カバー・加藤直之

ゼノサイド
上
オースン・スコット・カード
田中一江訳
XENOCIDE
SF 1072
ゼノサイド
上
オースン・スコット・カード
SF
カ
1
10
ハヤカワ文庫
定価
700

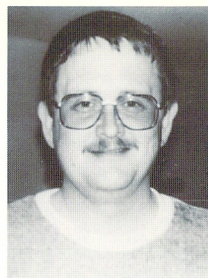
9784150110727

1910197007005

エンダー・ウィッギンが死者の代弁者として植民惑星のルジタニアにやってきてから、三十年が過ぎた。原住種族ピギーに殺された異類学者のために代弁をしたあと、エンダーは現地の女性と結婚し、そのままルジタニアにとどまっていたのだ。だが、人類に致命的な病気をもたらすデスコラーダ・ウィルスの蔓延を恐れるスターウェイズ議会が、ウィルスを惑星ごと殲滅しようと粛清艦隊を派遣。その到着が目前に迫っていた……！

ISBN4-15-011072-7

C0197 P700E

定価700円(本体680円)

オースン・スコット・カード

写真（禁転載）

ハヤカワ文庫SF／O・S・カードの作品

ソングマスター
無伴奏ソナタ
エンダーのゲーム
死者の代弁者／上・下
ゼノサイド／上・下
反逆の星
第七の封印
辺境の人々
地球の記憶

ハヤカワ文庫 〈SF1072〉

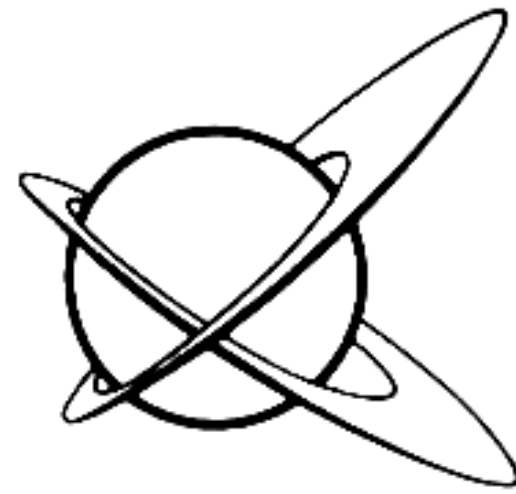
ゼノサイド〔上〕

オースン・スコット・カード
田中一江訳

早川書房

ハヤカワ文庫 SF
〈SF1072〉

ゼノサイド
〔上〕

オースン・スコット・カード
田中一江訳

早川書房

3543

クラークとキャシー・キッドに捧ぐ

自由と安息とアメリカ各地での楽しい思い出に感謝をこめて

謝辞

この本の核心をなすハン・チンジャオとハン・フェイツーの物語を書く直接のきっかけとなったのは、ノースキャロライナ州チャペル・ヒルにあるセカンド・ファウンデーション・ブックストアでの、ジェイムズ・クライアーとの予期せぬ出会いだった。わたしは、彼が中国詩の翻訳を手がけていると知って、いま中国系の登場人物を書いているところなんだが、なにかそれらしい名前を教えてくれないかと単刀直入にたずねてみた。わたしには中国文化に関する知識などないにひとしく、『ゼノサイド』という物語における問題の中国系の登場人物の役まわりは、それなりの意義はあっても、しょせん添えもの程度のつもりだった。ところが、わたしの知るかぎりもっとも精力的で人好きのする、心のひろい人物であるジェイムズ・クライアーが次から次へと李清照（リー・チンジャオ）と韓非子（ハン・フェイツー）について話をしてくれるのを聞くうち——彼らの書も見せてもらったし、中国の歴史や文学に登場するその他の人物のことも話してもらった——この本でわたしが語りたい話のまさに基礎となるものは、ここにあったのだとわかってきた。ジェイムズ・クライアーには大いに世話になったのに、何度も機会がありながら、なかなかその恩にむくいることができないのを申しわけなく思う。

彼以外の多くの人にもまた感謝をささげたい。この小説に書かれた強迫神経症(OCD)に関しては、ジュディス・ラパポートの著書、『手を洗うのをやめられなかった少年』を参考にさせていただいた。エージェントのバーバラ・ボーヴァは、わたしがこの本を書こうと考えもしないうちに英国に権利を売ってくれた。おかげで本書はこうして世に出た。アメリカで本書を出版してくれたトム・ドハティの比類なき誠実さと寛容さが、最後にはすべて正当に評価されるように願う。一九七八年にわたしが本書の第一案をデル社に提示したとき、編集者のジム・フレンケルは賢明にもそれを没にして、「きみはまだ、これほどの野心作を書くには修行が足りない」と正論を述べた。本書の英国での出版をひきうけてくれたアンソニー・チータムは、駆けだしのころからわたしの仕事を信頼していてくれ、われわれ双方にとって予想外に遅れた本書の完成を辛抱づよく待ってくれた。担当編集者のベス・ミーチャムは、本書および他の数多い本の準備段階からずっと、友人、アドバイザー、守護者でありつづけてくれた。エンダーの物語をまた書くようにとわたしの尻をたたいてくれた多くの読者のみなさんにも感謝する。これまでの作家生活におけるもっとも困難な執筆活動と取りくむあいだ、わたしはみなさんの声援に大いにはげまされた。グリーンズボロにあるノースキャロライナ大学のフレッド・チャペルひきいる大学院創作ワークショップには、チンジャオを軸とする物語の第一稿に目を通して意見を聞かせてもらえたことを感謝する。アナログ誌のスタン・シュミットには、雑誌としては異例の長さだったのに、この小説の一部を〝Gloriously Bright〟と題して載せてくれたお礼をいいたい。アシスタントのラレイン・ムーン、エリン・アブシャー、そしてウィラード・カードと

ペギー・カードが、それぞれまったく異なった方法で献身してくれたおかげで、わたしは自由と力ぞえをえて執筆することができた。ジェフ・アルトンやフィリップ・アブシャーに代表される友人たちが初期の草稿を読んでくれたので、これほど登場人物と物語が入り乱れていても、ちゃんと話の筋は通っているのだという自信がもてた。そして、わが子ジェフリー、エミリー、チャーリーにも感謝する。父親の猛烈な執筆活動中にはつきものになっている気味のある不機嫌やつきあいのわるさを我慢してくれたうえ、もっとも愛着のある登場人物たちを創造するのに自分たちの生活や経験を借用することとさえ許してくれてありがとう。

最後に、わが妻クリスティーンに感謝のことばをささげたい。彼女は、本書が形になるまでのそれぞれの厄介な段階において、四苦八苦しながら疑問を呈し、あやまちや矛盾を指摘し、さらには——ここがもっとも肝心なのだが——うまく運んだ点には惜しみない称賛を与えてくれた。そうした彼女を見ると書きつづける自信が出たものだ。彼女がいなかったら、作家としてもひとりの人間としても、わたしはどうなってしまうのか見当もつかない。その答えを見つける機会などこの先もずっとないものと考えている。

目次

登場人物

●惑星ルジタニア

アンドルー（エンダー）・ウィッギン　死者の代弁者
ノヴィーニャ　エンダーの妻。異生物学者（ゼノバイオロジスト）
マルカン・リベイラ　ノヴィーニャの前夫
ミロ・リベイラ　ノヴィーニャの長男。異類学者（ゼノロジャー）
エラ・リベイラ　ノヴィーニャの長女。異生物学者（ゼノバイオロジスト）
キン（エステヴァン）・リベイラ　ノヴィーニャの次男。聖職者
オリャード・リベイラ　ノヴィーニャの三男。煉瓦工場主任
ジャクリーン・リベイラ　オリャードの妻
ニンボ・リベイラ　オリャードの長男
クァーラ・リベイラ　ノヴィーニャの次女。微生物学者
グレゴ・リベイラ　ノヴィーニャの四男。物理学者
ピポ　異類学者（ゼノロジャー）

リボ　ピポの息子。異類学者（ゼノロジャー）

オウアンダ・サーヴェドラ　リボの娘。異類学者（ゼノロジャー）

ペレグリーノ　司教

コヴァーノ・ゼリェイゾ　ミラーグレ主長。ルジタニア総督

ヒューマン　父樹（ファーザートウリー）

ルーター　父樹（ファーザートウリー）

ウォーメイカー　父樹（ファーザートウリー）

プランター　ルジタニアの原住種族ペケニーノ（ピギー）。父樹（ファーザートウリー）ヒューマンの息子

●惑星パス

ハン・フェイツー　神がみの声を聞いた者すなわち神子（みこ）。心の先祖は韓非子（ハン・フェイツー）

ハン・ジャンチン　ハン・フェイツーの妻。心の先祖は江青（ジャンチン）

ハン・チンジャオ　ハン・フェイツーの娘。心の先祖は李清照（リー・チンジャオ）

シー・ワンム　ハン家の召使。心の先祖は道教の神である西王母（シー・ワンム）

ムパオ　ハン家の召使。もとジャンチンの秘婢（シークレット・メイド）

●惑星トロンヘイム

ヴァレンタイン・ウィッギン　エンダーの姉。ペンネームはデモステネス

ヤクト　ヴァレンタインの夫
シュフテ　ヴァレンタインとヤクトの娘
ラース　シュフテの夫
ロウ　ヴァレンタインとヤクトの娘
ヴァーサム　ヴァレンタインとヤクトの息子
プリクト　ヤクト一家の家庭教師

*

ジェイン　フィロトの網の目に住まう存在
ピーター・ウィッギン　ヴァレンタインとエンダーの兄。初代覇者(ヘゲモン)

ゼノサイド

〔上〕

1　別れ

〈きょう、兄弟（ブラザー）たちのひとりがわたしにこんなことをたずねてきた。いま立っている場所から動けなくなるのは、悲惨な牢獄だろうか、と〉
〈で、なんと返事を……〉
〈いまのわたしは、彼よりもよほど自由だと答えてやった。自由に動けないということが、行動する義務からわたしを解放してくれたのだ〉
〈ことばを話す者はみなひどいうそつきだ〉

病身の妻が床についているわきで、ハン・フェイツーは木の床にじかに蓮華座（れんげざ）を組んですわっていた。たったいままで眠っていたのかもしれない。自分でもそんな気もする。だが、いまは妻の呼吸のわずかな変化に気づいていた。蝶の羽ばたきが起こす風のような微妙な変化だ。
ジャンチンのほうでも、なにか夫の変化を感じとったにちがいない。その証拠に、それまで

だまっていた彼女が口をひらいた。ハン・フェイツーの耳にははっきりと妻の低い声が聞こえる。家はひっそりと静まりかえって物音ひとつしないからだ。知人たちにも召使にも、ジャンチンが人生の日没をむかえるまでそっとしておいてくれるようにと頼んである。夜のあいだ無神経に物音をたてたいと思えば気のすむまでそうできる時がやがて来るだろう。そのときにはジャンチンの唇からかすかな声が出ることはもうないのだ。

「まだ生きていたわ」ジャンチンはつぶやいた。ここ数日、彼女は目をさますたびに夫へのあいさつがわりにそういっている。はじめのうち、そのことばに奇異というか皮肉っぽい響きを感じていたハン・フェイツーにも、いまでは妻が失望をこめてそういっているのだとわかっていた。いまや彼女は死を待ちかねている。人生に未練がないからというのではなくて、もはや死が避けられないからだ。まぬがれえないものであるならば、すすんでむかえいれるべし——それが惑星パスの流儀だった。ジャンチンは生まれてこのかたパスから一歩も踏みだしたことがないのだ。

「すると、神がみはわたしを思いやってくれているのだな」ハン・フェイツーはいった。

「あなたを、ね」ジャンチンはぽつりといった。「なにを考えましょう？」

ジャンチンは、夫に胸のうちを明かしてほしいときにこういう言い方をする。他人に胸のうちを明かしてほしいなどといわれたら、ハン・フェイツーはスパイされているように感じるだろう。だが、ジャンチンがそういうのは、ただ夫とともに考えたいからだった。こうして彼らは心をひとつにしてきたのだ。

「欲望というものの本質について考えている」ハン・フェイツーはいった。
「だれの欲望？」ジャンチンがたずねた。「なにに対する欲望のことなの？」
わたしの欲望だよ。おまえの骨の病が治って丈夫になり、ほんのわずかな圧力がかかっても骨折しなくなるようにという願いだ。ふたたび立ちあがれるように、それがむりならせめて腕をあげても筋肉にひきずられて骨がごっそり取れてしまったり、張力で骨折したりしなくなるように。おまえがこんなふうに体重わずか十八キロにまでしぼんでしまうのを、なすすべもなく見まもっていなくてもいいように。永遠にいっしょにいられるわけではないと思い知ってはじめて、わたしは自分たちがどんなに文句なく幸福だったか気がついたのだ。
「わたしが願っているのは、おまえのことだよ」ハン・フェイツーは答えた。
「〝もっていないものこそほしくなる〟。だれのことばだったかしら？」
「おまえのだ」ハン・フェイツーはいった。「〝手にはいらないものこそ〟という者もいる。あるいはまた〝手に入れてはいけないものこそ〟という者もな。〝どんなにあっても足りない気がするものこそ、本気でほしいと思える〟と、わたしならいうところだが」
「わたしは、永遠にあなたのものよ」
「わたしは今夜おまえを失うかもしれない。明日かもしれないし、あるいは来週かも」
「欲望の本質について考えましょう」ジャンチンがいった。これが初めてではないが、彼女は考えこんで暗くなった夫の気分をひきたてるために哲学を利用しようとしている。
ハン・フェイツーはその誘いをしりぞけた。とはいっても、本気ではない。「おまえは情け

容赦のない支配者だな。他人の弱さを許すということがないところは、心の先祖ゆずりだ」ジャンチンの名は、人びとを新たなる道(バス)にみちびこうとしたが、弱気になった卑劣漢どもの手で地位を追われた大むかしの革命の指導者にちなんだものだ。だから、彼女が夫より先に逝くのは筋ちがいだとハン・フェイツーは思っている。彼女の心の先祖は夫より長生きしたからだ。だいいち、妻は夫に先立つべきではない。男にくらべて女は、自分ひとりで生きるのが得意なのだ。それに、子供たちのなかに自分の面影をのこすという点でもまさっている。ひとりきりになった男とちがって、女はけっして孤独にはならない。

ジャンチンは夫がふたたび物思いに沈みこもうとするのをゆるさなかった。「妻に先立たれた夫は、なにをもとめるのかしら?」

ハン・フェイツーはへそを曲げて、妻の問いにもっともふさわしくない返事をした。「ならんで横たわることだ」

「肉欲というわけね」ジャンチンはいった。

妻がどうしてもこの話題にこだわるのを見て、ハン・フェイツーは調子を合わせた。「肉体がなにをのぞむかといえば、行動することだ。さりげないものから親密なものまで、あらゆる触れ合い、そして習慣となった動作すべてがそれにふくまれる。だから、目の端にちらりと動くものが見えれば、男は、いまは亡き妻が戸口を横切ったような気がして、わざわざ戸口まで行って自分の目で見るまでは妻ではなかったと納得できない。眠っていても妻に呼ばれたような気がして目が冴えてしまい、妻が聞いているわけでもないのに思わず声に出して返事をして

しまったりするのだ」
「そのほかには？」ジャンチンがたずねた。
「哲学論議はもうたくさんだ」ハン・フェイツーがいった。「ギリシア人はそれで気がまぎれたかもしれないが、わたしはそれでは気がすまん」
「精神の欲望のことを」ジャンチンは執拗にこだわった。
「精神は地のものであり、古きより新しきを生み出すものだ。妻に死なれた男は、生前ふたりで達成できなかったすべてのことをなつかしみ、妻が生きていればふたりでできたはずの手もつけていない夢を惜しむ。こうして男は、子供たちが自分にばかり似ていて亡き妻にはちっとも似ないといっては怒る。妻と暮らした家が気にいらなくなる。手を入れなければ妻が死んだときのまま古びてゆくばかりだし、といって手を入れればこんどは妻がつくりあげた部分が失われてしまうからだ」
「わたしたちの愛しいチンジャオに怒ったりなさらないでね」ジャンチンがいった。
「むりをいうな」ハン・フェイツーが応じた。「おまえがいないというのに、わたしひとりであの子を一人前の女に育てあげねばならないのだよ。あの子になにが教えられる？　このわたしのような人間に仕立てることしかできない――温かみもなく厳しくて、鋭く頑強な、まるで黒曜石のような人間に。おまえにうりふたつのあの子を、そんなふうにしか育てられないとしたら、どうして怒らずにいられるものか」
「あなたならわたしのすべてを教えてやることができますとも」ジャンチンがいった。

「わたしには、なにひとつおまえと似ているところはないのだ」ハン・フェイツーは否定する。「だからこそ、一人前の人間になるためにおまえと結婚する必要があった」こんどは彼のほうが哲学を利用して、話題を苦痛から遠ざけようとした。「それが魂の欲望だ。魂は光でできたとらえどころのないものであり、思想をつむぎ、それを保つことができるのも、これがあればこそ。とりわけ自己という概念がそうだ。男は、夫と妻の両方があってこその完成した自己をもとめるものだ。そのため、自分自身の思考にはけっして自信がもてない。なぜなら、つねに彼の頭にある疑問の答えは、ただひとつ妻の思考だけだからだ。かくして、男にとって全世界が意味を失ってしまう。それというのも、この答えの出しようのない疑問の猛襲に耐えて世界の意味をたもってくれるなにものも信じられなくなるからだ」

「とても深遠ね」ジャンチンがいった。

「わたしが日本人なら腹かっさばいて、おまえの骨壷にはらわたをぶちまけたいところだ」

「血だらけで汚らしいわ」ジャンチンがいった。

ハン・フェイツーが微笑んでいった。「それなら、古代ヒンズー教徒のように、おまえを火葬にする薪に身を投じよう」

だが、ジャンチンはもう冗談には乗ってこず、「チンジャオが」とささやくようにいった。

妻に殉じて死ぬような派手派手しいまねができるわけはないとハン・フェイツーに思い起こさせようとしたのだ。チンジャオをひとりのこしてゆくわけにはいかない。

ハン・フェイツーも真顔で応じた。「あの子がおまえに似て育つように教えるには、わたし

はどうすればいいのだ？」
　ジャンチンが答えた。「わたしの美点は、すべて道（パス）の教えから来ているのですよ。神がみにしたがい、先祖をあがめ、人びとを愛し、そして支配者に仕えることをあの子に教えてください。そうすれば、あの子はあなたに似るだけでなく、わたしの美点をも受けつぐでしょう」
「あの子には、わたしの一部になっている道を説くつもりだった」ハン・フェイツーがいった。
「それはむりですね」ジャンチンがいった。「あなたは本来パスの教えになじまない方ですもの。いくら神がみが日々あなたに語りかけても、あなたはすべてが自然の理（ことわり）で説明のつく世界をよしとする気持ちを変えていない」
「わたしは神がみにさからいはしないぞ」ハン・フェイツーは苦にがしく思いながらいった。さからうことはできないのだ。すぐに従わなかったら、それだけでもう苦しみをあたえられるのだから。
「でも、あなたには神がみがわかっていません。あなたは神の御業を愛していないのです」
「パスの教えとは、人びとを愛することだ。われわれは神がみには従うだけだ」なにかにつけて自分を辱め、苦しみをあたえる神がみを愛することなど、どうしてできよう？
「神がみの創りたもうた存在なればこそ、わたしたちは人びとを愛するのですよ」
「わたしに説教をするな」
　ジャンチンはためいきをついた。
　妻の悲しみが蜘蛛の針のようにハン・フェイツーの胸を刺す。「おまえがいつまでも、そう

して説教してくれたらと思うよ」
「あなたがわたしを娶ったのは、わたしが神がみを愛しているからこそです。それはあなたにはまったく欠けている愛情だったから。その意味では、わたしはあなたの足りないところをおぎなってきたのです」
いくらいまだに神がみを憎んでいるとはいえ、妻に抗弁することなどとてもできない。神がみがいままで彼に味わわせたあらゆる苦渋、どうしても抗えずにさせられたあらゆる行為、彼らがハン・フェイッーの人生から奪い取ったすべてが、その憎しみの原因だったとしても。
「約束してください」ジャンチンがいった。
ハン・フェイツーはこのことばがなにを意味するかを悟った。ジャンチンは、死がせまっているのを感じて、生涯背負ってきた重荷を夫に託そうとしているのだ。重荷など、いくらでも引き受けよう。ハン・フェイツーがずっとおそれてきたのは、惑星パスでジャンチンという伴侶を失うことだった。
「チンジャオが神がみを愛するように、つねに道をふまえて歩くように教えると約束してください。あの子があなたの娘であると同時にわたしの娘でもあるようにすると、約束してくださ い」
「たとえあの子には神がみの声が聞こえなくてもか?」
「パスの教えは万人のためのものです。神の声を聞く者だけが特別なのではありません」
きっとそうなのだろうとハン・フェイツーは思った。だが、一般人とちがって神の声を聞く

者たちは道の教えに従いやすい。なぜなら、彼らにとって道からそれる代償はひどい苦痛だからだ。一般の人びとには束縛がない。彼らは道を逸脱したからといって何年も苦痛にさいなまれずにすむ。神の声を聞いた者たちは、一時間といえども道をふみはずすことはできないのだ。

「約束を」

わかった。約束する。

そのくせハン・フェイツーは口に出してそういうことができなかった。なぜだかわからないが、強い抵抗があったのだ。

ジャンチンが夫の誓いのことばを待っている沈黙のさなか、屋敷の表門の外の砂利道を踏んで走る足音が聞こえた。きっと、スン・カオピーの庭園から帰ってきたチンジャオだ。みんなが息を殺しているこの時期に物音をたてて走っても許されるのは、チンジャオだけなのだ。ハン・フェイツーたちは待った。娘がまっすぐに母の部屋へくることを知っていたからだ。

ほとんど音もなく扉がひらいた。じっさいに母親のいるところでは、チンジャオですら遠慮して足音を忍ばせる。爪先立ってはいるが踊るがごとき足どりをおさえられずに駆けこんできた。とはいえ、チンジャオは母親の首に両手でかじりつくのを思いとどまった。さすがの彼女も懲りたのだ。薄れかけてこそいるが、母親の顔にできたひどい青あざは三カ月まえに彼女が夢中になってむしゃぶりついたため顎が骨折したせいだった。

「庭園の流れに白い鯉が泳いでいたの。数えたら二十三匹もいたわ」チンジャオがいった。

「ずいぶんたくさんね」ジャンチンが答える。

「わたしが行ったから出てきたんだと思うの」チンジャオはいった。「数えてもらいたくて。みんな仲間はずれにされるのがいやだったのね」
「おまえを愛しているわ」ジャンチンがぽつりとつぶやいた。
気息えんえんとした妻の声に、聞きなれない音がまじっているのがハン・フェイツーの注意をひいた——なにかいうたびに泡がはじけるような破裂音がする。
「あんなにたくさん鯉が見られたんだもの、わたし、いまに神さまの声が聞けるかしら？」チンジャオがたずねた。
「お母さまから神さまにそうお願いしてあげます」ジャンチンがいった。
ふいに、ジャンチンの呼吸が浅く、急になった。ハン・フェイツーはすばやくひざまずいて妻をのぞきこむ。彼女は大きく目を見ひらき、おびえた表情をしていた。その時が来たのだ。
ジャンチンの唇が動いた。約束してと彼女はいった。だが、あえぐような呼吸が出るばかりで声にはならない。
「約束しよう」ハン・フェイツーは誓った。
それを境に、ジャンチンの呼吸が止まった。
「神さまは、なんと話しかけてくるの？」チンジャオがたずねている。
「お母さまは、とても疲れているんだ」ハン・フェイツーはいった。「もう邪魔してはいけない」
「でも、お返事を聞きたいの。神様はなんて話しかけてくるの？」

「秘密を教えてくださるのだよ」ハン・フェイツーはいった。「聞いた者は、それをだれにも打ち明けてはならないのだ」
チンジャオは心得顔でうなずいた。立ち去ろうとするように一歩うしろにひきさがり、立ち止まった。「キスをしてもいい、お母さま？」
「頬に軽くならいいよ」ハン・フェイツーがかわりに答えた。
チンジャオは四歳の子供にしても小柄なので、かがみこみもせずに母親の頬にキスすることができた。「大好きよ、お母さま」
「さあ、もう行きなさい、チンジャオ」ハン・フェイツーがうながした。
「でも、お母さまは、わたしが大好きだっていってくれてないわ」
「いったさ。さっきそういった。おぼえてるだろう？　でも、いまはとても疲れていてその元気がないんだ。さあ、もうお行き」
チンジャオがよけいな好奇心をかりたてられることのないていどに厳しさをこめて、ハン・フェイツーは命じた。娘が行ってしまってから、ハン・フェイツーの心に娘へのいたわりをはるかに越えた感情がこみあげてきた。彼はひざまずくようにしてジャンチンの亡骸をのぞきこみ、いま、妻の身になにが起きているのか想像してみた。宙に舞いあがった魂は、とっくに天国へ着いているはずだ。精神のほうはそう簡単に昇天することはなく、もしもここがほんとうに彼女にとって幸福に満ちた場所であったなら、おそらくはこの家に住みつくだろう。迷信深い人びとは死霊というものはなんでも危険だと思いこんで、よりつかないようにお札を貼り、

魔除けを飾ったりする。だが、パスの教えをまもる者たちは、善人の霊魂はけっして災いをなしたり暴れたりしないと知っている。彼らの生前の善行は破壊ではなくて創造を愛する霊魂のなせるわざだからだ。ジャンチンの霊魂がここに残ることをえらんでくれれば、それはこれから何年ものあいだ、この家に祝福をもたらすだろう。

そう思って、パスの教えにあるとおり亡き妻の魂や精神を想像しようとつとめても、ハン・フェイツーの心の一点は冷たくさめていて、妻の残したものは、このはかなくも干からびた遺骸だけなのだと確信していた。今夜、この亡骸が紙のようにあっさりと燃えてしまえば、もはや彼女はハン・フェイツーの心にある記憶として残るのみなのだ。

ジャンチンのいうとおりだ。魂の穴を埋めてくれた彼女がいなくなるが早いか、彼はもう神がみを疑いはじめている。そして、神がみはそれを察した——いつだって気づかれずにすんだためしはない。たちまちハン・フェイツーはこの罰あたりな思いが消えるまで浄罪の儀式をおこなわなければという耐えがたい衝動に駆られた。こんなときでさえ、神がみは彼を罰せずにはおかないのだ。目のまえに妻の亡骸が横たわっているいまでさえ、神がみは彼に服従の行為を要求し、それをすませるまでは妻を悼む涙の一粒も流させてはくれないのだ。

最初、ハン・フェイツーは服従をあとまわしにしようと思った。自己鍛練のおかげで儀式を丸一日先送りにしても内心の苦悶をいっさい表に出さずにいられるようになっていたのだ。いまもそうしようと思えばできるだろう——ただし、それには心がまったく冷えきっていないといけない。それでは儀式を先送りする意味がない。しかるべく悲しみをあらわすには、まず神

がみを満足させなければならなかった。そこで彼はその場で膝をついて儀式にとりかかった。痙攣し、身をくねらせながら彼が儀式をおこなっているとき、召使が部屋をのぞきこんだ。声はしなかったものの、扉がしまるひそやかな音を耳にしたハン・フェイツーは、召使がこう思うであろうことを知っていた。ジャンチンは死んだのだ。家の者に妻の死を告げるのをあとまわしにして、まず神がみと交感するとは、さすが徳高きハン・フェイツーだ、と。きっと、なかには神がみがじきじきにジャンチンをむかえに来たと思う者もいるにちがいない。それほど彼女は、そのなみはずれた高潔さで有名だったのだ。浄罪をするハン・フェイツーの心が、妻に先立たれたばかりだということも斟酌なくこんなことを要求する神がみに対する嫌悪でいっぱいだなどとは、だれにも想像すらつかないだろう。

ああ神よ、片腕を切り落とすか肝を切り取るかすればこんな思いを味わわなくてすむのなら、わたしは剣をつかみ、喜んで苦痛と損失に耐えるでしょう。ただ自由になりたい一心で。

そんなことを思うのもまた罰あたりなことであり、またしても浄罪が必要になった。やっとのことで神がみの許しが出るまでにはなお数時間もかかり、そのころにはハン・フェイツーは疲れはてて心底気分がわるくなり、悲嘆に暮れる余裕はなくなっていた。彼は立ちあがって、ジャンチンの亡骸を火葬にするしたくをととのえるため小女（こおんな）たちのところへ行った。

夜も更けきったころ、最後に火葬場へやってきたハン・フェイツーは、眠たげなチンジャオを腕に抱いていた。少女の手には、子供らしい筆跡で母のために字をしたためた三枚の紙が握られていた。そこには、〝魚〟〝本〟そして〝秘密〟とあった。チンジャオは、天国へゆく母

への土産として、これらをあげるのだといっていた。娘がそれを書くのを見ながら、ハン・フェイツーは娘がなにを考えてそれをえらんだのか想像しようとした。〝魚〟と書いたのは、きょう庭園の小川で鯉を見たせいにちがいない。それから、〝本〟――これはすぐに想像がついた。晩年のジャンチンが娘とともにできたことといえば、朗読以外にはあまりなかったからだ。だが、〝秘密〟とはなんだろう？　チンジャオは母にどんな秘密を託すというのか？　本人に問いただすわけにはいかない。死者への紙の供物(くもつ)について、あれこれいってはならないことになっているからだ。

ハン・フェイツーはチンジャオを下におろした。熟睡してはいなかったので、彼女はおろされるとすぐに目ざめてゆっくりまたたいた。ハン・フェイツーから小声で指示されて、彼女は紙をくるくると丸め、母親の袖口にさしこんだ。冷たくなった母親の肌に手がふれても動揺するようすはない――まだ幼くて、死者にふれることでおぞけをふるうような知識がないのだ。

ハン・フェイツーもまた平然と妻の肌に触れ、もう一方の袖に自分が書いた三枚の書をさしいれた。死が最悪の事態をもたらしたいま、これ以上なにをおそれることがあろう？

ハン・フェイツーの紙に書かれた文字を知る者がいたら、きっとふるえあがったことだろう。そこには、〝わが肉体〟、〝わが精神〟そして〝わが魂〟と書かれていたからだ。こうすることによって、彼はジャンチンを火葬する薪でみずからを焼却し、妻がどこへ行こうと自分もそこへついて行ったのである。

やがて、ジャンチンの秘婢(シークレット・メイド)であったムパオが聖なる薪にたいまつを載せ、薪は一気に

燃えあがった。炎の熱気は痛いほどで、チンジャオは父親のうしろに隠れてときどき顔をのぞかせては母親が死出の旅路につくのを見まもるばかりだった。けれども、ハン・フェイツーにとっては、肌を焦がし、絹の衣を焼く熱気はむしろ望むところだ。ジャンチンの遺体は見かけほど乾燥してはいなかった。紙が燃え尽きて灰になり、火葬の煙もろとも上空へ舞いあがってしまったあとも、彼女の遺体はまだジュージューと音をたて、周囲にたちこめる重厚な線香の薫りも、肉の焼けるにおいをまぎらすことはできなかった。われわれがここで燃やしているのは、これなのだ。肉、魚、腐肉、そういったもろもろ。あれは、わたしのジャンチンではない。彼女がこの世で身につけていた衣装にすぎないのだ。あの肉体を、わたしの愛する女にしていたものは、いまでもまだ生きている。死んでしまったはずがない。すると一瞬、彼には去ってゆくジャンチンが見えたり聞こえたり、あるいはなぜか実感できるように思えた。

宙であろうと、地中であろうと、火のなかであろうと、わたしは、おまえとともに行くのだ。

2 出会い

〈人間のもっとも奇異なる点は、男と女というその組み合わせね。男女のあいだにはつねに葛藤があり、どちらも相手に差し出口をせずにはいられない。男と女が、必要とするものも求めるものもまったく異なるべつべつの種であって、子孫をのこすときにだけ、やむなくいっしょになるものだという概念は、人間には納得がいかないものとみえる〉

〈あなたがそう思うのはとうぜんだろう。あなたの配偶者は意思をもたない雄バガーにすぎず、あなたにとっては外部装置のようなものだし、それ自体にはアイデンティティなどないのだから〉

〈われわれと愛する者のあいだには、誤解などいっさいない。ところが人間たちは、愛する者を想像ででっちあげ、ベッドをともにする生身の相手の顔にその仮面をかぶせるのだ〉

〈それが言語をもつ者の悲劇なのだ、わが友よ。象徴的な概念でしかおたがいを知りえない者は、相手のことを想像するしかない。しかも、その想像力が不完全なために、彼らは往々にしてあやまちをおかすのだ〉

〈もとはといえば、それが彼らの苦悩のみなもとだ〉

〈同時に、それは彼らの強さのみなもとでもあるのだろう。あなたの種族も、われわれの種族も、それぞれ独自の進化論的な事情にもとづいて、はるかに落差のある相手を伴侶にえらぶ。われわれはつねに、知性の点ではるかに劣った相手を伴侶とするのだ。人間たちはといえば、自分の優越性をおびやかしかねない相手を伴侶にえらぶ。人間の男女のあいだに葛藤があるのは、意思の疎通がわれわれに劣っているからではなく、彼らが相手と深く交流しているからなのだ〉

ヴァレンタイン・ウィッギンは自分のエッセイを読みかえし、数カ所を訂正した。すると、完成したエッセイがコンピュータ端末装置の上空に浮かんだ。われながら、みごとなまでに巧妙な皮肉を駆使して、スターウェイズ議会顧問団の団長であるライマス・オジマンその人の評判をおとしめる文章を書きあげたものだ。

「例によって〈百世界〉のお偉方を攻撃するエッセイは書きあがったかな？」

わざわざふりむいて夫の顔を見るまでもなかった。その口調で、どんな表情をうかべているかが手にとるようにわかるのだ。そこでヴァレンタインは、彼に背をむけたまま微笑みをかえした。結婚生活二十年にもなると、おたがい顔をあわせなくても表情が目に見える。「ライマス・オジマンを笑いものにしてやったわ」

背をかがめて、ヤクトは狭苦しい船室に頭をつっこんできた。おだやかな息づかいが聞こえるほどすぐそばに顔をちかづけ、彼は出だしの数節を読んだ。ヤクトはもう若くはない。両手

で戸口にすがってかがみこむように妻の船室内をのぞくだけでもつらそうで、聞いているほうが苦しくなるほど息があがっている。
やがて彼は口をひらいた。顔を接するようにしているため唇が頬をこすって、ひとことというたびにくすぐったい。「かわいそうに、これじゃあ、あのとんまの顔を見るたびに、母親だって忍び笑いをおさえられないだろうな」
「笑えるように書くのがたいへんだったわ」ヴァレンタインはいった。「ついつい非難がましくなってしまうんで、筆をおさえたのよ」
「笑える書きかたのほうがいい」
「そうでしょう？　怒りにまかせて彼の罪を列挙し、それを非難するような書きかたをしたのでは、あの男が現実以上に権力のあるおそろしい存在に見えてしまうもの。そうなったら、〈遵法派〉内でオジマンが幅をきかせるばかりだし、どの世界でも意気地なしどもがますます彼に平身低頭することになってしまう」
「いま以上に平身低頭するとしたら、連中はカーペットを薄手のやつに買いなおさなきゃならなくなるな」ヤクトがいった。
ヴァレンタインは笑い声をあげた。だがそれは、夫の唇が頬をくすぐる感触にたえきれなくなったせいでもあった。その刺激のおかげで、この旅行中はどうしてもがまんしなければならない欲求がほんのちょっぴりかきたてられかけていた。スターシップはただでさえ狭いところへもってきて、家族全員が乗り組んだためにすし詰め状態になっている。ちゃんとしたプライ

ヴァシーなど皆無だ。「ヤクト、目的地まではあと半分よ。わたしたちは毎年のようにあちこちへ旅して、もっと長い禁欲を強いられたこともあったでしょ。今回にかぎってがまんできないはずはないのに」
「ドアの外に〈立入禁止〉の札をぶらさげとけばいい」
「そんなことしたら、〈全裸の老人カップル、室内にて回春中〉って看板を出すようなものだわ」
「老人よばわりはひどいな」
「あなたは六十歳だもの」
「老いぼれたりといえど、わが部下はいまだ直立不動になって敬礼することもできるんだぞ。閲兵してやってくれてもいいじゃないか」
「この旅がおわるまで閲兵式はおあずけね。あとたったの二週間じゃないの。エンダーの継子(ままこ)とのランデヴーが完了すれば、あとはもうルジタニアにむかうだけよ」
ヤクトは妻のそばから顔をひっこめて戸口の外へ出ると、廊下で背中をのばした――この船で彼が文字どおり直立できる数すくない場所だ。とはいえ、背筋をのばすと思わずうめき声がもれる。
「そんな声を出して、あなたったらまるで錆びついたドアみたいよ」ヴァレンタインはからかった。
「きみだって、そのデスクから立つときは、おなじようにきしんでるさ。家族のなかでおれひ

とりが古びてガタのきた、あわれな老人ってわけじゃないんだぞ」
「もういいから行って。わたしはこれを送信しなくちゃ」
「むかしの船旅では、おれにもやる仕事があったものだ」ヤクトがつぶやいた。「ここじゃ、なんでもかんでもコンピュータが片づけちまう。おまけに、海に浮かぶやつとちがってこの船は縦にも横にも揺れやしないんだからな」
「本でも読んでらっしゃいな」
「きみの身を案じてやってるのに。よく学び、よく遊べっていうだろ。そんなに仕事ばっかりしてると、いやみな婆さんになっちまうんじゃないかってね」
「わたしたちがこうして一分おしゃべりをしているあいだに、じっさいには八時間半という時間がたっているのよ」
「ほかの人間が外の世界で過ごす時間が現実なら、われわれがこの船で過ごす時間だって、現実さ」ヤクトがいった。「エンダーの友人たちがこの船と惑星との接続方法を考えついてくれなければよかったのにと、ときどき思うよ」
「膨大なコンピュータ時間がかかるのよ」ヴァレンタインがいった。「いままでは軍関係者しか亜光速飛行中の宇宙船と通信できなかった。エンダーの友人たちがそれを可能にする方法を見つけてくれたんだから、利用するのがわたしの義務だわ」
「きみがこんなことをしているのは、他人への義務をはたすためじゃない」
図星だった。「ヤクト、たとえわたしが一時間に一本のエッセイを書いたとしても、ほかの

人間たちにとっては、デモステネスが三週間にたった一度しか意見を発表しないということになるのよ」
「一時間に一本のエッセイを書きつづけることなんかできっこないさ。眠ったり食べたりもしなきゃならないんだから」
「あなたがしゃべれば、それを聞く時間もとられるしね。さあ行って、ヤクト」
「ひとつの惑星を破滅から救うのに、童貞時代に逆戻りしなきゃならないとわかっていたら、おれはぜったい賛成しなかったよ」
ヤクトは、からかい気味にそういっているだけだ。トロンヘイムを離れることは家族全員にとってつらい決断だった——当のヴァレンタインにとってさえそうだった。たとえエンダーに再会できるとわかっていても。みな成人か、そうでなくても大人になりかけていた彼女の子どもたちは、この旅を大冒険とみなした。彼らは将来、暮らす場所をどこと決めていたわけではない。父親とおなじ船乗りになった子はひとりもいず、全員が学者か科学者になり、母親にならって大衆に講演したり、ひとり静かに思索にふける暮らしをしている。彼らは、たとえどこへ行っても、どんな世界でも、事実上変わりなくみずからの人生をいとなむことができるだろう。ヤクトは子どもたちを誇りに思いながらも、トロンヘイムの海で七代にわたってつづいてきた家族の伝統が自分の代でおわってしまうことを残念に思っていた。それでもこうして、彼は妻のためにみずから海を捨ててきた。トロンヘイムを離れてほしいというのは、ヴァレンタインからヤクトへのもっともつらい頼みだった。だが彼は、迷うことなくその頼みを承知した

のだ。
いつの日か、ヤクトは故郷にもどることもあるだろう。そのとき、大洋や氷山や嵐や魚や、いやになるほどやさしい緑なす夏の草原は、変わらぬ姿でそこにあるだろう。だが、彼の仲間たちの姿はない。とっくのむかしに消えうせてしまっているはずだ。ヤクトが、おのれの子どもよりも、妻よりもよく知りぬいていた男たち——彼らはヤクトが家族とともにトロンヘイムを離れたとき、すでに十五歳も年上だった。そして彼が故郷にもどるとき——よしんばもどることがあったとしても——それはさらに四十年の歳月がたってからだ。そのとき海で働いているのは仲間の孫息子たちだろう。彼らはヤクトの名前を知らないにちがいない。ヤクトは、海ではなくて空からやってきた見知らぬ船主であって、両手をスクリーカの黄色っぽい血と異臭に染めた男ではない。ヤクトは、彼らの仲間ではなくなっているのだ。
それだけに、ヴァレンタインがかまってくれないといってこぼし、旅のあいだ夫婦らしくむつみあうこともできないとからかい気味に彼がいうとき、そこには老年にさしかかった夫が冗談半分に妻にちょっかいを出す以上の意味がある。ヤクト自身が意識していっているにせよそうでないにせよ、ヴァレンタインには彼の提案の真の意味がわかっていた。彼はこういいたいのだ。おれはきみのために節を屈したのに、きみからはなんの見返りもあたえてもらえないのか？
それに、ヤクトのことばには一理ある——ヴァレンタインは必要以上に自分に無理を強いていた。彼女は必要以上の犠牲をはらいつづけている——同様に、夫にまで過剰な犠牲を強いて。

この旅のあいだにデモステネスが著す反政府的エッセイの数そのものが世界を変えるのではない。肝心なのは、どれだけの人が彼女の著作を読み、その内容を信じるかであり、さらには、どれだけの人がスターウェイズ議会の敵にまわって思索をめぐらし、発言し、そして行動するかなのだ。それ以上に意味があるのは、ほかならぬスターウェイズ議会の官僚機構内部にいながら、より高度な人類への忠節を揺さぶられてあの異常なまでに画一的な結束を断ち切ろうとする者が、たとえ少数でも出るのではないかという望みだった。ヴァレンタインの著作によって変心する者は存在するにちがいない。多くはないが、それでもじゅうぶんなだけの人数が。そして、その変化が間にあえば、スターウェイズ議会が惑星ルジタニアを破滅させるのをくい止められるだろう。

そうならなかったときは、ヴァレンタインとヤクトはもちろん、多くを捨ててトロンヘイムを離れ、ふたりとともにこの旅に出た者たちは、ルジタニアに到着するが早いか、まわれ右して逃げることになる——さもなくば、ルジタニアという世界に暮らす者たちの道連れとなって死滅してしまうだろう。ヤクトが神経過敏になって、もっと長い時間を妻といっしょに過ごしたがるのもゆえないことではない。これほど余念がないヴァレンタインのほうがどうかしていたのだ。目覚めているあいだは一瞬もむだにせず執筆にはげむなんて。

「ドアに〈立入禁止〉の札をお出しなさいな。誓っていうけど、あなたひとりにはさせないから」

「ドキドキするようなことをいってくれるんだな。陸にあがったカレイみたいに息ができなく

なりそうだ」ヤクトがいった。
「漁師らしい口説き文句ね。そういうあなたって、ほんとにロマンチックよ」ヴァレンタインは答えた。「子どもたちのいい笑いものだわ。たった三週間の旅行なのに、女房にかまわずにいられないなんて」
「おれたちの子どもだ。老けこむのは百歳を過ぎてからでいいって応援してくれなきゃ、うそだよ」
「わたしは、とっくに四千歳を過ぎているのよ」
「古代人さん、いったいいつになったらおれの部屋に来てくれるんだい？」
「このエッセイを送信してから行くわ」
「どのくらいかかる？」
「あなたがわたしをひとりにしてくれれば、すぐにすむのよ」
本気で失望したというよりは芝居がかったようすで深いためいきをもらし、ヤクトはカーペットをしいた廊下を踏んで去っていった。そのあとすぐに、カーンという金属音がしてヤクトがぎゃっとわめいた。むろん、ぶつけたふりをしただけだ。旅に出たばかりの日、金属製の梁にうっかり頭をぶつけたことがあるのだが、それからというもの、彼はわざと頭をぶつけてみんなを笑わせようとするようになった。いうまでもないが、だれも声高に笑ったりしない――ヤクトがふざけた動作をしてもおもしろがったりしないのが家族のならわしだった――とはいえ、彼は他人に笑ってもらいたくてふざけるたぐいの男ではない。自分が笑えればそれでいい。

自立した男だからこそ、船乗りになり、人の上に立つ生涯を送ることができたのだ。ヴァレンタインの知るかぎり、ヤクトが自分にとって欠かせない存在と認めたのは彼女と子どもたちだけだった。

それでありながらなお、ヤクトは家族に執着するあまり海の男であり漁師であるおのが人生を放棄することはなく、何日も、あるいは何週間も、ときには何カ月ものあいだ家をあけた。貪欲なまでにおたがいをもとめ、飽くことを知らなかった新婚時代のころは、ヴァレンタインも夫に同行したりしたこともある。けれども、数年がたつうちに、その貪欲さが忍耐と信頼にとって変わった。彼女は夫の留守のあいだに調べ物をしたり本を書いたりし、彼が帰っているときは全身全霊を夫と子どもにそそいだ。

子どもたちはこう不平をいったものだ。「父さん、帰ってこないかな。そしたら、母さんが部屋から出てきてまたお話ししてくれるのに」と。ヴァレンタインは思った。わたしはあまり良い母親ではなかったわ。あんないい子たちに育ってくれたなんて、ほんとうに運が良かった。

書きかけのエッセイが端末装置の上に浮かんでいた。あとひとこと書きそえるだけで終わりだ。最終行の中央にカーソルを移動し、彼女は自分が書いたすべての作品の著者たる名前をこう打ちこんだ。

〝デモステネス〟

それは、子どものころ、兄のピーターが彼女に与えた名前だ。五十年まえ――いや、三千年まえのことだった。

ピーターのことは、いまだに思いだしただけでも心が乱れ、かっと熱くなるような、しんしんと冷えこむような心地がする。ピーターこそは、情けを知らず、暴力をも辞さない人間だった。明晰きわまる危険な頭脳の持ち主である彼は、二歳にしてヴァレンタインを、弱冠二十歳にして世界を、意のままにあやつっていたのだ。まだ彼らが二十二世紀の地球に住む子どもであったころに、ピーターは男女を問わず古今東西の偉人たちの手による政治的文書を研究した。目的は彼らの思想を学びとることではなく——そんなものは造作もなく把握した——その語り口を学ぶことだった。早い話、おとなの論法を身につけるのが狙いだったのだ。自分が習得すると、ピーターはそれをヴァレンタインに教えこみ、彼女にはデモステネスという名前で低級な政治的檄文を書くことを強制して、いっぽう自分はロックという名で高尚な政治家らしいエッセイをものした。そして、ふたりのエッセイをコンピュータ・ネットワークを通じて流したのだ。何年もたたないうちに、彼らは当時の政界における大問題の中心に食いこんでいた。

あのころヴァレンタインにとって苦痛だったのは——いや、それはいまでも胸にのこるしこりだ。なぜなら、それはピーターの存命中ついに解決することはなかったのだから——権力欲にかられた兄によって彼女がむりやり書かされたものこそ、ほかならぬ兄本人の人格の発露といえるものだったにもかかわらず、ピーターその人は本来ヴァレンタインのものである平和を愛する高尚な意見を書いたことだ。当時、〝デモステネス〟の名はヴァレンタインにとって耐えがたい重圧だった。その名前で彼女が書くことはすべてうそ、しかもそれは自分のうそですらなく——ピーターのうそだった。うその皮をはがしたところにあるもののもうそだったのだ。

いまはそうではない。この三千年間は。わたしは、〝デモステネス〟の名前を自分のものにした。〈百世界〉におけるあまたの学者たちの思考のもとになり、多くの国家のアイデンティティを形成するのに役立ったのは、わたしが書きあげた歴史書や伝記なのだ。もうあなたの出る幕はないわ、ピーター。わたしを利用して作りだそうとしたものも、もう終わり。

ただし、書きあげたばかりのエッセイをながめながら、たとえ命令を下す存在としてのピーターの束縛からはのがれたとしても、その影響が消えたわけではないとヴァレンタインは悟った。修辞学や弁証法に関する彼女の知識は――そう、煽動家としての素養も――すべてピーターから教えこまれ、あるいは押しつけられたものだ。そしていま彼女は、ピーターがあれほど夢中になっていた政治的操作を崇高な目的のためとはいうものの、そっくりそのまま踏襲している。

ピーターは、〈大発展期〉初頭の六十年にわたって全人類の支配者であるヘゲモンとして役割をはたした。いさかいの絶えない各共同体のすべてをひとつにまとめあげ、はかり知れぬ努力の末にスターシップを送りだし、かつてはバガーたちが生息していた世界をすべて手に入れ、なおかつ居住可能な世界をほかにも発見したのだ。そして、彼が死ぬまでには、〈百世界〉のどれもが定住を完了したか、植民船を送りだしたかしていた。もちろん、その後スターウェイズ議会がふたたび全人類をひとつの政府のもとにまとめあげるまでには千年ちかい年月がたっていたが――初代の真のヘゲモン――あのヘゲモンの記憶こそが――人類の統一を可能にした物語の核心だった。

ピーターの魂のような、道徳のかけらすらないところから調和と統一と平和が生まれた。対してエンダーの残したものといえば、すくなくとも人類の記憶に残ったのは、殺戮、それも無差別の異類皆殺し(ゼノサイド)だ。

ヴァレンタインの弟のエンダー、彼女が家族とともに旅をして会おうとしている人物――彼には、やさしさがある。ヴァレンタインが愛し、ごく幼いころには保護してやろうとした相手だ。彼こそが、善なる存在だった。たしかに、エンダーもピーターに劣らぬ残酷な性格を持ちあわせてはいたが、彼にはおのれの残虐さに愕然とする良識があった。ヴァレンタインはピーターを忌み嫌うのとおなじ熱意をもってエンダーを愛した。だから、ピーターが地球をおのれの支配下におくと決めてエンダーを追放したとき、ヴァレンタインは弟と行動をともにしたのだ――こうして彼女は、自分を左右するピーターの個人的主導権に対してついに反旗をひるがえしたのだった。

それなのに、いままたわたしは、むかしのように政治の世界にもどったのだとヴァレンタインは思った。

感情をはさまないてきぱきした声で、彼女は端末装置に鋭く命令を与えた。「送信せよ」と。エッセイの上空に〝送信中〟というメッセージがあらわれた。そのむかし学術論文を書いていたころは、通例、送信先を明示する必要があった――書き手がヴァレンタイン・ウィッギンだと察知されないために、なんらかの抜け道を通して出版社に論文を送っていた。だがいまはちがう。エンダーの破壊分子的友人が、〝ジェイン〟という偽名であることが明白なコードネ

ームを使って動き、そうした手間をすべて肩代わりしてくれていた——亜光速で移動する宇宙船から送られてくるアンシブルのメッセージを、五百倍以上の速さで時間が経過する惑星上のアンシブルで解析可能なメッセージに翻訳までして。

スターシップと交信する場合、惑星上のアンシブルは膨大な時間を消費するので、そのほとんどは航行情報や指示の伝達にかぎられている。まとまった長いメッセージを送ることが許されているのは、政府や軍の要人だけと決まっていた。ヴァレンタインにはどう頭をひねっても理解できないのだが、自分が書く長大なエッセイの送付にかかるたいへんなアンシブル時間をくすね——それと同時に、こうした反政府的な文書の出所をだれにもつかめないようにするのに、ジェインはどんな方法を使っているのだろう。それだけではない。ジェインは、さらに多くのアンシブル時間を使って、出版物に載ったヴァレンタインの著作に対する反応を返送してきて、彼女のプロパガンダに反撃するために政府がもちいたあらゆる論法や戦術に関して報告してくれる。〝ジェイン〟の正体が何者であるにせよ——ヴァレンタインは、〝ジェイン〟とは政府の最上層部にまで食いこんでいる覆面組織の名にすぎないのではないかと疑っているのだが——彼女はとてつもなく優秀だ。そしてまた、とてつもなく向こう見ずでもある。だが、ジェインがそういう危険に対して自分の——あるいは自分たちの身をもって楯になってくれるおかげで、ヴァレンタインは力のおよぶかぎりいくらでもエッセイを発表することができ、それに思う存分影響力を与え、かつまた危険なものにできるのだ。

ことばが相手に致命傷を負わせる武器になるとしたら、わたしはそれに兵器庫を与えなければ

ばならない。

とはいうものの、そんなヴァレンタインもひとりの女だ。革命家たちにも人生を生きる権利があってていいのではないだろうか。ひとときの満足――あるいは楽しみ、いや、ただの安らぎでもいい――ときにはこっそりそれを味わっても。彼女は椅子から立ちあがった。あまりに長時間すわっていたあとで体を動かしたために生じた痛みは感じないふりをして、身をくねらせるように狭苦しい船室から出た――じつをいえば、自家用スターシップに改装するまえは貯蔵庫だった場所だ。ヤクトが待っているであろう部屋へ一刻も早く行きたい自分が、ちょっぴりうしろめたい。歴史に名をのこす偉大な革命の宣伝者たちのほとんどは、たかが三週間の肉体的禁欲に耐えただろうに。あるいは、彼らも？　だれか、その点だけにしぼって調査をした者なんているのだろうか？

どういう許可申請書を書けば、そんなプロジェクトの研究が許されるだろうなどと考えているうちに、かいこ棚が四つならんだ部屋についてしまった。ヴァレンタインたちはこの部屋を娘のシュフテ夫婦と共有している。シュフテの夫となったラースは、一家が出発をほんの数日後にひかえたある日、恋人が本気でトロンヘイムを離れるつもりだと知って結婚を申しこんだのだ。新婚カップルと部屋を共有するのは楽ではない――ヴァレンタインは同室にいるだけで、とんでもない闖入者になった気がした。けれども、こうするしかなかったのだ。このスターシップはぜいたくなクルーザーだし、望みうるかぎりの快適さをそなえてはいたが、なにせこれほどの大人数を収容するように設計されてはいなかった。トロンヘイムあたりで、なんとか使

えそうな船はこれだけだったのだから、がまんするしかなかったのだ。

二十歳になる娘のロウと、十六歳の息子ヴァーサムは、生まれたときからの教育係であり一家のもっとも親しい友人であるプリクトともうひとつの船室を共有している。ヨットのスタッフとクルーで、ヴァレンタインたちの旅に同行することをえらんだメンバーは――彼ら全員の同行をこばみ、トロンヘイムにしばりつけてくることは妥当ではなかっただろう――他のふたつの船室を使っていた。ブリッジと食堂、調理室、サロン、仮眠室――船内のいたるところに、ややもすれば爆発しそうな不安を懸命にこらえる人びとがあふれている。

けれども、いま廊下には人っ子ひとり見当たらず、ヤクトは早くもドアにテープでこんな注意書きを貼りだしていた。

〝邪魔したら命はないぞ〟

注意書きには、〈所有者〉と署名してある。ヴァレンタインはドアをあけた。ドアのすぐわきの壁によりかかっているヤクトを見て、彼女はぎょっとして小さく声をあげてしまった。

「おれの姿を見て喜びの声をあげてくれるとは、うれしいね」

「びっくりさせるからよ」

「はいりたまえ、わが愛しの煽動家君」

「ご存じでしょうけど、手続き上は、わたしがこの船の所有者よ」

「妻のものは夫のものさ。おれは財産狙いできみと結婚したんだぞ」

ヴァレンタインは室内にはいっていた。ヤクトがドアを密閉した。

「あなたにとって、わたしはそれだけの意味しかないの？」彼女はたずねた。「土地もちというだけ？」
「すこしばかりの地べたがあっても邪魔にはならんさ。土地を耕し種をまいて収穫する。季節季節でそれなりの仕事ができるからな」ヤクトが腕をさしのべた。ヴァレンタインはすすみ出て身をあずける。ヤクトは両手を軽く背中にまわして妻の肩を抱きとった。その抱擁はけっして強引ではなく、ヴァレンタインは満ち足りた気分になった。
「いまは晩秋ね」彼女はつぶやいた。「これから冬にむかうんだわ」
「土地を耕す時期ということだ」ヤクトがいった。「いや、雪がふるまえに火をおこして古い小屋をあたためておいたほうがいいかも」
　ヤクトがキスをした。それはまるで初めてのキスのようだった。
「もし、今日あらためてあなたに結婚を申しこまれたら、わたしはきっと承知するわ」ヴァレンタインはいった。
「おれだって、今日はじめてきみにあったとしても、結婚を申しこむさ」
　これまでに何度おなじことをいいあっただろう。けれども、そのことばを聞くとやはり微笑が浮かんでしまう。なぜなら、それはいまだに真実だからだ。
　二台のスターシップの壮麗なバレエは終幕にさしかかっていた。豪快な飛越と優美な回転をくりかえして宇宙空間をわたり、ついに出会い、触れあう瞬間を目前にしている。ミロ・リベ

イラは、自分のスターシップのブリッジからそのすべてを見守ってきた。肩をまるめ、頭を座席のヘッドレストによりかからせた姿勢で。傍目にはどう見ても不安定だ。ルジタニアにいるとき、こんな姿勢ですわっている息子を見ると、母は枕をもってくるといってきかなかった。そのほうが快適だろうからというのだ。息子が格別苦労しなくても頭をまっすぐに保つには、一見不安定に見えてもこの背をまるめた姿勢でいるしかないということが、母にはどうしても納得いかないらしい。

説明しても結局はむだなのだから、ミロは母のお節介を甘んじて受けいれた。母はいつだってちょこまかと動き、忙しく頭を働かせている。落ちついて息子の話を聞くことはほとんど不可能だ。人類の植民地とピギーの森をへだてる垂直フィールドを通過しようとして脳に損傷を受けて以来、ミロの話しかたは耐えがたいまでにのろくなり、口をきく当人もつらかったし相手にも理解しにくくなってしまった。ミロの弟で聖職者のキンは、まがりなりにも口をきけるようになったことを神に感謝すべきだといった――怪我をした直後の数日間は、アルファベット・スキャンでひとつひとつ文字を追ってメッセージをつづることでしか意思を伝えられなかったのだから。とはいえ、ある意味では一文字一文字つづるほうがまだましだった。すくなくとも、そうしているあいだは口をきかずにいたので、ミロは自分の声を聞く必要がなかったのだ。こもったような聞き苦しい音声が、のろのろと苦しげに口から出てくる。家族のだれひとりとして、辛抱強くミロの話に耳をかたむけてはくれなかった。たとえ相手が聞こうという努力をしても――すぐ下の妹エラや、友人であり継父である〈死者の代弁者〉アンドルー・ウィ

ッギン、そしてもちろんキンもそうだ——しまいに苛立ってくるのが感じとれた。彼らはミロがみなまでいわないうちにことばをひきとって終わらせてしまいがちだった。みんなは悠長にかまえてはいられないのだ。そういうわけで、たとえ相手が話をしたいといって、じっさいに腰を据えてこちらの話に耳をかたむけたとしても、ミロは遠慮して自由にしゃべることができなくなる。思想についての話などできるわけがない。長く、こみいった文章を口にすることは不可能だった。なぜならば、ミロが話しおえるころには、聞き手はその話がどうはじまったのかを忘れているのが落ちだからだ。

ミロは結論した。人間の脳はコンピュータと似ていて、一定のスピードのデータを受信することしかできないのだ。スピードが遅すぎると聞き手の注意力は散漫になり、情報が散逸してしまう。

それは聞き手にだけいえることではない。正直にいおう——話しているミロ自身も聞き手とおなじくじれったかったのだ。複雑な思想を説明するのにかかる手間ひま、思いのままにならない唇や舌や顎を動かしてことばを発する努力、そうしたことにどれほど時間がかかるかを考えると、うんざりしてしまって口をきく気力もなくなる。頭は従来どおり急速に回転し、あとからあとから考えが浮かぶので、ときには脳に休めといいたくなるほどだった。ときにはおとなしくして、安らぎを与えてくれ、と。だが、その考えは彼以外の人間に伝わることがないのだ。

ただしジェインは例外だった。ジェインとは話しあうことができる。最初、彼女は自宅のミ

ロ専用の端末装置にあらわれた。スクリーンに彼女の顔が浮かんだのだ。「わたしは〈死者の代弁者〉の友人よ」と、彼女はいった。「このコンピュータはもうすこし反応を良くできると思うわ」そのときから、ジェインだけは気がねなく話せる相手だということをミロは知った。ひとつには、彼女が極端に忍耐強かったためだ。彼女はけっしてミロの話を横取りしない。自分で最後まで話すのを待ってくれた彼女のおかげで、ミロはいそがなければという焦りを感じることもなく、相手を退屈させているのではという懸念にかられることもなかった。

もしかしたら、それ以上に意味があるのは、生身の聞き手とちがってジェインを相手にするときは思っていることを完全なことばにする必要がないことだった。ミロはアンドルーから個人用の端末装置をもらった——アンドルーが耳につけているのとおなじ宝石に内蔵されたコンピュータ・トランシーバーだ。宝石のセンサーを利用して、ジェインはミロが発するあらゆる音声や、頭部の筋肉の動きを逐一察知することができた。ミロが、いちいち発声を完了するまでもなく、きっかけだけを与えればジェインはわかってくれるのだった。つまり、ミロは労せずして、よりすばやく話し、しかもわかってもらえたというわけだ。

それに、ミロは声を出さずに話すこともできた。心のなかで思うだけで——いまとなってはどう喉をしぼってもそれしか出てこない、あの聞き苦しい、吠えるような、むせび泣くような声を発せずにすむ。したがってジェインが相手のときは、自分が障害をもっているということを再認識せずにすらすらと自然に話すことができるのだ。ジェインが相手だとミロは本来の自分をとりもどしたような気分になった。

いま、彼はほんの数カ月まえ〈死者の代弁者〉をルジタニアへ連れてきた貨物船(カーゴシップ)のブリッジにすわっている。ヴァレンタインの船とのランデヴーをまえに緊張していた。どこかほかに行く場所を思いついたならばそこへ逃げることもできただろうが——ミロには、アンドルーの姉のヴァレンタインはおろか、その他のだれにも会うつもりはなかった。いつまでもたったひとりでスターシップにこもり、ジェインだけを話し相手にしていればそれで満足だったのだ。

いや、そんなはずはない。ミロはつねに満たされない思いだった。

すくなくとも、このヴァレンタインとその家族は初めて会う人物ではある。ミロはルジタニアの人間とはすべて顔見知りだ。というより、自分にとって意味のある人間とはすべて顔見知りだ——あの星の科学者グループの全員、教育と理解のある人間たちとは。あまりによく知りすぎているだけに、ミロはおのれの身におきた事件に対する哀れみや悲嘆ややりきれなさを彼らのなかに見てとらずにはいられなかった。ミロを見て彼らが感じるのは、かつてのミロと現在のミロの落差だけ。彼らには損失しか見えない。

初めて会う人びとなら——ヴァレンタインとその家族なら——ひょっとしてミロを見てもべつの感じかたをするかもしれない。

とはいっても、それははかない望みだ。ミロを見たよそ者には、障害を得るまえの彼を知っている連中にくらべて、より深い理解どころかより浅い理解しか期待できないだろう。すくなくとも母やアンドルーやエラやオウアンダやそのほかのみんなは、ミロにはれっきとした頭脳があり、理解力があることを知っている。このぼくを見て、よそ者たちがどう思うか知れたも

のではない。背中のまがった、おとろえつつある肉体の持ち主。ひきずるような不器用な歩きかた。指をのばすこともできない手で三歳児のようにスプーンをわしづかみにし、口をきけばこもったような聞きづらい声。これで彼らは判断するだろう。まちがいない。こんな人間に複雑かつ困難なことがわかるはずがない、と。

ぼくはどうして来てしまったんだろう?

ぼくは来たんじゃない。出たんだ。問題の人物をむかえるためにここへやって来たわけじゃない。あそこを離れたかった。逃げてきたのだ。ただ、ぼくは自分をいつわっていた。三十年の旅に出るのだといっても、それは彼らからそう見えるだけだ。ぼく自身にとってはたかだか一週間半ばかり故郷を離れているだけ。とるに足らない時間だ。そして、ひとりきりでいられる時間はもう終わった。ぼくをもとどおりの人間あつかいして耳をかたむけてくれるジェインとの水入らずの時は過ぎた。

ミロはあぶなく、ランデヴーを中止させかねないことばを口にするところだった。アンドルーのスターシップを盗んで、二度とふたたび生身の人間にあいまみえずに永遠の旅に出ることだってできたところだ。

けれども、そんな無価値な行動はミロの性にあわなかった。いまはまだ。望みを捨てることはいつでもできる。ミロは覚悟を決めた。自分にはまだ、なにかできることがあるのかもしれない。このような体になってまで生きつづけることに意義を見いだせるようななにかが。ひょっとするとアンドルーの姉と会うことがそのきっかけとなるだろう。

二台のスターシップはいままさにドッキングしようとしていた。接合部が外に伸びて手さぐりするように相手をさがしている。ミロはモニターを注視しながら、次つぎと接合の成功を告げるコンピュータ・リポートに耳をかたむけた。二台のスターシップは、考えうるかぎりの方法でむすばれた。あとは完璧に並走してルジタニアへもどるだけだ。すべての物資は共有とい うことになる。ミロの船はカーゴシップだから、人間はほんのわずかしか乗れない。だが、相手の船の生命維持物資を詰めこむ余地はたっぷりあるだろう。二台のコンピュータは協力して、完全なバランスを編みだそうとしていた。

負荷を計算しおえると、コンピュータは、まったくおなじペースの亜光速にもどすにあたって、とりあえずパーク転移をおこなうにはどちらがどれくらいスピードをあげればよいかをきっちり算出した。おたがいの積み荷をほぼ完璧に把握している二台のコンピュータは、織細かつ複雑きわまるデータの交換をして手順を決定した。その計算が完了した直後、スターシップ間の通路が完全に接続された。

ミロは、チューブ状の通路をこするような足音を耳にした。椅子をまわし――ゆっくりと、だ。ミロの行動はすべて時間がかかる――こちらへやってくるその女性を見た。わずかに腰をかがめている。それでなくても彼女は、さほど大柄ではなかった。白髪で、ところどころに白茶けた色がのこっていた。背筋をのばした相手の顔を見て、ミロはその人物を判断した。年をとってはいるが老いぼれてはいない。たとえ彼女がこの出会いに不安をいだいていたとしても、表情からそれをうかがうことはできなかった。とはいえ、アンドルーやジェインから聞かされ

たところによれば、この女性は二十歳の障害者とはくらべものにならないほどおぞましい相手に、いやというほど会ってきているのだ。
「ミロね？」彼女はたずねた。
「ほかにだれがいる？」ミロは切りかえした。
一瞬、ほんのわずかな間があり、彼女は相手の口から出た聞きなれない音声を解析し、その内容を理解した。ミロはいまではそうした間に慣れっこになっていたが、それでも不快感は消えない。
「わたしはヴァレンタインよ」彼女は名乗った。
「わかってる」ミロは答えた。ぶっきらぼうにそういっても、困難であることにはかわりがないが、だからといってばかていねいな返事をする必要もない。これはおたがいの国を代表する二大巨頭の会見というわけではないし、決定しなければならない案件が山積しているわけでもない。だが、敵意のないことを見せるためにも多少の努力は必要なのだ。
「あなたの名前の〝ミロ〟というのは、〝わたしは見る〟ということなのでしょう？」
「〝わたしは注意深く見る〟ということだ。〝わたしは注意深い〟でもいいかもしれない」
「あなたのことばは、思ったほど聞き取りにくくはないのね」ヴァレンタインはいった。
その件をこれほどあけっぴろげに口に出されて、ミロは啞然とした。
「脳の損傷による言語障害よりもポルトガル語なまりのほうに手こずりそうだわ」
一瞬、ハンマーで心臓を一撃されたような感じがした――アンドルーをのぞけば、ミロの障

害についてこれほどあけすけに話をした人間はだれもいなかった。もっとも、この女性はアンドルーの姉ではないか。飾り気のないしゃべりかたをするからといって、意外に思う理由はなかった。

「なんなら、あなたが他人と意思の疎通をはかるときに、それが障害にならないというふりをしてもいいのよ」

どうやらショックを受けたのを見抜かれてしまったらしい。だが、そのショックもおさまったいま、ミロは、ひょっとしたらこれは気をわるくするようなことではなく、むしろ問題を避けずにすむのを喜ぶべきなのかもしれないと思った。ただ、彼は現実には気分を害したので、一瞬、その理由がふしぎだった。それはすぐわかった。

「ぼくの脳障害のことは放っておいてほしい」彼はいった。

「そのせいで、あなたが理解しにくくなるとしたら放っておくわけにはいかないわ。なんとかしなくちゃ。いまからそうけんか腰にならないでほしいわね。おたがい、会ったばかりなのに不快がっていたのでは、先が思いやられるわ。たまたまわたしがあなたの脳障害のことをまるで自分のことみたいに話したからって、そんなにつっかからないでちょうだい。これからも遠慮なく思ったことをいわせてもらうつもりよ。そのせいで、世界は自分の失望を中心にしてまわると思っている神経過敏な青年の反感を買うかもしれないけれどね」

ミロは怒り心頭に発した。会ったばかりだというのに、彼女は彼を裁定した。それも、手厳しく。不公平だ――デモステネス流ヒエラルキーを著した人間ともあろう人の取るべき態度で

はあるまい。「ぼくは、世界はぼくの失望を中心にしてまわるなんて思ってやしないぞ！　しかし、これはぼくの船だ。そこへ乗りこんできて勝手なまねをしないでくれ！」これこそが気分を害した理由であって、彼女のことばのせいではなかった。彼女は正しい——その発言が彼の気分を害したのではない。彼女の態度、磐石(ばんじゃく)の自信がたまらなかったのだ。ミロは、ショックもあわれみもなしに見られることに慣れていなかった。

彼女はミロのとなりの椅子に腰をおろした。彼は椅子をまわして面とむかった。相手は、目をそらそうともしない。それどころか、彼女はミロの体を頭のてっぺんから爪先まで、しげしげと冷静に値踏みするような目で観察した。「エンダーは、あなたはタフだといっていたわ。ねじまがりはしたけれど、こわれてはいない、と」

「あなたは、ぼくの精神分析をやろうっていうのか？」

「あなたこそ、わたしの敵になるつもり？」

「そうなるべきかな？」

「やめておくことね。わたしはあなたの精神分析をする柄でもないし。アンドルーがわたしたちを会わせたのは、わたしにあなたを癒させるためじゃない。あなたを**わたし**に協力させるために会わせたのよ。協力してくれないなら、それでもけっこう。してくれるなら、それもけっこう。とにかく、一、二、三はっきりさせておきたいことがあるの。わたしは起きているあいだの一分一秒を惜しんで反政府的なプロパガンダを書いているけれど、その目的は植民地における〈百世界〉への一般大衆の感情を刺激することよ。スターウェイズ議会がルジタニアを制圧す

るために送りだした艦隊を排斥させようと努力しているのよ。ルジタニアは、あ、あなたの、世界であって、わたしの世界ではないのにね。わかっているでしょうけど」

「あなたの弟は、ルジタニアにいる」ミロは、まったくの滅私奉公だといいたげな相手の口調を否定しようとした。

「そう、ルジタニアには、あなたの家族もわたしの家族もいるわ。そして、あなたもわたしも、なんとかしてペケニーノたちを絶滅から救おうと思っている。さらに、あなたもわたしも、エンダーがあなたの故郷で窩巣女王を復活させたため、スターウェイズ議会の作戦が成功したらふたつの異種族が滅亡することになると知っている。失うものはあまりにも大きいわ。だから、わたしはすでに、問題の艦隊をくい止めるためできるかぎりの手を打っている。そこで、あなたにつきあっていくらかの時間を費やすことが役にたつのなら、あなたと話し合うために貴重な執筆時間をさいてもかまわないと思っているのよ。ただし、あなたが怒るかどうか気にして時間をむだにするつもりはさらさらないわ。そういうわけ。敵にまわるつもりなら、ひとりでそこにすわっていなさい。わたしは仕事にもどるから」

「アンドルーからは、あなたほどの善人をほかに知らないと聞かされていた」

「彼がそう結論したのは、わたしが理屈の通じない子どもを三人も育てあげるのを見る以前のことよ。あなたのお母さんは六人も育てたそうね」

「そのとおり」

「あなたが、その長男」

「そうだ」
「気の毒に。親は、いちばん最初の子どもを育てるときにいろいろと失敗するものなのよ。親になったばかりだから、なにもわからず甘やかしほうだい。ついつい子育てに失敗して、そのくせ自分たちはまちがっていなかったといいたがるものだわ」
ミロはこの女性に自分の母親のことを勝手に決めつけられたくなかった。「ぼくの母は、あなたとは大ちがいだ」
「そうでしょうね」ヴァレンタインは椅子から身をのりだした。「で、決心はついた？」
「決心って、なんの？」
「協力するの？　それともあなたは人類の歴史から、ただ三十年逃げていただけなの？」
「ぼくになにをさせる気だ？」
「決まってるでしょう。話が聞きたいのよ。事実についてはコンピュータに照合すればすむことだから」
「なんの話を？」
「あなたたちのこと。ピギーのこと。あなたたちとピギーのこと。ルジタニア粛清艦隊という今度の事態は、結局、あなたたちとピギーのかかわりがきっかけだったのよ。つまりは、あなたたちがピギーに干渉して――」
「われわれは彼らによかれと思ってやったんだ！」
「あら、また気にさわるいいかたをしたようね」

ミロはヴァレンタインをにらみつけた。だが、そうしながらも、相手のいうとおりだと納得していた――たしかに彼は神経過敏になっている。〝干渉〟という表現は、科学的に使用された場合、ほとんどニュートラルな意味をもつ。研究対象であった文化に変化を導入したという意味にすぎない。もしも否定的なニュアンスがあるとしたら、それはミロが科学的な観点を失ったためで――彼はペケニーノを研究対象として見ることをやめ、彼らを友人あつかいするようになっていた。その点では明らかにミロに非があった。いや、非はなかった――彼は自分がそう考えなおしたことを誇りに思っていたのだから。「先をつづけて」彼はうながした。

「すべてのきっかけは、あなたが法律をやぶり、ピギーたちがヒユを栽培しはじめたことだった」

「いまはちがう」

「そう。そこが皮肉だわね。デスコラーダ・ウィルスが侵入し、あなたの妹が彼らのために開発したヒユの血統をひとつのこらず殺してしまった。つまり、あなたがたの干渉はむだだったのよ」

「いや、むだじゃなかった」ミロは反論した。「彼らは学んでいるんだ」

「ええ、知っているわ。もっとはっきりいうと彼らは選択しているのよ。なにを学び、どう行動するべきかをね。あなたがたは彼らに自由をもたらした。あなたがたの決断には、わたしも心から賛成するわ。でも、わたしの仕事はあなたがたのことを書いて、〈百世界〉や植民地の人びとに提供すること。そういう人びとはかならずしも、こちらの意図どおりに解釈してくれ

るとはかぎらない。だから、ぜひ聞きたいのよ。あなたがたが法律を犯してまでピギーに干渉した経過やその理由、それから、法律違反のあなたがたは法廷に送られて罪の裁きをうけるのが当然なのに、ルジタニア政府や人民はなぜスターウェイズ議会に反旗をひるがえしたのかということをね」

「その話ならアンドルーからもう聞いただろう」

「そして、もう概要は書きあげたわ。あとは個人レベルの話が必要なの。いわゆるピギーたちも人間だということをみんなにわかってもらいたいのよ。それから、あなたのことも。あなたを一個の人間としてわかってもらわなければ。できることなら読者があなたに好感を抱いてくれるといいんだけど。そうすればルジタニア艦隊の実像が見えてくる――実体のない脅威に対するおぞましいほどの過剰反応だということがね」

「艦隊は異類皆殺し（ゼノサイド）だ」

「エッセイには、そう書いたわ」ヴァレンタインがいった。

ミロはヴァレンタインの自信がまんできなかった。揺るぎない信念が鼻持ちならなかったのだ。となれば反論するしかない。そこで彼は、まだ完全に整理できてもいない考えを思わず口走らずにはいられなかった。いまだ半信半疑でいる考えだ。「艦隊は自己防衛の目的もかねているんだ」

　これは思ったとおりの効果を生んだ――ヴァレンタインは講義を中断し、問いかけるように眉をあげさえしたのだ。問題は、いまの発言がどういう意味をもつか説明しなければならなく

なったことだった。
「デスコラーダは」と彼は話しはじめた。「この世でもっとも危険な生命体だ」
「だったら、隔離すれば事足りるわ。分子破壊（M・D）装置を搭載した艦隊を送りだすまでのことはないでしょう。あれは住民全員もろともルジタニアを目に見えないほどの宇宙塵にしてしまう威力のある武器よ」
「隔離すればすむと断言できるか？」
「懲りずに知性体を抹殺することを考えるだけでも、スターウェイズ議会がまちがっていることはたしかね」
「ピギーたちはデスコラーダなしでは生きられない」ミロはいった。「そしてもしよその星にデスコラーダがひろがったら、そこの住民は全滅するだろう。そうなるに決まっているんだ」
ヴァレンタインでもけげんそうな表情をすることがあるのを見て、痛快な気分になった。
「デスコラーダ・ウィルスは制御できたんだと思っていたけれど。デスコラーダを封じこめて人間には影響を与えないようにする方法を発見したのは、あなたのお母さんのご両親だったのでしょう」
「デスコラーダには適応性がある」ミロはいった。「ジェインの話では、デスコラーダはこれまでにも何度か変化したことがあるそうだ。ぼくの母と妹のエラはその方面の研究をしている——なんとかデスコラーダの先回りをするためにね。デスコラーダは意図的に変化しているように見えることすらあるんだ。知性があるんじゃないかと思うことがね。人間に致命的な作用

をおよぼさないようにデスコラーダを制御する薬物をあみだしても、やつらはそれをかわす手段を見つけてしまうのさ。デスコラーダは、人類がルジタニアで生存するために欠かせない地球産の穀物にまではいりこもうとしている。いまじゃ、薬物を散布しないと枯れてしまうんだ。デスコラーダがフェンスの内側にまではいりこむ方法を見つけたらどうなると思う？」

ヴァレンタインはだまっていた。これにはすらすらと返事はできない。彼女はこの問題ととももに取り組んだことはなかったのだ――だれだってそうだろう。ミロ以外は。

「このことはジェインにもいってないんだが」ミロが口をひらいた。「艦隊が正しいという可能性はないんだろうか？　人類全体をデスコラーダから救うには、ここでルジタニアを破壊してしまうしかないのでは？」

「それはちがうわ」ヴァレンタインがいった。「これはスターウェイズ議会が艦隊を送りだした目的とはなんのかかわりもない。彼らは惑星間の政治がらみでしか動かないのよ。だれがボスかを各植民地に思い知らせたいだけ。スターウェイズ議会側の大義名分は、どうしようもない官僚主義と軍隊の――」

「口を出さないでくれ！」ミロがいった。「ぼくの話を聞きたいといったな。聞かせてやろう。スターウェイズ議会がどんな大義名分をふりかざそうと関係ない。たとえ連中が血も涙もない殺し屋集団であっても、ぼくの知ったことか。要は――連中にルジタニアを破壊させるのが正しいのではないかということだ」

「なんて人なの、あなたは」ヴァレンタインがいった。ミロは、その声に敬意と同時に憎悪も

聞き取った。
「あなたは倫理的な哲学者だね」ミロは答えた。「ききたいのはこっちのほうだよ。われわれはどこまでもペケニーノを愛さなければならないのか？　彼らがデスコラーダをもったまま宇宙に進出して全人類を死滅させるのを許さなければならないのか？」
「もちろん、そんなことはないわ。必要なのは、デスコラーダを中和する方法を見つけることよ」
「それが見つからなかったら？」
「そのときは、ルジタニアを隔離するのね。ルジタニア全土の人間が死滅しても——あなたの家族も、わたしの家族も例外じゃないわ——たとえそれでもペケニーノを滅ぼしてはいけない」
「へえそう？」ミロがいった。「高巣女王はどうする？」
「エンダーから聞いたところでは、彼女は再生しつつあるそうだけど——」
「高巣女王は体内に完全な産業社会をそなえているんだ。スターシップをつくってルジタニアを出ようとしている」
「まさかデスコラーダに侵されたまま出るつもりじゃないでしょうね！」
「当然そうなるさ。彼女はすでにデスコラーダのキャリアだ。このぼくだって」
これは止めの一撃になった。ヴァレンタインの目を見て、ミロは知った——恐怖があることを。

「あなたも感染するよ。自分の船に駆けもどってぼくから感染しないように接触を断ったところで、ルジタニアに着陸したが最後、あなたも、あなたの夫も、それに子どもたちもデスコラーダに感染するのを避けられない。ふつうに生活していれば食物や水を通してデスコラーダに侵されずにはいられないからだ。そうなったが最後、ルジタニアを出るということは死と破滅を世界にもたらすことだ」

「そうなる可能性があるとわかってはいたはずね」ヴァレンタインはつぶやいた。

「あなたたちが出発するときは、それはたんなる可能性だった。デスコラーダはじきにコントロールできると思っていたからね。ところが、いまでははたしてコントロールできるかどうかさえあやしくなってきた。つまりルジタニアに着陸したらもう二度と出られないということさ」

「気候が快適であってくれるといいけど」

ミロは相手の表情を読んで、自分が明かした情報がどう解釈されたかをたしかめた。最初の恐怖はもうない。ヴァレンタインは平静さをとりもどして考えていた。「ぼくはこう思う」ミロはいった。「スターウェイズ議会がどれほど忌むべき存在であり、その計画がどれほど悪辣なものであったとしても、あの艦隊は人類にとって救済になるかもしれない」

ヴァレンタインはことばを選びながら考え深げに答えた。それがミロの気にいった——この女性は考えもなく反駁してくるようなタイプではない。彼女は学ぶということを心得ている。

「ものごとが、あるひとつの可能性にむかってすすむと、いつかは究極の時がくるものだとい

うのはわかるわ——でも、それはありそうにないわね。だいいちに、これをすべて承知のうえで窩巣女王がルジタニアから外界にデスコラーダをはこぶようなスターシップをつくるとはとても思えない」

「あなたは窩巣女王を知ってるわけじゃないだろう？」ミロが詰問した。「彼女がなにを考えているかわかるものか」

「よしんば彼女がその気だったとしても、あなたのお母さんや妹はこの問題を研究中なんでしょう？　わたしたちがルジタニアに到着するまでには——例の艦隊がルジタニアに到着するころには——デスコラーダを完全にコントロールする方法が見つかっているかもしれないわ」

「もしもそんな方法を発見したとしても」ミロがいった。「それを利用することは許されるだろうか？」

「許されない理由でもある？」

「デスコラーダ・ウィルスを全滅させるなんてむりさ。あのウィルスはペケニーノの生活環(ライフサイクル)に不可欠の要素なんだ。ペケニーノの体が死んだとき、それを彼らのいう第三の生である樹木の姿に変態させるのはデスコラーダ・ウィルスだからね——そして、その第三の生で樹木になってはじめてペケニーノの雄は雌を受胎させられるんだ。デスコラーダ・ウィルスがなくなったら第三の生にいたる道を断ち切られたも同然で、ピギーはいまの代で絶えてしまうだろう」

「だからといって研究は絶対むりというわけじゃないわ。困難になるだけよ。あなたのお母さんと妹が開発しなければならないのは、ペケニーノを成体に変える能力は温存したまま、人体

と、人間が摂取する作物に影響しないようにデスコラーダをコントロールする方法よ」
「たったの十五年間でね」ミロがいった。「むずかしい話だ」
「でも、不可能じゃないわ」
「そう。可能性はある。で、あなたはその可能性に賭けて、艦隊を追い払おうというわけか」
「デスコラーダ・ウィルスをコントロールできるかできないかにかかわらず、あの艦隊はルジタニアを破壊するために送られてきたのよ」
「もう一度いうが——送りだした側の意図なんかどうでもいい。理由がどうであれ、ルジタニアを破壊することが他の世界の人類全体を救う唯一の確実な方法かもしれないんだ」
「だから、それはまちがいだといっているのよ」
「あなたはデモステネスなんだろう？　アンドルーからそう聞いている」
「そのとおりよ」
「つまり、異質さの階層（ヒエラルキー）を考えだした人間だ。異郷人（ユートレニング）は、われわれ自身の世界の外に住む人間。異世界人（フラムリング）は、われわれとおなじ種だがよその世界に住んでいる。異種人（ラマン）は異なる種であるにもかかわらず、われわれと意思の疎通をはかることもでき、人類と共存する能力がある。最後に残った人外動物（ヴァーレルセ）は——まったく理解不能だ」
「ペケニーノはヴァーレルセじゃないわ。窩巣女王もね」
「しかし、デスコラーダはそうだ。ヴァーレルセだよ。全人類を破滅させる力をもったエイリアンで……」

「ただし、そうしないようにコントロールできるかも……」
「……たとえそれができても、意思の疎通をはかるのは不可能だ。共存を望めないエイリアン。そういう相手とは戦争も避けられないと書いたのは、あなたじゃないか。相手がなんとしても人類を撲滅しようとしているように見えて、しかもこちらからの呼びかけに答えず、理解不能なエイリアンだったら、穏便に敵の攻撃をかわせる可能性がひとつもなかったら、われわれには自衛のために必要なあらゆる手段をとる正当な理由がある。相手を徹底的に破滅させることもふくめてね」
「ええ、わたしはそう書いたわ」ヴァレンタインがいった。
「ところが、デスコラーダを全滅させるしか手はないというのに、デスコラーダを全滅させるには、命あるペケニーノ、窩巣女王、そしてルジタニアにいるすべての人間がひとりのこらず死ななくてはならないとしたら、どうすればいい？」
ヴァレンタインの目にどっと涙があふれるのを見て、ミロは仰天した。「そうだったの。あなたはそこまで」
ミロは困惑した。「いま話しているのは、ぼくのことなんかじゃない」
「あなたはそこまで徹底して考えたのね。将来起こりうることをすべて考慮したのね――よいこともわるいことも――それなのに、確信がもてたのはただひとつだけ。あらゆる倫理的判断の基盤としてあなたが確信した想像上の未来像とは、あなたやわたしが愛したすべての人や、こうであれかしと望んだすべてのことが消えさるしかなかったのね」

「好きこのんでそういう未来を考えたわけじゃ――」
「わたしも、あなたが好きでそう考えたとはいっていないわ」ヴァレンタインがいった。「あなたはそういう未来がくることを想定したといったのよ。でも、わたしはちがう。いくばくかの希望のある世界で生きることをえらぶわ。あなたのお母さんと妹がデスコラーダをコントロールする方法を発見した世界、スターウェイズ議会が改変されるかべつの組織にとってかわられうる世界、ある種族をまるごと破滅させてしまうような意思も力もない世界で生きることをえらぶわ」
「思いどおりにならなかったら？」
「としても、死ぬまでにはたっぷり時間があるもの。それから後悔してもおそすぎはしないでしょう。でも、あなたは――そういつも望みのない考えかたをしたいわけ？　ついついそう思いたくなる気持ちもわからないではないわ。アンドルーから聞いたけど、あなたはハンサムな青年だったって――いまだってハンサムだけど――完全には体の自由がきかなくなったことであなたが深く傷ついたともいっていた。でも、あなた以上に傷ついている人だってたくさんいるけれど、世の中の見方がそう暗くはならないものよ」
「あなたはぼくをそう分析するわけだね？」ミロがたずねた。「知り合って三十分で、ぼくのことがすっかりわかったというわけか？」
「わかったのは、いまみたいに憂鬱な話はいまだかつてなかったということよ」
「で、それはぼくが不具者だからだというんだな。いわせてもらうけどね、ヴァレンタイン・

ウィッギン。ぼくだって、あなたとおなじように考えられたらいいと思うよ。それだけじゃない。いつかはこの体がもっとまともになればいいとも思うさ。いっそ死んでいたら良かったと思うこともないではないけどね。さっきぼくがいったことは、絶望から出た考えじゃない。なにもかも、そういう可能性があると思えばこその発言なんだ。そして、起こりうる可能性があることは考えておくべきなんだ。いざというときに面食らわないようにね。最悪の事態を予想して考えておかなければ。たとえそうなっても生きぬく方法がわかっているように」

ヴァレンタインはミロの表情をうかがっているようだった。手ざわりでも確かめているような視線が感じられる。皮膚に隠されたもの、脳のなかまでもまさぐるような微妙な感触。「いいわ」彼女はいった。

「いい？」

「ええ。夫とわたしは、ここに移ってくる。あなたの船で暮らすことにするわ」彼女は座席から立ちあがって、チューブ状の通路のほうへ足をむけた。

「どうして、そう決めた？」

「わたしたちの船はごみごみしすぎているからよ。それに、あなたとの話は、まちがいなく得るものがあるし。それも、エッセイの題材になること以外にもね」

「へえ、ぼくはあなたのテストをパスしたってことか？」

「ええ、そうよ」彼女はいった。「わたしもパスしたかしら？」

「ぼくはあなたをテストしてたわけじゃない」

「信じられないわね。でも、気がついてないといけないから教えてあげる——わたしはちゃんとパスしたのよ。あなたがあんなになにもかも話してくれたのが、その証拠」

ヴァレンタインは去った。重い足どりで通路を遠ざかってゆくのが聞こえる。やがてコンピュータから、彼女が両船をつなぐチューブを通過中という報告がはいった。

ミロは早くもヴァレンタインの存在をもとめていた。

なぜならヴァレンタインのいったとおりだったからだ。彼女はミロのテストをパスした。聞き手としての彼女には、だれもかなわない——苛だつようすもなく、話を先取りすることもせず、話しているミロの顔からよそへ視線を泳がすこともなかった。ミロは正確さに気をつかうかわりに感情を吐露するようにヴァレンタインに話しかけた。多くの場合、彼のことばはほとんど聞き取れないほどだったにちがいない。それなのに彼女はたいへん注意深くじゅうぶん耳をかたむけ、こちらの論点をあますところなく理解して、一度たりとも聞きなおしたりしなかった。この女性に対しては、ミロも脳に損傷をうける以前に人と話したときのような自然さで話をすることができたのだ。たしかに、彼女は独断的で頑固で親分肌で、すぐに結論を出したがる。それでいて、自分とは逆の意見にも耳をかたむけ、必要なら考えなおすこともできる人だ。耳をかしてくれる相手だからこそ、ミロも話すことができたのだ。ひょっとしたら、ヴァレンタインといっしょにいるときは、彼はもとどおりのミロでいられるのかもしれない。

3　清らかな手

〈人間のもっとも不快な点は、変態をしないというところだ。汝やわたしの同族たちは生まれたときは地虫のようだが、子孫を残せるようになるまでにはもっと高等な形態に変わる。人間は生涯地虫のままだ〉
〈人間もちゃんと変態する。彼らはひっきりなしに人格を変える。ただし、そのたびに、たったいま征服した肉体を所有しているという思いこみで新しい人格が肥え太る〉
〈そんな変態は表面的なものだ。組織の生体はずっとおなじなのだから。人間は自分が変わることを非常に誇りにするが、変態した姿をどのように想像したところで結局はなんとかかんとか理屈をつけて、それまでとまったく変わりなく行動するばかりだ〉
〈あなたは人間とあまりにかけはなれているから、とうてい彼らを理解することはできない〉
〈汝は人間とあまりに似すぎているから、彼らをはっきりと理解することはぜったいにできまい〉
ハン・チンジャオが初めて神がみの声を聞いたのは、七歳のときだった。しばらくのあいだ、

彼女は自分が神がみの声を聞いているのだとは思わなかった。わかっていたのは、自分の手が、なにやら目に見えないべとべとした不快なものにまみれて汚れているということだけで、その汚れを落とさずにはいられなかった。

最初の何回かは、ただささっと手を洗うだけでそのあと数日間は気分よく過ごせた。ところがしだいに、手を洗ってもすぐにまた汚れた感じがするようになり、それを落とすために何度も何度もこすり洗いしなければならなくなって、ついには日に数回も血が出るほどたわしで洗うしまつだった。痛くてたまらないほどごしごし洗ってようやく汚れを落とした気分になるのだが、それもほんの数時間しかつづかない。

チンジャオはそれをだれにもいわなかった。本能的に、手の汚れのことは隠しておかなければならないと思ったからだ。子供たちが神がみに話しかけられるとまず手洗いという行動が見られるようになるというのは、だれもが知っていることだ。パスの世界に住む親ならたいていの人が、自分たちの子供が清潔さに過剰な関心を示すようにならないかと胸をふくらませながら見まもっているのだった。けれども、こうした人びとは、手洗いという行動をひきおこすひどい自己への認識をわかっていないのだ。神がみは、話しかける対象にまず、おまえは口にできないほど穢(けが)らわしいと伝えてくる。チンジャオが手洗いのことを秘密にしたのは、神がみが自分に話しかけてきたという恥じらいのためばかりではなく、自分がこれほど汚れているとだれかに知れたら、きっと軽蔑されるだろうと思ったからだった。

神がみは秘密を隠す彼女に加担した。力まかせにこするのは手のひらだけでいいようにして

くれたのだ。おかげで両手がひどい傷だらけになったらぎゅっと握りしめてしまうとか、歩くときにスカートの襞に隠すとか、腰かけているときはおとなしく膝にのせているかすれば、だれにも気づかれずにすむ。おとなには、おさないのに行儀のいい少女としか見えない。

　母親が生きていれば、チンジャオの秘密はずっと早く発見されていただろう。だがじっさいは、ある使用人に見つかるまで何カ月もかかった。太った老ムパオが、チンジャオの朝食の席にかかった小さなテーブルクロスに血の染みがあることに偶然気づいたのだ。ムパオは、その染みの意味を即座に飲みこんだ——血まみれの手というのは、神がみに目をかけられた初期の印として周知のものではなかったか？　だからこそ、名誉心にはやった親たちは、とくに有望そうな子供にしつこく手洗いを強いるのだ。パスの世界ではどこでも、これみよがしに手を洗う行為は〝神がみ招来〟と呼ばれているほどだ。

　ムパオはとるものもとりあえずチンジャオの父親である徳高きハン・フェイツーのもとへ注進した。うわさによればハン・フェイツーは神がみの声を聞いた者である神子たちのなかでももっとも偉大な存在で、神がみは彼を外世界人フラムリングに会うことができるほどの力をもつ数少ない人間のひとりとみなしている。彼は神がみの声をほんのわずかといえども裏切ることなく、惑星パスの聖なる秘密をまもっているという。ハン・フェイツーはこの知らせを聞いて喜ぶだろう。そしてムパオはチンジャオのなかに神がみが宿ったことを最初に発見した者という名誉をあたえられるだろう。

　それから一時間もしないうちに、ハン・フェイツーは愛するおさない娘チンジャオをよび、

ともに輿に乗りこんで岩瀧にある寺院へとむかった。チンジャオは輿に乗るのをいやがった——自分たちを乗せてはこぶ人足たちにすまないような気がしたのだ。「彼らは苦しむわけではない」チンジャオが初めて自分の思いを口にしたとき、父親はこう説明してくれた。「彼らにとってはたいへんな名誉なのだ。これは人びとが神がみをうやまう気持ちを伝える方法のひとつだからね——神子が寺院へ行くとき、パスの人びとの肩にかつがれることでそうしてあげられるのだよ」

「でも、わたしはどんどん大きくなっているのに」チンジャオは抗った。

「もっと大きくなってわたしといっしょに輿に乗れなくなったら、自分の足で歩くか、自分の輿に乗るかすればいいことだ」父親はいった。自分の輿をもてるのは彼女自身も神がみの声を聞くおとなに成長した場合だけだということは、説明するまでもなかった。「それに、謙譲の気持ちをあらわしたいなら、人びとが重い荷をかつがなくてすむように、体重をふやさず、とても痩せていなければならない」むろん、これは冗談だ。ハン・フェイッーは太鼓腹というほどではないにせよ、福ぶくしい体格だった。とはいえ、冗談の裏には真実の教訓が隠されている。すなわち、神子たちは、けっしてパスの一般大衆の重荷になってはならない。神がみはあらゆる世界のなかでこのパスをえらんでその声を聞かせてくれた。人びとは、つねにこのことに感謝の気持ちをいだき、けっして反感をもってはならないのだ。

だがいま、待ちかまえている試練を思うとチンジャオの不安はつのるいっぽうだ。彼女は、自分が試験を受けるために連れていかれるのだと知っている。「教えこまれて神がみの声を聞

いたふりをする子供がたくさんいるのだ」父は説明してくれた。「神がみがほんとうにおまえをえらばれたかどうかを確かめなければならない」

「わたしは、えらんでなんかほしくありません」チンジャオはさからった。

「試験を受けているときは、いっそうそう思うだろう」そういう父の声は憐れみに満ちている。

それを聞いてチンジャオはますます不安になった。「人びとはわれわれの能力を特権とみなし、われわれをうらやむ。彼らは、神子たちが味わうたいへんな苦痛を知らないからだ。チンジャオよ、もしほんとうに神がみがおまえに声をかけてくださったのだとすれば、彫刻刀の刃で削られても目の粗い布で職人に磨かれても文句をいわない翡翠(ひすい)のように、おまえは苦痛に耐えることをまなぶだろう。だからこそ、わたしはおまえにチンジャオという名前をつけたのだ」

清照(チンジャオ)――その名の意味するところは、高貴な輝きということだ。これはまた、旧中国の古代の偉大な詩人の名でもあった。男性だけが尊敬の対象とされた時代にあって、その時代のもっともすぐれた詩人としてあがめられた女性詩人だ。「薄霧がたちこめた永い昼に物思いにふけり」これは李清照(リー・チンジャオ)が書いた『重陽酔花陰(重陽花陰に酔う)』という詞の出だしで、まさにいまのチンジャオの気持ちにふさわしい一節だ。

ところで、その詞はどういうふうにしめくくられているだろう？「簾(すだれ)は西風に捲かれ、人は菊よりも痩せている」チンジャオも結局はそうなる運命(さだめ)なのだろうか？彼女の心の先祖は、この詞を通じてチンジャオに教えてくれているのだろうか？西方から神がみがおとずれ、痩せおとろえて軽くなった黄金の魂を彼女の肉体から抱きあげてくれるまで、いま彼女におおい

かぶさっている闇が晴れることはない、と。わずか七歳という若さなのに、死について考えることなどおそろしすぎる。それなのに、彼女はこう思った。早く死ねば、お母さまにも会えるし、ほかでもない李清照（リー・チンジャオ）にだって会えるだろう。

もっとも、試験には死はいっさい関係ない。というより、すくなくともそのはずだった。じっさい、それはしごく単純だった。ハン・フェイツーがチンジャオを連れて部屋にはいると、そこには三人の年老いた男性がひざまずいていた。いや、男性のように見えただけで、女性であってもおかしくはない。あれだけの老人となると、男女の区別も消えてしまうのだ。三人の頭にはごくわずかな白髪があるだけで、髭はまったくなく、白い寸胴（ずんどう）の貫筒衣に身をつつんでいた。あとになってチンジャオが知ったところでは、彼らは寺院づきの宦官だった。古い習慣の生きのこりだ。スターウェイズ議会が介入してからは、宗教活動従事者がおこなう去勢はたとえ自発的なものであっても禁止ということになったからだ。だが、このときは生きている人間とは思えない謎めいた存在に見えた彼らの手で、チンジャオは衣服を点検されたのだった。

なにをさがしているのだろう？　彼らはチンジャオの黒檀の箸を見つけると、それを取りあげた。腰に巻いた帯も取りあげた。部屋履きも取りあげた。このときはなぜだかわからなかったのだが、こうしたものを取りあげられたのは、試験中に絶望のあまりそれを使って命を絶った子供たちがいたせいだった。ある子は鼻孔に箸をさし入れ、勢いをつけて床に倒れこんだ。その衝撃で箸は脳につきささったのだ。帯で首を吊った子もいる。また、ある子は部屋履きをむりやり口につっこんで飲みこみ、窒息死した。自殺しようというこころみが成功することは

めったになかったが、それはとくに利発な子供の場合に多いようで、なかでも女子の割合が高い。そこで彼らは、いままで自殺した子たちが使ったすべてのものをチンジャオから取りあげたのだった。

老人たちは去った。ハン・フェイツーは娘のそばにひざまずき、正面から顔を見てこういった。「わかっているね、チンジャオ。わたしたちがためしているのは、ほんとうはおまえではないのだ。おまえが自分の意思でなにをしようとしても、ここで起きることはいささかも変えられない。わたしたちがためしているのは実は神がみなのだ。おまえに声をかけることを決めたかどうかをたしかめたい。決まったことならば、神がみはなんらかの方法でわたしたちにそれをお示しになるだろう。そして、ここから出るとき、おまえは神子たちのひとりになっているのだ。そうでないとすれば、おまえはこの先ずっと神がみの声につきまとわれることのない自由な身でここから出てゆく。わたしが、そのふたつのどっちであってくれと祈っているかはいえない。自分でも、どちらなのかがわからないからだ」

「お父さま」チンジャオが口をひらいた。「もしお父さまが、わたしを恥とお思いになったらどうすればいいの？」まさにそう考えるだけで、彼女は手がぴりぴりするような感覚におそわれた。まるで泥でもついているような気がする。洗い清めずにいられない気が。

「どちらの結果が出ようと、わたしはおまえを恥と思ったりはしない」

そして彼は手を叩いた。さっきの老人のひとりが重そうな水盤を手にしてもどってきた。彼はそれをチンジャオのまえに置いた。

「両手を浸しなさい」ハン・フェイツーが命じた。

水盤にはどろりとした真っ黒な油がいっぱいはいっている。チンジャオは身震いした。「こんなところに手を浸けるのはいやです」

ハン・フェイツーは手をのばして娘の腕をとり、むりやり汚らしい液体に両手をつっこませた。チンジャオは思わず悲鳴をあげていた――父親に力ずくでなにかをされたのは、これが初めてだった。ようやく放してもらったときは、チンジャオの両手はぬるぬるした粘液にまみれていた。彼女は汚れきった自分の手に愕然とした。そんなふうに汚れ、悪臭を放つ両手を見て、息も止まるほどだった。

老人は水盤を手にとると、部屋からはこび出した。

「この手はどこで洗えばいいの、お父さま?」チンジャオが力なくたずねた。

「それは洗ってはいけない」ハン・フェイツーが答える。「おまえはもう二度と手を洗うことはできないのだ」

おさないチンジャオは父のことばを疑うことを知らず、これが試験の一部であるなどとは思いもつかなかった。彼女は部屋を出てゆく父親を呆然と見送った。とびらのむこうに父が消え、かんぬきがかかる音がした。彼女は取り残されたのだ。

最初のうち、彼女は服に汚れがつかないようにただ両手をまえにつきだしていた。なにか汚れを落とすものがないかと必死にさがしてみたが、水どころか布切れひとつ見つからない。部屋はけっして殺風景なわけではなく――椅子も卓もあれば彫刻もあり、大きな石の壺もあった

でさわる気にはなれなかった。とはいうものの、手の汚れをこのままにしてはいられない。なにがなんでもきれいにしなければ。

――だが、どの品物の表面も固くて磨きがかかっており、清潔そのもので、とうてい汚れた手

「お父さま！」チンジャオは声をあげた。「もどってきて、わたしの手を洗ってください！」まちがいなく父の耳にとどいているだろう。父はきっとどこかちかくにいて、試験の結果を待ちかねているにちがいない。ぜったいに聞こえたはずだ――なのに父は姿を見せなかった。

室内で布といえば、チンジャオ本人が身につけている服しかない。それで手をぬぐおうと思えばぬぐえるが、それでは油を着るようなものだ。手以外の部分にまで汚れがついてしまうかもしれない。いうまでもなく、問題を解決するには服を脱げばすむ――だが、どうすれば汚れた手がどこにもふれないように服を脱げるだろう。

やってみよう。彼女はまず、銅像のすべすべした腕の部分に手をこすりつけてできるだけ油を落とした。チンジャオは心のなかで銅像に詫びた。神の像だったらいけないからだ。あとで汚れを落としに来ます。わたしの服で清めてさしあげますから。

それから、肩ごしに背中に手をまわして布地をつかみ、頭からすっぽり脱いでしまおうと服をたくしあげた。油まみれの指で絹の服がすべる。生地に染みた油の感触が、背中に直接ひんやりと感じられた。あとで洗えばいいんだわ。彼女は自分にいいきかせた。

やっとのことで布地をがっちりつかめたので、彼女は服を脱ぎはじめた。するりと頭が抜けかかったが、すでにその時点で服を着たままでいたほうがましだったと思った。手の油が長い

髪にくっつき、その髪が顔にかぶさってしまったのだ。おかげで、いまでは両手ばかりか背中や髪や顔にまで汚れがついてしまった。

それでもチンジャオはあきらめなかった。そのまますっかり服を脱いで布地の片隅で慎重に手をぬぐう。それから、べつの端をつまんで顔をふいた。けれども、そのかいはなかった。なにをしようと油はきれいには取れなかったのだ。絹の服でふいたために、汚れが落ちるどころかかえって顔じゅうにひろがってしまったような気がする。ここまで救いようのないほど汚れてしまったのは初めてだ。たまらない気分だが、どうやってもぬぐえなかった。

「お父さま！　ここから出して！　わたしは神がみの声なんか聞きたくないの！」父親はあらわれない。チンジャオは泣きだしてしまった。

泣くのはいいが、困ったことに、それは事態をわるくするばかりだった。泣けば泣くほど自分が穢れてゆくような気がする。なにがなんでも汚れを落とさなければという気持ちは、泣きたい気持ちを圧倒した。チンジャオはぼろぼろと涙をこぼしながら両手の油を落とす方法はないものかと夢中になってさがしはじめた。すこしのあいだ、さっきのように絹の服でこすっていたが、すぐに両手を壁になすりつけて部屋じゅうをぐるぐる這いずり歩く。そこらじゅう油汚れだらけになった。あまりにはげしく手のひらを壁にこすりつけるため、しまいには摩擦で油がとろけだした。何度も何度もこすっているうちに手は真っ赤に腫れあがり、木の壁の目に見えないような凹凸でとうとうやわらかな手のひらの皮膚がすりむけ、はがれ落ちた。

手のひらや指がひりひり痛みだし、ねばねばした汚れの感触がなくなると、チンジャオはそ

の手を顔にあて、こびりついた油を爪でこそげ落とした。そうしてふたたび手が汚れると、またしても壁にこすりつける。
ついに疲れ果てて床にくずおれ、彼女は両手の痛みと、どうしても落ちない汚れにすすり泣いた。まぶたをとじて泣きじゃくる。涙が頰をつたい落ちた。目や頰をこすり――そして彼女は思った。涙で顔がべとべと、わたしはこんなに穢れてしまった。これはきっと神がみがわたしに審判を下し、清らかではないと断じたにちがいない。わたしは生きるに値しないのだ。汚れを清められないのなら、みずからをこの世から消さなくてはならないのだ。そうすれば神がみも満足してくれるだろう。そうすればこの苦痛も休まるだろう。そうと決まったからには、命を絶つ方法を見つけなければ。息を止める方法を。呼ばれたときに姿をあらわさなかったことで父は悔やむだろうが、いまさらしかたがない。いまやチンジャオは神がみのなすがまま、その神がみが彼女はこの世に生きるに値しないと判断したのだ。そもそも、母親の唇から空気が出たりはいったりしなくなってしまったときからもう何年もたつというのに、彼女が息をしつづけていたことがおこがましいのだ。
チンジャオは初め、服が使えるかもしれないと思いついた。これを口につめこんで息ができなくなるようにしようか、それとも首に巻いて窒息するとか――だが、服は油まみれで手にするのもはばかられるほどだ。こんなに汚れていては使えない。死ぬならなにか別の方法を見つけなければ。
チンジャオは壁に歩みよってぐっと押してみた。頑丈な木でできている。大きく身をそらし、

はずみをつけて頭から壁にぶつかった。その瞬間、脳天に激痛が走って気が遠くなり、彼女はがっくりと膝を折って床にへたりこんだ。頭のなかががんがんと痛む。目の前で部屋がゆっくりと回転していた。つかのま、両手の汚れも忘れられた。

けれども、その息抜きは長くはつづかなかった。磨きあげられて輝くばかりの壁が、チンジャオのひたいがぶつかって油がついたところだけ、わずかに曇っているのが見えたのだ。心のなかで神がみの声がした。おまえの穢れはちっとも清められていない、と。多少の苦痛ぐらいでは、彼女の穢らわしさは消えないのだ。

チンジャオはもう一度、壁に頭をぶつけた。ところが、こんどはさっきに比べてちっとも痛くない。何度も何度もくりかえす――そのうちに、意に反して自分の体が衝撃を嫌い、手ひどい苦痛を食らうまいとしていることがわかってきた。考えてみれば、こんなふうだから神がみはわたしを穢れていると判断したのだ――わたしは自分の体にいうことをきかせることもできないほど意志薄弱なのだ。だからといって打つ手がないわけではない。体の裏をかけば服従させることだってできるだろう。

チンジャオはもっとも高さのある彫像に目星をつけた。おそらく縦の長さが三メートルはある。青銅の鋳物で、刀剣をふりあげて大きく足を踏みだした男の像だ。角張ってでこぼこが多いから、よじのぼることができそうだ。手がつるつるすべるのにもめげずとうとう上までのぼりつめ、片手でかぶりものをつかみ、もう一方の手で剣をつかんで彫像の肩にまたがった。

手が剣にふれて、ふと思った。この剣で喉を掻き切ったら、死ねるのではないだろうか。け

れども、剣の刃は見せかけのものにすぎない。鋭くもないし、首をのばしても喉が切れるような角度には当たりそうにない。そこでチンジャオは最初の計画を実行することにした。
何回か深呼吸をくりかえしてから、両手をうしろに組んで前のめりに身を投げ出したのだ。頭から床に落ちれば、穢れたこの身の息の根も止まるだろう。
ところが、ぐんぐんと迫ってくる床を目にして、チンジャオはわれを忘れた。彼女は悲鳴をあげた。背中で組んでいた両手がほどけ、さっと前に出て体が床にぶつかるのを避けようとするのがわかった。もう間に合わないのに。暗い満足感をおぼえながらチンジャオは思う。次の瞬間、頭が床にぶつかり、すべては真っ暗闇に閉ざされてしまったのだった。

チンジャオは目ざめた。腕ににぶい痛みがあり、身動きするたびに頭に疼痛が走る――だが、彼女は生きていた。なんとかまぶたをひらいてみると、まえにもまして薄暗い部屋が見えた。外は夜だろうか？　どのくらいのあいだ意識を失っていたのだろう？　痛むほうの左腕はどうにも動かない。見ると、肘がぶざまに赤く腫れあがっていたので、落ちるときに骨折したにちがいないと思った。
そのほかにも、いまだに油まみれの両手が見え、みずからの不浄さが耐えられない思いがした。神がみが彼女にくだした審判だ。やはり自殺などこころみたのがまちがいだった。神がみは、そう簡単に彼女を逃がしはしないのだ。
わたしはどうすればいいのでしょう？　チンジャオは訴えた。ああ、神さま、どうすればわ

たしは清い姿であなたがたの御前に出ることができるのでしょう？　わが心の先祖、李清照（リー・チンジャオ）よ。わたしが神がみのありがたい審判を受けられるような立派な人間になれるよう、道をお示しください。

反射的に心に浮かんだのは、李清照の恋歌『一翦梅』だった。わずか三歳のとき、父の命令で暗記した詞のひとつだ。母の命が長くないことを父と母本人から聞かされたのは、そのすぐあとのことだった。あのときもそうだが、いまもまたその詞がまさにうってつけだ。チンジャオが神がみの好意から切り離されたいまこそ。そうではないだろうか？　掛け値なしに神子たちのひとりとして受け入れてもらうには、神がみに以前のようにみとめてもらう必要があるのではないだろうか？

なつかしいあなたの便りがとどいた
雁は字を描いて帰り
月は西の一室を満たすというのに
あなたはいつお帰りになるのか

花はひとりでにひらひらと散り、水は流れ去ってゆく
おたがい思いはひとつなのに
こうして離ればなれに愁えている

消しがたい胸の痛みは
いましもうつむいたとて
すぐまた心によみがえる

西の一室をいっぱいに照らす月という一節で、この詞に歌われている恋しい君とは、ふつうの恋人ではなくて実は神のことなのだとわかる――西という方角が出てきたら、そこにはつねに神がみに関連する意味があるからだ。李清照は、おさないハン・チンジャオの祈りに応えてこの詞を送り、どうすれば消すことのできない苦痛を――彼女の肉体の穢れを癒すことができるかを教えてくれたのだった。

「錦書」とはなんだろう、とチンジャオは思った。清照は「雁は字を描いて帰り」とうたっている――そうはいっても、この部屋には雁などいない。「花はひとりでにひらひらと散り、水は流れ去ってゆく」――だが、ここには花びらも小川もない。

「いましもうつむいたとて、すぐまた心によみがえる」すなわち「視線をさげたとき、心は動きつづける」、これが手がかりだ。これが答えなのだ。きっとそうだ。チンジャオはそろそろと慎重に腹這いになった。左手で体をささえようとすると、肘ががくっと折れて激痛が走り、あぶなくまた気を失いかけたこともあった。それでもなんとか上体を起こした。右手で体をささえた状態で、うつむいたまま、じっと視線を床に据えた。詞によれば、こうしていれば心臓が動きつづけるのは確かなのだ。

事態はちっとも改善しなかった——汚れも、苦痛もそのままだ。視線を落としても、見えるのはただ磨きあげられた床板だけ。両膝のあいだから伸びる波うつような木目の列が部屋の端までつづいていた。

列だ。木目の列、すなわち雁の列だ。それに、木目は川の流れのようにも見えないだろうか？　わたしは、これらの線を雁のようにたどらなければならない。流れに翻弄される花びらのように舞わなくてはならないのよ。それが詞の意味するところなのだ。「視線をさげたとき、心は動きつづける」

チンジャオは木目のなかにとくに目立つ一本の線を見つけだした。周囲にならぶ明るめな線を縫うように波うつ、黒っぽい川のような線。それを目にしたとたん、これこそ自分が追うべき流れなのだと彼女はさとった。指先でじかにふれる勇気はない——穢れた忌まわしい指先などで。大気に乗って飛ぶ雁のように、花びらが流れにただようように、やさしく追わなければならない。視線でだけ線を追うことができるのだ。

こうしてチンジャオは線をたどり、慎重に壁までたどりついた。二度ほど、先をいそぎすぎて線を見失い、どこにあったかわからなくなってしまった。けれども、すぐにまたきっとこれだと思う線が見つかって、それをたどって壁へたどりついたのだ。それでじゅうぶんではないか？　神がみは満足なさったのではないだろうか？

おおむね合格ではあったが、満点とはいいがたい——線から目がそれてもとの線にもどったとき、まちがっていないという自信がなかったからだ。花びらは小川を飛びこえたりはしない

だろう。端から端まで一本の線をたどらなければならない。今度は壁ぎわからはじめることにして、チンジャオは床ぎりぎりに視線をさげた。これなら、自分の右手の動きにさえ目をとられることはないだろう。目がちかちかと痛むのもかまわず、まばたきすらせずに少しずつ先へすすんだ。いまたどっている線を見失ったら、また最初からやりなおさずにいられないことがわかっていたのだ。完璧におこなわなければ、穢れを清める力もすべて消えてしまうだろう。

それはいつまでたっても終わらなかった。たしかにまばたきはしたものの、それは思いがけない偶然のまばたきではなかった。目の充血が限界に達すると、彼女は左目が線に直接ふれるくらいに頭をさげる。そして、一瞬だけ右の目を閉じるのだ。右目の痛みがとれたらまぶたをひらき、今度はその目を床にちかづけて左の目を閉じる。こうして部屋のなかほどまでたどりついたところで、その床板は途切れ、べつの床板につながっていた。

これでじゅうぶんだという確信はもてなかった。この板の木目を読みおわっただけでいいのか、それとも新たな木目を見つけてたどる必要があるのか、どっちともいえない。チンジャオは立ちあがるふりをして神がみのようすをさぐり、満足してもらえたかどうかたしかめようとした。立ちあがりかけてもなにも感じない。立ちあがっても、やはり不快感はなかった。

ああ！　神がみは満足してくれたのだ。チンジャオを気に入ってくださったのだ。いままでは皮膚についた油も、わずかな染みといった感触にすぎない。このときばかりは、手洗いをしたいという気持ちがわかなかった。なぜなら、彼女は自分を清める新たな方法を発見したからだ。これもまた、神がみが彼女を律する方法なのだった。チンジャオはゆっくりと床にあおむけに

なりながら、顔に微笑をうかべ、ひっそりと喜びの涙を流した。わが心の先祖、李清照（リー・チンジャオ）よ、わたしに道をお示しくださったことを感謝します。これで神がみはわたしを受け入れてくださいました。別離のときは終わったのです。お母さま、清らかで善良なわたしにもどりました。あなたの娘にもどったのです。西方の白虎よ、これでわたしがおまえの白い毛にふれても、穢れのしるしが残ることはないでしょう。

　そのとき、人の手がチンジャオにふれた――父の手が彼女を抱き上げた。チンジャオの顔に、そしてむきだしの体の表面に水のしずくが落ちた――父の涙だ。「もう大丈夫だぞ」彼はささやいた。「神子となった愛する娘よ、おまえはわが命だ。神々しくもまばゆき清照（グローリアスリー・ブライト）よ、おまえはこれからも輝きつづけるのだ」

　娘の試験中、ハン・フェイツーが否応（いやおう）もなく縛りつけられたうえに猿ぐつわをかまされていたこと、娘が彫像によじのぼって刀剣を喉に押しつけるような恰好をしたとき、ものすごい力で前にのりだしたため椅子が倒れて激しく床に頭をぶつけたことなどを、チンジャオはあとになって知った。倒れたおかげで、娘が彫像から飛びおりる忌まわしい場面を見ずにすんだのだから、これはたいへんな幸運だったというべきだろう。倒れて意識を失っている娘を見て、彼はずっとすすり泣いていた。そして、やがて彼女が膝立ちになり、床の木目をたどりはじめたとき、真先にその意味を見抜いたのはハン・フェイツーだった。「見ろ」彼はささやいた。「神がみはあの子に仕事をお与えになったぞ。神がみはあの子に語りかけておられる」

　彼以外の人間にはなかなかそれがわからなかった。木目をたどるという行為を目にするのは

初めてだったからだ。それは『神命目録』に挙げられていない。戸口待機、五倍数計算、物体計数、過失致死の原因追及、爪嚙み、肌むしり、髪抜き、岩かじり、眼球むき——これらはみな、神がみが要求する苦行であり、神子たちの魂を清め、その心に神の知恵を満たすための服従の儀式として知られているものだ。木目たどりは、だれも見たことのない儀式だった。にもかかわらず、ハン・フェイツーは娘のしていることを見て、それを木目たどりと定義し、『神命目録』にくわえたのだ。そこには、神がみの命令でこの儀式をおこなった最初の人間としてハン・チンジャオの名が永遠にのこるだろう。これによって、彼女はごく特別な人間になったのだ。

手を清め、はては命を絶とうとして用いたいくつかの方法のまれに見る創意工夫もまた、彼女を特別な人間にした。むろん、壁に手をこすりつけて汚れを取ろうとした者や、服でぬぐおうとした者は枚挙にいとまがない。けれども、こすりつづけて摩擦熱を起こさせるのは珍しい工夫とみなされた。そして、頭をぶつけるのはありふれた行為だが、彫像によじのぼって頭から落下しようとする子はめったにいない。いままでにこれをこころみた子供たちのなかで、あれほどぎりぎりまで手を出さずにいられた子はひとりもいなかった。このことで寺は騒然となり、うわさはたちまちパスじゅうの寺院につたわった。

いうまでもなく、娘がこれほど強く神がみに魅いられたことは、ハン・フェイツーにとってたいへんな名誉だった。そして、娘が自殺をこころみたときの彼が激しく取り乱したという話もあっというまにひろまって、多くの人びとを感動させた。「神子たちのなかでももっとも偉

大な人かもしれないが、あのお方は娘を命より愛しているのだ」と人びとは彼についてうわさした。すでにして人びとに大いに尊敬されていた彼だが、これによってたいへんな愛情の対象にもなったのだった。

ハン・フェイッーの神格化の可能性について人びとがひそかに語り合うようになったのは、このころだった。「あのお方ほど偉大で強い人ならば、神も聞く耳をおもちだろう」ハン・フェイッーに好意的な人びとはいった。「とはいっても、あのお方は愛情深いから、つねにパスの人民を思いやり、われわれのために尽力してくださるだろう。これこそ、現人神（あらひとがみ）のあるべき姿ではないか」もちろん、いま結論を出すことなどできない――人間は息をひきとるまで、まるごとひとつの世界の神はもちろん、ひとつの集落の神としてえらばれることなどできない。生まれてから死ぬまでのことがわかってもいないのに、一生が終わらないうちにその人物がどんな神になるかを決めることなどどうしてできよう。

チンジャオは大きくなるまでのあいだに、こうしたささやきを幾度となく耳にした。そして、自分の父親がパスの神としてえらばれても当然だという知識は、彼女の人生の指針のひとつとなったのだった。だが、このときも、以後も思い出すたびに記憶のそこからよみがえるのは、父の手が傷つきねじれた体を癒す寝台へ自分をはこんでくれたこと、その日から冷えきった彼女の肌に温かい涙がこぼれたこと、美しくも熱情あふれる古代言語の調べにのせてこうささやく父の声だった。「神子となった愛する娘よ、おまえはわが命だ。神々しくもまばゆき清照（グローリアスリー・ブライト）よ、おまえはこれからも輝きつづけるのだ」

4 ジェイン

〈汝らは、続々とクリスチャンになってゆくようね。あの人間たちがもたらした神を信じて〉
〈あなたは神を信じていないのか?〉
〈そのような疑問は考えたこともない。われらは、つねにわれらの始まりを記憶している〉
〈あなたは進化の産物だが、わたしたちは、創造の産物だ〉
〈ウィルスによる創造の〉
〈われわれを創造するべく神が創りだしたウィルスの、だ〉
〈では、汝らもまた信仰を奉じているわけですね〉
〈わたしは信仰を理解している〉
〈それはちがう——汝らは信仰をもちたいと望んでいるのです〉
〈その望みが切実であるあまり信仰をもっているような行動になるのだ。それが信仰の本質かもしれない〉
〈あるいは意図的な狂気かも〉

じっさいミロの船に乗りうつってきたのは、ヴァレンタインとヤクトだけではなかった。招かれもしないのにプリクトもやってきて、じゅうぶんに体をのばす空間もない狭苦しい粗末な個室に住みついてしまった。彼女は、この旅の変数ともいえる存在であり――家族でも、クルーでもなく、友人だ。プリクトはエンダーが〈死者の代弁者〉としてトロンヘイムに滞在していたときの学生だった。だれから聞いたわけでもないのに、アンドルー・ウィッギンこそ、初代〈死者の代弁者〉であり、と同時に、エンダー・ウィッギンその人であることを彼女は見抜いたのだった。

この頭脳明晰な若い女性がエンダー・ウィッギンにそれほど執着する理由は、じつのところヴァレンタインにはよくわからない。ひょっとしたら、これはなにかの宗教の始まりかもしれないと思うこともあった。開祖が弟子をもとめるのではなくて、弟子のほうがどうしても離れようとしないのかも。

なんにせよ、エンダーがトロンヘイムを離れたのちもプリクトはヴァレンタインの家族のもとにとどまって、子どもたちの家庭教師を務めたりヴァレンタインの研究に手を貸したりしながら、一家がエンダーと再会するべく旅に出る日を長年のあいだ待ちつづけてきた――そんな日が来ようとはプリクト以外のだれひとり予測していなかったのだが。

かくして、ルジタニアまでの旅ののこり半分、ミロのスターシップは四人の人間を乗せてゆくことになった。ヴァレンタイン、ミロ、ヤクト、そしてプリクトを。というより、ヴァレンタインは当初そう思っていたのだ。自分たちのほかに最初から五人目の同乗者がいたことを彼

女が知ったのは、ランデヴー後三日目のことだった。
その日、例によって四人はブリッジに集まっていた。ほかに行く場所などない。この船は貨物船で――ブリッジと寝室をべつにすれば、あとはせせこましい調理室とトイレがあるだけだった。のこりの空間は荷物用であって、人間を乗せるようには設計されていない――とにかく居心地のわるさといったらお話にならないのだ。
とはいえ、ヴァレンタインはプライヴァシーがなくなったことを気にしてはいなかった。反政府的エッセイの執筆は、一時棚あげになりつつあった。もっと大切なことがあると直観したからだ。それは、ミロを知ること――そして彼を通じてルジタニアを知ることだった。ルジタニアの人間たち、ペケニーノ、それよりなにより、ミロの家族たちのことを――なぜなら、エンダーがミロの母親であるノヴィーニャと結婚したからだ。いうまでもなく、ヴァレンタインはこの種の情報をほとんど拾いあつめていた――これだけの年月を歴史家兼伝記作家としてやってこられたのも、あるかなきかの証拠からこうして大局を推測するすべを身につけたからこそなのだ。
ヴァレンタインにとって文字どおりの宝は、つまるところミロ本人だった。彼は皮肉っぽく、怒りに燃え、不満だらけで、不具となった自分の肉体に対する憎しみにあふれていたが、どれもむりはない――ミロがこんなことになったのはほんの数カ月まえのことで、彼はまだ新しい自分をあつかいかねているのだ。ヴァレンタインはミロの将来については心配ないと思っていた――彼はひじょうに意思強固で、容易にはくじけない人間だ。そのうちに慣れて元気になる

だろう。
ヴァレンタインは、ミロの思考にもっとも興味をそそられた。それはさながら肉体の不自由さが精神を解放したようなものだ。事故の直後、ミロはほぼ全身麻痺の状態にあった。することといえば、ただひと所にじっと横になってものを考えることだけ。むろん、彼はほとんどの時間を、失われた自由、自分のおかしたあやまち、手のとどかなくなった未来について思い悩んでいた。だが、彼にはまた、忙しい人たちがけっして考えないようなことについて思考をめぐらす時間もたっぷりあったのだ。そして、スターシップに同乗して三日目のその日、ヴァレンタインが聞きだそうとしたのは、その点だった。
「たいていの人は、本気でそんなことを考えはしないわ。でも、あなたは考えた」ヴァレンタインはいった。
「考えたからといって、なにかがわかるものじゃない」ミロは答えた。ヴァレンタインはすでにミロの口調にすっかりなじんでいたが、それでも、あまりののろさに苛立ちをおぼえるときもある。集中力が欠けがちであるということをさとられないようにするためには、ときとしてたいへんな自制心が必要になった。
「宇宙の本質とか」ヤクトが口をはさんだ。
「生命の起源もそうね」ヴァレンタインがいった。「生きていることにどんな意味があるかと考えたと、あなたはいったでしょ。あなたが考えたことを聞かせてほしいの」
「宇宙はどう動いているか、そしてぼくたちはなぜ宇宙に存在するか」ミロは笑い声をあげた。

「まったくばかばかしい話だ」

「ひとりで船で漁に出て氷原のまっただなかでブリザードにつかまったことがある。暖房もなしで二週間立ち往生したよ」ヤクトがいった。「そんなおれだ。なにを聞いてもばかばかしいとは思わないね」

ヴァレンタインは微笑をうかべた。ヤクトは学者ではないし、その哲学はといえば、仲間の団結をはかることと魚をうんと釣ることに要約される。しかし、ヤクトはヴァレンタインがミロの心をひらかせようとしていることを知って、この青年の緊張を和らげ、本気で聞こうとしているのだとわからせようと協力していた。

それに、ヤクトにとっては自分がその役割をすることに意義がある――なぜなら、ヴァレンタインだけでなくヤクト自身も、ミロが彼にむける視線を意識していたからだ。年をとってはいても、漁で鍛えた手足や背中はいまだにおとろえてはいない。わずかな動きにも体の柔軟性がうかがえる。一度など、ミロは感嘆してあてこすりっぽくこういった。「あんたの体つきは二十歳の若者みたいだ」と。ヴァレンタインは、そのことばのうらにミロが抱いているにちがいないこんな皮肉を聞きとった――なのに、ほんとうは若いこのぼくの体は、節ぶしがきしむ九十歳の老人みたいだ。それだけにミロにとってヤクトはただの男ではない――ヤクトは、ミロが永遠に手にいれることのない未来の象徴なのだ。賛嘆と反感。ヤクトのまえで本音を吐くのはミロはつらかろう。もしも、ミロの話に純粋な敬意と関心をはらっていることがわかるようヤクトが気を配っていなかったら。

もちろん、プリクトも自分の席についていた。発言したり出しゃばったりはしないから、透明人間になったように目立たない。
「わかったよ」ミロはいった。「実体と魂の本質に関して、あれこれ考えた」
「神学的に？　それとも形而上学的に？」ヴァレンタインが質問した。
「ほとんどは形而上学的なものだね。物理学も関係がある。どっちもぼくの専門じゃない。それに、これはあなたがぼくから聞く必要があるといっていたような話でもない」
「わたしだって、自分がなにを必要としているか全面的にわかっているわけではないわ」
「まあ、そういうことにしておこう」ミロはいって、二度ほど息をついた。いかにも、なにから始めるか選んでいるようだ。「フィロティック収束のことは知ってるね？」
「これでも常識はあるつもりよ」ヴァレンタインは答えた。「本格的な実験のしようがなくて、この二千五百年のあいだ理論が宙ぶらりんになったままだということも知っているわ」フィロティック収束は古い発見だ。科学者たちがテクノロジーをわがものにしようと苦闘していた時代の産物だ。物理学専攻の若い学生たちは、いくつかの金言を記憶した。いわく、「フィロトは、あらゆる物質とエネルギーのもとになる基本単位である。フィロトには質量も慣性もない。フィロトにはただ、位置と継続時間と接続しかないのだ」などと。そして、フィロティック接続──すなわちフィロト線(レイ)の収束──があるからこそアンシブルが機能し、何光年もかけ離れたそれぞれの世界とスターシップとが瞬時に通信を交わせるのだということも、これまた常識だった。だが、なぜそうなるのかという理由はだれにもわからない。そして、フィロトの〝操

作〟が不可能であるため、実験しようにも手がつけられない。フィロトが実在することは観察によって、それもフィロトの接続という現象を通してしかみとめられないのだ。

「フィロト学か」ヤクトが口をはさんだ。「アンシブルのことだろう？」

「それはひとつの副産物だよ」ミロは説明した。

「フィロトと魂がどう関係してくるの？」ヴァレンタインがたずねた。

ミロは口をひらきかけはしたものの、どうやら、ろれつのまわらない口で長ながと説明をしなければならないと考えると、じれったそうだった。顎を動かし、わずかに唇をひらこうとしている。やがて、彼は声に出していった。「ぼくには話せない」

「邪魔はしないから」ヴァレンタインはうながした。不自由な口で長ながと理論を述べる気になれないというのはよくわかるが、いずれ彼がそうしなければならないというのもヴァレンタインにはわかっているのだ。

「むりだ」ミロはこばんだ。

もうひと押ししようとして、ヴァレンタインはミロがまだ唇を動かしていることに気づいた。ただし、声はほとんど聞こえない。ひとりごとだろうか？　文句をいっているのだろうか？

そうではない――そんなこととはまるでちがう。

一瞬の間があって、ヴァレンタインは自分がそう確信した理由をさとった。彼女は、エンダーがいまのミロとそっくりおなじように顎と唇を動かすのを見たことがあったのだ。そんなとき、エンダーは耳に装着した宝石にビルトインされたコンピュータの端末装置に声にならない

声で指示を発していた。そういうことか。ミロはエンダーとおなじコンピュータ・フックアップをもっていて、おなじようにそれに話しかけようとしているのだ。

つぎの瞬間、ミロが宝石にどんな指示を与えたかが判明した。宝石はこの船のコンピュータに接続されているにちがいない。その証拠に、ディスプレイのひとつが消えたと思うと、そこにたちまちミロの顔が映った。ただし、画面の顔には生身のミロに見られる筋肉の弛緩がみじんもない。ヴァレンタインはさとった。これは以前のままのミロの顔なのだ。そして、コンピュータ画像のミロが口をきき、その映像は、以前のミロの声はきっとこうだったろうと思わせるような音を発した——明瞭そのものだ。力強く、教養にあふれ、きびきびとしている。

「あなたも知っているように、フィロトは、接続して安定した組織——中間子、中性子、原子、分子、組織、惑星になるときによりあわさる」

「どうなってるんだ、これは?」ヤクトが質問した。なぜコンピュータがしゃべりだしたか、まだのみこめていないのだ。

コンピュータ画像のミロはぴたりと動きを止め、沈黙した。ミロ本人がかわって答える。

「ぼくがこれにいたずらしておいたんだよ。いいたいことを伝えておくと、コンピュータがそれを記憶してぼくのかわりに話してくれるんだ」

コンピュータのプログラムが彼の顔と声を正確に把握するまで試行錯誤を重ねているミロの姿を想像しようとした。自分のあるべき姿を再現するのは、さぞや胸躍る作業だったことだろう。だが、そうであったはずの自分をまのあたりにしながら、それがけっして現実にはならな

いと思い知ることは、さぞかし苦痛でもあったはずだ。「卓抜なアイディアだわ」ヴァレンタインはいった。「いわば、人格の装具といったところね」
ミロは、ただ「ハッ！」と笑いとばしただけだった。
「先にすすんで」ヴァレンタインはうながした。「話すのが生身のあなたであってもコンピュータであってもかまわない。わたしたちは聞いているから」
コンピュータ画像が息をふきかえし、つくりものだが明確なミロの声でふたたびこういった。
「フィロトは、あらゆる物質とエネルギーのもとになる最小基本単位だ。フィロトには質量もなければ次元もない。個々のフィロトは、一本の線にそって全宇宙とつながっている。いわば、それはひとつのフィロトを最小の直接的構造物である中間子にふくまれる他の全フィロトに接続する一次元的な直線だ。その構造物につながるすべてのより糸が収束しあって一本の線となり、中間子を次に大きい構造物である中性子などに接続する。中性子の細糸が収束しあって太糸になり、原子を構成する他のすべての素粒子と接続させ、原子の太糸がよじれて分子のロープとなる。これは核力や重力とはいっさい無関係だし、化学結合ともなんら関係がない。われわれの知るかぎり、フィロティック接続は、なにもしない。それはただ存在するだけなんだ」
「でも、個々のフィロト・レイはつねに収束のなかに存在しているわ」ヴァレンタインはいった。
「そう、個々のフィロト・レイは永遠にそのままなんだ」画面のミロが答えた。
これは彼女の予期しないことだった——目をまるくしたところからするとヤクトもおどろい

たらしい――ヴァレンタインの発言にコンピュータが即答した。いまの発言はまえもってインプットされていたものではないのに。ミロの顔と声をこれほど巧みに模倣していることからしても、高度なプログラムにはちがいない。けれども、ミロの人格まで模倣したかのような応答をさせるとは……

あるいは、ミロがプログラムになんらかの合図を送っているのだろうか。無言のうちに返事を指示したのか？　ヴァレンタインにはなんともいえない――画面のほうしか見ていなかったからだ。こんどはそれを中断してみよう――ミロ本人に注目することにしよう。「フィロト・レイが永続的なものであるかどうかは、わたしたちにはわからないわ」ヴァレンタインはことばをつづけた。「わかっているのはただ、フィロト・レイの終着点がみつかっていないということよ」

「フィロト・レイは収束しあってひとつの惑星になり、そして個々の惑星のフィロティック収束は、その恒星に達し、おのおのの恒星が銀河の中心まで――」

「で、その銀河の収束が達する先は？」ヤクトが口をはさんだ。これはむかしからある疑問だった――高校で初めてフィロト学に接した学生たちも、この疑問をいだく。はるかに巨大な宇宙のなかでは、銀河系はじつは中性子や中間子のようなものなのだという古臭い理論や、宇宙に果てがあるのなら、そのむこうにはなにが存在するのかといった古臭い疑問とおなじだ。

「そうききたくなる気持ちはわかるよ」ミロがいった。ただし、このことばは本物のミロの口から出たものだった。「しかし、いまはその話じゃない。ぼくは生命の話をしたいんだ」

コンピュータ合成の音声が——才気煥発な青年の声で——あとをひきとった。「岩や砂といった物質からのフィロティック収束は、どれも個々の分子からじかに惑星の中心へつながっている。ところが、分子が生体に混入すると、そのフィロト・レイがシフトするんだ。惑星の中心に達するかわりに、それは個々の細胞とからみあい、その細胞の発するフィロト・レイもすべてよじれあって、結果的にそれぞれの生体がフィロティック接続の単一ファイバーを発し、惑星の中心になるフィロティック・ロープとよじれあう」

「つまり、個々の生命体が物理学のレベルではなんらかの意味をもつという証拠ね」ヴァレンタインがいった。これについては一度エッセイを書いて、フィロト学をめぐって台頭しつつあった神秘学じみたものを一掃し、同時に共同体形成の視点を提示するのに利用しようとしたことがある。「でも、それにはなんら実効はないわよ、ミロ。手出しのしようがないんじゃ。生体のフィロティック収束は、ただ単に存在するだけだもの。フィロトは例外なくなにかと接続しているんだし、それがまたべつのなにかに接続し、さらに接続をくりかえす——生細胞や生体は、そうした接続がなされるレベルの二種類にすぎないわ」

「そのとおり」ミロがいった。「生あるものは収束しあう」

ヴァレンタインは肩をすくめてうなずいた。証明することはできそうにないが、そういう前提で推測したいとミロがいうなら、それでもいい。

ふたたびコンピュータのミロがとってかわった。「ぼくが考えていたのは、その収束の持続時間のことなんだ。収束しあった構造物が崩壊しても——分子構造が崩れるようにね——それ

までのフィロテイック収束はしばらく持続する。物理学的にはすでに結合が解かれている要素が、フィロト学的にはしばらく接続したままでいる。その要素が微小であればあるほど、本来の構造物が分解したあとも接続は長もちし、要素が新たな収束にシフトするスピードもゆるくなる」

ヤクトが眉をしかめた。「物質は小さければ小さいほど、変化は速まるのかと思ったが」

「たしかに逆の印象をもつわね」ヴァレンタインがいった。

「核分裂後フィロト・レイがふたたび秩序をとりもどすには何時間もかかる」コンピュータのミロがいった。「原子より小さな物質を分解させたら、その物質のフィロテイック接続は、さらに長時間持続するんだ」

「アンシブルが機能するのも、そういうわけなのさ」ミロ本人がおぎなった。

ヴァレンタインはじっと相手を見つめた。自分の声でしゃべるかと思えばコンピュータにしゃべらせたりするのは、なぜなのだろう。このプログラムは、ミロがコントロールしているのではないのか?

コンピュータのミロが口をひらいた。「アンシブルの原理はこういうことだ。中間子を強力な磁場に宙づりにして、それをふたつに分解する。たとえどこまでひきはなしても、フィロテイック収束が両者を接続しつづけるだろう。しかも、その接続は即時的だ。片方の物質がスピンしたり振動したりすれば、両者をつなぐフィロト・レイもスピンしたり振動したりし、その動きは他方の末端でもまったく時差なく関知できるんだ。両者のあいだに何光年というへだた

りがあろうとも、動きがフィロト・レイの端から端まで届くのに時間はいっさいかからない。そうなる理由はだれにもわからないが、さいわいなことにそうなんだ。アンシブルなくしては、各地の人間世界は意味のあるコミュニケーションのとりようがない」

「やれやれ、意味のあるコミュニケーションなどないのが現状だがね」ヤクトが口をはさんだ。

「それに、アンシブルさえなければ、目下ルジタニアにむかっている艦隊もなかったはずだ」

けれども、ヴァレンタインはヤクトの発言を聞いてはいなかった。彼女はミロを注視していたのだ。こんどは、彼が顎や唇をかすかに声もなく動かすのが見えた。はたせるかな、無言の伝達のあと、コンピュータ画面のミロがまた口をひらいたのだ。やはりミロが指示を出している。それを否定するなどというとてつもないことをよくも考えたものだ――ミロの指示なくしてコンピュータが作動するものか。

「それはひとつの階層(ヒエラルキー)だ」コンピュータのミロがいった。「構造が複雑であればあるほど、変化に対して反応する速度もはやい。いってみれば、物質は小さいほど愚鈍で、もう別個の構造物の一部になってしまったのだという事実に気づくのに時間がかかるんだ」

「それは擬人化だわ」ヴァレンタインがいった。

「そうかもしれない」ミロは答えた。「でも、ちがうかも」

「人間は有機的組織だ」コンピュータ画面がいった。「だが、人間のフィロティック収束には、ほかのどんな生体のそれもかなわない」

「あなたのいっているのは、千年まえにガンジス人がいいだした考え方よ。そういう実験から

首尾一貫した結果を得たものはいないわ」研究者（リサーチャー）たちは、みな信心深いヒンドゥー教徒ばかりだったが、こう断言したものだ。人体のフィロティック収束は、他の組織とちがってまっすぐ惑星の核に達して他の生体や物質と収束しあうとはかぎらない、と。それどころか、人間の発するフィロト・レイは往々にして他の人体、ほとんどの場合には家族間で、まれには教師と学生とか、親しい同僚どうしとかのそれとよじれあうことが多いというのだ。ほかならぬリサーチャーたち自身も例外ではなかった。人間と他の動植物とのこのような差異は、一部の人間の魂が文字どおりより高度な段階に昇華して成熟にちかづくからなのだとガンジス人たちは結論した。〝成熟しつつあるもの〟たちは、あらゆる生命が世界と一体化するように一体となるのだと彼らは信じた。「とても神秘的でありがたい考えだけれど、いまではガンジス系ヒンドゥー教徒以外のだれもそんなことを信じてはいないわ」

「ぼくは信じている」ミロがいった。

「人はさまざまだな」ヤクトがいった。

「宗教としてじゃなく」ミロが説明した。「科学としてだけど」

「形而上学ということね？」ヴァレンタインが念を押した。

画面のミロから答えがあった。「人間どうしのフィロティック接続は、ほかのなによりも急速に変化する。つまりガンジス人たちが証明したのは、それが人間の意思に反応しているということだ。家族と強い感情の絆でむすばれていれば、フィロト・レイがからみあって一体となるだろう。異なった原子がひとつの分子にふくまれて一体化するのと、まったくおなじように

ね」

これは愛すべき考えだ——かれこれ二千年もむかしのことになるが、ミンダナオで虐殺された革命闘士たちのことを語るエンダーの口から初めてこれを聞いたとき、ヴァレンタインはそう思ったものだった。そして、ガンジス人たちの実験をしてみたら、ほかならぬ自分たちも姉と弟として収束しあっているかどうかがわかるのだろうかと思った。子供の自分たちのあいだにそのような結びつきがあるという確信はなかったし、たとえあっても、エンダーがバトル・スクールへ召還されて六年間も離れ離れになったら持続するとは思えなかった。エンダーはその考え方が大いに気にいり、ヴァレンタインも魅了されたけれども、この話題はそのときかぎりで二度ともちだされることはなかった。人間どうしのフィロティック接続という考えは、ヴァレンタインの記憶のなかの愛すべきアイディアという項目にしまいこまれたきりになったのだ。「人間の結びつきという比喩に相当するものが物理学にもあるかもしれないと思うとステキだわ」ヴァレンタインはいった。

「ちゃかさないでくれ!」ミロがいった。どうやら、「ステキ」の一言で片づけられたのが気にさわったらしい。

ふたたび画面のミロが口をひらいた。「ガンジス人たちの考えが正しいとしよう。すると、ひとりの人間が他の人間と結びつくことを選択し、あるコミュニティにかかわりをもつということは、単なる社会的現象ではなくなる。それは同時に物理的現象でもあるんだ。フィロトは想像できるかぎり最小の粒子であり——質量も物理的エネルギーもいっさいもちあわせないも

のを有形といえるとしたらの話だが——人間の意思にもとづく行動に反応するからだ」
「ガンジス人たちの実験を信用すると、そういう論理になるから、みんな二の足を踏むのよ」
「でも、彼ら以外にそういう実験結果に到達したものはいないのよ」
「だれひとりとして本気でその理論を信じなかったから、おなじ実験を手がけようとしなかっただけだ。当然だろう?」
「そうかしら」ヴァレンタインはいった。だが、ガンジス人たちの理論は、科学ジャーナリズムの世界では物笑いの種になったのに対し、一部の狂信的異端分子たちやあまたの新興宗教には受け入れられたことを彼女は思いだした。いったん、そうなってしまったが最後、その科学者がプロジェクトに資金提供を受けることは絶望的だった。他人から超自然的宗教の提唱者とみなされたら、科学者としてのキャリアは絶たれたも同然だ。
画面のミロがうなずいた。「フィロト・レイが人間の意思に反応してよりあわさるのだとしたら、ほかのフィロトのからみあいにもすべてなんらかの意思がはたらいていると考えられなくはないか? すべての微粒子、すべての物質やエネルギー、宇宙で観察されるすべての現象が個人の意思を反映した行動でないとはいえないはずだ」
「そうなると、ガンジス系ヒンドゥー教徒の理論どころじゃないわね」ヴァレンタインはいった。「それを全面的に信じろというの? あなたのいっているのはアニミズムだわ。もっとも原始的な宗教よ。あらゆるものに命がある。石も海も——」

「生命は生命だ」

「そうじゃない」ミロが反論した。「生命は生命だ」画像のミロがいった。「単一のフィロトが、あるひとつの細胞の分子を結束させ、そのフィロト・レイをひとつにからみあわせる意思力をもったとき、生命が生まれる。より強力なフィロトは、多くの細胞を結びつけて単一の組織を形作ることができる。すべてのなかで最強のものは、知性体だ。われわれは、自分たちのフィロティック接続を望むところに据えつけられる。他の既知の種族においては、知性体のフィロティック基盤がより明白だ。ペケニーノが死んで第三の生に移行するとき、そのアイデンティティを保持して死んだ哺乳類から生きている樹木へと受けわたすのは、その意思強固なフィロトなんだ」

「生まれ変わるわけか」ヤクトがいった。「フィロトは魂なんだ」

「とにかく、ピギーたちの場合はそうなんだよ」生身のミロがいった。

「窩巣女王の場合もそうだ」画像のミロがいった。「そもそも人間がフィロティック接続を発見したのは、バガーたちが光速以上のスピードでコミュニケーションをとっていると知ったからだ。あれを見て、われわれは超光速通信が可能であることを知った。個々のバガーたちすべてが窩巣女王の一部だ。バガーたちは彼女の手足となり、窩巣女王はバガーたちの精神となって、無数の肉体からなるひとつの巨大な組織を形づくっている。そして、おたがいをつなぐ唯一の接点が、フィロト・レイのからみあいなんだ」

それは、ヴァレンタインがかつて夢想だにしたことのない宇宙の図だった。むろん、歴史家兼伝記作家としての彼女は、ものごとを民族や社会といった単位でとらえる習慣がついている。

物理学に無知ではないけれども、徹底的に訓練をうけてきたわけでもなかった。物理学者なら、この理論がなぜ異常に思えるのか即座に判断がつくのだろう。とはいえ、ほんものの物理学者は、おのれの専門分野の常識にとらわれるあまり、既存の知識の意味をくつがえすような考えを受け入れるのに一般人より抵抗をおぼえるだろう。たとえ、それが真実であっても。

しかも、ヴァレンタインはミロの提示した考えに深く共感し、それが真実であればいいと思っていた。「ふたりでひとり」とささやきをかわしあった無数の恋人たちの何組かがまさにひとつに結びあっていたということはありうるだろうか？　一心同体になったように強い絆で結ばれた数えきれない家族たちが、現実のもっとも基本的レベルでは一心同体であったなんて、考えるだけでもすばらしいではないか。

だが、ヤクトはこのアイディアに彼女ほど魅了されはしなかった。「寓巣女王の存在は口に出してはいけないことになっていたはずだろう。エンダーの秘密だと思っていたがね」

「かまわないのよ」ヴァレンタインがいった。「この部屋には、それを知らない人はいないんだから」

ヤクトはじれたように妻を見やった。「おれたちは、スターウェイズ議会をむこうにまわして戦っているルジタニアを救うためにやってきたんじゃなかったのか。こんな話が現実の世界にどうかかわってくるんだ？」

「なんの関係もないかもしれないわ」ヴァレンタインはいった。「あるいは、これがすべての鍵かも」

ヤクトはしばし両手で顔をおおっていたが、やがて心からのものではない微笑をうかべて妻を見あげた。「きみがそんな観念的なことをいうのは弟がトロンへイムを離れて以来ひさしぶりだ」

ヴァレンタインの胸は痛んだ。その発言が心からのものであるとわかっているだけに、なおさらだ。これだけの年月がたっても、ヤクトはまだ妻とエンダーの結びつきに嫉妬しているのだろうか。自分にとってはなんの意味ももたないことに妻が心をくだいているという事実に、ヤクトはいまだに反感をもっているのだろうか。ヴァレンタインはいった。「弟が去っても、わたしはのこったわ」ほんとうにいいたかったのは、こういうことだ。「わたしは、ただひとつの肝心なテストにパスしたのよ。それなのに、なぜいまになって疑うの？」

ヤクトは反省した。これが彼の最大の美点のひとつだ。自分がまちがっていたとみとめると、彼はすぐさまひきさがる。「そしてきみが旅立つとき、おれは同行した」ヴァレンタインは夫のそんなことばをこう解釈した。「おれはきみと離れない。ほんとうはもうエンダーにやきもちなんか焼いていないんだ。揚げ足をとるようなことをいってすまなかった」と。あとで、ふたりきりになったら、彼らはもう一度そんなふうにおたがいの胸のうちをさらけだすだろう。疑念や嫉妬をかかえたままルジタニアへ行ったのでは、おたがいのためにならない。

いうまでもなく、ミロはヤクトとヴァレンタインがすでに休戦を宣言したなどと気づいていない。ふたりのあいだに張りつめたものが漂う気配を察しただけで、その原因が自分にあると思いこんでいた。「すまない。ぼくはなにも……」

「いいんだよ」ヤクトがとりなした。「おれがよけいなことをいったのがいけなかったんだ」
「ちっともよけいなことじゃないわ」ヴァレンタインはそういって夫にほほえみかけた。ヤクトもほほえみかえす。
これを見たミロは納得し、目に見えてほっとした。
「話をつづけてちょうだい」ヴァレンタインがうながした。
「それをすべて当然のことと考えてくれ」画像のミロがいった。
ヴァレンタインは思わず声をだして笑ってしまった。その笑いは、ガンジス人のいう神秘的な〝フィロト＝魂〟説が不条理な前提すぎて受け入れかねたせいでもあり、ヤクトとのあいだの緊張を解放するためでもある。「ごめんなさい」ヴァレンタインはいった。「〝当然〟と受け取るにはひどく大きなことだから。もしそれが前提だとしたら、結論はどうなるか楽しみだわ」
いまでは相手の笑いの意味を把握して、ミロも微笑みかえした。「ぼくには考える時間がいやというほどたくさんあった。生命とはなにかを考えてぼくが到達した推測は、ほんとうにそういうことだった。宇宙のすべては習性なんだ。ただし、あなたたちにいっておきたいことはべつにある。あなたたちの答えも聞かせてもらいたい気がする」彼はヤクトにむきなおった。「そして、それはルジタニア艦隊をくい止めることと大きな関係があることだ」
ヤクトは微笑してうなずいた。「ときには、おれもゲームに参加したいと思っていたところさ」

ヴァレンタインは、とっておきのチャーミングな笑顔を見せた。「あらそう――じゃあ、あとでいじめてあげるから覚悟してらっしゃいな」

ヤクトはまた笑い声をあげた。

「さあ、つづきを」ヴァレンタインはミロをうながした。

答えたのは画像のミロだった。「現実のすべてはフィロトの習性だとすると、ほとんどのフィロトには中間子として行動するか、接続して中性子になるだけの才覚、というか強さがあるだけのように見える。生きよう――そして組織を支配しようという意思力を持つに足るフィロトはめったにない。さらにいえば、知的生命組織をコントロール――いや、知的生命組織になるだけの力があるフィロトは全体のごく一部だけだ。それなのに、もっとも複雑で知性的な生物――たとえば高巣女王なども、他のすべての生物とおなじように核心部分はただのフィロトにすぎない。たまたま果たすことになった特定の役割によって、それはアイデンティティと生命を得るが、その実体はといえばフィロトなんだ」

「わたしの自我――わたしの意思は、原子より小さいかけらだというの？」ヴァレンタインがたずねた。

ヤクトは微笑してうなずき、「おもしろいじゃないか」といった。「おれは靴と兄弟なんだ」

ミロは力なくほほえんだ。が、画像のミロはこう答えた。「恒星と水素原子とが兄弟だとしたら、たしかに、靴のようなありふれた物体を構成するフィロトとあなたとは縁戚関係にあ

る」

画像のミロが答える直前に、生身のミロが指示をあたえてはいなかったことにヴァレンタインは気づいた。ミロ本人がとっさに指示したのでないとしたら、画面にミロの姿を描いているプログラムは、いったいどこから恒星と水素原子の比喩をもってきたのだろう？　指示もあたえられないのにこれほど複雑かつ適切な会話をする能力のあるコンピュータ・プログラムなど聞いたこともない。

「そればかりか、おそらく宇宙には、あなたがたがいままで知りもしなかった縁戚関係があるかもしれない」画像のミロがいった。「出会ったことのないような生命体も存在するかも」

生身のミロを観察していたヴァレンタインは、彼が不安げな表情を浮かべているのに気づいた。動揺しているのだ。画像のミロがいましていることが気に入らないとでもいうようだった。

「きみのいう生命とは、どんなものだ？」ヤクトが質問した。

「宇宙には、物理的現象が存在する。それはごくありふれたもので、なんの説明もなしにだれもが当然のごとく納得し、それが起きる理由や過程をきちんと調べようなどと思うものはひとりとしていない。はっきりいおう。いまだかってアンシブルの接続が途切れたことはない」

「ナンセンスだ」ヤクトは一蹴した。「トロンヘイムのアンシブルのひとつは、去年、半年のあいだ使えなくなった――たびたびあることではないが、故障は起きるさ」

こんどもまたミロの口もとは微動だにしない。そして、こんどもまた画像のミロが即時に応答した。いまやミロがコンピュータを制御しているのでないことは明らかだ。「アンシブルに

は故障がないとはいっていない。接続が――分断された中間子の各部分のフィロティック収束のことだが、それが途切れることはないといったんだ。アンシブルの装置が故障することはありうるし、ソフトウェアに異常が起きることもあるだろう。しかし、アンシブル内の中間子のかけらがシフトし、フィロト・レイを他の手近な中間子や付近の惑星と接続させてしまうことはけっして起こりえない」
「それは磁場がかけらを宙づりにしているからさ」ヤクトがいった。
「自然の状態では、中間子の分解は一瞬のうちに起こるから、わたしたちにはその本来の動きはわからないのよ」ヴァレンタインが意見を述べた。
「ぼくは、スタンダードな回答をすべて知っている」画像のミロがいった。「どれもナンセンスだ。自分たちが真実を知らないし、知ろうとも思わないときに、親が子供にいうようなたぐいの答えばかりだ。人間は、いまでもアンシブルを魔法の機械のようにあつかっている。アンシブルが機能しつづけているかぎり、だれにも文句はないというわけさ。その理由をつきとめようなどとしたら、魔力が消えて、アンシブルは機能停止してしまうと思ってるんだ」
「だれも、そんなふうに思ってやしないわ」ヴァレンタインがいった。
「みんなそう思っているね」画像のミロがいった。「たとえ何百年、千年、いや、三千年の寿命があったとしても、いまだにアンシブルのコネクションがひとつも途切れないのはおかしいじゃないか。いくら中間子のかけらだって、ひとつくらいはフィロト・レイをシフトしていていて当然だ――それなのに、そんなことになってはいない」

「なぜだろう?」生身のミロが質問した。
はじめ、ヴァレンタインはミロが疑問のつもりでなくいったのだと思った。けれども、そうではない——彼はヴァレンタインたちとおなじように画面を見つめ、映像にむかって理由を問いかけていた。
「これは、あなたの推測をことばにするプログラムだと思っていたけど」ヴァレンタインはいった。
「さっきまではね」ミロが答えた。「でも、いまはちがう」
「アンシブル間のフィロティック接続に棲息する生物がいるとしたらどうだい?」映像が問いかけた。
「こんなことして、ほんとにいいのか?」ミロは問いつめた。こんどもまた、画面の映像にむかってだ。
と、画面の映像が変わって若い女性の顔になった。ヴァレンタインにはなじみのない顔だ。
「すべての世界のアンシブルと、人間がいる宇宙のすべてのスターシップのアンシブルを接続しているフィロット・レイの網の目に住みついた生物がいるとしたら? その生物を構成しているのがフィロティック接続だとしたら? その思考が分裂した中間子のスピンや振動にとってかわるとしたら? その記憶が、すべての世界とスターシップにあるコンピュータに蓄積されているとしたらどうする?」
「あなたはだれなの?」ヴァレンタインは映像にむかって直接問いかけた。

「もしかしたら、わたしこそ、そうしたフィロティック接続を生かし、アンシブルとアンシブルを接続しているものかもしれない。新種の生命、フィロト・レイをよりあわせるのではなくて、二度と離れないように結びつけているものかもしれない。もし本当にそうならば、そうした接続が途切れたり、アンシブルが機能を停止したりしたら——アンシブルが沈黙したそのときは、わたしも死ぬでしょう」
「あなたは何者なの？」あらためてヴァレンタインは質問した。
「ヴァレンタイン、ジェインを紹介するよ」ミロがいった。「エンダーの友人だ。そして、ぼくの友人でもある」
「ジェインだったの」
では、ジェインというのはスターウェイズ議会の官僚主義に巣食う反乱グループの暗号名（コード・ネーム）ではなかったわけだ。ジェインとはコンピュータのプログラム、一片のソフトウェアだったのか。ちがう。たったいまジェインがほのめかしたことが真実であるならば、ジェインは単なるプログラム以上のものだ。彼女はフィロト・レイの網の目に住まう存在であり、全世界のコンピュータに記憶を蓄積しているのだ。彼女のいうとおりだとすれば、フィロトの網の目——すなわち全世界のアンシブルどうしを接続している入り組んだフィロト・レイのネットワークが彼女の肉体、彼女の実体なのだ。そして、フィロトのリンクが一瞬の中断もなく機能しつづけるのは、彼女の意思がそう望んでいるからなのだ。
「では、こんどはわたしから偉大なるデモステネスに質問があるわ」ジェインはいった。「わ

たしはラマン？　それともヴァーレルセ？　わたしは、はたして生きているの？　ぜひ答えてもらわなければ困るわ。なぜなら、たぶんわたしにはルジタニア艦隊をくい止めることができるはずだから。でも、そのまえにどうしても知っておきたい。命がけでそんなことをする理由があるかどうかを」

ジェインのことばはミロの心につき刺さった。彼女には本当にルジタニア粛清艦隊をくい止めることができるだろう――ミロは即座にそうさとった。スターウェイズ議会はM・D装置を搭載したスターシップをふくむ艦隊を送りだしはしたが、それを使用せよという命令はまだ出していない。事前にジェインにさとられることなく艦隊に命令を出すことは不可能だし、アンシブル通信網の隅ずみまではいりこんでいる彼女なら、艦隊にとどくまえに攻撃指令を遮断することができるはずだ。

問題は、そんなことをすればスターウェイズ議会に自分の存在が気取られてしまう――あるいはすくなくとも、なにか異常があるとわかってしまうという点にある。艦隊から命令を了解したという返事がなければ、それは何度でも再送されるだろう。ジェインが繰り返し命令を遮断すればするだけ、スターウェイズ議会は、なにものかがアンシブル・コンピュータに対して考えられないほどの制御力をもっていることを確信するはずだ。

指示を受信したと虚偽の報告をすれば、そういう事態は避けることができるかもしれないが、そうなるとこんどは、艦隊の全スターシップ間のみならず艦隊と全惑星ステーション間の通信

まで逐一モニターしなければならなくなる。そうでもしなければ、艦隊が攻撃指令を受信したという偽装がばれてしまうからだ。いくらはかりしれない能力をもっているジェインといえども、いつまでもそんなことはしていられない——ジェインにはいちどに百単位、あるいは千単位のものに多少気をくばるくらいの能力はあるが、この作戦には無数のモニター作業と修正が必要だ。たとえほかのことにはいっさい手をださないとしても、そのすべてを遂行するのはとうていむりだ。ミロは、じきにそう結論した。

いつかはどこかで秘密が露見してしまうだろう。そして、ジェインが計画を説明するのを聞きながら、ミロは彼女のいうとおりだと納得した——ジェインにとって最上の選択、彼女の存在が明るみに出る危険のもっともすくない選択は、艦隊と惑星ステーションおよび艦隊内のスターシップ間のアンシブル通信を完全に遮断してしまうことなのだ。各スターシップを孤立させてしまえば、事情を知らないクルーたちが選ぶ道は、ミッションを中止するか、最初の指令にしたがいつづけるしかない。彼らは去ってゆくか、あるいは〈小博士(リトル・ドクター)〉を使用する権限を与えられないままルジタニアに到着するか、どちらかになる。

だが、いっぽうでスターウェイズ議会には、なにかが起きたことが知られてしまうだろう。もちまえの官僚主義的無能さからして、なにが起きたのかはだれにもわからないかもしれない。しかし、そのような事態は、自然的、もしくは人為的ミスといって片づけられないことをいずれはだれかがさとるはずだ。ジェインの——あるいはジェインのようななにかの——存在を知っただれかは、アンシブル通信を断ち切れば彼女がほろびると確信するだろう。それがわかっ

たとき、ジェインはまちがいなく死ぬのだ。

「そうなるとはかぎらない」ミロはいいはった。「スターウェイズ議会にされるままにならない方法だってあるさ。惑星間通信を妨害してスターウェイズ議会に通信を断ち切れという指示を出させなければいいんだ」

だれも答えなかった。理由はわかっている。ジェインにも永遠にアンシブル通信を妨害することはできないのだ。いずれは各惑星の政府がひとり歩きしはじめる。ジェインは、何年、何十年、何世代にもわたって戦争がつづいても生きつづけるだろう。けれども、彼女が力を行使すればするほど、人間たちは彼女を憎み、おそれるようになる。そして結局は、彼女を殺してしまうだろう。

「それでだめなら本がある」ミロがいった。「『窩巣女王』や『覇者（ヘゲモン）』のような本だ。たとえば『ヒューマンの生涯』とか。〈死者の代弁者〉なら、書けるはずだ。それを書いて、思いとどまるように人間たちを説得するんだ」

「望み薄ね」ヴァレンタインがいった。

「ジェインを死なせるわけにはいかない」ミロは食い下がった。

「たしかに、死んでくれと頼むことはできないでしょうね」ヴァレンタインは分析した。「でも、窩巣女王やペケニーノたちを救うには、それしかないとしたら――」

ミロは激昂した。「そんなふうに彼女の死を口にするな！　あなたは、ジェインをなんだと思ってるんだ。ただのプログラム、ソフトウェアのひとつか？　そんなものじゃない。彼女は

現実に生きているというんなら彼女だって生きている。ピギーたちとおなじように、彼女も――」
「あなたにとってはそれ以上の存在なんでしょうね」ヴァレンタインがいった。
「以上でも以下でもない」ミロが反論した。「あなたはわすれているようだが――ぼくにとってピギーは兄弟のようなもので――」
「それなのに、あなたはピギーたちをほろぼすことが道義的に必要になるかもしれないという可能性を考えることができるわけね」
「揚げ足をとらないでくれ」
「揚げ足なんかとっていないわ」ヴァレンタインはいった。「あなたがピギーたちの死を考えることができるのは、あなたにとって彼らがすでに失われた存在だからよ。ところがジェインを失うとなると――」
「彼女はぼくの親友だからだ。親友のために命乞いをすることは許されないのか？　生死にかかわる決定をくだせるのは、縁もゆかりもない人間だけなのか？」
おだやかで深みのあるヤクトの声が議論を中断した。「ふたりとも、落ちつきなさい。決定するのはきみたちじゃない。ジェインなんだ。彼女の命の価値を決定する権限は彼女にある。おれは哲学者じゃないが、それくらいはわかるつもりだ」
「あなたのいうとおりだわ」ヴァレンタインが答えた。
ミロにも、ヤクトのいうとおり、決めるのはジェイン本人だということがわかっていた。だ

が、それはたまらないことだった。なぜなら、ジェインがどう決定するかもわかっていたからだ。決定をジェインにゆだねるのは、死んでくれと頼むのと同じことだ。そうはいっても、結局、その選択はジェインにまかされるだろう。ミロは、こうしてくれというような注文すら出さなかった。ジェインにとって時の流れは非常に速い。船がすでに亜光速飛行にはいっているのだからなおさらだ。おそらく、彼女はすでに心を決めてしまっただろう。

それはあまりにもつらいことだった。いまジェインを失うことには耐えられない。それを考えるだけでも平静でいられそうにはなかった。ヴァレンタインのまえで、そのような弱みを見せたくない。そこで、ミロは体をまえにかたむけてバランスをとり、よろよろと座席から体をもちあげた。ごく一部の筋肉しか意のままにならないので、動くのはひと苦労だ。ブリッジから自室まで歩いてゆくのさえ、全神経を集中しなければならない。だれもついて来たり、話しかけたりしなかった。それが、ミロにはありがたかった。

自室でひとりになると、彼はベッドにあおむけになってジェインに呼びかけた。ただし、声には出さない。いいたいことを心に思い浮かべるのが彼女に話しかけるときの癖だった。いまやジェインの存在は同船しているみんなに周知のことだったが、ミロには彼女の存在をいままで隠しつづけてきたこの習慣を捨てるつもりはさらさらなかった。

「ジェイン」声もなく、彼は呼びかけた。

「なあに」耳の中で彼女の声がした。いつものように彼は想像した。この低い声は、目には見

えないけれども、すぐそばにいる女性の声なのだ。ミロは目をとじた。こうすると、彼女のイメージがよりはっきりと想像できる。彼女の息が頬をくすぐる。ささやきかける彼女の髪が顔をなでるのを感じながら、ミロは無言で答えた。
「決めるまえにエンダーに相談しろよ」ミロはいった。
「もうしたわ。たったいま、あなたが考えているあいだにね」
「なんていわれた？」
「なにもするなって。なにかを決めるなら、じっさいに指令が送られてからにしろって」
「そのとおりだ。もしかしたら、指令は出ないかもしれない」
「もしかしたらね。もしかしたら、異なる政策をもった新しいグループが台頭するかもしれない。現在の指導者たちが心変わりすることもあるかもしれない。ヴァレンタインのプロパガンダが効を奏するかもしれない。艦隊に反乱が起きることだってないとはいえないわ」
この最後のことばがあまりにも荒唐無稽だったので、ミロは、まちがいなく指令が出されることをジェインが確信しているのだと知った。
「のこされた時間は？」彼はたずねた。
「艦隊の到着は十五年後のはずよ。この船とヴァレンタインたちのスターシップがルジタニアについてから一年以内ということね。そうなるように計算したから。指令が出るのは、そのすこしまえでしょう。おそらく到着の六カ月まえ——つまり、艦隊時間で約八時間後には、艦隊は光速飛行を脱してスピードを通常にゆるめることになるわね」

「あんなことはしないでくれ」ミロはいった。
「まだすると決まったわけではないわ」
「いや、もう決まってる。きみはもう、すると決めたんだ」
ジェインは無言だった。
「ぼくを捨てないでくれ」ミロは訴えた。
「そうしないですむのなら、友達を捨てたりはしないでしょう」ジェインがいった。「捨てて平気な人もいるけれど、わたしはちがう」
「たのむから」ミロはもう一度いった。彼は泣いていた。ジェインにはわかるだろうか？　耳に埋めこまれた宝石を通して、それを察知することができるだろうか？
「努力してみるわ」
「ほかの方法を見つけてくれ。彼らを思いとどまらせる、べつの方法を。きみ自身をフィロトの網の目からはずす方法をさがすんだ。そうすれば、殺されずにすむ」
「エンダーもそういったわ」
「じゃあ、そうしろよ！」
「そんな方法をさがすことはできるけど、見つかるという保証はどこにもないわ」
「方法はきっとあるはずだ」
「これだから、わたしはときどき自分が生きているという確信をもてなくなるのよ。あなたたち生物は、なにかがほしくてたまらなくなると、かならずそれが実現すると思うのね。心の底

からなにかをもとめれば、きっとそうなるって」
「実在すると信じてもいないのに、どうしてなにかをさがすことができる？」
「さがそうとさがすまいと」ジェインはいった。「わたしは人間のように気が散ったり飽きたりすることはないわ。とにかく、なにかべつの方法を考えてみましょう」
「このことも考えてくれ」ミロがいった。「きみはなにものなのか、ということをね。きみの精神作用のことを。そもそも、きみがこの世に生まれるにいたったことの次第を理解してもいないのに、自分の命を救う方法なんかさがせるはずはない。いったん自分のことが理解できれば——」
「コピーをつくって、どこかに保存しておくことができるかもしれない」
「もしかしたらね」
「もしかしたら」ジェインが復唱した。
だが、ミロには彼女が信じていないことがわかったし、自分でも信じていなかった。ジェインはアンシブルのフィロティック網に存在する。自分の記憶を宇宙のあらゆる世界、すべてのスターシップにあるコンピュータのネットワークに保存することは可能だが、彼女の自我を保存できる場所などどこにもないのだ。そのためには、フィロティック・リンクのネットワークが欠かせない以上は。
ただし、例外はある。
「ルジタニアの父樹（ファーザートゥリー）はどうだい？　彼らだってフィロトを介して意思を通じ合っているん

だろう？」

「すこしちがうのよ」ジェインがいった。「デジタル通信じゃないから。アンシブルのように記号化（コード）されてはいないの」

「デジタルではないにしても、とにかく情報を伝えあってはいる。フィロトを利用した方法でね。それに窩巣女王だって――バガーたちとそうやって意思の疎通をはかっているんだ」

「そっちのほうは使えないわ」ジェインはいった。「構造が単純すぎるの。女王とバガーとのコミュニケーションはネットワークにはなっていない。すべてが女王に集中しているだけよ」

「ぜったいだめと、どうしていいきれる？　そういうきみ自身がどう機能しているのかだって、はっきりはわからないくせに」

「わかったわ。それも考えてみる」

「よくよく考えろよ」ミロはいった。

「よくもわるくも、わたしにはひとつの考え方しかないのよ」ジェインがいいかえした。

「ぼくは、じゅうぶん注意をはらってくれといいたかったんだ」

ジェインには一度に多くの思考をたどることができるが、その思考には優先順位があり、注意の払い方にもさまざまに異なるレベルがあった。ミロは、ジェインが自分の自我をさぐるということを、さして大切でない下位のレベルに追いやらないようにしたかった。

「注意をはらうわ」ジェインがいった。

「そうすれば、なにか見つかるさ」ミロはいった。「きっと見つかる」

しばらく待ってもジェインの答えはなかった。これはつまり対話が終了したということだ。ミロはとりとめのないことを考えはじめた。こんな体のままで、ジェインがいなくなったら、人生はどんなふうになるのか考えてみようとした。ルジタニアにつきもしないうちに、そうなる場合だってありうるのだ。もしもそうなったら、この旅は彼が生涯で犯したもっともとりかえしのつかない失敗になるだろう。光速で旅をしたために、彼は現実の時間を三十年分もふいにしようとしている。ジェインといっしょに過ごせたはずの三十年。それだけの時間をかければ、ジェインを失うことに対処しようもあっただろう。だが、いま彼女を失うのは、深くつきあうようになってたった数週間でしかない——わきあがる涙は自己憐憫のためだと知りながら、ミロはやはり泣いてしまった。

「ミロ」ジェインの声がした。

「なんだ?」彼は答える。

「これまで考えたことのないことを、どうすれば考えられるかしら?」

ミロはしばらく返事をしなかった。

「ミロ、人類が解明し、どこかに書きのこした単なる論理ではないことを、どうすれば理解できるの?」

「きみはいつだってものごとを考える」ミロはいった。

「わたしは、想像はできないことを想像しようとしているのよ。人間が解明しようとすらしたこともない疑問の答えを見つけようとしているんだわ」

「それができないのか？」

「わたしには独自の思考ができないとしたら、それはつまりわたしが進化したコンピュータ・プログラムにすぎないということなのかしら？」

「ばかをいうなよ、ジェイン。たいていの人間は独自の思考なんか死ぬまでしやしない」ミロは低く笑った。「だからって、彼らが地上生活をする進化したサルにすぎないということになるのか？」

「あなた、泣いているのね」ジェインがいった。

「ああ」

「わたしには、ここを切り抜ける方法が考えつかないと思っているのは、そっちのほうだわ。わたしが死ぬと思っているのは、あなたのほうなのよ」

「ぼくは、きみならきっとなにか考えつくと信じている。うそじゃない。そうは思っても、こわくてたまらないんだ」

「わたしが死ぬことが、こわいのね」

「きみを失うことがこわい」

「そんなにおそろしいことかしら？　わたしを失うことが？」

「ひどいな」ミロがつぶやいた。

「わたしがいなくなったら、一時間くらいはさみしいと思ってくれる？」ジェインはたたみかけてきた。「それとも一日？　一年？」

彼女はいったいミロになにをもとめているのだろう。いなくなっても思い出にのこるという保証か？　だれかになつかしんでもらえるということか？　なぜ信じてくれないのだろう？ジェインには、まだミロという人間がわかっていないのだろうか？

たぶんジェインはそれだけ人間的なのだ。だからこそ、すでにわかっていることを改めて保証してもらわずにいられないのだろう。

「永遠にだよ」ミロは答えた。

こんどはジェインが冗談めかして笑う番だった。「あなたは、そんなに長くは生きられないわ」彼女はいった。

「まったく、ああいえばこういうんだから」

またジェインの声が途切れてこんどはそれっきりになった。そしてミロは、ぽつんとひとり思いにふけるのだった。

ヴァレンタインとヤクトとプリクトはブリッジに居のこり、自分たちが得た知識を語りあいながら、その意味をさぐり、なにが起きるのかを突きとめようとしていた。彼らが到達した結論はただひとつ、将来のことがわかるはずもないが、おそらく事態は最悪の想像よりははるかにましな結果になるだろうとはいえ、もっとも好ましい状況にはおよびもつかないだろうということだった。

「そうね」プリクトはいった。「例外もあるけど」

プリクトはいつもこうだ。教師役をつとめるとき以外はほとんど話さないし、いざ口をひらくと、それで会話は打ち止めになるきらいがある。プリクトは立ちあがって、窮屈きわまりない寝室のほうへと行きかけた。ヴァレンタインは、自分たちのスターシップへもどるよう、懲りずにプリクトを説得しようとした。

「わたしがあっちにいたのでは、ヴァーサムとロウの邪魔になるわ」プリクトはいった。「あの子たちは、ちっとも気にしていないのに」

「ヴァレンタイン」ヤクトが口を出した。「プリクトがあっちへもどりたがらないのは、すべてに立ち会いたいからなんだよ」

「そういうことなの」ヴァレンタインがつぶやいた。

プリクトはにやりと笑った。「おやすみなさい」

それからまもなく、ヤクトもブリッジを出ていった。出がけに一瞬、彼はヴァレンタインの肩に手をおいた。「すぐあとから行くわ」ヴァレンタインはそう答えた。そのときは文字どおりすぐにも夫のあとを追うつもりだったのだ。ところが、ブリッジにとどまって考えているうちに、思いは深まった。知られているかぎり人間以外のあらゆる種を一気に絶滅の危機に追いやりかねない宇宙とは、いったいなんなのか。窩巣女王、ペケニーノ、そしていまジェイン。彼女はかけがえのない、おそらくは実在することのできた唯一無二の存在だ。こんなたくさんの知的生命、しかもごく少数にしか知られていない知的生命——それが全員一律に消し去られようとしている。

すくなくともエンダーは、これが自然の法則なのだということを最後には納得するだろう。三千年まえのバガーの絶滅がつねに自分の責任だと思いつづけたのとはちがって、これにはそれほど自責の念を感じないかもしれない。きっと異類皆殺し（ゼノサイド）は自然界のならいなのだ。このゲームでは、たとえ最高のプレイヤーにもいっさいの情けはかけられない。

そうとしか考えようがないではないか。知性のある種だからといって、この世に生まれたあらゆる種族を例外なく待ちうける絶滅という恐怖にさらされずにすむ法はない。

ヴァレンタインがようやく端末装置のスイッチを切り、寝室へ行こうと立ちあがったのは、ヤクトが去ってから一時間はたったころだった。が、立ちさりかけてふと気まぐれを起こし、彼女は宙にむかって呼びかけた。「ジェイン？」そしてもう一度。「ジェイン？」

答えはない。

なくて当然だろう。耳に宝石を埋めこんでいるのはミロなのだ。ミロとエンダーの、ふたりだ。いったい、ヴァレンタインはジェインが一度に何人の人間をモニターできると思ったのだろう。せいぜいふたりが限度だろう。

いや、二千人かもしれない。あるいは二百万人？　フィロトの網の目に幻影（ファントム）のごとくひそんでいる存在の能力の限界など、ヴァレンタインには知るべくもない。たとえいまの声が聞こえていたとしても、ジェインに返事してもらえると思う権利は彼女にはないのだった。

通路に出て、ヴァレンタインはミロの部屋と自分たち夫婦の部屋のまんなかで足を止めた。ドアは防音にはなっていない。自分たちの部屋のなかからヤクトの低いいびきが聞こえた。そ

れとはべつの物音もする。ミロの息づかいだ。眠っているのではない。泣いているようだった。三人の子供を育てあげたヴァレンタインには、その切れぎれの重い呼吸に聞き覚えがある。
（ミロはわたしの子供ではない。よけいな世話をやくべきじゃないわ）
ヴァレンタインはドアを押しあけた。物音はしなかったが、ベッドに一条の光がさしこんだ。とたんにミロは泣きやんだものの、彼女を見つめる目は泣き腫らしてふくれていた。
「なんの用？」彼はいった。
ヴァレンタインは室内にはいって寝棚のわきの床にすわり、数インチのところまで顔をちかづけた。「あなたは自分のことで泣いたりする人じゃないわ。そうでしょう？」
「そうでもないさ」
「でも、今夜は彼女のことを思って泣いているのね」
「彼女だけじゃなく、ぼくのためでもある」
ヴァレンタインはなおも身を乗りだし、片方の腕でミロを抱くと、その頭を自分の肩にひきよせた。
「やめてくれ」ミロはいった。そのくせ、身をひこうとはしない。そして、しばらくすると彼はおずおずと腕をあげてヴァレンタインに抱きついた。もう涙は止まっていたが、一、二分ほどそのまま彼女に抱かれていた。これで、すこしでも気が休まればいい。ヴァレンタインは、ぼんやりとそう思った。
と、ミロがわれにかえった。身をひいてごろりと寝返りをうつ。「ごめん」彼はつぶやいた。

「どういたしまして」ヴァレンタインは、相手のことばの表だった意味よりも内容をくんで返事をする主義だった。
「ヤクトにはいわないで」ミロがささやいた。
「だいじょうぶ」ヴァレンタインはいった。
彼女は立ちあがって部屋を出ると、うしろ手にドアをしめた。「あなたと話せてよかったわ」ミロはいい青年だ。彼がヤクトにどう思われるかを気にしているという事実がいじらしかった。今夜ミロが流した涙に自己憐憫の意味があったとしても、それがなんだろう？ ヴァレンタイン自身もそういう涙を流したことはある。ヴァレンタインは自分に念を押した。人は、ほとんどいつの場合も自分の損失のために嘆くのだ。

5　ルジタニア艦隊

〈エンダーの話では、スターウェイズ議会が送りだした武装艦隊はここへやって来て、この世界を破壊するつもりらしい〉

〈興味深い話だ〉

〈あなたは死がこわくないのか？〉

〈われらは、艦隊が到着するまでここにいるつもりはない〉

　チンジャオはいまや、両手が血に染まっていることを隠していた幼い少女とは別人だった。神子（みこ）であると証明されたその瞬間に彼女は別の人生を送ることになり、あの日から十年たったいまでは、神がみの声を人生の一部として受けいれ、このことが彼女にあたえた社会的役割を果たすようになっていた。彼女は、神がみに送るかわりに自分に供される特権と名誉を甘んじて受けることをおぼえた。父の教えをまもって、高ぶることなくますます謙虚になり、神がみと大衆が彼女にあたえる重くなる一方の責務をになった。

　彼女はまじめに職分を果たし、それに喜びを見いだした。この十年間、厳格で刺激的な一連

の学問をおさめてきた。ひきしまった体つきは、同年輩の子供たちと、駆け足、水泳、乗馬、剣術、棒術、骨闘術といった訓練をともにしたたまものだ。ほかの子供たちにまじって、さまざまな言語をおぼえた——宇宙共通語としてコンピュータを打つときにも使用するスターク、喉音で歌ったり、紙や細かい砂に美しい漢字を描いたりするのに使う古代中国語、そして新中国語。これは口語であり、通常のアルファベットを用いてふつうの紙や地面に書くときに使用する。チンジャオ本人をべつにすれば、彼女がほかの子供たちとは比べものにならないほどのスピードで苦もなく完璧にこれらの言語を習得してしまったことにおどろいている者はだれもいなかった。

運動と語学以外の教師は、個別に彼女をたずねてくる。科学や歴史、数学、音楽については、こうして習った。そのほかに、毎週父のもとをおとずれて半日ほどいっしょに過ごし、なにを学んだか逐一知らせて問答をするのだ。父にほめられると、部屋へもどる足どりもついはずんでしまう。やんわりとでも叱責されれば何時間もかけて教室の床の木目をたどらないことには、自分が下等に思えてふたたび勉強にとりかかる気になれないのだった。

チンジャオの修養には、そうした学問とは別に完全に自分だけのものがあった。彼女は、神がみへの服従を先送りにできる父親がどれほど強い人であるかを自分の目で見てきた。神がみが浄罪を要求するとき、それがひきおこす渇望、服従しなければという欲求は筆舌につくしがたいほど激しいもので、こばむことなど不可能なのを彼女は知っている。にもかかわらず、父はなぜかそれをこばむことがある——すくなくとも、けっして他人の目にふれずに儀式をおこ

なえるまで待てるくらいに。チンジャオは父のような強さにあこがれるあまり、自分も儀式を先のばしにする訓練にとりかかった。神がみによって、自分が耐えがたいほど穢れているような気になると、視線が木目をさがしだしたり、どうしようもなく手が汚れていると感じてしまう。そんなとき、チンジャオはすぐには行動しなかった。懸命になって当面の現状に気持ちを集中させ、服従の行為をできるかぎり先にのばそうとしたのだ。

最初のころは、たっぷり一分も浄罪を先送りにできたら合格で――抵抗が崩れると、神がみはそのために儀式をいつも以上に煩雑でむずかしいものにして彼女に罰を与えた。それでも、チンジャオはあきらめようとしなかった。これでもわたしはハン・フェイツーの娘だもの。こうして数年ごしの修練を積むうちに、彼女は父ゆずりのものを身につけた。すなわち、人は渇望をおぼえつつ、ときには数時間ものあいだそれをこらえることができるのだ。透きとおった翡翠の箱のなかにまばゆい火を囲いこむように、神がみからの危険でおそろしい炎を心につつみこむことができる。

そして、ひとりきりになったとき、その箱をあけて炎を解放すればいい。一気に勢いよく燃えあがらせるのではなく、時間をかけてすこしずつ全身に火をいきわたらせながら、頭を垂れて床の木目をたどったり、手洗いのための聖なる水をたたえた洗盤にかがみこみ、軽石と灰汁とアロエを使って音をたてずに入念に手をこすり洗いするのだ。

こうして、チンジャオは怒り狂う神がみの声を、自分だけの規律のとれた崇拝の対象へと変えてしまった。教師や訪問客のまえで、われをわすれて床にひれ伏してしまうのは、ごくたま

に、なんの前触れもなく苦痛がおそってきたときだけだ。自分にはとうてい太刀打ちできない力をもっていることを思い知らせるために神がみがえらんだ方法なのだと思って彼女はこうした辱めを受け入れた。ふだん自制心をはたらかせることができるのも、神がみがおもしろ半分に許してくださるからなのだ。完全とはいえないまでも、チンジャオはこのていどの規律で充分だった。結局、父のような完璧な自己抑制ができるなどというのは、彼女の思いあがりだろう。ハン・フェイツーが公衆の面前で辱めを受けることがないのも、神がみが彼を高く評価し、比類ない高貴さをあたえたからだ。チンジャオは、そんな名誉をあたえられるほどのことはなにひとつしていない。

チンジャオの教育でわすれてならないのは、週に一度、勤労奉仕をする平民の手伝いというのがあったことだ。いうまでもなく、勤労奉仕とは、平民たちが役所や工場で日々おこなっている労働ではない。勤労奉仕とは、水田での重労働のことを意味する。老若男女を問わず、惑星パスに住む者はみな、背をまるめ、すねまで水につかって田植えをし、稲刈りをしなければならない——それをしないと市民権を剝奪されるのだ。チンジャオは、おさないころに父から説明されていた。「これは、われわれが先祖をうやまっているというしるしなのだ。ご先祖さまのした仕事をするときは、だれもみなへりくだっているということを、身をもってしめすのだ」勤労奉仕によって育てられる米は聖なるものとみなされ、寺院へ供えて、聖なる日に食される。それは小さな碗に入れた家内の神がみへの供物にもなる。

十二歳のころのこと。むせかえるような暑い日で、チンジャオはあるリサーチ・プロジェク

トの追いこみにはいっていた。「きょうは、水田へは行きません」彼女は教師にいった。「いましている仕事のほうがずっとずっと大事なんだから」

教師はお辞儀をして退室したが、すぐ入れ代わりに父がはいってきた。父が、手にしたずっしり重い剣をふりかぶったとき、チンジャオは恐怖のあまり悲鳴をあげた。父は、神がみを冒瀆するようなことを口にした娘を殺してしまうつもりなのか？　だが、父は彼女を傷つけたりはしなかった――父がそんなことをするとおそれるなんて、チンジャオがどうかしていたのだ。父は彼女が使っていたコンピュータの端末装置めがけて剣をふりおろした。金属部分はぐにゃりと折れまがり、プラスチックの破片がはじけ飛び、端末装置は台なしになった。

ハン・フェイツーは声を荒立てることもなく、やっと聞き取れるくらいの声でひっそりとこういった。「第一に神がみ。二にご先祖さま。三に人民。四に支配者。自分のことは一番最後だ」

これこそ、まぎれもなく道を説明することばだった。そもそもこの世界が安定したのも、こういう思想があったればこそなのだ。チンジャオは忘れていたが、忙しくて勤労奉仕をする時間がないなどという者は惑星パスにいるべきではないのだった。

もう二度と、わすれることはあるまい。そして、うなじに照りつける日ざしや、足や手をひたすひんやりした水や、まとわりつく泥、地中から伸びて彼女の指先にからみつく苗を、彼女はいつのまにかそれが楽しいと思うようになった。水田で泥まみれになっても自分が汚いという感覚におそわれたことは一度もない。その泥は、神がみに仕えるためについた泥だとわかっ

ていたからだ。
十六歳になって、ついに修行は終わった。あとはただ、おとなの女としての仕事ができるという証拠を見せるだけだ――その困難さと重要さのために、神子たちだけに任される仕事を。
チンジャオは自室にいる偉大なるハン・フェイツーのまえに出た。彼女の部屋と同様、ハン・フェイツーの部屋も広く閑散としていた。床にマットを敷いただけという飾り気のない寝具もチンジャオの部屋とおなじだ。ひときわ目につくのが机上のコンピュータ端末装置という点もまたおなじだった。父の部屋をおとずれると、図表、3Dモデル、リアルタイム・シミュレイション、あるいは言語などなんらかの画像が端末装置の上のディスプレイに浮かんでいないことはなかった。たいていの場合、それらは単語だ。父は、仮想ページに書かれた文字や漢字を必要に応じて前後左右に移動させながら比較対照する。
チンジャオの部屋には、寝具とコンピュータ以外になにも置いていないのでがらんとしたものだ。父は床の木目を読んだりはしないのだから、そこまで簡素さにこだわる必要はない。でありながら、彼は簡素さを好んだ。敷物がひとつ――これも派手な柄であることはめったにない。一体の彫像を載せた低い卓がひとつ。絵がひとつかかっている以外、壁はのっぺらぼうだ。あまりにも広い部屋のなかで、これらの品じなはほとんど目につかない。ちょうど、はるか遠くで呼んでいるかすかな人の声のようだった。
この部屋をおとずれる者は、みなこういうメッセージを感じとる。ハン・フェイツーは簡素を宗(むね)としているのだ。純粋な魂には、各種のものがひとつずつあればじゅうぶんなのだ、と。

だが、チンジャオが感じるのは、それとはまったく異なるメッセージだった。それというのも、この家の者でなければうかがい知ることのできないことを彼女は知っているからだ。敷物も卓も彫像も絵も、毎日取り替えられる。しかも、生まれてこのかた、彼女は二度とおなじものを見たことがないのだ。したがって、彼女が学んだ教訓は、純粋な魂の持ち主は、あるひとつのものに未練を抱いてはならない、ということだった。純粋な魂の持ち主は、日々新しいものに接するようにしなければならないのだ。

この日の用事は公式なものだったので、チンジャオはディスプレイ画面を調べているハン・フェイツーのうしろに立ち、なんの仕事をしているのか当ててみようとはしなかった。この日、彼女は部屋のなかほどに進みでて簡素な敷物にひざまずいた。きょうのはコマドリの卵の色をした敷物で、ひとつの隅に小さな染みがあった。チンジャオは視線をさげたまま、染みのほうに目をくれようともせず、父が席を立って自分のまえに来るまで待った。

「ハン・チンジャオよ。娘の顔に日がのぼるのを見せてくれ」

彼女は顔をあげて父に目をむけ、微笑してみせた。

ハン・フェイツーも微笑みかえした。「わたしがこれからおまえに示す仕事は、経験豊かなおとなにとっても容易なものではない」

チンジャオは頭を垂れた。父が彼女に難題を課すだろうという予測はついていたから、すすんでそれを果たす覚悟はできている。

「わたしを見るのだ、チンジャオよ」

彼女は顔をあげ、ひたと父の目を見つめた。

「これは学校の仕事とはわけがちがう。実社会がもとめる仕事だ。スターウェイズ議会はこれをわたしにあたえた。数かずの国と人びとと世界の運命がこの仕事にかかっている」

いやでも緊張しているチンジャオだが、父のことばはなおさら重荷だった。「では、経験もない子供ではなく、信頼のおける一人前の人物におまかせになるべきでしょう」

「おまえはとっくのむかしに一人前だ、チンジャオ。仕事の内容を聞く覚悟はいいか」

「はい、お父さま」

「ルジタニア艦隊について、おまえはなにを知っている？」

「知っていることを、なにからなにまでお話ししたほうがいいのでしょうか？」

「おまえが大切だと判断したことを、すべていいなさい」

では——これは一種の試験なのだ。特定の話題に関する知識から必要なものと不要なものとをふるいにかける手際を見るためのものなのだ。

「艦隊が送りだされた目的は、惑星ルジタニアにあるコロニーの反乱をおさめるためです。現地では、知られている唯一のエイリアンへの不干渉に関する法律が傲然と破られました」

これでじゅうぶんだろうか？　だめだ——父はつづきを待っている。

「そもそも、ルジタニアには最初から問題があったところ」チンジャオは先をつづけた。「デモステネスという名の人物が発表したエッセイが騒動をひきおこしたのです」

「騒動とは、具体的にどんなことだ？」

「各地の植民惑星です。デモステネスは、ルジタニア粛清艦隊は危険な先例だという警告を発しました――スターウェイズ議会がルジタニア以外のコロニーをも武力で服従させようとするのは時間の問題にすぎないといったのです。カトリック系コロニーや各地のカトリック系マイノリティにむけて、デモステネスは以下のように説きました。スターウェイズ議会は、ペケニーノの魂を地獄から救うよう宣教師を送ったルジタニアの司教を罰しようとしている、と。科学者にむけてはデモステネスはこういいました。調査への不干渉という原則が危機に瀕している――現場の科学者の判断を何万光年も離れたところにいる官僚の判断より優先したためにひとつの世界がまるごと軍事的攻撃の標的になっている、と。一般大衆にむけて、デモステネスは、ルジタニア粛清艦隊がM・D装置を搭載しているといいました。いうまでもなく、これは明白なつくりごとなのですが、一部の者たちは信用しました」

「それらのエッセイが、どのくらい効果的だったか知っているか?」

「知りません」

「効果のほどは絶大だった。十五年前に発表されたごく初期のエッセイに影響されて、各地のコロニーはあぶなく反乱を起こすところだったのだ」

コロニーの反乱計画? 十五年前? チンジャオはそうした例をひとつだけ知ってはいたものの、それがデモステネスのエッセイに関係があるなどと考えたこともなかった。彼女の顔に血の色がのぼった。「十五年前というと、〈植民地憲章〉の時期ですね――お父さまの最初の大がかりな条約でした」

「条約はわたしのものではない」ハン・フェイッーが訂正した。「あれは当事者双方がひとしく分け合ったものだ。あれがあったればこそ、悲惨ないさかいが避けられた。その延長上にルジタニア粛清艦隊の偉大な使命があるのだ」

「あの条文はすべてお父さまが書かれたものです」

「わたしがしたことは、スターウェイズ議会と植民地の両者の人びとがすでに抱いている期待と願望にふさわしいことばを見つけることだけだった。わたしは官吏だったのだ」

チンジャオは頭を垂れた。彼女は真実を知っている。それはだれもが知っていることだ。あれはハン・フェイツーがその偉大さを発揮するきっかけとなった一件だった。彼は条約の一言一句を執筆したのみならず、ほとんど原型のままで受け入れるよう双方を説得したのだ。以来、ハン・フェイツーはスターウェイズ議会のもっとも信頼篤い顧問のひとりとなっている。連日、各植民惑星の支配階級にある男女からメッセージがとどく。あのような偉業をなしとげながら、みずからを一介の官吏と称するのは、ハン・フェイツー一流の謙遜にすぎない。チンジャオはまた、すでに妻が死の病におかされているなかで父がこうした業績をまっとうしたことを知っている。父はそうした人だ。妻も仕事もどちらもおろそかにはしなかった。彼は妻の命を救うことはできなかったが、戦争になれば失われていたかもしれない人びとの命を救うことはできたのだ。

「チンジャオ、艦隊がM・D装置を搭載しているのが明白なつくりごとだといったのはなぜかね」

「なぜなら——いくらなんでもそこまで非道なことをするとは思えないからです。異類皆殺しのエンダーではあるまいし、ひとつの惑星をまるごと破壊するなんて。そんな強権が宇宙に存在することは、許されるべきではありません」
「だれがそんなことをおまえに教えたのだ？」
「分別があれば教わらなくてもわかります。神がみが恒星とその周囲の惑星をつくりたもうたのです——人間がそれをなきものにするのはおこがましいことです」
「しかし、星ぼしを破壊することができるように自然の法則を整えられたのもまた神がみなのだ——神がみがあたえたもうたものを人間がこばむのはおこがましくはないか？」
チンジャオは唖然としてことばもなかった。理由はどうあれ、父の口からあからさまに戦争を擁護することばを聞いたのは、これがはじめてだ——どんな戦争でも忌み嫌っていた父が。
「もう一度きく——そんな強権が宇宙に存在することが許されるべきでないと、だれから教わった？」
「これは自分で考えたことです」
「しかし、その文章は、なにかからそっくり引用したものだ」
「はい。デモステネスのエッセイにありました。でも、ある考えを信じたら、それはわたしの考えになります。これは、お父さまが教えてくださったことですよ」
「なにかを信じるなら、そのまえに因果関係をすっかり見きわめるよう気をつけるべきだ」
「〈小博士〉すなわちM・D装置がルジタニアで使用されるようなことは、けっしてあって

はならないのです。だから、それを搭載した艦隊も送りだされるべきではありません」
ハン・フェイツーは深刻な顔でうなずいた。「けっして使用されてはならないとする根拠は？」
「それはペケニーノを絶滅させてしまうからです。知性ある種としての可能性を満たすべく必死に努力している若く、美しい種族なのに」
「それも引用だな」
「お父さま、『ヒューマンの生涯』をお読みになったことがあるのですか？」
「ある」
「では、おわかりでしょう。ペケニーノはけっして滅ぼしてはならないのです」
「わたしは『ヒューマンの生涯』を読んだことがあるといったのだ。それを信じたとはいっていない」
「信じてらっしゃらないのですか？」
「信じても、疑ってもいない。この書物は、ルジタニアとのアンシブル通信が切られてから世に出たものだ。したがって、おそらくはルジタニアで書かれたものではあるまい。そして、ルジタニアで書かれたものでないとすれば、作り話だということになる。署名が〈死者の代弁者〉となっていることからしても、その疑念は大いにある。おなじ署名は『窩巣女王』と『覇者』の書にもあり、それらは書かれてから数千年もたっているからだ。何者かが、人びとの敬愛の対象となっているそうした古来の名著を利用しようとしたのだ」

「わたしは『ヒューマンの生涯』はほんとうだと信じています」
「そう信じるのはおまえの自由だがな、チンジャオ。しかし、信じる根拠はなんなのだ？」
読んで、ほんとうだと思ったからだ。父にそんなことがいえるだろうか？　いえるとも。なにも遠慮することはない。「あの本を読んで、書かれているのは真実だと直感したからです」
「なるほど」
「お父さまは、さぞやわたしを愚かだと思われたでしょうね」
「その逆だ。おまえが賢明であることがわかった。真実の物語を聞くと、その体裁や証拠とは無関係にピンとくるものがある。たとえ無骨な語り口であっても、真実を愛する者はやはりその話に引きつけられるだろう。見るからにでっちあげ臭いものであっても、やはりいくばくかの真実があると確信することもあるだろう。なぜなら、いくらうわべがほころびだらけでも、真実を否定することはできないからだ」
「それなのに、なぜお父さまは『ヒューマンの生涯』を信じないのですか？」
「わたしの発言は不明瞭だった。わたしとおまえとは、〝真実〟や〝信念〟ということばをべつべつの意味で使っているのだよ。おまえは、あの話が真実だと信じている。なぜなら、自分の奥底にある真実に対する感受性がそうと知らせたからだ。だが、その真実に対する感受性は物語がじっさいにあったことかどうかという点に反応するものではない――じっさいの世の中でじっさいに起きた出来事が文字どおりに描かれているかどうかという点にはな。おまえの内なる真実の感受性は物語の因果関係に反応するのだ――はたしてそれが宇宙のはたらき方を忠

実に示しているか、神がみがその意思を人間に反映させているかどうかということにな」
チンジャオはほんの一瞬考えて、納得したしるしにうなずいた。「つまり、『ヒューマンの生涯』は、普遍的立場からいえば真実で、特定の立場から見るとつくりごとであるわけですね」
「そうだ。あの本を読めば大いに知恵を得るだろう。なぜなら、それは真実の物語だからだ。しかし、あの本はペケニーノそのものを正確に描いているだろうか？　その点は、はなはだ疑わしい――死んだら樹木に変態する哺乳類だと？　詩としてはうるわしいが、科学としては滑稽だ」
「でも、それはお父さまにも断言できないことではありませんか？」
「たしかに断言はできん。自然は数かずの奇妙なものを生んできた。だから、『ヒューマンの生涯』がうそいつわりのない真実である可能性もある。その判断は一時保留にして、時を待とう。だが、わたしが待っているからといって、スターウェイズ議会はルジタニアを『ヒューマンの生涯』に出てくるような風変わりな生物の住む世界としてあつかうとは思えない。われわれの知るかぎりでは、ペケニーノは人間に対する致命的な脅威となる可能性があるのだ。彼らもエイリアンにはちがいないからな」
「ラマンです」
「『ヒューマンの生涯』のなかでは、だ。だが、ラマンであるにせよヴァーレルセであるにせよ、われわれにはその正体がわからない。ルジタニア粛清艦隊は、まんいち人類を筆舌につく

しがたい危険から救う必要が生じた場合にそなえて〈小博士〉を装備しているのだ。それを使用するべきか否かを、われわれが判断する必要はない――決定はスターウェイズ議会がくだすだろう。それを送りだすべきだったか否かについても、われわれが判断する必要はない――送りだしたのはスターウェイズ議会だ。ましてや、それが存在すべきか否かなどにわれわれの判断は関係ない――ああいうものが作れる、存在してもよいと決定したのは神がみなのだ」

「では、デモステネスのいうとおりだったのですね。やはり艦隊はM・D装置を搭載していたのですね」

「そうだ」

「そして、デモステネスが公開した政府資料も――あれも本物だったのですね」

「そうだ」

「でも、お父さま――あなただけでなく数多い人たちが、あれは贋作だと主張したではありませんか」

「神がみが、ごく一握りの者にしか声をかけないように、支配者の秘密を知るべき人間もまた、知識をあやまりなく利用できる一部の者たちにかぎられる。デモステネスは、知識を賢明に利用するのに適さない人間たちに影響力の大きい秘密を明かそうとしていた。だから、人びとのためには、そうした秘密をとりもどさねばならなかったのだ。いったん明るみに出てしまった秘密を取りもどすには、それをうそといいくるめるしか方法はないのだ。そうすることで、真実の知識をふたたび我が物にすることができる」

「うそつきはデモステネスではなくて、スターウェイズ議会のほうだとおっしゃるのですね」
「わたしは、デモステネスは神がみの敵だといっておる。賢い指導者ならば、あらゆる状況に対応できる可能性をあたえてルジタニア粛清艦隊を送りだして当然だろう。ところがデモステネスは、スターウェイズ議会を艦隊の撤収に追いこむため、艦隊が〈小博士〉を搭載しているという知識を利用した。そうすることで、神がみが人類の支配者に任じた者たちの手から権力をもぎとろうなどと思ったのだ。神がみにあたえられた支配者を人民がこばんだりしたら、どのようなことになると思うかね？」
「世情は混沌とし、苦しむ者が出るでしょう」チンジャオがいった。歴史をひもとけば混沌と苦難に満ちた時代は枚挙にいとまがない。それも、神がみが強力な支配者と制度を送りこんで秩序をたもつようになってそうした時代は終焉を告げたのだ。
「さて、デモステネスは〈小博士〉について真実を語っていたわけだ。神がみの敵にはけっして真実は語れないとでも思っていたかね？　そうであってくれれば苦労はないだろうがな。それなら、敵を見分けるのはずっと簡単になるだろう」
「神がみに仕えるためにうそをつくことができるのならば、わたしたちはほかにも犯罪を犯すことができますね？」
「犯罪とはなにかな？」
「法律に反する行為のことです」
「法律とはなんだ？」

「わたしが思うに——法律を作るのはスターウェイズ議会だから、スターウェイズ議会のいうことはすべて法律です。けれども、スターウェイズ議会の構成員は人間の男女ですから、善行をなすこともあれば悪行をなすこともあるでしょう」

「よしよし、多少は真実にちかづいてきたぞ。スターウェイズ議会の仕事で犯罪を犯すことはできない。なぜなら法律はスターウェイズ議会がつくるからだ。だが、スターウェイズ議会がまんいち邪悪なものになれば、それにしたがう者は悪行を犯すことにもなりかねん。それは良心の問題だ。しかしながら、そんな事態になればスターウェイズ議会はかならずや天命を失うだろう。そして、われわれ神子たちは、一般の人間たちとちがって、神がみの御心がどうあるかを知るのに待つ必要はないのだ。スターウェイズ議会が天命を失ったなら、われわれには即座にそうとわかるはずだ」

「では、お父さまがスターウェイズ議会のためにうそをついたのは、天命が議会にあるからなのですね」

「それはつまり、スターウェイズ議会の秘密をまもることに協力するのが、人民の幸福をねがう神がみの御心に沿うことだとわかっていたからだ」

チンジャオは、いままでこんなふうにスターウェイズ議会のことを考えたためしがなかった。彼女が学んできた歴史書は、例外なく、スターウェイズ議会は人類を統一した偉大な組織であると記していた。そして教科書によれば、スターウェイズ議会の行為はすべて尊いものであるとされていた。ところがいま、その行為のなかには善行とは思えないものもあることが彼女に

はわかった。だからといって、かならずしもそれは善にあらずともいいきれない。「では、わたしは神がみから学ばなければなりませんね。スターウェイズ議会の意思が神がみの意思でもあるのか否かを」チンジャオはいった。
「そうしてくれるか？」ハン・フェイツーがたずねた。「たとえ一見あやまったものに思えてもスターウェイズ議会に天命があるかぎり、その意思にしたがってくれるな？」
「誓えとおっしゃるのですか？」
「そうだ」
「では、誓います。天命がスターウェイズ議会にあるかぎり、わたしはその意思にしたがうでしょう」
「スターウェイズ議会の機密規定を満たすためには、おまえに誓ってもらわねばならなかったのだよ。宣誓がないと、おまえに任務をあたえることができなかったのだ」ハン・フェイツーは咳払いした。「だが、ここでもうひとつ誓ってもらいたいことがある」
「わたしにできるものなら誓いましょう」
「この宣誓は——偉大な愛ゆえに求められる。ハン・チンジャオよ、おまえは神がみのために、どんなことでも、どんな手段を使っても、生涯変わらず仕えるか？」
「まあ、お父さま、そのことならわざわざ誓いを立てる必要などないでしょう。わたしはすでに神がみにえらばれ、神がみの声にみちびかれる身ではありませんか？」
「それを承知で申しておる。宣誓するな？」

「一生涯、どんなことでも、どんな手段を使っても、わたしは神がみに仕えるでしょう」
おどろいたことに、ハン・フェイツーは彼女のまえにひざまずいてその両手を包みこんだ。その頰を涙がつたう。「おまえは、これまでわたしが背負ってきた重荷をわが肩からとりのぞいてくれたのだ」
「わたしにそんなことができるはずはありませんわ、お父さま」
「おまえの母上が亡くなるまえ、わたしは約束をもとめられた。おまえの母上はこういったのだ。彼女の全人格は神がみへの献身を通じてあらわされるものであり、おまえが母を知るには、おまえもまた母とおなじように神がみに献身するよう教えることだけが、わたしにできるおまえへの助力だとな。わたしは、いまのいままでうまくいかないのではないかと不安だったのだ。おまえが神がみにそむいてしまうのではないか。おまえが神がみを嫌うようになりはしないか。あるいは、おまえが神がみの声を聞くに値しないのではないか、と」
チンジャォはそれを聞いて胸を打たれた。神がみの御前で、彼女はつねに深い不浄感を意識していたからだ。床の木目を目で追ったり指でたどったりする必要を感じないときでも神がみが彼女を穢らわしいと見なしているような気がしていた。いまにしてようやく、彼女は自分が失いかけていたものがなんだったかを知った。それは彼女を思う母の愛情だったのだ。
「これで不安はすっかり消えた。やはりおまえは非のうちどころのない娘だ、チンジャォよ。おまえはすでに神がみによく仕えている。そのおまえがこうして誓いをたてたからには、この先ずっと献身してくれると確信しているよ。これで、おまえの母上がいる天上の家にもさぞや

喜んでもらえるだろう」
　そうだろうか？　天上の人びとは、わたしの弱さを知っている。お父さま、あなたは、わたしがいまのところ神がみの信頼を裏切っていないということしか見ていらっしゃらないのです。お母さまは、わたしが何度ももうすこしで挫折しそうになったことを、そして、神がみが目をかけてくださるとき、わたしがどれほど穢れているかを知っているはず。
　けれども、父の手放しの喜びようを見ていると、とてもいいだす気にはなれなかった。自分の汚らわしさを天下にさらす日が来るのではないかと不安でたまらないなんて。そこで、彼女は父に抱きついた。
　もっとも、やはりこうたずねずにはいられない。「お父さま、お母さまには本当にわたしが誓いを立てたのが聞こえたとお思いになりますか？」
「そうだといいが」ハン・フェイツーが答えた。「もし聞こえていなくても、神がみはちゃんとその声のこだまを拾って貝殻にしまっておいてくれるだろう。貝殻を耳にあてれば、いつでも母上におまえの声が届くようにね」
　子供のころは、こんなふうに夢多い想像をして聞かせるゲームをしてよく遊んだ。チンジャオは不安をよそに、打てば響くように応答した。「いいえ、神がみはお父さまとわたしが抱き合った感触をとっておいて、それで肩掛けを編むのです。それなら、天上界が冬になったとき、お母さまがそれを肩に羽織ることができるもの」ハン・フェイツーが簡単に肯定しなかっただけでも、気が休まった。彼は、彼女の誓いが母に聞こえていればいいと思うとしかいわなかっ

た。ひょっとしたら母の耳には聞こえていなかったかもしれない——だったら、娘が失敗してもそれほど失望せずにすむだろう。
娘に接吻してハン・フェイツーは立ちあがった。「さて。おまえに任務を与える準備は整った」
ハン・フェイツーは娘の手をとって机のところへ連れていった。彼女は椅子にすわった父の横に立った。立っているチンジャオは、腰をおろした父とあまり変わらない身長だ。まだこれから背が高くなる可能性もないわけではないが、もうこれ以上伸びないでくれればいいと思っている。田畑で重い荷を背負って働く見あげるように大柄な女がいるが、ああいうふうになるのはチンジャオの本意ではない。ブタよりはネズミのほうがまし、とは、何年もまえにムパオがいっていたことばだ。
ハン・フェイツーがディスプレイに星図を呼びだす。それがどの星域であるか、チンジャオには一目でわかった。中心にあるのはルジタニア星系なのだが、個々の惑星を見分けるには距離が遠すぎる。「中央にあるのがルジタニアですね」チンジャオはいった。
ハン・フェイツーがうなずき、さらに二、三のコマンドを打ちこむ。「これを見なさい。ディスプレイではなく、わたしの指だ。これと、おまえの声紋がパスワードになる。それで必要な情報にアクセスすることができるのだ」
チンジャオは父が、〈四人組〉と打ちこむのを見まもった。なにからとったものかはすぐわかった。チンジャオの母の心の先祖は江青といって、共産党国家になって初の皇帝である毛沢

東の未亡人だった。江青とその仲間が権力の座を追われたとき、卑劣な裏切り者どもは彼らを〈四人組〉の名で中傷したのだ。チンジャオの母は、そんなふうに殉教した過去の女性の真の心の娘だった。したがって、これからはアクセス・コードを打ちこむたびに、母の心の先祖にさらなる敬意を表することができるだろう。父のこういう心配りが、ありがたかった。

ディスプレイに、たくさんの緑色の点があらわれた。反射的に急いで数を勘定する。ルジタニアからすこし離れた位置に十九個の点が、ずらりと取り囲むようにならんでいる。

「あれがルジタニア粛清艦隊ですか?」

「五カ月まえの配置だ」父がまたコマンドを打ちこむと、緑色の点はきれいに消えうせた。

「そして、これが現在の配置だ」

目をこらしてさがしたが、どこにも緑色の点は見つからない。ところが、父は明らかに彼女がなにかに気づくのを待っている。「艦隊はすでにルジタニアに到着したのでは?」

「見てのとおりだ」父はいった。「五カ月まえに、艦隊は消えた」

「いったいどこへ?」

「それがいっさい不明なのだ」

「反乱でしょうか?」

「それはだれにもわからん」

「艦隊全体が消えたのですか?」

「一隻の例外もなくな」

「消えたというのは、どういう意味でしょう？」

父は微笑を浮かべて彼女にちらっと目をやった。「それでいいのだ、チンジャオよ。そう質問するべきだったんだ。艦隊はどこにも見えないが――彼らはすべて深宇宙にいたのだ。したがって、物理的には消滅したのではない。われわれの知るかぎり、艦隊はいまでもコースどおりに航行しているかもしれないのだ。ただ、われわれとのコンタクトがまったく途切れたという意味でだけ彼らは消滅したのだよ」

「アンシブルが？」

「沈黙した。三分という時間内にいっせいに切れたのだ。送信妨害はいっさいなかった。一台が消えると次という具合で――反応は返ってこない」

「すべての船があらゆる惑星とのアンシブル通信を絶ったというのですか？　ひとつのこらず？　そんなことは、ありえません。たとえ艦隊がまるごと壊滅するほどの規模の爆発があったとしても――だいいち、それならいっせいに通信が絶たれるはずはありませんからね。艦隊はルジタニアの周囲に広範に配置されているんですから」

「いや、否定はできんよ、チンジャオ。それほどの規模をもつ激変となると――ルジタニアの太陽が超新星と化したという可能性がある。その閃光がもっともちかい世界に到達するまでは、十年はかかるだろう。問題は、史上にのこるどのような記録を見ても、そのような超新星はまずありそうもないということだ。絶対不可能とはいいきれないが、およそ眉唾ものだ」

「それに、もしそうなら事前に兆候が見られたはずです。恒星に変化があらわれたでしょう。

艦隊は、なにかそれらしい兆候を計測したんですか？」
「していない。したがって、これは天文学上の現象とはいっさいかかわりないと思えるのだ。科学者たちも、なにひとつ筋のとおった説明を考えつかない。それではというので、破壊活動という側面からの調査もしてみた。アンシブル・コンピュータに侵入したものの有無をさぐった。艦隊のクルーの個人ファイルをしらみつぶしに調査し、謀略の可能性がありはしないかとたしかめた。各船のあらゆる通信を傍受して、反乱分子が共謀者たちとメッセージを伝えあっていないかを極秘に調査した。軍部も政府も、考えつくかぎりのものを片っ端から分析した。各惑星の警察組織が調査を実行した——アンシブルのオペレーターは全員経歴をチェックずみだ」
「なんのメッセージも届かないとすると、まさかアンシブルの接続が切られているのでは？」
「そんなことがあると思うのかね？」
チンジャオは赤面した。「そうでした。たとえM・D装置が艦隊めがけて使われたとしても、アンシブルは素粒子の断片によってつながっているんですもの。たとえ艦隊が吹き飛ばされて灰塵に帰したとしても、アンシブルは健在なはずですね」
「恥じることはないぞ、チンジャオ。賢人が賢人であるゆえんは、あやまちを犯さないということではない。あやまちに気づいたら即座に訂正する者こそ賢人と呼ばれるのだ」
そういわれても、いまやチンジャオの顔には、べつの理由で血がのぼっていた。頭のなかで血がどくどくとたぎるようだ。たったいま彼女は、父親が自分にあたえようとしている任務を

おぼろげに察したからだった。それにしても、まさか。もっと年長の、知恵にまさる先人たちが次つぎと失敗した任務を、彼女にあたえるなど考えられない。
「お父さま」彼女は低い声でいった。「わたしの任務とは、なんなのですか？」この期におよんでなお、それが艦隊の消滅にかかわるなにか取るに足らない問題であってくれればいいがと願った。そのくせ、質問もしないうちから、そんな願いはかなわないとわかっている。
ハン・フェイツーが答えた。「おまえは、艦隊の消滅を説明する可能性をひとつのこらず見つけだし、そのそれぞれの見込みを算出するのだ。スターウェイズ議会は、このような事態に立ちいたった理由を突き止め、二度とこんなことのないように手を打たねばならない」
「ですが、お父さま」チンジャオは抗った。「わたしは十六歳の小娘にすぎません。わたしなどより優秀な方がたは数多くいらっしゃるでしょう」
「おそらく、なまじ知恵がついているだけに、そうした者たちはこのような任務に手は出さんのだろう。しかし、おまえはまだ若く、自分を知恵者と夢想したりしない。おまえの若さがあれば、ありえない事態に思いをめぐらし、どうすればそのようなことになるのかを突き止めることができるだろう。なにより大切なのは、おまえに神がみがなみはずれた明確さで語りかけてくださることだ。優秀なるわが娘、清照よ」
これこそ、チンジャオがおそれていたことだ――娘が神がみに愛されているから任務に成功するという父の期待が。父には、神がみがチンジャオをどれほどさげすんでいるか、彼らがチンジャオをどれほど軽んじているかがわかっていないのだ。

しかも、問題はそれだけではない。「わたしが任務に成功したらどうなるのですか？　ルジタニア粛清艦隊の所在をつきとめ、通信を回復したとして、そのあとは？　艦隊がルジタニアを破壊したら、それはわたしのせいではないといえるでしょうか？」

「まっさきにルジタニアの人びとを思いやるとは、よい心がけだ。心配はいらない。どうしても避けられないという保証のないかぎりM・D装置を使用しないとスターウェイズ議会は確約したのだ。M・D装置使用などという事態になることはまずあるまい。ただし、万にひとつそういう事態になったとしても、決定をくだすのはスターウェイズ議会だ。わが心の先祖の言にいわく、〝罰が軽くても、仁慈とはいわない。刑が厳しくても、暴戻とはいわない。風俗の変遷にしたがってとりしきるだけのことである。されば「事は世に因り、備えは事に適す」という〟（『韓非子』より引用）スターウェイズ議会は親切とか残酷とかいうことをぬきにして、人類にとってなにが大切かを基準にルジタニアを処遇するだろう。それはたしかだ。だからこそ、われわれは支配者に仕えている。彼らが人民に、人民が先祖に、先祖は神がみに仕える者だからだ」

「お父さま、そこまで考えいたらなかったわたしが愚かでした」そういいながら、チンジャオは胸のうちにくすぶる不浄感をなまなましく感じた。両手を洗わなければ。床の木目をたどらなければ。だが、彼女は自制した。それはあとまわしだ。

チンジャオは思った。わたしがどう行動するかは、おそろしい結末につながりかねない。失敗すれば、父はスターウェイズ議会に対して面子をうしなうだろう。ひいては惑星パス全体に対しても。それは、多くの人にとって父が死後パスの神として選ばれるに値しないという証明

になるだろう。
とはいえ、成功すればしたで、その結果は異類皆殺し（ゼノサイド）につながるかもしれない。決定権はスターウェイズ議会にあるとはいえ、そんなことを可能にしたのが自分だということはやはり無視できない。わたしも責任の一端を負わねばならないだろう。どっちにしても、わたしは敗残者のそしりをまぬかれず、不浄にまみれるのが落ちだ。
そのとき、あたかも神がみがチンジャオの胸のうちを知らしめたかのように、父がいった。
「たしかに、おまえは不浄だった。そして、そんなことを考えるとは、いまでも不浄なままだな」
チンジャオは赤くなってうつむいた。胸のうちをこれほどあからさまに父に見抜かれたからというのではなく、こんな素直でない考えを抱いた自分がはずかしかったのだ。
父は娘の肩にやさしく手をふれた。「しかし、わたしは神がみがおまえを清めてくださると信じている。スターウェイズ議会は天命を受けているとはいえ、おまえもみずからの道をゆくべくえらばれた人間だ。おまえなら、この偉大な仕事をなし遂げることができる。やってみるな？」
「やってみます」やっても失敗に終わるだろうが、それを意外に思う者はいないだろう。とりわけ、チンジャオの不浄さを知っている神がみは。
「名前をいってパスワードを打ちこめば、おまえが調べたいことに関係する公式文書すべてにアクセスできるようになっている。助けが必要なときはわたしにいいなさい」

チンジャオは堂々と父の部屋を辞し、ゆったりとした歩みを必死に保ちながら階段をあがって自室へひきとった。室内にはいって扉を閉め、彼女はこらえかねて身を投げだすようにひざまずき、床にへばりついた。果てしなく木目をたどりつづけるうち、とうとう目がかすんできた。それでもまだ消えないほど不浄感は強く、洗面所へ行って神がみが満足したと確信がもてるまで両手を洗った。二度ほど、食事だの伝言だのをもって小者が顔をだした――チンジャオはほとんど目もくれようとしない――けれども、主人が神がみと交感中であると見てとると、彼らはお辞儀をして音もなく出ていった。

もっとも、チンジャオがようやく不浄感から解放されたのは、手洗いをしたためではなかった。それは、彼女が不安の残滓を心から追いやったときのことだ。スターウェイズ議会は天命を受けているのだ。彼らに疑念を抱いてはならない。スターウェイズ議会がルジタニア粛清艦隊をどうするつもりであっても、それを遂行するのが神がみの意思であることにはまちがいない。であれば、最後までスターウェイズ議会に協力するのがチンジャオの義務だ。そして、じっさいチンジャオのおこないが神がみの意思であるならば、神がみはこうして彼女の目の前に置かれた問題に解決の道をひらいてくださるだろう。あまのじゃくな考えが浮かんだり、デモステネスのことばが心によみがえったりしたら、自分は天命を受けた支配者にしたがうのだということを思い出して、それらを追い払うようにしよう。

心が落ちつくころには、柔肌がむしれて痛々しい手のひらには点々と内出血のあとができていた。わたしは、こうなってやっと真実に目ざめるのだ、と彼女は思った。死すべき人間の浅

知恵をじゅうぶんに洗い流してしまえば、そのときは神がみの真実が表面に浮きだして日の目を見ることになるだろう。

やっとのことでチンジャオの穢れははらわれた。時刻はおそく、目も疲れている。にもかかわらず、彼女は端末装置のまえにすわって仕事を開始した。「消息を絶ったルジタニア粛清艦隊に関して、これまでおこなわれた全調査の要約を見たい」彼女はいった。「最近のものから提示せよ」瞬時にして、端末装置の上に文字が現われはじめた。前線へ行進する兵士の列のように、つぎつぎとページがならんでゆく。チンジャオは一ページに目を通すと、画面をスクロールして次のページを読めるようにした。七時間ほどそうして読みつづけ、ついに精根つきはて、彼女は端末装置のまえで眠りこんでしまった。

ジェインはすべてを見守っていた。彼女は何百万という仕事をこなしながら同時に千の事物に目配りすることができるのだ。どちらの能力にも限界がないわけではないが、なにかしながらではひとつのことしか考えられない人間の微々たる能力にくらべれば、ジェインのそれは無限といってもいい。とはいえ、彼女には人間とちがって感覚という限界がある。というより、人間こそジェインにとっての限界だ。巨大な惑星間ネットワークに結びついたコンピュータに打ちこまれたデータという形をとらないかぎり、ジェインにはなにひとつ見ることも知ることもできないのだ。

その限界は、人間が考えるほど重大なものではない。ジェインはすべてのスターシップ、す

べての衛星、すべての交通制御システム、その他、人間社会における電気を使ったほとんどすべてのスパイ・モニターにインプットされた整理まえの情報にほとんど即時にアクセスすることができる。しかし、恋人たちの痴話げんかや、ベッドでの語らいや、教室内での議論、夕餉の席でのうわさ話、あるいはひとりひそかに流す苦い涙といったことには、ジェインはたしかにほとんど立ち入ることができない。彼女が知る人間の生活は、デジタル情報として提示されるものだけだった。

各地の植民地に定住している人間の正確な数をたずねれば、ジェインはたちどころに人口調査による数値に各植民地の出生率および死亡率を加味した数字を答えてくれるだろう。おそらく、その数字を構成する人間たちの名前を列挙することもできるだろう。死ぬまでにそのリストを通読できる人間などいないにしても。そして、思いついた名前を適当に挙げて——たとえばハン・チンジャオなどと——「この人物はなにものか？」とたずねれば、ジェインは間髪を入れず重要な情報をならべたてるだろう——生年月日、市民権、血統、最新の医療チェックによる身長および体重、学業成績まで。

けれども、それはジェインにとって価値のない情報で、雑音のようなものだ。そういう情報がわかっているからといって、なんの意味もない。ジェインにハン・チンジャオのことをたずねるのは、どこか遠方の雲にふくまれるある特定の分子構造をもつ水蒸気について質問するのに似ている。その分子はたしかに存在するが、周囲にあるほかの無数の分子との差を生むものはなにもないのだ。

ハン・チンジャオについてもおなじことがいえた。だがそれも、彼女がコンピュータを駆使してルジタニア粛清艦隊の失踪に関するレポートに片っ端からアクセスしはじめるまでのことだった。チンジャオが調査を開始すると、その名前は一気に浮上してジェインの注意をひくことになった。ジェインはチンジャオがコンピュータを使ってすることを逐一記録しはじめた。そして、すぐに、わずか十六歳の少女であるハン・チンジャオが自分にとって深刻な脅威となることが明らかになったのだ。なぜなら、なんら特定の官僚組織につながってはいず、イデオロギー的な目的もなければ守るべき既得の利権もないハン・チンジャオが、人類のあらゆる機関によって収集された情報を調査しはじめたからだった。その視線はこれまでになく広範で、それだけにより危険なものだ。

なにが危険なのだろう？　ジェインはチンジャオに見つかるような手がかりをのこしてきただろうか？

いや、むろんそんなはずはない。ジェインは手がかりなどなにひとつ残さなかった。なにか手がかりを残して、ルジタニア粛清艦隊の失踪が破壊活動とか機械の故障とかなんらかの非人工的災害だったように見せかけようかと考えたこともある。どうしても物的証拠をでっちあげることができなかったので、やむなくその案は放棄したのだ。ジェインにできるのは、コンピュータの記憶に、誤解をまねきそうなデータをのこすことだけだった。そんなものは、現実世界ではなんら物理的類似をもちえない。したがって、すこしでも知性のある調査員にかかれば、そんな手がかりはたちまちでっちあげのデータだと見抜かれてしまうだろう。そうとわかった

ら、ルジタニア粛清艦隊の失踪が、なんらかの操作によってひきおこされたものだと調査員は結論するはずだ。考えられないほど細部までコンピュータ・システムにはいりこみ、にせのデータをのこしていった者がいるのだ、と。これでは、いっさい証拠を残さなかった場合よりずっと簡単にジェインの正体がたどられてしまうに決まっている。

やはり、証拠を残さないに勝る策はない。そして、ハン・チンジャオが調査を開始するまでは、それがじゅうぶん効果を生んでいたのだ。どの調査員も型どおりの調査をするだけだった。どこの惑星の警察も、既知の反体制グループをしらみつぶしにチェックした（なかには、拷問までくわえて意味もない自白をひきだしたあげく、最終レポートを記録して一件落着を宣言した調査機関もあった）。軍部は、軍事的反対グループに注目し――とりわけエイリアンのスターシップには神経質になった。軍部には、三千年まえのバガーの襲来という記憶がまだなまなましくのこっていたのだ。科学者はといえば、なにか想像を絶する目に見えない天文学的現象が起きて、艦隊が全滅したかアンシブル通信だけが故障したか、そのいずれかの証拠をさがした。政治家たちは、自分以外のだれかに責任をなすりつけようとした。ジェインの存在を想像したものはひとりもいず、したがって彼女はだれにも見つからなかったのだ。

ところがハン・チンジャオはすべての情報を総合し、細心かつシステマティックにデータに詳細な分析をくわえつつある。必然的に、彼女は証拠を見つけだし、ジェインの存在を証明し、そして終わらせるだろう。早い話、証拠がないのが証拠なのだ。ほかの者はだれもこのことに気づかなかった。というのも、予見のない秩序だった精神で調査にのぞんだ者がなかったから

だ。

チンジャオはどうやら人間ばなれした忍耐力をもち、細かな点も見落とさない注意力があり、ひっきりなしにいろいろなキーワードや新たなプログラムを使ってコンピュータで検索することができる。ジェインには、思ってもみないことだが、チンジャオはこうしたことをすべて、背中をまるめ、木の床にへばりつくようにして、いつ果てるともなく部屋じゅうの一枚一枚の床板の木目を端から端まで慎重にたどることで身につけたのだった。チンジャオを自分にとってもっとも手ごわい相手にしたてたのは神がみによる偉大な教訓だなどとは、ジェインには知るよしもなかった。わかっているのはただ、いつかはチンジャオという名のこの調査員が、おそらくほかのだれにもまともには理解できないことを見いだすであろうということだ。すなわち、ルジタニア粛清艦隊の失踪に関しては、考えられるすべての説明がすでに徹底的に除去されているということを。

となると、のこる結論はただひとつ。広範囲に展開していたスターシップの艦隊を瞬時に一掃してしまうか、あるいは——これもまたありえないことだが——全スターシップのアンシブルをいっせいに機能停止状態にしてしまう力をもつ、人類が歴史上いまだかつて相まみえたことのないなんらかの存在があるということだ。そして、このチンジャオという秩序だった精神の持ち主が、そのような力をもつかもしれない、考えられる存在をリストアップしはじめたら、いずれはまぎれもない相手の名前に行きつくはずだ。すなわち、すべてのアンシブルをひとつにつないでいるフィロト・レイでできている独立した存在——ではなく、フィロト・レイを住処(すみか)とする——いや、フィロト・レイでできている独立した

存在。この思いつきは真実なのだから、論理的な吟味や調査をどれほどくわえられようとも崩れることはない。結局、のこるのはこの思いつきだけなのだ。そうなれば、かならずやだれかがチンジャオの発見をみとめ、ジェインを破壊しにかかるだろう。

こうしてジェインは、ますますチンジャオの調査に注目するようになった。この十六歳になるハン・フェイツーの娘は、身長百六十センチ、体重三十九キロ、パスという中国道教思想の惑星に住む少女で、社会的にも知的にももっとも高い位にある。彼女は、ジェインがいままで知ったなかで、周到さと正確さにおいてコンピュータに、すなわちジェイン自身に匹敵する初めての人間だった。そして、チンジャオが数週間も数カ月もかけてする調べものをジェインなら一時間で処理することができるとはいえ、あなどりがたい真実は、チンジャオはジェイン自身がするであろう方法とほとんどまったくおなじ調査方法をとっている点だった。つまり、ジェイン自身なら到達するであろう結論にチンジャオがたどりつけないとする根拠はなにひとつないのだ。

ということは、チンジャオはジェインにとってもっとも危険な敵であり、ジェインには彼女を食い止める手だてがない――すくなくとも物理的には。チンジャオが情報にアクセスするのを妨害しようとすれば、チンジャオがジェインの存在を察知するのを早めるだけだ。そこで、表立った妨害をするかわりに、ジェインは敵を阻止するべつの方法をさがした。ジェインは人間の本質をすべて理解しているわけではないが、エンダーからはこう教わったことがある。人間がなにかをするのを止めたいときは、そうしたくないという気を起こさせる道を見つけるこ

とだ。

6　ヴァーレルセ

〈あなたはどうしてエンダーの意識に直接話しかけることができるのか？〉
〈彼の居場所さえわかっていれば、それは食事をするのとおなじように造作もないこと〉
〈どうやって彼を見つけたのか？　わたしは、第三の生の段階にはいっていない者の意識に話しかけることに成功したためしがないが〉
〈われらは、アンシブルと、それを接続している電子回路を通じて彼を——彼の肉体が宇宙のどこにあるかを発見した。彼の精神に到達するためには、混沌のなかをさぐって橋をかけなければならなかった〉
〈橋？〉
〈過渡的な存在であり、人間の意識と、われらの思考回路の特徴をすこしずつあわせもつもの〉
〈もしエンダーの意識に接触できるのなら、あなたがたを滅ぼすことをやめさせればよかったのに〉
〈人間の脳はひどく異質なのです。細部を理解し、その歪んだ空間に語りかけるすべがわかる

ようになるまでに、姉妹や母たちはすべて消去されてしまった。以来、われらは繭にくるまったさなぎになって待ちつづけ、ついに彼のほうがわれらを発見した。彼がやってきたとき、はじめて直接語りかけることができたのです〉

〈せっかくこしらえた橋はどうなった?〉

〈そのことは考えもしなかった。きっと、いまでもどこかに存在しているのであろう〉

馬鈴薯(ばれいしょ)の株は、こんどもだめなようだ。葉に丸くあらわれた茶色いしみを見て、エンダーはそうさとった。茎がもろくなって、わずかな風が吹いてもかんたんにたわみ、最後にはへし折れてしまう。今朝見たときは、どこにも病気の兆候はなかった。これだけ急激に症状があらわれ、しかも助かる見こみゼロである以上、原因はデスコラーダ・ウィルスとしか考えられない。

エラとノヴィーニャががっかりするだろう――こんどこそだいじょうぶと、あんなに期待していたのだから。エンダーの義理の娘であるエラは、ある遺伝子を操作して生命体のあらゆる細胞が三種の異なる化学物質を生産するようにする研究をつづけていた。その化学物質にはデスコラーダ・ウィルスを抑制あるいは殺す効果があることが知られている。エンダーの妻であるノヴィーニャのほうは、細胞核小体がデスコラーダの十分の一以上の分子すら透過させなくなるように遺伝子に操作をくわえていた。この馬鈴薯の株にそれらの遺伝子を両方とも切り継ぎ(スプライシング)したところ、事前の実験では双方の特徴が認められたので、エンダーが苗木を実験農場へもってきて植えたのだった。以来六週間、彼と助手たちはていねいに世話をしてきた。すべては

順調だと思われていたのだ。

もしもこの技術が効果をあらわしたら、ルジタニアの人間たちが食料としているすべての動植物にもおなじ処置をほどこせただろう。だが、デスコラーダ・ウィルスの利口さはなみたいていのものではなかった――ここまでやっても結局は手の内を見抜かれてしまったのだ。とはいうものの、通常は二、三日というところを六週間ももったのだから上等だ。この調子でいけばなんとかなるかもしれない。

それとも、いまとなってはなにをやっても手遅れなのだろうか。エンダーがはじめてルジタニアに来たばかりのころ、新しく農場に出した地球産の動植物は、デスコラーダによって遺伝情報を解読され、ばらばらにされてしまうまで二十年ももちこたえたものだ。ところが近年、デスコラーダ・ウィルスはある種の突破口を見つけたらしく、どんな地球産の動植物の遺伝情報でも数日ないし、わずか数時間で解読するようになってしまった。

このごろでは、動物や植物を育てるのに、植民者たちは一発でデスコラーダ・ウィルスを殺してしまうスプレーに頼るしかなくなっている。なかには、ルジタニアじゅうにスプレーをまいて、後腐れのないようにデスコラーダ・ウィルスを一掃してしまいたがっている植民者もいるほどだった。

ルジタニアじゅうにスプレーをまくことは非実用的ではあるが、できない相談というわけではない。その方法を選択しない理由は実用うんぬんということではなかった。この星の土着の生命体は、どれもデスコラーダなしでは繁殖できないのだ。むろんピギーたち――すなわち、

ルジタニア土着のたったひとつの樹木に結びつき、切っても切れないかかわりができてしまっている。万一デスコラーダ・ウィルスが絶滅でもしたら、ペケニーノたちはいまの代で終わりになるだろう。それでは、異類皆殺し(ゼノサイド)も同然だ。

これまでのところ、ピギーたちの全滅をまねくアイディアには、ミラーグレの村に住む大半の人びとが一も二もなく反対してきた。これまでのところは。だが、エンダーには、もうすこし事実が知れわたれば多くの人が変心するだろうことがわかっている。たとえば、ひとにぎりの人物しか知らないことだが、デスコラーダ・ウィルスは人間がデスコラーダを殺すために使う化学物質に二度までも適応して耐性を獲得している事実があるのだ。エラとノヴィーニャは、このつぎデスコラーダが殺ウィルス剤に耐性をもったとき、すぐさま新しいものに切り換えられるよう、すでに数種類もの新種の化学物質を開発ずみだ。そればかりか、植民地のあらゆる人間が体内にもっているデスコラーダ・ウィルスに命をうばわれないようにするための、デスコラーダ抑制剤も一度は切り換えを余儀なくされた。抑制剤は植民地内のすべての食品に添加されていて、食事のたびに摂取するようになっている。

とはいえ、抑制剤も殺ウィルス剤も、基本原理はみなおなじだ。いつの日か、地球産生物一般の遺伝子に適応するすべを身につけたとき、デスコラーダ・ウィルスは各種化学物質のあつかい方をも会得するだろう。そうなったが最後、新種の物質をいくらストックしていたところで関係ない——デスコラーダは数日のうちに人間側の蓄積を食いつぶしてしまうはずだ。

じっさいミラーグレの存続がどれほどあやういものかを心得ている人間の数は限られている。ルジタニアのゼノバイオロジストであるエラとノヴィーニャが手がけている仕事がどれほど重大なものであるか、デスコラーダと人間の戦いがどれほどのきわどいものであるか、デスコラーダに遅れをとることがどれほど取り返しのつかない結果を生むか、それがわかっているのは、ごく一部の人間だけなのだ。

そういうわけだ。もしも植民者たちに事実が知れようものなら、いずれデスコラーダが人間を圧倒する日がくるのが避けられないのであれば、いまのうちに全滅させてしまおうといいだす者が続出することだろう。それでピギーが死ぬのは気の毒だけれども、人間かピギーかというとなら、人間のほうが大事だ、と。

哲学的な視野に立ち、長い目で見て、知性のある種を一掃してしまうことよりは小さな人間の集落がひとつ絶えるほうがましだというのは、エンダーにとって造作もないことだった。こういう話をしても、ルジタニアの人間たちには納得がいかないというのはわかる。自分たちにはされているのは彼ら自身の命であり、彼らの子供たちの命なのだ。自分たちには理解できず、危険にさらされているのは彼ら自身の命であり、彼らの子供たちの命なのだ。自分たちには理解できず、好感をいだくものすらごくすくないという人間以外の生物のために、だれが死にたがったりするものか。遺伝子的にいっても、それは筋が通らない——進化は、自分自身の種をまもろうと命がけになる生物たちにだけ味方するものなのだ。ピギーのためにルジタニアの人間が命を投げだすのが神の御心であると司教みずからが宣言したとしても、いうことをきくような敬虔な人間はほとんどいないだろう。

わたしだって、そんな犠牲をはらえるという自信はない。エンダーは思った。血のつながった子供をもたない、このわたしですらそうなのだ。すでに一度は知的生命体の絶滅を経験してきたとはいえ――ほかならぬこの手でひきがねをひき、どんなに重い道義的な負担を負わねばならないかも承知しているというのに――そのためにおなじ人間たちが死んでゆくことに手をこまねいていられる自信はない。食用の穀物が全滅して飢え死にするにせよ、復活したデスコラーダ病によって数日で体がむしばみつくされる、はるかに苦痛に満ちた過程をへるにせよ、どちらでもおなじことだ。

そうはいうものの……はたして、わたしはペケニーノの絶滅をあまんじて見ていられるだろうか。二度までも異類皆殺し(ゼノサイド)を許されるだろうか。

まだらになった葉のついた馬鈴薯の折れ茎をひとつ拾いあげた。もちろん、これはノヴィーニャのもとへもって行かねばならないだろう。ノヴィーニャがそれを調査するはずだ。彼女がやらなければエラがやる。そして、彼女たちは歴然たる事実を確認するだろう。こんどもまた失敗だった、と。エンダーは馬鈴薯の茎を滅菌パウチにしまった。

「代弁者」

プランターだった。彼はエンダーの助手でもあり、ピギーのなかでは第一の親友だ。プランターはヒューマンという名のペケニーノの息子だった。エンダーはヒューマンを〈第三の生〉つまりペケニーノの生活環(ライフサイクル)における樹木の段階へ送りこんでやったのだ。彼はなかにはいっている葉がプランターにも見えるように透明なプラスチックのパウチをもちあげた。

「まちがいなく死にきっているね、代弁者」プランターがそういう口調には、格別な感情がまるでうかがえない。ペケニーノと共同作業をするようになった当初、もっとも気にさわったのがこの点だ——彼らは、人間たちが自分の尺度でかんたんに判断できる感情表現をしない。それは、植民者の多くにペケニーノが受け入れられない最大の障壁のひとつだった。ピギーたちの外見はかわいくもなければ愛嬌もない。彼らはただただ異質なのだ。
「もう一度やってみるよ」エンダーはいった。「ゴールは目前だという気がするんだ」
「あなたの〈妻〉が呼んでいる」プランターがいった。いくらスタークのような人間の言語に翻訳してあっても、〈妻〉という単語はペケニーノにとってはひどく重おもしいひびきなので、ふつうの調子で口に出すことがむずかしい——プランターはほとんど金切り声でそれを発音した。とはいっても、〝妻〟という概念はペケニーノにとっては強烈で、ノヴィーニャ本人に話しかけるときは名前で呼ぶことができるのに、その夫と話すときは彼女のことは地位をあらわす表現でしかいいあらわせないのだった。
「呼ばれなくても行こうと思っていたところだ」エンダーがいった。「この馬鈴薯を計測して記録をとっておいてくれたまえ」
プランターはまっすぐ跳びあがった——まるでポプコーンだな、とエンダーは思う。人間の目には相変わらず無表情なままに見えるのだが、いまの垂直ジャンプを見ればプランターが喜んでいることがわかる。プランターは電子機器を使う作業が大好きなのだ。機械がめずらしいせいでもあり、それを使うことでペケニーノの男同士のあいだでのステイタスが大いにあがる

からでもあった。プランターはただちに常時もちはこんでいるバッグからカメラと付属のコンピュータをとりだしはじめた。

「それがおわったら、この隔離区画を閃光焼却する準備をしておいてほしい」エンダーは注文した。

「はいはい」プランターが答える。「了解了解、了解だよ」

エンダーはためいきをついた。ペケニーノたちは、いわずもがなのことを人間に命じられるとひどく気分を害する。むろんプランターには、デスコラーダが新しい作物に適応した場合の手順がわかっている――〝知識を獲得した〟ウィルスは、まだ孤立しているうちに破壊してしまわなければならない。座して見ていたのでは、ひとつの菌が獲得した知識によってデスコラーダ・ウィルス全体が繁栄することになるからだ。エンダーは、それを知っているプランターに念を押すべきではなかった。とはいえ、人間はそうしなければ責任をまっとうしたような気になれないものなのだ――だから必要がないとわかっていても念には念を入れてしまう。

プランターは仕事に夢中で、エンダーが農場を去ってゆくのにも気づかなかった。農場と町の境にある消毒棟にはいると、エンダーは衣類を脱いでそれを消毒箱に入れ、浄めのダンスを踊った――腕をあげて手をくるくると左右にむけながら円をえがいてまわり、しゃがんだりすわったりといった動作を繰りかえす。こうして、建物全体に充満している熱照射とガスに全身をくまなくさらすのだ。口からも鼻からも大きく息を吸い、咳きこんだ――いつもこうなる――ガスは人体の許容範囲ぎりぎりのものだからだ。まるまる三分間、目の痛みと肺のひりつき

に耐えながら、両腕をふりまわして立ったりすわったりのダンスをつづける。全能のデスコラーダに服従する人間の儀式。われわれは、まぎれもないこの惑星の生命の支配者のまえで、こんなふうにみずからを卑しめているのだ。

やがて、時間がきた。ちょうど食べごろに焼きあがったというわけだ。ようやく新鮮な酸素が勢いよく吹きこんできたところで、エンダーはまだ冷めきっていない衣類を箱から出して身につけた。彼が出てゆくが早いか、デスコラーダ・ウィルスがもちこたえられないと証明された温度よりはるかに高い温度で、この部屋の表面に熱処理がくわえられるだろう。こうして消毒の最終段階がおこなわれているあいだは、ここではなにものも生きられない。このつぎだれかがはいってくるとき、そこは徹底的に滅菌された状態になっているだろう。

それなのに、エンダーにはデスコラーダ・ウィルスはなんらかの抜け道を見つけるだろうという気がしてならない――この消毒棟を通りぬけることがむりならば、実験農場を見えない城壁のようにとりかこんでいる分解バリアを通過するだろう。公式には、百アトム以上の大きさの分子は原型をたもったままバリアを通過することはできないということになっている。人間やピギーが危険地帯に迷いこむのを避けるためにバリアの両側にはフェンスがある――とはいえ、エンダーは、分解バリアを通過したらどうなるのだろうと何度となく想像したものだった。核酸が分解し、体内の全細胞が一瞬にして死滅する。おそらく肉体は原型をとどめているのだろう。だが、エンダーの想像のなかでは、肉体はバリアを通過するや粉微塵に砕け、地上に落ちるまもなくそよ風に乗って煙のように飛散してしまうのだった。

エンダーが分解バリアを不快に思う最大の理由は、それがM・D装置とおなじ原理にもとづいていることだった。M・D装置はもともと対スターシップあるいは対ミサイル用に設計されたものだ。三千年まえ、人類の戦闘艦隊の司令官として、それをバガーたちの母星を殲滅するために転用したのはエンダーだった。そしてこのおなじ武器が、スターウェイズ議会の命を受けて目下ルジタニアにむかいつつあるのだ。ジェインの話では、スターウェイズ議会はすでにM・D装置の使用命令をくだそうとしたという。艦隊と他の全人類とのあいだのアンシブル通信を遮断することで命令を妨害はしたものの、アンシブルの故障に逆上したストレス過多の艦長たちが、ルジタニアに到着してM・D装置を使用しないという保証はどこにもない。

考えられないことだが、それは現実なのだ――スターウェイズ議会は、ひとつの世界を破壊せよとの指示を出していた。異類皆殺し(ゼノサイド)を実行しろと。エンダーが『窩巣女王』を著したのは徒労だったのだろうか？　彼らは、早くも忘れさってしまったのだろうか？

とはいえ、彼らにとっては〝早くも〟ということばは当たらない。大半の人びとにとっては、あれから三千年もたっているのだ。おまけに、いくらエンダーが『ヒューマンの生涯』を書いたといっても、それはまだ広く信頼を得るにはいたっていなかった。それはペケニーノ攻撃をスターウェイズ議会に思いとどまらせるほどには、人びとに深く浸透していないのだ。

彼らはなぜ、攻撃を決断したのか？　おそらくは、ゼノバイオロジストたちが分解バリアを採用したのとおなじ目的、すなわち、これ以上の拡散をふせぐために危険な伝染病を隔離するためだ。スターウェイズ議会には、惑星単位の反乱という疫病を阻止しようという意図があっ

たかもしれない。だが、艦隊はここに到着したら、命令のあるなしにかかわらず、デスコラーダ問題の最終的解決策として〈リトル・ドクター〉を使用する可能性があるのだ。ルジタニアという惑星がなければ、意図的に突然変異をくりかえす半ば知性をもったウィルスが、すきあらば人類とその業績を一掃しようと手ぐすねひくこともないだろうから。

実験農場から新しい異類生物学（ゼノバイオロジー）基地までは、歩いてもさほどの距離ではなかった。まがりくねった道が低い丘をこえて、このあたりのペケニーノ一族たちにとって父親と母親であり、それに生きた墓地でもある森を遠巻きにし、そして人類のコロニーを囲むフェンスの北口に通じている。

エンダーは、そのフェンスを見るたびに苦い思いをする。人類とペケニーノとの接触を最低限に保つという政策が瓦解し、双方が自由にゲートを行き来するいまとなっては、このフェンスに存在意義などないのだ。エンダーがルジタニアに到着したとき、このフェンスには電流が通っていて、突破しようとする者はだれでも耐えがたい苦痛を与えられたものだ。エンダーの義理の子供たちのうちで長男にあたるミロは、ペケニーノたちとの自由な交流を勝ちえようと困難な努力をかさねているとき、数分間このフェンスにとらわれて取り返しのつかない脳障害を受ける結果になったのだった。だがミロの経験は、とらわれの身となった人間の魂にフェンスが与える影響を、もっとも痛ましくかつ目に見える形で表現したにすぎない。心情的バリアは三十年まえに崩れた。以来三十年のあいだ、人類とペケニーノのあいだにはいかなる障壁をかまえる理由もなかった——それなのにフェンスはいまだ健在だ。ルジタニアのコロニーに住

む人間たちが、そう望んだからだった。彼らは、人類とペケニーノとの境界線をとりはらうことを望まなかったのだ。

ゼノバイオロジー研究所が、むかしの川べりから移転された理由もそれとおなじだ。ペケニーノたちが調査研究活動(リサーチ)に参加するのなら、研究所はフェンスにちかい場所、実験農場はすべてフェンスの外側にするべきである。そうすれば、人間とペケニーノが偶然顔をあわせることもないはずだからだ。

ミロがヴァレンタインをむかえるためにこの星を出ていったとき、エンダーはこう思った。帰還したミロは、ルジタニアの世界が大きく変わったのを見て驚愕するだろう、と。ミロは、人間とペケニーノが協調して生きるふたつの種となってとなりあわせに暮らしているのを見ることになるだろうとエンダーは予想した。だが、ミロはほとんど元のままのコロニーを見ることになりそうだ。わずかな例外をのぞけば、ルジタニアの人間は自分たち以外の種と親しくつきあいたいとは思っていなかった。

エンダーは、窩巣女王がバガーという種を復活させる地をミラーグレからかなり隔たったところに選んで良かったと思っていた。バガーと人類が徐々に知りあえるように力を貸すというのが彼の腹づもりだったのだ。ところが、彼もノヴィーニャも家族たちも、ルジタニアにバガーが存在することをひた隠しにすることを余儀なくされている。一見哺乳類風のペケニーノと折りあうことさえできない現状では、昆虫にしか見えないバガーのことを知ったら、コロニーの人間たちのあいだにはほとんど一瞬のうちに猛烈な異類恐怖症(ゼノフォビア)が巻き起こることだろう。

わたしには秘密が多すぎる、とエンダーは思った。これだけの長い年月、わたしは死者の代弁者として秘密を明るみに出し、人びとが真実の光のなかで生きられるように協力してきた。そのわたしが、いまではもはや知っていることの半分も人に明かさずにいる。それというのも、すべての真実を話したら、恐怖や憎悪や暴力や殺しあいや戦争が生じるからだ。

ゲートからほどちかいフェンスの外側に、二本の父樹（ファーザートゥリー）が立っていた。ひとつはルーター、もうひとつはヒューマンと呼ばれるその木々は、ゲートのところから見るとルーターが左側、ヒューマンが右側になるように植わっている。ヒューマンは、エンダーが頼まれてほかならぬ自分の手で儀式的に殺してやったペケニーノだった。そうすることで、人類とペケニーノとのあいだにむすばれた条約が証明されたのだ。その結果ヒューマンは繊維素（セルロース）と葉緑素（クロロフィル）となって再生し、ようやく子供をつくることができる成熟したおとなの男性になった。

いまのところ、ヒューマンはあいかわらずこの地域のピギーたちばかりか多くのよその地域のものたちにも絶大な権威がある。エンダーは彼が生きていることを知っていた。とはいえ、その木を見ると、ヒューマンの死にざまを思い出さずにはいられないのだ。

ヒューマンを一個の人格とみなすことには、なんの抵抗もない。というのも、何度となくこの父樹と語り合ったことがあるからだ。どうにも違和感を感じてしまうのは、この木を、自分が知っていたヒューマンと呼ばれるペケニーノと同一の人物だと考えることなのだ。エンダーも頭では、人格というものは意思と記憶によってできているものであり、そのおなじ意思と記憶がそっくりそのままペケニーノから父樹へと受け継がれているのだと理解しているつもりだ

った。しかし、頭で理解したからといって、かならずしも心から信じられるものではない。ヒューマンは、いまではそれほど異質な存在だった。

とはいっても彼はやはりヒューマンにはちがいなく、エンダーの友人に変わりはない。エンダーは通りすがりに樹皮に手をふれた。それから数歩ほど横に移動してヒューマンより古いルーターという名の父樹に歩みより、おなじように樹皮に手をふれた。彼はルーターのペケニーノ時代を知らない——ルーターを手にかけたのはエンダーではなく、彼がルジタニアに到着したときにはすでに高く生い茂った木となっていたからだ。エンダーは、ルーターにはなんの喪失感もなく話しかけることができた。

地面にはったルーターの根のあいだには、たくさんの木切れがころがっていた。よそからもってこられたものもあれば、ルーター自身の枝から落ちたものもある。〈会話棒(トーキング・スティック)〉なのだ。ペケニーノたちは、これを使って父樹の幹をリズミカルにたたく。父樹はおのれの内部の空洞をさまざまに変形させて音階を変え、一種のゆったりしたことばを発するのだ。ぎこちなくではあるが、エンダーも父樹たちのことばをひきだせるていどには、そのリズムをきざむことができた。

けれども、きょうは会話をする気分になれない。実験がまたも失敗におわったことはプランターが父樹たちに話すだろう。エンダーはルーターやヒューマンと話すのをあとまわしにすることにした。高巣女王には話をするだろう。ジェインにも話をするだろう。みんなにしゃべりもしよう。そんなふうにさんざん話しまくったところで、ルジタニアの未来に影を落とす問題

のなにひとつ、これっぽっちも解決にちかづきはしない。なぜなら、彼らの問題の解決は、いまや話し合いでどうなるものでもないからだ。解決の鍵は知識と行動――彼以外の人間だけが得ることのできる知識、そして、彼以外の人間だけが実行できる行動、それしかない。エンダーひとりでは、問題を解決するためにできることなどひとつもないのだった。

子供の戦士として臨んだ最後の戦い以来、彼にできたこと、彼がしてきたことは、ひたすら話を聞き、話をすることだけだった。これまでのところ、よその土地では、それでじゅうぶんだったのだ。いまは、そうはいかない。ルジタニアは、さまざまな種類の無数の滅亡にさらされている。そのいくつかはエンダーその人によってひきがねを引かれたものでありながら、どれひとつとしてアンドルー・ウィッギンのいかなる行動や発言や考えによっても解決のめどがつかない。ルジタニアの他の全住民とおなじく、エンダーことアンドルー・ウィッギンの命運はよそからくる人びとの手ににぎられているのだ。エンダーと他の住民との差は、彼があらゆる危険を、あらゆる失敗や過ちがひきおこしかねない結果をすべて承知していることだった。最後の瞬間まで自分が死ぬと知らずに死ぬ者と、何年、何週間、何日ものあいだ一歩一歩せまってくるおのれの滅亡を見つめつづける者と、どちらが悲惨なのだろう？

エンダーは父樹のそばを離れて、踏みかためられた道を人間の住むコロニーのほうへむかった。ゲートを通りゼノバイオロジー研究所のドアを抜ける。もっとも信頼のおける助手としてエラの下で働いているペケニーノが――聴覚にはなんら異常がないのに聾者（デフ）という呼び名で通っている――いそいそとノヴィーニャのオフィスへと案内してくれた。そこにはすでにエラと

ノヴィーニャとクァーラとグレゴが待っていた。エンダーは馬鈴薯の茎の断片を入れたパウチをもちあげてみせた。
　エラが頭を横にふり、ノヴィーニャはため息をついた。とはいえ、その落胆ぶりはエンダーが予想していた半分にもおよばない。明らかに、なにかもっと気がかりなことがあるのだ。
「そんなことじゃないかと思っていたわ」ノヴィーニャがいった。
「まだまだ努力が足りなかったのよ」エラがいった。
「そもそも、なぜ努力なんかしなきゃならなかったんだ？」グレゴが激しく問いかけた。ノヴィーニャの末息子グレゴは――つまりエンダーにとっては継子ということになる――いま三十代のなかばだが、ひとかどの優秀な科学者だ。だが、彼は家族が議論をはじめるたびに、それがゼノバイオロジーに関することであろうと壁のペンキの色のことであろうと、あまのじゃくな立場を楽しんでいるようだった。「この新しい馬鈴薯がなんの役にたった？　こいつのおかげで、デスコラーダの息の根をとめるための新しい作戦の手の内をすっかり知られてしまっただけじゃないか。いますぐデスコラーダを撲滅しなきゃ、こっちが逆にやられてしまうよ。だいいち、デスコラーダさえやっつけてしまえば、こんなふうに四苦八苦しなくてもごくふつうの馬鈴薯を栽培することができるんだ」
「そんなことできないわ！」クァーラが声を荒らげた。その激しさは、エンダーには意外なほどだった。クァーラはよほどのときでも発言したがらないほうだったのに、こんなに激しく抗議するとは彼女らしくない。「だって、デスコラーダは生きているのよ」

「生きていたって、ウィルスはウィルスだ」グレゴが反論した。
エンダーには、グレゴがデスコラーダ撲滅を唱えるのが納得いかなかった――グレゴはペケニーノの全滅につながるようなことを軽がるしく主張する男ではない。グレゴは、じっさいペケニーノの雄たちに囲まれて育ったようなものだった――彼はだれよりもよくペケニーノを知っているし、彼らの言語を話すのもいちばん得意なのだ。
「みんな、静かにしてちょうだい。アンドルーに説明しなきゃ」ノヴィーニャが口をひらいた。
「こんど馬鈴薯がうまく育たなかったら、そのときはどうするかを議論していたのよ、エラとわたしでね。それで、この子が――だめだわ。あなたが説明してちょうだい、エラ」
「ごくかんたんな考え方なのよ。わたしたちはデスコラーダ・ウィルスの成長を阻害する植物を生み出そうとしていたわけだけれど、それよりはウィルスを研究すべきだということなの」
「そのとおり」グレゴが口をだした。
「うるさいわよ」クァーラがいった。
「グレゴ、お願いだから、クァーラ姉さんにさからわないでちょうだい」ノヴィーニャがつけくわえた。
エラはためいきをつき、先をつづけた。「わたしたちは、ただデスコラーダ・ウィルスを殺すわけにはいかないわ。そんなことをしたらルジタニアじゅうの土着生物もみな死に絶えてしまうもの。そこでわたしの提案というのは、現在のデスコラーダ・ウィルスがルジタニアの全生物の再生産サイクルに影響を与える点は変えずに、新種の生物に適応する能力だけ除去して

しまおうというわけ」
「デスコラーダから、そういう能力を除去することは可能なのかい？」エンダーが質問した。
「それを見つけることができると？」
「むずかしいでしょうね。でも、ピギーたちをはじめとするすべての動物と植物の対の体内で活動しているデスコラーダ・ウィルスの素養を調べあげて、それをこわさないように、他のすべての素養を除去することはできると思うの。そのあとで、基本的再生産能力をあたえ、なんらかの受容体をこしらえて、宿主の肉体の通常の変化に適当に反応するようにしておいて、それをまるごと微細な細胞小器官に埋めこめば、それでできあがりよ——代替デスコラーダがね。それができたら、ペケニーノやほかの土着の生物に命の危険はなく、しかも人間も安心して暮らせるようになるわ」
「というと、殺ウィルス剤を散布してもともとのデスコラーダ・ウィルスを全滅させるわけかい？」エンダーはたずねた。「薬に耐性のあるウィルスがいたらどうなる？」
「いいえ、殺ウィルス剤散布はしないわ。いくら薬をまいたところで、すでにルジタニアのあらゆる生物の体にとりこまれて活動しているウィルスは影響を受けないもの。そこがむずかしいところで——」
「そういうと、ほかにはむずかしいところがないみたいだけど」ノヴィーニャが口をはさんだ。
「なにもないところから新しい細胞小器官を作りだすことだって——」
「ピギー全員はおろか一部のピギーにだってその細胞小器官を注射することはできないわ。だ

って、土着の動植物や草にまで例外なく注射しなくちゃならないわけだから」
「できっこないな」エンダーが感想を述べた。
「となると、新しいメカニズムを考えださなきゃならないわ。問題の細胞小器官を全土にひろげると同時に、古いデスコラーダ・ウィルスをきれいさっぱり消してしまうようなものをね」
「異類皆殺しだわ」クァーラがつぶやいた。
「そこで意見が食い違うのよ」エラがいった。「クァーラは、デスコラーダに知性があるというんだけど」
エンダーは末の継娘を見やった。「あの単細胞生物に知性があるって？」
「彼らには言語があるのよ、アンドルー」
「いつから、そんなことを考えるようになったんだ？」エンダーは質問した。たった一個の遺伝子が――たとえデスコラーダ・ウィルスのそれほど長く複雑な構造をしているものであっても――いったいどうして言語を使用したりできるのか、彼には想像もつかない。
「ずっとむかしから、そうじゃないかと思っていたの。はっきりするまではなにもいわないつもりだったんだけど――」
「ということは、いまだに確信はないってわけだ」勝ち誇ったようにグレゴがいった。
「でも、十中八九確実なのよ。そうでないと判明しないかぎり、皆殺しにはさせないわ」
「デスコラーダはどんなふうに言語を使用しているんだね？」エンダーがたずねた。
「もちろん、人間のようにではないけど」クァーラはいった。「彼らは分子レベルでおたがい

に情報をやりとりするの。初めてそれに気がついたのは、耐性をつけたデスコラーダの新種がどうしてああ急速にひろがって、たちまちのうちに古いタイプと入れ代わってしまうのかを研究しているときだった。なぜそうなるかわからなかったのは、最初の考え方がまちがっていたからよ。デスコラーダは旧タイプと入れ代わったりはしない。彼らはただメッセージをやりとりするだけ」

「矢(ダーツ)を投げて、ね」グレゴが口をだした。

「そういったのは、わたしなの」クァーラがいった。「まさかことばをやりとりしているとは思わなかったから」

「だって、ことばじゃないからさ」グレゴがいった。

「あれは五年まえのことだったな」エンダーがいった。「きみはこういった。デスコラーダがくりだす矢には必要な遺伝子が載っていて、その矢を受けたウィルスは例外なく、新しい遺伝子をとりこめるように構造を変化させる、と。それでは、とうてい言語とはいえない」

「でも、デスコラーダが矢を送りだすのは、そういうときだけじゃないのよ」クァーラがいった。「そういうメッセンジャー分子はつねに行ったり来たりをくりかえしていて、たいていはまるで肉体に吸収されないの。それらはデスコラーダの数カ所で判読されると、つぎのデスコラーダにまわされるのよ」

「だから言語だというのか？」グレゴがたずねた。

「まだそうじゃないわ」クァーラが答えた。「ただ、デスコラーダはこういう矢の情報を読ん

だあとで、新しい矢をつくって送りだすことがあるの。彼らが言語をもっているんじゃないかという根拠は、これなのよ。新しい矢の先端は、先に送られてきた矢の後尾部分とそっくりな分子配列に決まっているの。それが会話を関連づける糸なのよ」
「会話ね」グレゴが小ばかにしたような口調でいった。
「口を出したら生かしちゃおかないわよ」エラが決めつけるのを聞いて、エンダーは感心した。あれからずいぶん長い年月がたったが、いまでもエラの声には尊大なグレゴの鼻っ柱を――かならずとはいえないものの、たまには――へし折る力があるのだ。
「そうした会話のいくつかを追跡調査すると、なんと百回もの応答がくりかえされるところまで行ったわ。たいていの場合、そこまでいかないうちに消えてしまう。なかにはウィルス本体に吸収されてしまうものもあるしね。でも、もっとも興味深い点はなにかといえば――それは完全に自発的なものだということ。ときには、ひとつのウィルスが矢をとらえてずっと自分のところにおいておいたりする。ところが、ほかのウィルスはそんなことをしない。かと思うと、ほとんどのウィルスがある特定の矢を自分のものにしておいたりね。ところが、ウィルスがそうしたメッセージの矢を吸収する点となると、まちがいなく、それはいちばん特定しにくい点なの。もっとも特定しにくい理由は、それがウィルスの構造ではなくて彼らの記憶にあるということなのよ。しかも、各個体はそれぞれにことなっているし。それに彼らは、あまりにも多くの矢を受けると、記憶の断片の一部を捨てることもあるのよ」
「どれも話としてはおもしろいよ」グレゴがいった。「しかし、科学的とはいえないな。その

矢とやらも、好き勝手な保存、遺棄のことも、どうにでも説明がつくし――」
「好き勝手だなんて！」クァーラがいった。
「とにかく、どこから見ても言語とは思えないね」グレゴは反論した。
エンダーはふたりの言い争いを聞いていなかった。耳につけている宝石状の受信機を通じてジェインがささやきかけてきたからだ。ジェインは近年、むかしとちがってめったに話しかけてくることがなくなっている。エンダーは、そのひとことひとことを噛みしめながら慎重に聞き入った。「クァーラは、なにか発見しかかっているわ」ジェインがいった。「彼女のリサーチを見てみたんだけど、たしかにそこには、いまだかつてどんな亜細胞生物にも起きたことがないようななにかが起きている証拠がのこっているのよ。異なった角度でデータを分析した結果、デスコラーダが見せるこの独特の行動をさぐる模擬実験や追試をくりかえすにつれ、それは遺伝子情報というよりは言語にちかいものだという印象は強まるばかりなの。現時点では、事実それが自発的なものであるという可能性は除外できないわね」
ふたたびエンダーが目の前の会話に注意をむけなおしたとき、グレゴがこういっていた。
「自分たちに種明かしがわからないからといって、どうしてなにかあるたびにそれを神秘的な経験のようにいって片づけたがるのか、わからないね」グレゴは目をとじて唱えた。「われ、新たなる命を発見せり！　われ、新たなる命を発見せり！」
「やめてよ！」クァーラが叫んだ。
「ほんとにしょうがない子ね」ノヴィーニャがこぼした。「グレゴ、ちゃかさないで冷静に話

をしてちょうだい」
「そうはいうけど、なにもかも冷静とはほど遠いんだから、むりだよ。微生物学者が単なる分子に恋をしたなんてばかな話は聞いたこともない！(アテ アゴーラ ケイン ジャイ マジノウ ミクロビオロジスタ ケ シ トルナ ナモラーダ ジ ウーマ モレークラ)」
「いいかげんにしなさい！」ノヴィーニャがたしなめた。「クァーラも、あなたとおなじ科学者よ。それに――」
「科学者だったというべきだね」グレゴがつぶやいた。
「とちゅうで口を出さないで――人の話は最後まで聞くものよ――それに、クァーラの意見も一理あるわ」いまやノヴィーニャは本気で怒っていたが、グレゴは平然としている。「グレゴ、あなたもだてに科学者をしてきたわけじゃないでしょう？　はじめこそ奇妙奇天烈で直感に反しているように見えても、結局は世の中の見方を根本的に変えてしまう……そんなものの考え方は枚挙にいとまがないほどあるものよ」
「みんな、クァーラの意見もそんな基本的発見のひとつだと本気で思っているのかい？」グレゴは、全員をかわるがわるひたと見据えながらいった。「話をするウィルスだって？　もしクァーラがそう断言するのなら、この小さな暴れん坊がしゃべっている内容を教えてもらいたいもんだ？(セ クァーラ サーベ タント ポルキ エーラ ナウン ジース オ キ アケーリス ビッショス イーゼン)」グレゴがスタークから――すなわち、科学と外交の言語から――ポルトガル語に切り換えて話しはじめたのは、議論が収拾のつかない状態になりかけているという証拠だ。
「どうでもいいことじゃないか」エンダーがいった。
「どうでもいいですって！」クァーラが声をあげた。

エラは動揺もあらわにエンダーを見やった。「致死性の病気の治療法が見つかるか、知性ある種を全滅させるかのちがいにすぎないというわけなの？　どうでもいいどころではないでしょうに」
「いや、そういう意味でいったんじゃないんだ」エンダーは辛抱強く説明した。「デスコラーダの話の内容がわかったところで、影響はないということだよ」
「それはそうだわ」クァーラがいった。「おそらく、わたしたちには彼らの言語は永久に理解できないと思うけど、彼らに知性があるという事実には変わりがないのよ。どっちみち、ウィルスと人間とがなにを話し合えるというの？」
「〝ぼくたちを殺すのをやめて〟とでもいってみたら？」グレゴが口をはさんだ。「ウィルスの言語でどういうのか、それがわかったら、きっと便利だと思うよ」
「そうはいうけどね、グレゴ」クァーラが、わざとらしくやさしい口調で切り返した。「それって彼らにいうべきことかしら？　彼らのほうが、わたしたちにそういいたいんじゃない？」
「なにもきょう結論を出す必要はないさ」エンダーがいった。「いまさらあせってもしかたがない」
「そうかな？」グレゴがいった。「明日の昼過ぎになって目をさましたら、全員がかゆみや痛みや吐き気や焼けそうな発熱にさいなまれているなんてことにならないという保証がどこにある？　デスコラーダ・ウィルスは、今夜じゅうに人類を徹底的に消し去る方法を考えだしているかもしれないじゃないか。こうなったら、殺るか殺られるかなんだ」

「いまのグレゴの発言を聞いたね。だからこそ、冷却期間をおかねばならないんだ」エンダーがいった。「グレゴはいま、デスコラーダのことをなんといった？　人類を消し去る方法を考えだすといったんだ。なんとグレゴまでが、デスコラーダは意思をもち、決定をくだす能力があると思っているのさ」

「いまのは単なることばのあやだよ」グレゴが反論した。

「ああいう言い方をするのはグレゴだけじゃない。そして、みんな頭のなかでもそう思っているんだ。なぜなら、だれもが、これはデスコラーダ相手の戦争だと感じているからさ。われわれの敵はただの病気じゃない――より知性があって臨機応変であり、こっちの出方のひとつひとつに対抗してくる力がある相手と戦っているようなものさ。われわれは、医学研究史上かつてない無数の作戦を撃破してきた病気を敵にまわしているんだ」

「人類はこれほど巨大で複雑な遺伝子をもつ細菌に出会ったことがなかっただけのことさ」グレゴがいった。

「そのとおり」エンダーが肯定した。「デスコラーダのようなウィルスはふたつと存在しない。それだけに、デスコラーダには、いままで人類が遭遇してきた構造の単純で脆弱な種がもっとは思えないような能力が秘められている可能性もあるわけだ」

つかのま、エンダーのことばは宙に浮いたように、沈黙にむかえられた。やはり自分が話の核になって仕切ったほうが実り多い話し合いができたのではないか、単なる話し手の役を演じたほうが、なにがなしの合意が生まれたのではないかと、つかのまエンダーは想像した。

グレゴが口をひらくと、その考えはたちまち消し飛んだ。「百歩ゆずってクァーラが正しかったとしよう。万一彼女のいうとおりデスコラーダ・ウィルスがみんな哲学の博士号をもっていて、『人間を死ぬまで苦しめる方法』なんて題名の論文を発表しているとしたら、どうすればいい？　みんなしてあおむけに寝て死んだふりでもするかい？　なにせぼくたちを殺そうとしている相手は、とてつもなく利口なんだよ」

ノヴィーニャが落ちついた口調で答えた。「クァーラの研究はまだまだ不完全だと思うわ。そのための情報は提供しましょう――ただし、エラのほうにもまだ研究をつづけてもらわないとならないわね」

これに反対したのはクァーラだった。「みんながデスコラーダを殺す方法の研究をやめないなら、わたしひとりがデスコラーダと理解しあおうと努力するだけむだじゃないかしら？」

「いい質問だわ、クァーラ」ノヴィーニャがいった。「逆の考え方をしてごらんなさい。彼らが急に化学的障害物を乗りこえる方法を考えついて人類を全滅させようとした場合、彼らと理解しあうためのあなたの研究がなかったら、われわれはお手上げになるでしょ」

「殺るか殺られるか、だからな」グレゴがつぶやいた。

ノヴィーニャは絶妙の決断をくだしたとエンダーは思った。敵対と和合のための研究をふたつながら継続し、もっとくわしいことがわかった段階でひとつを選ぶのだ。それにひきかえ、クァーラとグレゴはともに要点を見失っていた。どちらも、デスコラーダの知性の有無がすべてを決定すると思いこんでいる。「デスコラーダに知性があったとしても」エンダーは発言し

た。「それだけで、彼らに手をだしてはいけないと決まったものじゃない。彼らがラマンか、あるいはヴァーレルセか、それがすべてを決めるんだ。彼らがラマンならば――われわれがじゅうぶん彼らを理解でき、また彼らがじゅうぶんわれわれを理解できるなら、共存の方法を考えだすこともできるだろう――それでいいんだ。われわれも、彼らも死なずにすむ」

「お偉い仲介役さんは、単細胞生物と協定をむすぶおつもりですかね？」グレゴが口をはさんだ。

エンダーは、その小ばかにしたような口出しを無視した。「逆の場合を考えてみよう。デスコラーダが人類を滅亡させる気でいて、しかもわれわれには彼らとコミュニケーションをとる手段が見つからないとなったら、彼らはヴァーレルセ――すなわち、知性はあるが、どうしようもなく好戦的で危険なエイリアンということになる。ヴァーレルセは、共存不可能なエイリアンだ。ヴァーレルセは、人類にとって命がけで徹底的に戦わざるをえないエイリアンであり、その場合、われわれに与えられた道徳的選択肢は、どんな手段を使っても勝ち抜くことなんだ」

「そのとおり」グレゴが同調した。

勝ち誇ったような弟の口ぶりを聞きながらも、クァーラはエンダーの発言を受け入れ、その意味をおしはかって、こんどはためらいがちにうなずいた。「最初から相手をヴァーレルセと決めつけないなら、賛成だわ」彼女はいった。

「たとえヴァーレルセであったとしても中庸の道があるかもしれない」エンダーがいった。

「もしかしたらエラが、この記憶と言語という特性を破壊することなくデスコラーダ・ウィルスを総入替えする方法を発見してくれるかも」

「それはだめ！」またもや激しい調子でクァーラは叫んだ。「そんなことをしてはいけないのよ——記憶は維持したままで適応能力を奪うなんて、そんなことは許されない。それじゃまるで、人間がデスコラーダにロボトミー手術をするようなものだわ。戦いに情け容赦は無用よ。意思力を奪っておきながら記憶だけのこすようなことをするくらいなら、いっそデスコラーダを殺して」

「とりこし苦労はおよしなさい」エラがいった。「そんな事態になるはずはないから。どうやら、わたしは不可能な仕事に手をそめてしまったようね。デスコラーダに操作をくわえることは簡単じゃないのよ。動物を研究して操作をくわえるようなわけにはいかないの。相手が分子生物じゃ、どのていどに麻酔をかければ切断手術の最中に目をさまさないでいてくれるかもわからないでしょ？　デスコラーダは物理学は得意じゃないかもしれないけど、分子レベルの手術にかけてはこっちより格段にうわ手なんだから」

「現段階ではね」エンダーがいった。

「現段階でわれわれにわかっていることはただひとつ」グレゴが口をだした。「デスコラーダは懸命になって人間を皆殺しにしようとしているのに、人間のほうはいまだに反撃すべきかどうかすら決めかねているってことさ。ぼくもここはだまって見ててやるが、我慢にも限度があるよ」

「ピギーはどうなの？」クァーラが問いかけた。「ピギーたちはデスコラーダがあればこそ子孫をのこすことができるんだし、そもそもデスコラーダなしでは知性だってもつことができないかもしれないのよ。人間が、その分子生物を変態させようとしているのに、彼らには決定権がないの？」

「相手は、われわれを殺そうとしているんだ」エンダーが答えた。「エラの考案する解決策が、ピギーたちの再生産能力に影響することなくウィルスを一掃できるものであるなら、ピギーたちに反論の余地はないと思うね」

「ピギーたちはそうは思わないかも」

「だったら、ピギーたちにはわれわれの行動を悟られないようにしたほうがいいね」グレゴがいった。

「このことは他言無用よ。相手が人間であろうとペケニーノであろうと、ここでおこなっている研究について口外しないように」ノヴィーニャがぴしりといいきった。「どんな誤解が生じて、暴力沙汰や死傷事件が起きないともかぎらないから」

「これで、わたしたち人間は全生物の審判者となったわけね」クァーラがいった。

「それはちがうわ、クァーラ。われわれ科学者は情報を収集するのよ」ノヴィーニャが訂正した。「じゅうぶんな情報があつまるまでは、なにものも審判をくだされることはないでしょう。いいこと、ここにいる全員が秘密を明かさないと約束しなければならないのよ。クァーラもグレゴもね。わたしがいいというまで、だれにもなにもいわないこと。いまはまだ、わからない

ことだらけなんだから」
「ゴー・サインを出すのは母さんなの？」グレゴがあつかましく質問した。「それとも、〈死者の代弁者〉かな？」
「ゼノバイオロジストのチーフはわたしです」ノヴィーニャは答えた。「じゅうぶんな情報があつまったと決定するのは、ほかのだれでもなく、わたしよ。いいですね？」
彼女は、ことばを切ってその場の全員が納得するのを待った。全員が了承した。
ノヴィーニャは立ちあがった。ミーティングはおわりだ。クァーラとグレゴは、そのときを待ちかねたように姿を消した。ノヴィーニャはエンダーの頬にキスをすると、彼とエラをオフィスから追いだした。
エンダーはすぐには研究所を去らず、エラをつかまえて話をした。「ルジタニアの全土着生物に例外なく代替ウィルスが行き渡るようにする方法なんて、本当にあるのかい？」
「わからないけど」エラは答えた。「問題はそれよりも、デスコラーダが適応したり逃げたりする間もなく個々の組織の全細胞に代替ウィルスを送りこむ方法のほうね。なんらかのキャリア・ウィルスを創りださざるをえないわ。それにはたぶん、デスコラーダ自身を多少模倣する必要があると思う——だって、デスコラーダほど敏速かつ徹底的に宿主を侵略する寄生生物はないもの。わたしがもとめているキャリア・ウィルスも、そうでなきゃ困るの。皮肉よね——デスコラーダの場所を取るために、ほかならぬデスコラーダから技術を盗まなきゃならないんだから」

「皮肉なんかじゃないさ」エンダーはいった。「それが世の中の仕組みなんだ。ある人に、こういわれたことがあるよ。自分にとって価値のある唯一の師とは、自分の敵だって」
「じゃあ、クァーラとグレゴは、おたがいに相手を師とあおぐべきね」エラはいった。
「彼らの言い争いには害はない」エンダーは評価した。「おかげで、われわれは自分たちの行動をあらゆる面から判断せざるをえなくなるからね」
「家族のなかで言い争っているぶんにはともかく、ふたりのどちらかがよそであんなことをいったら、害がないではすまないわ」エラがいった。
「うちの家族にかぎって、他人に家庭内の話をすることはないさ」エンダーはいった。「だれより身にしみて知っている、このわたしが保証するよ」
「その逆だわ、エンダー。あなたはほかのだれより良く知っているはずよ。わたしたちがどんなに他人に打ち明け話をしたがっているか――どうしてもそうする必要があると思ったときは、あえてそうするって」
エンダーは、彼女のいうとおりだと認めざるをえなかった。クァーラやグレゴ、ミロやキンやオリャードは、なかなか心を許して話をしてくれようとしなかった。ルジタニアに来たばかりのエンダーは、そうなるまでにさんざん苦労したのだ。だが、エラは最初から彼と口をきいてくれたし、ノヴィーニャのほかの子供たちも全員そうだった。そして、最後にはノヴィーニャ自身も口をきいてくれた。一家の結束は筋金入りだが、彼らはまた意思強固で自分の判断に自信をもっていた。一家のどのひとりも、自分がこうと決めたらほかの人間がなんといおうと

てこでも動かなかった。グレゴにしてもクァーラにしても、だれか他人に話すのがもっともルジタニアや人類や科学のためになると決めたが最後、秘密を守るというルールなどないも同然だ。ピギーたちへの不干渉というルールが、エンダーのルジタニア到着のはるか以前に破られたのとちょうどおなじように。

ありがたくて泣けてくる、とエンダーは思った。これもまた、彼にはまったく手出しできない災厄のもとだ。

研究所をあとにして、エンダーはいままでにも何度となく切望したように、ヴァレンタインがいてくれたらと思った。倫理的なジレンマを解決するのはヴァレンタインの得意わざだったのだ。ヴァレンタインはもうじきここへやってくるだろう――しかし、そのときは、手遅れになっているのではないか？　エンダーはクァーラとグレゴの両者が提出した見解を理解していたし、おおむね賛成でもあった。最大の心痛は、秘密厳守を強要されることだ。地球出身の植民者各自にとって影響があるとおなじく、ペケニーノにとっても影響の大きい決定を、当のペケニーノ、あのヒューマンにさえ明かすことができないとは。だがしかし、ノヴィーニャはまちがってはいない。ゼノバイオロジストたちにも先の予測のつかない現時点でこのことを公にしたら、世間は騒然とするどころではすまないだろう。へたをすると、暴動やら流血沙汰が起きかねない。ペケニーノたちはいまはおとなしくしている――だが、あの種族の歴史は戦いの血にまみれているのだ。

ゲートを出て実験農場に戻ろうとしたエンダーは、ヒューマンの父樹のそばに立っているク

ァーラを見た。棒を手にして会話の最中だ。じっさいに幹を叩いたにしては、エンダーにはその音が聞こえなかった。ということは、クァーラは内密の話がしたいのだ。それならそれで、エンダーは遠回りをして、立ち聞きするのを避けようと思った。

だが、エンダーに見られていると気づいたとたん、クァーラはヒューマンとの会話を打ち切って、小道をゲートのほうへすたすたと歩いてきた。当然、エンダーのすぐそばを通りかかることになる。

「内緒話をしてたのかい？」エンダーは問いかけた。なにげないからかいのつもりでいったのだ。ところが、そのことばを口にした瞬間、クァーラの顔にうかんだ表情を見て、エンダーは彼女がどんな内緒話をしていたのかをはっきりとさとった。そして、クァーラの返答は、彼の疑念を裏づけるものだった。

「母さんが正当と思うことは、わたしにとってはかならずしも正当ではないのよ」クァーラはいった。「それをいうなら、あなたのいう正当性もね」

クァーラならやりかねないと思ってはいたものの、ついさっき約束をかわしたばかりだというのにこうもあっさりと行動に出るとは予想もしていなかった。「しかし、正当性だけを考慮に入れれば、ほかのことはどうでもいいというわけでもないんじゃないか？」エンダーはたずねた。

「わたしにとってはそうだわ」クァーラは答えた。

そのまま顔をそむけてゲートを通り抜けようとした彼女の腕を、エンダーはとらえた。

「放して」

「ヒューマンに打ち明けるのはまだわかる」エンダーはいった。「彼は非常に賢いからな。しかし、彼以外の者には話すな。ペケニーノのなかには、とくに雄のペケニーノのなかには、いざとなるとてつもなく攻撃的になる者がいる」

「雄という呼び方はしないで」クァーラは反論した。「彼らは自分たちのことを夫と呼ぶわ。わたしたちは、男性と呼ぶべきじゃないかしら」彼女は勝ち誇ったようにエンダーに微笑みかけた。「良い気分じゃないかもしれないけど、あなたは自分で思っているほど心が広くはないみたいね」そう言い捨てて、彼女はふりきるようにエンダーのわきを通りすぎ、ゲートをこえてミラーグレへはいって行った。

エンダーはヒューマンにちかづいてその正面にたたずんだ。「彼女はきみになんといっていたかね、ヒューマン？　もしもきみたちの一族に危害が及ぶとしたら、わたしが生きているかぎり、だれにもデスコラーダを消去させないといったかな？」

むろん、ヒューマンからはそれに対する直接の返事はなかった。エンダーは父たちの言語を発するための会話棒（トーキング・スティック）を使おうとしなかったからだ。トーキング・スティックを使ったらペケニーノの雄たちが聞きつけて馳せ参じるだろう。ペケニーノと父樹のあいだでは、内輪の会話など存在しない。内輪の会話をしたいと思えば、父樹は仲間の父樹たちと無言の会話を交わすことができる――彼らは心と心で会話をするのだ。窩巣女王がみずからの目となり耳となり手足となって仕えるバガーたちと話すのとおなじやりかただった。そのコミュニケーションの

ネットワークに参加できないと思うと、エンダーは無念でならなかった。宇宙のどこへでも発信することができる純粋な思考だけでなりたつ即時的な会話なのだ。

とはいうものの、たぶんクァーラが告げたであろう情報をなんとかして否定しなければならない。「ヒューマン、わたしたちは、人間とペケニーノの両者を救おうとして全力をつくしているんだ。できることなら、デスコラーダ・ウィルスも救えないものかと思っている。エラとノヴィーニャは優秀な専門家なんだ。グレゴやクァーラだって、そういう点ではたいしたものさ。しかし、いまはまだ、わたしたちを信用してほかの仲間たちにはなにもいわずにおいてほしい。たのむよ。われわれはいま死に瀕しているんだ。じっさいにおさえる準備もできないうちに人間やペケニーノがそれを知ったら、大惨事をひきおこしかねない」

これ以上、なにもいうことはなかった。エンダーは実験農場へもどった。日が暮れるまえにプランターとともに計測を完了し、そのフィールドを焼却して閃光処理した。分解バリアのこちら側にある大きめな分子はすべて死滅した。このフィールドでデスコラーダがなにを学びとったにせよ、そのすべての記憶が消え失せるように、エンダーたちは万全の手を打ったのだ。

どうにも始末におえないのは、人間もペケニーノもひとしくおのが体内の細胞にとりこんでしまったウィルスだ。クァーラのいうとおりだとしたら、どうなるのだろう？　バリアのこちら側にはいったデスコラーダが死ぬまえに、新種の馬鈴薯から学んだ知識をプランターやエンダーの体内のウィルスに〝伝達〟してのけたらどうするのか？　エラとノヴィーニャが新種の馬鈴薯に組みこんだ防御策のことを伝えたら？　人間の策略を打ち破る方法を伝授したら？

デスコラーダが本当に知性をもち、言語を使って情報を広め、ひとつの個体から多くの仲間へと行動を伝えることが可能だとしたら、エンダーには——いや、どんな人間にだって——結局は勝ち目などないだろう。長い目で見れば、デスコラーダは最高の適応力がある種であり、世界を征服しライヴァルたちを蹴落とすことができるだろう。人間もピギーもバガーも、命あるどのような植民惑星の生物も、デスコラーダにはかなわない。その晩、エンダーはそんなことを考えながら床につき、ノヴィーニャと愛を交わすあいだもその思いが脳裏を離れなかった。おかげでノヴィーニャは、自分のことはさておいて、あたかも世界じゅうの心配事をかかえこんだかのようなエンダーをなぐさめなければという気になったほどだった。エンダーは詫びようとしかけたが、すぐにむだなことはすまいと思いなおした。それでなくても気苦労の多いノヴィーニャに、自分の不安まで背負わせるわけにはいかないではないか。

ヒューマンにはエンダーのことばが聞こえてはいたが、その依頼には賛成できなかった。沈黙しろ、だと？　人間たちがペケニーノの生活環（ライフサイクル）を変換しかねない新種のウィルスを創りだそうとしているときに、そんなことはできない。もちろん、ヒューマンには未熟な男たちや女たちに事情を明かすつもりはなかった。だが、ルジタニアじゅうの他の父樹たちになら、告げてかまわないだろうし、また告げるのが当然だろう。彼らには事態を把握し、しかるのちに、必要ならどのような手を打つべきかともに決定をくだす権利がある。

日が暮れるまでには、すべての森にある父樹たちに一本のこらずヒューマンの知識があます

ところなく伝わっていた。人間たちの計画のこともそうだし、彼らがどのていど信用できるかというヒューマンの判断もそうだ。大多数の父樹はヒューマンと同意見だった――いましばらくは人間たちの好きなようにさせておこう。だが、そのあいだも慎重な監視をつづけ、きたるべき時にそなえよう。そうならないにこしたことはないが、人間とペケニーノがたがいに戦う時のために。戦いになったら勝てる見込みはない――しかし、人間たちに惨殺されるまえに、何人かだけでも逃げのびる道がみつからないとはかぎらないのだ。

かくして、彼らは夜のうちに、人間以外ではルジタニアにおける唯一のハイテク技術のもちぬしである蒿巣女王と相談して協定を締結していた。次の日の夜には、早くもルジタニア離脱のためのスターシップ建造がはじまったのであった。

7　秘婢（ひひ）

〈各世界へとスターシップを送りだしたむかしは、あなたがたもひとつの森に立っているわたしたちとおなじようにおたがいに意思を通じ合うことができたと聞いている。ほんとうにそうだったのか？〉

〈おそらく、汝らから見ればおなじようなものであろう。新しい父樹が成長すれば、それと古い父樹とが共存する。フィロティック接続は距離にはかかわりない〉

〈しかし、わたしたちの接続は途切れはしないだろうか？　わたしたちは父樹を旅に送りだすつもりはない。スターシップに乗るのは兄弟（ブラザー）たちのほかには妻が数人、あとは新しい世代を産むべき小さき母が百人だけだ。その旅はすくなくとも数十年はかかるだろう。新世界に到着したらすぐ、成人男性の精鋭たちが第三の生に送りこまれるはずだが、それでも最初の父樹が子孫をもうけるほどに成長するまでに最低一年は余裕をみなければならない。新世界で育った最初の父樹に、われわれに語りかけるすべがどうしてわかるだろう？　われわれにしたって、相手の居所もわからずにどうやって挨拶をすればいいのだ？〉

チンジャオの顔面を汗が流れた。背をまるめた姿勢でいると汗は頰を伝い、下まぶたをなめて鼻の先にあつまる。その汗のしずくが、田んぼの泥水や、やっと顔をだしたばかりの早苗の上にしたたり落ちた。

「なぜ顔をふかないのですか、聖女さま?」

すぐそばで声がしたので、チンジャオは顔をあげて相手をたしかめようとした。彼女の勤労奉仕を手伝う者たちは、たいていはすこし距離をおいて作業をする——神子(みこ)たちの近くにいるというだけで緊張してしまうからだ。

声をかけてきたのはひとりの娘だった。年はチンジャオよりも下で、十四歳といったところか。体つきは男の子のようで、髪をごく短く刈りこんでいる。娘は、好奇心むきだしでチンジャオを見つめていた。遠慮というものがまったくなく、あけっぴろげな雰囲気が、チンジャオには珍しくもあり、いくらか不快でもある。最初、彼女はその娘を無視しようかと思った。

けれども、相手を無視するのは不遜な態度だ。それでは、わたしは神がみに声をかけられた人間なのだから、話しかけられても答える必要はないといったも同然になる。偉大なるハン・フェイツーによって課せられた困難な任務のことで頭がいっぱいで、ほかのことを考えるのがほとんど苦痛にひとしいなどとは、だれにも想像できないだろう。

そこで、チンジャオは答えるかわりにこう問い返した。「なぜ顔をふく必要があるのかしら?」

「だって、くすぐったいでしょ? 汗が流れてるから。目にしみたりしません?」

チンジャオはしばらくうつむいて作業をしながら、こんどは汗の感触に気を配ってみた。たしかにくすぐったいし、目にはいればしみる。じっさい、ひどく不愉快で気持ちがわるかった。慎重に背筋をのばして立ちあがる——これもさっきは気づかなかったのだが、彼女の背中は姿勢が変わったことに抗議して痛んだ。「そうね」チンジャオは娘にいった。「くすぐったいし、目にもしみるわ」

「だから、ふいたほうがいいですよ」娘はいった。「お袖でね」

チンジャオは自分の袖に目をやった。すでに腕の汗がしみてぐしょ濡れだ。「これでは、ふいてもどうにもならないんじゃないかしら？」と、娘にたずねてみた。

今度は娘のほうが、思ってもみなかったことに目を開かれる番だ。一瞬、考え深げな顔をして、娘は袖でひたいをぬぐった。

彼女はにやっと笑った。「ほんとですね。ふいてもどうにもならないわ」

チンジャオはまじめな顔でうなずき、ふたたびかがみこんで作業にもどった。ところが、さっきまでとちがって汗が肌をつたう感触、目にしみる痛さ、背骨のきしみといったもろもろのことがひどく気になってたまらない。不快さのあまり集中力が乱れた。その逆にならなければならないのに。だれだか知らないが、この娘に指摘されたおかげで、ただでさえつらい労働をいやでも意識せずにはいられなくなった——そのくせ、皮肉なことに彼女のおかげで肉体労働のつらさを意識させられたチンジャオは、心にかかっていた問題の苦痛からは解放されたのだ。

チンジャオは声をあげて笑いだしてしまった。

「わたしのことを笑っているのですか、聖女さま？」娘がたずねた。
「これでも、あなたに感謝しているのですよ」チンジャオはいった。「あなたのおかげで心の重荷がとれました。ほんの一瞬だけでもね」
「ふいてもなんにもならないのに、お顔をふけといったわたしがおかしいのですね」
「いっておきますが、そんなことで笑っているのではありません」チンジャオがいった。ふたたび背筋をのばして、ひたと娘の目を見た。「わたしはうそをつかないのよ」
娘はきまりのわるそうな顔をした――といっても、本来ならその倍くらい恐縮してもいいはずなのだ。いまのチンジャオのような口調で神子になにかをいわれたら、一般人は即座に叩頭（こうとう）して敬意を見せるものだ。ところが、この娘はチンジャオのことばを聞いてもその意味をおしはかってうなずくだけだった。
となると、チンジャオはとうぜんのごとく以下の結論に達して、「あなたも神子なの？」とたずねた。
娘は目をまるくして、「わたしが？」と問い返した。「わたしのふた親は、どちらも賤民です。父は畑に肥やしをまく仕事をしていますし、母は食堂で皿洗いをやっています」
もちろん、これではなんの答えにもならない。神がみは、神子の子供に白羽の矢をたてることが多いとはいえ、親にはまったくその傾向がないという子がえらばれることもたまにはある。もっとも一般には卑しい両親のあいだに生まれた子には神がみはまったく興味を示さないし、教養のない親の子に声をかけることはめったにないと信じられていた。

「名前はなんというのですか？」チンジャオがたずねた。
「シー・ワンムです」娘は答えた。
チンジャオは笑い声をたてそうになって、あわてて口もとをおおった。けれども、ワンムは怒ったようすはなく――ただ眉をひそめて居心地のわるそうな顔をしただけだった。
「ごめんなさい」やっと口をひらいてチンジャオはいった。「でも、その名は――」
「西王母の名です」ワンムはいった。「親につけられた名前ですもの、わたしにはどうしようもないでしょ？」
「高貴な名前だわ」チンジャオはいった。「わたしの心の先祖は立派な女性だけれど、なんといっても生身の詩人だったのよ。あなたの心の先祖は神がみのなかでももっとも歴史ある神だわ」
「だからどうしたというのですか？」ワンムがさからった。「そんな偉い神さまにちなんだ名前をつけるなんて、うちの両親は思い上がりすぎてたんですよ。それだもの、神がみがわたしに声をかけてくれるはずなんかありません」
ひどく悔しそうなワンムの口ぶりを聞いていると、チンジャオは悲しい気がした。彼女ができることなら立場をかわりたい気持ちでいるなど、ワンムには思いもよらないだろう。ああ、神がみの声から解放されたい！　二度と床にはいつくばって木目をたどったり、汚れてもいない両手を洗ったりしないですむのなら……
とはいえ、この娘にはどういったところでわからないだろう。わかるはずはない。ワンムに

とって神子は特権階級のエリートであり、底知れない知恵をもつ、ちかづきがたい人間なのだ。神子にとっては、そのむくいよりも重圧のほうが大きいなどと説明したところで、そんなチンジャオのことばに真実味はあるまい。

ただし、ワンムにとって神子はちかづきがたい存在ではない——その証拠にチンジャオに声をかけてきたではないか。そう思いなおして、彼女は心のうちを口にした。「シー・ワンム、神がみの声から解放されるなら、わたしはこの先死ぬまで目が見えなくてもかまわないと思っているのですよ」

ワンムは愕然として目をまるくし、あんぐり口をあいた。

やはりいうべきではなかったようだ。チンジャオはすぐに後悔し、「じょうだんですよ」と打ち消した。

「いいえ」ワンムがいった。「それこそうそです。さっきのことばはほんとうだったんだわ」ワンムは田んぼに踏みこんで苗が倒れるのもかまわずチンジャオのほうへ寄ってきた。「物心ついて以来、わたしは神子が輿にかつがれ、きらびやかな絹の衣装に身をつつんで寺院へはいって行くのを見るだけでした。人びとにかしづかれ、どんな情報もコンピュータで呼びだしほうだい。口をひらけば、そのことばは楽の音のよう。だれもがうらやむ立場だと思っていました」

チンジャオは思いきってこういうことはできなかった。わたしは一日だって神がみに辱められ、穢れをはらうために愚かな意味のない仕事をさせられないことはないのよ。来る日も来る

日も、そのくりかえし、と。「信じられないでしょうけど、ワンム、こうして田んぼで働く暮らしのほうがずっといいのよ」
「うそ！」ワンムが声をあげた。「あなたは、なにからなにまで教わってきた、知らないことなんてひとつもないでしょ！　いろいろな言語もしゃべれるし、どんなことばも読めるんだわ。ナメクジにわたしの考えがわからないように、あなたはわたしなんかが逆立ちしてもわからないむずかしいことを考えられるのよ」
「あなたは明快で筋がとおった話し方ができるから」チンジャオはいった。「きっと学校へ通ったのね」
「学校ですって！」ワンムは軽蔑したようにいった。「わたしみたいな子供は学校へ行ったってロクなことを教えてもらえやしない。読み方は、お祈りと所番地が読める程度だし、計算は買い物ができればいい。賢人の金言を習うにしたって、なにごとも身分相応と満足して、知恵のある者に従えと説くものばかりよ」
　チンジャオは、まさか学校というものがそんなふうだなどと知るよしもなかった。自分が個人教授で教わってきたようなことを子供たちは学校で教わるものだとばかり思っていたのだ。だが、シー・ワンムの話を聞けば、それがほんとうであることはすぐわかる――三十人の生徒にひとりの教師では、多くの教師からたったひとりで教えをうけたチンジャオとおなじだけのことを学ぶのはむりというものだ。
「わたしのふた親のように身分の低い人間が」ワンムがいった。「子供のわたしに教えることと

といえば、せいぜい召使としての常識だけです。だって、わたしはどうやったって召使以上のものにはなれませんもの。せいぜい磨きたててお大尽さまのお屋敷に召し抱えられるしか。床の磨き方だけは、懇切丁寧に教えられましたよ」

チンジャオは、自宅の床の木目を端から端までたどって過ごした日々を思いうかべた。床をはいずって歩いても、服には目だった汚れがつかなかった。考えてみたこともなかったが、あれほど清潔にするには召使たちがどんなに苦労したことだろう。

「床のことなら、わたしも多少は心得ているわ」チンジャオはいった。

「あなたは、なんのことでも多少は心得ていらっしゃるでしょうよ」ワンムは皮肉っぽくいった。「神子でいる苦労なんて聞きたくはありませんね。神がみはわたしのことなど気にかけてくれたためしもないんです。そのほうがずっとつらいですよ！」

「あなたは、なぜこわがらずにわたしに話しかけられたの？」チンジャオがたずねた。

「なにもこわがるまいと腹を据えたからですよ。わたしの人生なんかどうころんでもひどいものなんですもの。これ以上なにをこわがれっていうんですか？」

そんなことをいうのなら、生きているあいだ、毎日毎日血が出るまで手を洗わずにいられなくなってごらんなさい。

だが、そんなことを思ったとき、ふと逆の立場にたってみて、この娘はたとえそうなってもむかしのほうがましだったとは思わないだろうとチンジャオはさとった。チンジャオがもっている知識をすべて学ぶことさえできれば、おそらくワンムは手首の先にずたずたになった血だ

らけの皮膚がぶらさがっているだけになるまで喜んで手を洗うだろう。チンジャオは父にあたえられた任務の困難さに圧倒されていたが、たとえ成功しようが失敗しようが、あれは歴史を変える任務なのだ。明日もう一度する必要のない仕事などワンムは生涯与えられることはないだろう。彼女は、しくじったことだけが人目につき、うわさになるような仕事ばかりして一生を終えるのだ。結局、召使の仕事というものは、浄罪に負けずおとらず実りすくないものではないか。

「召使として生きるのは大変でしょうね」チンジャオはいった。「あなたはまだ雇われていない身で良かったこと」

「両親は、わたしが早く大きくなって美人にならないかと首を長くして待っていますよ。美人なら、高額の支度金がもらえますからね。もしかしたらお大尽の従者が嫁にといってくれるかもしれませんし、どこかの奥方さまから秘婢の口がかかるかもしれませんし」

「あなたはいまでも美人よ」チンジャオはいった。

ワンムは肩をすくめて、「ともだちのホアンリューはもうご奉公にあがっているんですけど、器量がわるい娘はこき使われても、屋敷の男たちにちょっかいを出されずにすむといってます。器量のわるい娘は自由に考え事ができるんです。奥方さまたちにおべっかばかりいってないでいいんですからね」

チンジャオは父の屋敷の召使たちのことを考えた。父が召使女たちに手をだすなどということはぜったいにないだろう。それに、彼らはチンジャオにおべっかを使う必要などない。「わ

たしの屋敷では、そうではないわ」彼女はいった。
「だけど、わたしはお宅にご奉公するわけではありませんからね」というのがワンムの返事だった。
そのとたん、すべてがはっきりと見えてきた。ワンムは思いつきでチンジャオに声をかけたのではないのだ。声をかけてきたのは、神がみの声を聞いた女性の家で召使として雇われるという狙いがあったからだ。なにしろ、町は神がみの声を聞く女性である若きチンジャオのうわさでもちきりだった。チンジャオは、その教育を終えていよいよ一人前のおとなとして初めての任務についた——そして、彼女にはまだ夫も秘婢もいない、と。シー・ワンムがチンジャオの勤労奉仕部隊にまぎれこんだのも、まさにこうしてことばを交わすためだったのだ。
一瞬、チンジャオは怒りをおぼえ、そして考え直した。ワンムがいまやったような行動をとっていけない理由はない。最悪、こちらに狙いを見抜かれ、怒りを買って雇われそこなうだけだ。こちらに彼女の狙いを見抜く目がなくて、気に入られ、雇われでもすれば、ワンムは神がみの声を聞く女性の秘婢になる。わたしだってワンムの立場だったらこうしたのではないだろうか。
「わたしがだまされると思っているの？」チンジャオはいった。「わたしの秘婢に雇われるのが狙いなんでしょう。それがわからないと思う？」
ワンムの表情からは、彼女が面食らって頭に血がのぼり、おそれていることがわかった。だが、賢明にも彼女は口をつぐんだままだ。

「むきになって反論してくるかと思ったわ。わたしに雇ってもらいたい一心で声をかけたんじゃないと、あなたならそういいそうなものだけど」
「だって、おっしゃるとおりなんですもの」ワンムはいった。「お邪魔してすみませんでした」
これこそ、チンジャオが期待していたことばだった——正直な答えだ。チンジャオにはワンムを追い払うつもりなどさらさらない。「さっきの話は、どこまでほんとうなの？　良い教育が受けたいといったのは？　ただの召使で一生を終えるんじゃなく、もっとましなことがしたいと本気で思っているの？」
「どれもほんとうです」ワンムは熱のこもった口調でいった。「でも、そんなことをきいてどうなさるんですか？　あなたは、神がみの声という重荷で大変なんでしょ？」
ワンムは最後のことばにたっぷりと皮肉をこめていいはなち、チンジャオは思わず大声で笑いかけた。もっとも、あぶないところで思い止まったが。ただでさえ腹をたてているワンムをこれ以上怒らせる理由はない。「シー・ワンム、西王母の心の娘よ、あなたをわたしの秘婢として召しかかえましょう。ただし、それには次の条件をのんでもらわなければなりませんよ。第一に、わたしの弟子になり、あたえられた課程をすべてこなすこと。第二に、わたしとはかならず対等な口をきき、けっしてお辞儀をしたり、〝聖女さま〟などと呼んだりしないこと。そして第三に——」
「そんなのむりです」ワンムが口をはさんだ。「あなたさまを敬わなかったら、みんなから罰

当たりだといわれてしまいますもの。あなたの見ていないところで、みんなに懲らしめられてしまうわ。そんなことになったら、わたしだけじゃなくてあなたまで恥をかくでしょ」

「もちろん、他人の目があるところでは敬って見せるのよ」チンジャオは説明した。「だけど、あなたとわたしとふたりきりのときは、おたがい対等な立場でつきあうの。それができないなら、くびだわ」

「第三の条件は?」

「わたしがあなたに話したことを、ひとことたりとも口外しないこと」

ワンムは、憤りを隠そうとしなかった。「秘婢はけっして秘密を明かしたりしないものです。心のなかに障壁があるんだから」

「障壁は、秘密をまもらなければならないことを思い出させる役にはたちます」チンジャオがいった。「けれども、その気になれば障壁などよけて通ることができる。それに、どうしても秘密をいえと迫る者もいるだろうし」チンジャオは父の経歴を思いやった。父はスターウェイズ議会の秘密をすべて頭にしまいこんでいるのだ。父はだれにもそれを語らなかった。語るべき相手がいなかったからだ。たまさかチンジャオと話し合う以外には。ワンムが信頼のおける人間だとはっきりしたら、チンジャオには話し相手ができるだろう。そうすれば父のように孤独でいなくてもすむ。「わかってくれないの?」チンジャオはたずねた。「世間には、わたしがあなたを秘婢として雇い入れるように見えるでしょう。でも、わたしたちはおたがいに、じつはあなたがわたしの弟子になること、ほんとうはわたしの友に育ててあげようとしているんだ

とわかるはずよ」

ワンムはふしぎそうにチンジャオを見つめた。「どうしてこんなことをするの？　わたしが作業にまぎれこんであなたに話しかけても見逃してくれるように、現場監督に賄賂をつかませたってことは、もう神がみからお聞きになったんでしょう？」

むろん神がみはそんなことを教えてはくれないのだが、チンジャオはただ微笑した。「神がみがわたしたちを友達どうしにさせたいと望んでいるとは思えない？」

はっとして、ワンムは両手をにぎりあわせ、ひきつった笑い声をたてた。その手をとると、チンジャオはワンムがふるえていることに気づいた。見かけほど大胆不敵ではないらしい。

ワンムが自分たちの手を見おろしたので、チンジャオもつられて視線を落とした。ふたりの手は泥や汚れにまみれていた。立っているあいだずっと水から出ていたせいで、すっかりかわいてこびりついている。「こんなに汚れちゃった」ワンムがつぶやいた。

チンジャオは勤労奉仕中についた汚れを無視することをとうのむかしにまなんでいた。こういう汚れには清めの必要はない。「わたしの両手は、これよりもっと汚れているのよ」彼女はいった。「勤労奉仕が終わったら、いっしょに来なさい。父にわたしの計画を打ち明けて、あなたを秘婢にしていいかどうか決めてもらいましょう」

ワンムの顔に不満げな表情があらわれた。彼女の表情をこうもやすやすと読めるのは、チンジャオにとって安心材料だ。「なにか不満かしら？」

「決めるのは、いつだって父親なんだもの」ワンムがいった。

チンジャオはうなずきながら、こんなわかりきったことをわざわざ口にするワンムの意図をはかりかね、「知恵というものはそこからはじまるのよ」と説明した。「だいいち、わたしの母はもうこの世の人ではないから」

勤労奉仕は、つねに午後にはいってまもなく終わる。表向き、これは遠方から来ている人たちを帰路につかせるためとされている。だが実情は、勤労奉仕が終わったお返しの宴会をするためだった。昼寝の時間もつぶして働きつづけるから、勤労奉仕がすむとみんな徹夜でもしたようにふらふらになる。ぐったりして機嫌がわるくなる者も多い。とかなんとか理由をつけて、人びとは友と盃をあげ、食べ物をつめこんで、一日の重労働としそこなった昼寝の時間をとりかえすために、ふだんより何時間も早く寝床にころげこむのだ。

疲れをおぼえてぐったりしているチンジャオに対して、ワンムは一見はしゃいでいるように見える。あるいは、そう見えるのは単にチンジャオの心にはルジタニア粛清艦隊の一件が重くのしかかっているのに対して、ワンムは神子である若き女性の秘婢として受けいれられたせいかもしれない。ワンムを連れかえると、チンジャオはハン家が召使を雇いいれるときの手はずを踏ませたが——沐浴、指紋採取、身元の確認などだ——そのあいだじゅうワンムがひっきりなしにおしゃべりをつづけるのにつきあいきれなくなって、ついに自室にひきさがることにした。

階段をあがって自室へ行くとき、ワンムがこわごわと質問している声が聞こえた。「ご主人

さまは気をわるくなさったのかしら?」ハン家を管理するユー・クンメイの答えはこうだった。「神がみの声を聞く方がたは、おまえのいうことなど気にもなさらんよ」相手を傷つけないためにクンメイはそういったのだ。父が雇いいれた召使たちの優しさと知恵には、チンジャオもしばしば感心させられる。自分も父とおなじような賢明さで初めての召使を雇うことができただろうかと、彼女は不安に思った。

そんな心配が浮かぶと同時に、まえもって父に相談することもなく衝動的にワンムの採用を決めてしまった自分の浅はかさを思い知った。父はワンムをどこから見ても不適格と判断し、チンジャオのおろかな決定を軽蔑するだろう。

父に軽蔑されることを想像すると、反射的に、神がみにとがめられているような気がした。自分が穢れていると思う。彼女は自室へ駆けこんで扉をしめた。神がみに強いられて儀式をとりおこなうのをどれほど嫌い、神がみをうやまうのがどれほどむなしいものかを何度も繰り返して考えられたにもかかわらず、父やスターウェイズ議会に反抗的な考えをいだくとすぐさま浄罪をおこなわずにはいられない。まったく、いやになるほど皮肉なことだった。

ふだんなら、チンジャオは三十分や一時間、あるいはもっと長いあいだ、自分が穢れているという意識にさからって浄罪を先送りにしただろう。けれどもきょうは、どうしてもがまんできなかった。その儀式は、それなりに筋のとおったものだ。儀式には体系というものがある。はじめと終わりがあり、まもるべき規則がある。ルジタニア粛清艦隊のような問題とはまるでちがうのだ。

ひざをついて、チンジャオは目についたかぎりもっとも淡い色の床板のなかで、もっとも細くてはっきりしない木目を意図的にえらんだ。これなら困難な苦行になるだろう。この木目をたどりきることができれば、神がみも彼女はじゅうぶん清められたと判断して、父が課した問題の解決策を示してくれるはずだ。部屋のなかほどまで木目をたどるのに、三十分ほどもかかった。とちゅうで何度も線がわからなくなって、そのたびに最初からやりなおさなければならなかったからだ。

ようやくたどり終えたときには、体は勤労奉仕で疲れはて、目は木目たどりで痛めつけられ、どうしようもない睡魔におそわれた。それでも彼女は端末装置のまえにすわって、これまでの調査をまとめたデータを呼びだした。ざっと目を通し、調査の過程でまぎれこんだ役にたたないクズ情報をすべて除外してみると、のこる可能性は、大ざっぱにいって三種のカテゴリーに分かれた。その一、ルジタニア粛清艦隊の失踪は、なんらかの自然的要因によるものであること。ただ、ルジタニアまでは距離がありすぎて、いくら科学者が目をくばっていても光が到達するスピードがまだ追いつかないだけだ。二つ目は、アンシブル通信が切れたのが、破壊活動か艦隊の指揮系統での決定である可能性。三番目に考えられるのは、ルジタニアでなんらかの謀略があってアンシブル通信が切れたということだ。

第一の可能性は、艦隊の航行形態からいって事実上考えられない。スターシップは固まって移動していたわけではないのだから、知られているかぎりどのような自然現象をもってしても一度に全滅させることは不可能だ。艦隊は事前のランデヴーもなしに出発した――アンシブル

があるので、ランデヴーなどするのは時間の無駄だからだ。艦隊にくわわるように指令をうけた各艦は、それぞれ当時いた地点からルジタニアへむけて旅立った。あと一年かそこらで全艦がルジタニアの太陽の周回軌道に乗るというこの段階にいたっても、各スターシップは、考えられる自然現象によって一気に全滅することはありえないほど離れている。

第二の可能性は、一隻の例外もなく艦隊全体が消え失せたという事実によって、ほとんどありえないと考えられる。計画したのが人間であるかぎり、こうまで効率よく完璧に運ぶはずがないではないか――しかも、惑星側にのこされているデータベース、個人資料、通信記録のどこをさがしても事前に画策された証拠をなにひとつ残さずに。そのうえ、だれかがデータを改竄したり隠匿したり、そこから足がつくのをふせごうとして通信を妨害したりした形跡はまったくない。首謀者が艦隊側にいたと仮定しても、やはり証拠や隠匿やエラーは見つからなかった。

惑星側の謀略という可能性となると、証拠不足という点でなおさら疑わしい。それに、三つの可能性のどれをとっても、事件のまぎれもない同時性という点が障害となる。確証のつかめているかぎりにおいて、艦隊からの通信は、ほとんど同時にいっせいに消えたのだ。数秒から数分という時差はあったかもしれないが――それも長くて五分、ある一隻の搭乗員がべつの一隻の消滅に気づく間もない。

調査データは、優美なまでに要領よくまとまっていた。見逃したものはない。これ以上ないほど完璧にそろった証拠からすると、どのようなもっともらしい説明の可能性も否定されてし

まう。

またしてもチンジャオの胸に疑問がわいた。お父さまともあろうお方が、どうしてわたしにこんなことを命じたのだろうか？

そのとたん——例によって——彼女はそんな疑問をいだいた自分に不浄感を感じた。父が決めたことは、なんであろうと完全に正しい。それを疑うとは。チンジャオはかすかに、疑念をいだいた自分の穢れを清めたくなった。

けれども、彼女は手洗いをしなかった。そのままにしていると、神がみの声は彼女のなかでふくれあがり、ぐんぐんと切迫したものに感じられてくる。今回、彼女はいま以上に自制心を強めたいという義務感から手洗いをこばんだわけではない。このときは、できるかぎり神がみに注目してもらいたくてわざとそうしたのだ。自分自身を清めたいという意識が息づまるほどに強まり、自身の肉体にごく軽く触れただけで——たとえば手が軽く膝についたとか——虫酸がはしるような心地がしてきたとき、ようやく彼女は質問を口にした。

「あなたがたのなさったことなのでしょう？」チンジャオは神がみに呼びかけた。「人間にできるはずのないことは、あなたがたがなさったにちがいありません。その御手でルジタニア粛清艦隊を切り離したのですね」

回答は、ことばではなく、なおいっそうつのる清めの欲求という形であらわれた。

「ですが、スターウェイズ議会も軍本部も〝道〟にはずれております。彼らには、西王母の住む西方の山に通じる黄金の扉など想像もつかないのです。〝あなたたちの非道なおこないの罰

として、神がみが艦隊を奪われたのだ〟などと父がいえば、彼らは父を軽蔑するでしょう。ほかならぬ最大の政治家である父を軽蔑するようなら、彼らはほかのだれをも軽蔑するでしょう。そして、父のせいでパスが恥をかくようなことになったら、あの人は生きてはおりません。あなたがたは、それを承知でこんなことをなさったのですね？」

チンジャオはすすり泣きだした。「おめおめと父を滅ぼさせたりはいたしません。わたしがべつの道を見つけてみせます。政府を満足させる回答を見つけてみせます。あなたがたの思いどおりにさせてたまるもんですか！」

そういったとたんに神がみが送ってきた感覚は、いまだかつて感じたことのないほど圧倒的なものだった。心底穢れきった自分を感じて、そのあまりの強烈さにチンジャオは息をすることもできず、身を投げだすように端末装置にしがみついた。口をひらいて許しを乞おうとしたのだが、喉がつまり、窒息しそうになって激しくあえぐばかりだ。まるで、自分の手の触れるものに片っ端からどろどろした汚れがひろがるようだ。よろめくように立ちあがると、どろりとした真っ黒な油にまみれてでもいるかのように服が体にまとわりついてくる。

それでも、チンジャオは手洗いをしなかった。床にしゃがみこんで木目をたどることもしない。足をひきずって戸口へたどりつく。階段をおりて父の部屋へ行こうとしたのだ。

ところが、彼女は戸口で止められてしまった。物理的には、扉はいつものようにすんなりとひらいたにもかかわらず、そこを通りぬけることができない。こういうふうに、神がみが、いうことをきかない下僕を戸口から出さないことがあると聞いてはいた。けれども、これまで彼

女はそんな目にあったことはなかったのだ。どうして動きがとれないのか、わけがわからない。体はなんの不自由もなく動くし、障害物があるわけでもない。それなのに、戸口を通りすぎることを考えただけでも胸がわるくなるほどの恐怖におそわれ、とうていできないと思い知らされた。神がみは、とにかく償いをしろといっているのだ。なにかの形で穢れを清めなければこの部屋を出してはもらえない。木目たどりでも、手洗いでもないなにかの形で。いったいどうすれば神がみは満足してくれるのか?

そのとき、ふいにチンジャオは、神がみが彼女をこの扉のむこうへ行かせようとしない理由をさとった。それは母のためにと父に強制されたあの誓いのせいなのだ。たとえどんなことがあろうと、けっして神がみにさからわないというあの誓い。それを、彼女はいまこうして破ろうとしている。ああ、お母さま、許してください! 神がみにさからうつもりなどないのです。でも、わたしはお父さまのところへ行って、神がみのせいでわたしたちがどんな窮地に追いこまれたかを説明しなければならないのです。お母さま、わたしをこの扉のむこうへ行かせて!

その訴えに応じるように、チンジャオはどうすればこの扉のむこうへ行けるかを思いついた。彼女はただ、扉の右上方から外の一点を見つめ、そのまま視線を動かさずに、右足をうしろむきに扉のむこうへ出し、左手を抜いてくるりと左に回転しながら左足をうしろむきに扉からぬき、つぎに右手をまえむきに抜けばいい。複雑でむずかしい踊りのようだが、チンジャオはゆっくりと慎重に動いて成功した。

彼女は扉から解放された。それに、あいかわらずのしかかっている不浄感も、いくぶんか弱

まったようだった。これなら我慢できる。息ぐるしさもおさまり、ことばもすんなりと出てくる。
チンジャオは階下へ行って父の部屋の外についている小さな鐘を鳴らした。
「娘か？　清照だな？」父親の声がたずねる。
「はい」答えてチンジャオがいった。
「はいるがよい」
扉をあけて、彼女は室内に踏みこんだ——こんどはなんの儀式も必要なかった。端末装置のまえの椅子にすわっている父のほうへまっすぐすすみ出て、彼女は床にひざまずいた。
「おまえの連れてきた西王母(シー・ワンム)を調べた」父がいった。「はじめて人を召し抱えるにしては、上出来だったと思うぞ」
一瞬、チンジャオには父のことばの意味がのみこめなかった。西王母？　いにしえの神の名を出して、父はなにをいおうとしているのか？　はっとして顔をあげたチンジャオは、父が視線をむけている方向を見た——そこにいるのは、清潔な灰色の服を着て、しおらしくひざまずき、頭をさげている召使の娘だった。やがて、彼女は、それが田んぼから連れ帰ったあの娘、チンジャオが秘婢にしようとしたあの娘であることを思い出した。どうしてわすれたりしたのだろう？　つい数時間まえに別れたばかりだというのに。とはいえ、その数時間のあいだチンジャオは神がみとやりあっていたのだ。彼女はその戦いに勝ったとはいえないにしても、まだなんとか抵抗している。神がみとの闘争のまえでは、召使を雇い入れることなどものの数では

なかった。
「ワンムは生意気で野心的だ。しかし、この娘には正直さもあり、想像していたよりはるかに頭もいい。これだけ望みが高く利発な娘を雇おうというからには、ふたりとも秘婢としてだけではなく、師弟の関係になるつもりなのだろう」
ワンムがはっと息をのんだ。そのようすを見て、チンジャオは彼女がひどくおびえていることを知った。なるほど――ふたりだけの秘密を自分が父に話したとチンジャオに思われていると誤解したにちがいない。「安心しなさい、ワンム」チンジャオはそういった。「お父さまには、どんな秘密もたいてい見抜かれてしまうのよ。あなたが明かしたのでないことはわかっているわ」
「秘密というのは、どれもこんなふうに見抜きやすいものだとかぎったものではないがな」父はいった。「娘よ、そのような寛大さをほめてとらそう。わたしばかりでなく、神がみもおまえをたたえるだろう」
父の称賛のことばは軟膏のように心の傷をいやしてくれた。神がみに抵抗しながら破滅させられずにすんだのは、たぶんこのせいだったのだろう。ついさっき、神がみのだれかがチンジャオに慈悲をかけて扉を抜ける道を示してくれた理由もこれだったのだ。彼女が慈愛と知恵をもってワンムの人となりを判断し、その生意気さを許したために、チンジャオ自身の許しがたい大胆さもつかのまとはいえ許されたのだ。
ワンムは自分の野心を悔いたりはしないだろうとチンジャオは思った。わたしもまた、自分

の決意を悔いることはない。わたしがルジタニア粛清艦隊の失踪について神聖ならざる説明を見つける——というよりでっちあげることができないからといって、父を破滅させるわけにはいかないのだ。そうはいっても、神がみの狙いを阻止することなどどうしてわたしにできるだろう？　神がみは艦隊を隠したか、あるいは破壊してしまったのだ。そして、従順なしもべならきっと神がみの御業を見分けることができるはずだ。たとえほかの世界の不信心者たちには隠されたままであっても。

「お父さま」チンジャオは話をかえた。「任務のことでお話ししなければならないことがあります」

父は彼女のとまどいを誤解した。「ワンムのことなら気にせず話すがいい。この娘は、いまではおまえの秘婢なのだ。支度金は父親のもとに送らせたが、いわれなくとも彼女は秘密をまもる障壁をこしらえている。なにを聞いても他言しないと信用してよかろう」

「はい、お父さま」チンジャオはそういった。そのじつ、ワンムがそこにいることすら念頭になかった。「お父さま、ルジタニア粛清艦隊を隠したのがだれなのかがわかりました。ですが、それをお話しするまえに、スターウェイズ議会にはけっして報告しないと約束していただきたいのです」

ふだん感情を見せることのない父が、かすかに眉を曇らせて、「そのような約束はできんな」といった。「主人を裏切るわけにはいかないのだ」

それでは困るのだ。約束もとりつけずに、どうして話せるだろう？　とはいいながら、話さ

ずにいるわけにもいかない。「主人とはだれのことでしょう」チンジャオは声を張った。「スターウェイズ議会か、それとも神がみか？」
「なによりも神がみが大切」父がいった。「神がみあってのわれわれだ」
「では、お話ししますが、艦隊をわたしたちの目から隠されたのはその神がみなのです。ですが、このことをスターウェイズ議会に報告すれば、お父さまは笑い物になり、面子を失われるはず」そういったとき、チンジャオはいままで見逃していたことに気づいた。「神がみみずから艦隊を隠したのだとすれば、それは結局、艦隊が神がみの意思に反していたからにちがいありません。そして、艦隊を送りだしたスターウェイズ議会が神がみの意思に反して——」
父が、そこまでというように片手をあげて制した。即座にチンジャオは口をつぐみ、頭を垂れて指示を待った。
「もちろん、それは神がみの御業だ」
父のことばは、チンジャオを安心させ、同時に屈辱をあたえた。〝もちろん〟とは。父は最初からそうと知っていたのだろうか？
「宇宙で起こることはすべて神がみの御業なのだ。だが、それがわかったからといって、理由がわかったことにはならない。神がみが艦隊を阻止したのはその使命に反対だったからだとおまえはいうが、わたしにいわせれば、神がみが望まないかぎりスターウェイズ議会が艦隊を送りだすこともできなかったはずだ。とすれば、神がみが艦隊を止めたのは、それが人間のような下賤な存在には果たせない重大で高貴な使命を負っているからであってもおかしくはないだ

ろう。あるいは、困難な課題をあたえておまえをためすために、神がみが艦隊を隠したのだったらなんとする？　ひとつだけたしかなことは、神がみはスターウェイズ議会に人類のほとんどを支配する権限をあたえたということだ。天命が彼らにあるかぎり、パスにあるわれらはさからうことなくスターウェイズ議会の指示にしたがうのだ」
「わたしはさからうつもりなど……」見え透いた詭弁を口にしかけてチンジャオはことばを切った。
むろん、父にはすべてお見通しだ。「声が尻すぼみになってみなまでいえなかったな。それはおまえのいおうとしたことが真実ではないからだ。あれだけわたしがいろいろと教えこんだにもかかわらず、おまえはスターウェイズ議会にさからおうとしたのだ」ふと、父はやさしい口調になった。「そんなことをしようとしたのは、わたしを守るためだったのだな」
「お父さまは、わたしの先祖です。わたしはスターウェイズ議会よりも、お父さまをうやまっているのです」
「わたしはおまえの父親だ。おまえにとって先祖といえる立場になるのは、息をひきとったあとのことだ」
「では、お母さまのためと思ってください。スターウェイズ議会が天命を失ったら、そのとき、わたしは彼らにとって最大の敵になるでしょう。なぜなら、わたしの主人は神がみだからです」そういいながらチンジャオは自分のことばがなかば嘘なだけに危険だと承知していた。ほんのさっきまで——室内に閉じこめられたあのときまで——彼女は父のためなら喜んで神がみ

さえも裏切るつもりでいたのではなかったか？　わたしはなんという穢れた、忌まわしい娘なのだろう。

「よく聞きなさい、わが娘、清照よ。スターウェイズ議会に反抗しても、けっしてわたしのためにはならないのだ。そして、おまえのためにもな。だが、わたしを愛するがあまりの行きすぎと思って許そう。もっとも思いやりのある、心やさしき悪行だからな」

父は微笑した。その笑顔を見ると、自分はそんな称賛のことばにふさわしくないと知りながらもチンジャオの動揺はおさまり、彼女はふたたび謎解きにもどることができた。「あれが神がみの御業とわかっているなら、わたしに答えをさがさせなくてもよかったのではありませんか」

「そうはいうが、おまえは正しい質問をしたかな？」父はいった。「われわれが解答をもとめている質問とは、神がみはどうやってルジタニア粛清艦隊を消したのかということなのだ」

「わたしにそんなことがわかるはずはありません」チンジャオはいった。「神がみは艦隊を破壊したかもしれないし、隠したかもしれない。あるいはどこか西方の秘密の場所へ移動して――

――」

「チンジャオ！　わたしを見なさい。よく聞くのだ」

チンジャオは目をむけた。父の厳しい声のおかげで頭を冷やして集中することができる。

「わたしは、おまえが生まれたときからずっとこれを教えようとしてきた。しかし、いまやおまえは自分でまなびとらなければならないのだ、チンジャオ。あらゆる出来事は神がみの起こ

されるものだが、しかし神がみが行動するとき、それはつねにいつわりの姿をとる。聞いているか?」
チンジャオはうなずいた。百回も聞かされたことばだ。
「おまえは耳では聞いているが、頭では理解していない、いまもそうだ」父はいった。「神がみはわれらパスの人間に白羽の矢をたてたのだ。われらだけが神がみの声を聞く特権をあたえられている。われらだけが、この世のありとあらゆるものは、いまも将来も神がみによってひきおこされると見抜くことを許されている。ほかのすべての人間が神がみの御業に気づくときは永遠にこない。それは彼らにとっては謎なのだ。おまえの任務はルジタニア粛清艦隊が消滅した真の原因を発見することではない――パス人ならばだれでも、真の原因は神がみがそれを望まれたことだと直観するだろう。おまえの任務は、神がみがこの一件にあたってどのような姿をとられたかをつきとめることなのだ」
チンジャオはめまいをおぼえて呆然となった。すっかり答えに行きついて任務を果たしたつもりでいたのだ。それがいま、泡と消えようとしている。見つけた解答は真実ではあったが、さらに新たな任務を負ったわけだ。
「このままむりのない説明が見つけられない以上、神がみの姿は信仰心をもつ者ばかりでなく不信心者にさえさらけ出されている。神がみの姿をむきだしにしておくわけにはいかん。われわれの手で衣をまとっていただかねばならないのだ。艦隊の失踪を説明するために神がみが創りだされた一連の出来事をつきとめ、不信心者たちの目には自然現象に見えるようにしなけれ

ばならない。こんなことくらい、おまえにはわかっていると思っていた。われわれがスターウェイズ議会に仕えているのは、ただひたすらそうすることで神がみに仕えることになるからなのだ。神がみはわれわれがスターウェイズ議会をあざむくことを望んでおられる。そしてスターウェイズ議会はあざむかれることを望んでいるのだ」
チンジャオはいまだ任務が終わっていないという失望に呆然自失しながらも、うなずいた。
「わたしのいうことが無情に聞こえるか?」父がたずねた。「わたしは正直ではないと? 不信心者たちに残酷だと思うか?」
「娘が父親に審判をくだすものでしょうか?」チンジャオは小声で問い返した。
「とうぜんだ。だれもが、毎日だれかに審判をくだしている。問題は、その判断が賢明か否かだ」
「では、わたしの判断はこうです。信仰心をもたない者たちに、その不信心なことばで語りかけることは罪でもなんでもありません」チンジャオはいった。
父の口の端にうかんだのは微笑みだろうか? 「わかったようだな」父はいった。「スターウェイズ議会のほうからへりくだって真実をもとめてくるようなことがあれば、そのときは彼らに〝道〟を教えてやればいい。それで彼らもパスの一員になるだろう。それまでは、われわれは神がみのしもべとして、信仰心をもたない者たちが好んであざむかれ、あらゆることにむりのない説明がつくものと思いこむよう力を貸してやるのだ」
チンジャオは床をこするほど深ぶかと頭をさげた。「お父さまは何度もこれを教えてくださ

ろうとしました。けれども、わたしはいままでこの原則があてはまる任務をあたえられたことがなかったのです。あなたの愚かな娘をお許しください」
「わたしには、愚かな娘などいない」父はいった。「わたしには、燦然と輝く娘があるのみだ。おまえがきょう学んだ原則をほんとうの意味で理解する者はパスにも数えるほどしかいない。だからこそ、他の世界からの訪問客をとまどわせたり不快がらせずに応対できる者の数もかぎられているのだ。きょうのおまえにはおどろかされたぞ、娘よ。いままでこの原則を理解していなかったからではなく、その若さでこれが理解できたことにな。わたしがそうと気づいたのは、おまえより十歳ほども年をとってからだった」
「お父さまがなにかを学んだ年齢より早く、ものを学ぶことなどできるでしょうか？」父の業績のひとつでもうわまわるなどとはとても考えられなかった。
「おまえには、わたしという教師がいる」父はいった。「わたしは自力で発見しなければならなかったのだがな。だが、わたしより若くしてなにかを学んだと思うと、おまえが怖じ気づくのもわからんではない。娘に出し抜かれたことでわたしが不名誉な思いをすると考えているのか？　だとしたら大まちがいだぞ――親にとって、自分より偉大な子供をもつほどの名誉はありえないのだ」
「わたしはどうやってもお父さまより偉大な存在になれるはずはありません」
「たしかにある意味ではそうだ。なぜならおまえはわたしの子供であり、おまえのすることはすべてある種の部分集合として、わたしの内に含まれている。人間はだれでも先祖の部分集合

なのだ。だが、おまえには比類ない偉大さの可能性が潜在している。いつか、自分の業績よりもむしろ子であるおまえの業績によってわたしの名が高まる日が来るだろう。わたしはそれを疑っていないのだよ。パスの人びとが、わたしになんらかの徳があると判断するときがあるとすれば、それはわたし自身の業績ゆえであっても、おまえの業績ゆえであってもふしぎはないだろう」

そういうと、父はチンジャォにむかって頭をさげた。それは退室をうながす儀礼的な礼ではなく、敬意をあらわす深い礼だった。父は床をこすりそうなほど低く頭をさげたのだ。もっとも、娘に敬意を表してじっさいに頭を床にこすりつけたりしたら、むしろ無礼で、からかいともとれる動作になってしまう。それでも、父は威厳の許すかぎり深ぶかと頭を垂れたのだった。

チンジャォは反射的に困惑を感じ、不安になったが、やがて納得した。娘の偉大さいかんではパスの神にえらばれる機会があるかもしれないと父がほのめかしたのは、それが漠然とした将来の出来事ではないからだ。父は、まさにいまこの瞬間の話をしているのだった。つまり、彼女の任務の話を。もしもチンジャォが神がみがなにに身をやつしているのかをつきとめ、ルジタニア粛清艦隊の失踪にむりのない説明を見つけたら、父がパスの神にえらばれることは確実になるだろう。父はそこまで彼女を信頼しているのだった。つまり、彼女の任務がどれほど重大なものかということだ。父が神に列せられることに比べたら、どれほど時間がかかろうがそんなことはものの数ではない。いままで以上にがむしゃらに調査し、頭をはたらかせて、軍部やスターウェイズ議会の人間が束になっても果たせなかった任務を完了しなければならない。

自分のためではなくて、母と、神がみのため、そして父がその神がみのひとりにくわえられるように。

チンジャオは父の部屋を辞去した。戸口で立ち止まってちらりとワンムに目くばせする。神がみの声を聞く者の視線を一瞬受けただけで、娘は了解してあとにしたがった。

自室にもどるころには、チンジャオはのびのびにしていた浄罪の欲求に身震いするほどだった。きょう彼女が犯したあやまちが——神がみに反抗したこと、もっと早く浄罪をしなかったこと、真の任務を見抜けなかった愚かさ——そういったことがどっとおそってきたのだ。不浄感はなかった。手洗いの必要性は感じないし、自己嫌悪もない。なんといっても、自分の不浄さは父に称賛されたことや、戸口の通りぬけかたを示してくれた神のおかげで和らいでいた。おまけに、ワンムをえらんだことはまちがっていなかった——チンジャオは大胆にもその試練にいどんでみとめられたのだった。したがって、彼女をおののかせているのは不浄感ではない。チンジャオは浄罪に飢えていたのだ。彼女は、神がみの存在を身近に感じながら仕えたいと思った。だが、知っているかぎりどのような償いをしても、この飢えはおさまりそうにない。

そうだ。わたしはこの部屋のすべての床板の木目を読まなければならない。

そう思ったとたん、どこから始めるべきかは決まった。南東の角だ。すべての床板を東の壁からたどろう。そうすれば木目読みの儀式をしながらつねに神がみのおわす西方へと移動することになる。最後にのこるのは、北西の片隅にあたる一メートルたらずのいちばん短い板になるだろう。最後に木目をたどる板がそんな短い簡単なものであるのは、チンジャオにあたえら

れる報酬なのだ。

ワンムがそっと室内にはいってくる気配が聞こえたが、チンジャオにはいま生者にかまけているひまはなかった。神がみが待っているのだ。チンジャオは部屋の片隅にひざまずき、木目に目を走らせて神がみが彼女にたどらせようとしている一本の線をさがした。ふつう、どの線をたどるかは自分で決めなければならない。そういうときチンジャオは、神がみに軽蔑されないようにもっともたどりにくい線をえらぶことにしていた。だが、この夜、彼女は直観的に自分のかわりに神がみがえらんでくれるだろうと確信があった。一本目の木目はうねってはいるが太くてたどりやすいものだった。最初から神がみが情けを示してくれている！　今夜の儀式は、ほとんどチンジャオと神がみの会話のようなものになるだろう。彼女はきょう、目に見えない壁を破り、父とおなじ明晰な理解によりちかづいたのだ。一般人はチンジャオのような人間には、はっきりと神がみの声が聞こえていると信じているが、いつかはほんとうにそういう日がくるかもしれない。

「聖女さま」ワンムが呼びかけてきた。

まるでガラスでできているようなチンジャオの喜びは、わざわざ声をかけてきたワンムによって木っ端みじんに砕けてしまった。ワンムは、儀式のとちゅうで邪魔がはいったらまた最初からやりなおさなければならないことを知らないのだろうか？　チンジャオは立ちあがって娘をふりむいた。

理由はとにかく、チンジャオの表情を見てワンムも彼女が怒っていることをさとったにちが

いない。反射的にひざまずいて床にひれ伏し、「申しわけありませんでした」とあやまった。
「うっかりして〝聖女さま〟といってしまいました。ただ、なにか探し物をしてらっしゃるなら、お手伝いをしようと思ったものだから」
ワンムがひどい誤解をしていることを知って、チンジャオはもうすこしで笑いだしそうになった。なるほど、ワンムは、チンジャオが神がみの声を聞いているのだと気づくはずはない。そうとわかって腹立ちが途切れ、目のまえで女主人を激怒させたかと恐縮しているワンムの姿を見ると、チンジャオは恥ずかしくなった。ワンムが床に頭をこすりつけている図は気分のいいものではない。チンジャオは、人が卑屈な態度をとらされているのを見るのが嫌いだった。
わたしのなにが、ワンムをこれほどまでに恐縮させてしまったのか？　わたしは、神がみからあんなにもはっきりと声をかけられて、はちきれんばかりの喜びを感じていた。けれども、あまりにも自分の喜びにひたりきっていたわたしは、無邪気に呼びかけてきたワンムに憎しみの表情をむけてしまったのだ。これが、わたしの神がみへのお返しだろうか？　神がみが愛情のこもった顔をむけてくれたというのに、わたしはかわりに人に対して憎しみをむけた。それも、自分の使用人に。神がみは、こうしてまたわたしにおのれの至らなさを思い知らせてくださったのだ。
「ワンム、わたしがいまみたいに床にかがみこんでいるときは、けっして邪魔をしないでちょうだい」チンジャオはそういって、自分が神がみからあたえられた浄罪のことをワンムに説明した。

「わたしもおなじことをしなければならないのですか？」ワンムがたずねた。
「神がみがあなたにそうお命じになった場合はね」
「命じられたら、わかるものなんですか？」
「あなたの年頃になるまで神がみの声を聞かないようだったら、おそらくこの先お声がかかることはないわね。でも、もしもお声がかかれば、きっとわかるわ。だって、頭のなかで神がみの声がしたら、さからうことなどぜったいにできないから」
　ワンムは生真面目な顔でうなずいた。「なにかわたしにお手伝いできることはないかしら……チンジャオ？」彼女は女主人の名をおそるおそるていねいに呼んでみた。父の口から出るとやわらかく愛しげに聞こえる自分の名も、他人にこんなふうにうやうやしく呼ばれてみると高貴なひびきがあることを、彼女は初めて意識した。自分に美点が欠けていることを痛いほど感じているいま、清照と呼ばれるのはほとんど苦痛だった。だが、ワンムにその名を使うことを禁じるわけにはいかない——主人を呼ぶのに名前がなくては困るだろうし、ワンムがうやうやしげにその名を口にするたび、卑小な自分がその名に値しないという皮肉をチンジャオは思いだすことになるからだ。
「手伝いたいのなら、邪魔をしないで」
「では、退がったほうがいいのでしょうか？」
　そうしなさいといいかけたとき、なぜか神がみはワンムの存在もこの贖罪のうちに入れているのだとチンジャオはさとった。なにを根拠にそう思ったのか。なぜなら、ワンムが退室する

と考えると、木目たどりを中途で放り出すのとおなじくらい耐えがたい感じがしたのだ。「いいえ、いてちょうだい」チンジャオはいった。「だまって待っていられる？　そこで見ているのよ」
「はい……チンジャオ」
「時間がかかるから、もしがまんできなくなったら、さがってもよろしい。ただし、出ていっていいのは、わたしが西から東へ移動しているときだけよ。そのときは、ひとつの木目を読みおわって次に移るとちゅうだから、あなたが出ていっても気にはならないと思う。でも、声をかけずに出ていってね」
ワンムは目をまるくしていた。「部屋じゅうの床板の木目を全部たどるおつもりなんですか？」
「まさか」いくら神がみでも、そこまで残酷な仕打ちはなさるまい！　そう思ってはみるが、いつの日か文字どおりそんな贖罪をもとめられるときが来るかもしれないことを、チンジャオは知っていた。そう考えると、恐怖で気分がわるくなる。「床板一枚につき、木目を一本たどればいいのよ。あなたも、そこで見ていてね」
端末装置のうえに輝いている時刻表示にワンムがちらっと目をむけたのを、チンジャオは見た。すでに床につくべき時間だ。そのうえ、ふたりともきょうは昼寝抜きだった。人間が、これほど長時間寝ないでいるのは不自然だ。パスの一日は地球のそれの一・五倍にあたるのだから、人間の体内時計のはたらきにも多少の差がある。昼寝もせずに夜更かしするのは、とても

つらいことだった。
だが、チンジャオには選択の余地はない。ワンムが起きていられないというなら、たとえ神がみが納得しなくても、いまのうちに退室させるしかないだろう。「起きていてもらわなければ困るのよ」チンジャオはいった。「そこで眠られてしまったのでは、あなたの下敷きになったあたりの木目をたどるときに、どいてちょうだいといわなきゃならないでしょ。口をきいてしまったら、儀式は最初からやりなおしだわ。眠らずに、だまってそこにじっとしていられる?」
ワンムはうなずいた。当人はその気らしいが、はたしてほんとうにできるかどうかは保証のかぎりではない。けれども、チンジャオが新しい秘婢を同室させることは、神がみの強い意思だ——一介の人間であるチンジャオに、神がみの望みをこばむなど、どうしてできよう?
チンジャオは一枚目の床板のところへもどって、あらためて木目たどりにとりかかった。ありがたいことに、神がみはまだ彼女を見捨てていなかった。二枚目三枚目と新しい床板に移動しても、そのたびにいちばん太くてたどりやすい木目をあたえられ、たまにたどりにくいものに行き当たっても、最初はたどりやすそうに見えた木目が決まって板の中ほどで薄れて消えていた。神がみはチンジャオに味方してくれているのだ。
ワンムのほうも、懸命にがんばっていた。二度ほど、チンジャオが西まで木目をたどりおえて、つぎの木目にとりかかるため東へもどるとちゅうでちらりとようすをうかがうと、ワンムが眠っているのが見えた。ところが、チンジャオがワンムの横になっているはずの場所にちか

づいてみると、いつのまにか彼女は目をさまして、すでにチンジャォが木目をたどりおえた位置に移動していた。彼女の秘婢は女主人の気を散らさないように、音もなく場所をかえていたのだ。気の利く娘だ。チンジャォは文句なしの秘婢を選択したらしい。
長い時間が過ぎ、ようやくのことでチンジャォは最後の一枚の出発点にたどりついた。部屋の隅っこの短い床板だ。うれしさのあまり大きく声をあげそうになって、彼女はその一歩手前で自制した。自分が声をあげれば、とうぜんワンムが返事をしてしまう。そんなことになったら、いやでもまた一からやりなおしだ——信じられない愚挙を犯すところだった。チンジャォは、部屋の北西の隅までもうわずか一メートル足らずの床板の端にかがみこみ、もっともくっきりした木目をたどりはじめた。際立った明確な線をたどってゆくと、まっすぐ壁までたどりついた。終わったのだ。
チンジャォは壁にもたれてがっくりと全身の力をぬいた。ほっとすると、笑い声がもれる。だが、気力も体力もつかいはたしたチンジャォの笑い声を聞いたワンムは、彼女が泣いているものと思ったらしい。さっとちかづいてきた彼女は、チンジャォの肩に手をふれて、「チンジャォ、苦しいのですか？」とたずねた。
チンジャォはワンムの手をとってにぎりしめた。「苦しくなんかないわ。苦痛なんて眠ればなおるものよ。終わったの。わたしはもう穢れてはいないわ」
じっさい、穢れをはらわれた証拠に、迷わずワンムの手をにぎりしめて肌と肌がふれあってもなんの不浄さも感じなかった。儀式が完了したとき、だれかの手をにぎりしめることができ

るのは、神がみのご褒美だ。「あなたはとても良くやったわ」チンジャオはいった。「あなたがここにいてくれたおかげで、わたしはいつもより木目たどりに集中することができたもの」
「チンジャオ、わたし、とちゅうで一度眠りこんでしまったみたい」
「二度ほどあぶなかったわね。でも、肝心なときは目をさましてくれたから、実害はなかったわ」
ワンムが目を閉じてすすり泣きだした。そのくせ、顔をぬぐおうともせず、チンジャオに手をにぎられたままにしている。その頰にぼろぼろと涙がこぼれた。
「なにを泣いているの、ワンム？」
「わたしは無知でした」彼女はいった。「神がみの声を聞くって、ほんとにつらいことなんですね。わたし、そうとも知らずに」
「でもね、神がみの声を聞く人間の真の友になるのだって、おなじようにつらいことよ」チンジャオはいった。「だからこそ、わたしはあなたを召使にする気でやとったんじゃないの。〝聖女さま〟って呼んだり、わたしの声にびくびくしてほしくはない。そういう召使なら、神がみに声をかけられたときはこの部屋から退がらせるでしょうね」
なにを思ったか、ワンムはさらに泣きじゃくりだした。
「シー・ワンム、こんなつらい目にあうのなら、わたしといっしょにいたくはないかしら？」
チンジャオはたずねた。
ワンムはかぶりをふる。

「つらいと思っても無理はないわね。そう思ったら、出ていっていいのよ。いままでだって、わたしはひとりだったのだから。またひとりになるのは、こわくはないわ」
ワンムは、さっき以上に激しくかぶりをふった。「出ていくなんて、そんなことできっこありません。だって、あなたがあんなにつらい思いをしてらっしゃるのを見てしまったのに」
「じゃあ、きっといつかこういうふうに書かれ、人びとが語りつぐでしょう。ハン・チンジャオが浄罪をおこなうあいだ、シー・ワンムは片時もそばを離れることはなかった、と」
ふいに、ワンムは顔をほころばせ、細く目をあいて笑い声をあげた。その頰にはまだ涙のあとが光っている。「おかしいじゃありません？　いまのはジョークですよ」彼女はいった。
「わたしの――シー・ワンムという名前。あなたの秘婢の名前だとも知らずに、人びとはその名を語りつぐんでしょうね。みんなきっと、西王母のことだと思うわ」
そう聞いて、チンジャオも笑いながら、ふと、西王母はほんとうにワンムの心の先祖なのかもしれないという気がした。そして、ワンムという友がそばについていてくれることで、チンジャオもまたこの神がみのなかでもっとも古いといってもいいこの女神と新たに親しく結ばれたようにも思えるのだった。
ワンムはチンジャオに指示されたとおりに、ふたりぶんの夜具をのべた。それはワンムの本来の義務だから、自分の夜具は自分で敷くものと思っていたチンジャオもこれから毎晩彼女にまかせなくてはならないだろう。床の木目がのぞかないようにぴったりくっつけて敷かれた二組の夜具に、ふたりはそれぞれ横になった。見ると、窓のよろい板をすかして銀色の光が洩れ

ている。きょう、ふたりは起きているあいだじゅう一緒だった。そして今夜眠っているあいだもいっしょだ。ワンムはかけがえのない献身を与えてくれた。彼女こそ真の友になるだろう。
だが、それから数分後、ワンムにつづいてうとうとしかけたチンジャオは、あることに気づいた。ワンムのような無一文の娘が勤労奉仕にまぎれこみ、チンジャオに声をかけてもとがめられないように現場監督を買収することがよくできたものだ。どこかのスパイが、ワンムをハン・フェイツー邸にはいりこませるために金を出したということもありうるのでは？　いやー―そんなスパイが介在しているのならハン家を管理しているユー・クンメイがきっと気づいて、ワンムを雇いはしなかっただろう。ワンムがはらったという賄賂は金銭ではなかったのだ。まだ十四歳とはいえ、シー・ワンムはいまでも目を見張るような美少女だ。歴史や伝記のたぐいをひもとけば、女がその手の賄賂を使った例は枚挙にいとまがない。
チンジャオは打ち沈みながら胸に誓った。この件は内密に調査したうえ、事実と判明したら、罪状を伏せて問題の現場監督を解雇しよう。調査の過程でワンムの名前が表沙汰にならないよう気をつけないと、彼女にどんな難がおよぶかわからない。ユー・クンメイに一言いってさえおけば、その点はうまくはからってくれるだろう。
チンジャオは眠っている秘婢の愛らしい顔を見つめた。なにものにもかえがたい新しい友だ。そして、彼女は激しい哀れをもよおした。もっとも、ワンムが現場監督にさしださねばならなかった代償のことよりも、それと引換えに彼女が得たものを思うと、その哀れはなおさらつのるのだった。ハン・チンジャオの秘婢になるという、無価値で、苦しみばかりが多い、忌まわ

しい仕事。人類の歴史を通じて幾多の女がいやおうなくそうしてきたように、しかたなく自分の体の一部を売った女には、きっと神がみがその犠牲に見合う価値をもつ報酬をあたえるにちがいない。

こうして、全身全霊をもってシー・ワンムの教育にうちこむ決意を固めたチンジャオは、その朝、いつになく深い眠りにはいったのだった。ワンムの教育にかまけてルジタニア粛清艦隊の謎を解くという困難な任務をおろそかにすることはできないが、あとは時間の許すかぎり彼女の尊い犠牲に見合う恩恵をあたえよう。神がみもそれを期待しているにちがいない。それを見こんで、チンジャオのもとにこんな申しぶんのない秘婢を送ってくれたのだから。

8 奇跡

〈ちかごろエンダーが、われらを悩ませている。超光速の航法を考えろというのです〉
〈あなたは、それは不可能だといっていた〉
〈われらはそう思っている。人類の科学者もそう思っている。ところがエンダーは、アンシブルによる情報の伝達が可能である以上、おなじ速度で物体を移動させることもできるはずだと主張する。もちろん、そんなことはありえない――情報と物理的な実体とは比較にならない〉
〈彼はなぜ、あれほど超光速飛行にこだわるのだろう〉
〈考えてみればばからしいことだ――実体がどこかへ到着したあとになってその姿が見えるのだから。まるで反対側にいる自分に会いたくて鏡を通りぬけようとするようなものだ〉
〈エンダーは、そのことでよくルーターと話しこんでいる――わたしは、ふたりの会話を聞いたことがある。エンダーの考えでは、物質やエネルギーはつまるところ単なる情報の集積にすぎないということだ。物理的な実質とは、フィロトどうしが伝達しあうメッセージにすぎないのだと〉
〈ルーターの意見は？〉

〈エンダーのいうことの半分は正しいといっている。ルーターがいうには、物理的実質はたしかにメッセージであり――そのメッセージとは、フィロトがたえず神に問いつづけている質問なのだと〉
〈その質問とは？〉
〈ただひとこと――なぜ？〉
〈で、神はその質問になにをもって答えるのか？〉
〈命を。命こそ、神が宇宙にあたえたもうた目的なのだとルーターはいうのだ〉

ルジタニアへ帰還したミロは家族全員の出迎えをうけた。やはり、みんなはミロを愛しているのだ。それはミロのほうもおなじことで、彼は一カ月間の宇宙旅行をおえて家族に再会するのを心待ちにしていた。すくなくとも頭では、自分が宇宙ですごした一カ月が家族にとっては四分の一世紀にあたるとわかっている。母親の顔に皺がきざまれ、グレゴやクァーラさえも三十代のおとなになっているだろうという覚悟もできていた。本能的に予感しさえしなかったのは、彼らが赤の他人になっているだろうことだった。いや、赤の他人ならまだしもだ。彼らは、ミロをあわれみの目で見て、彼のことはわかっているようなつもりで、子供を相手にするように見くだす他人だった。家族のだれもがミロより年上になっていた。年下はひとりもいない。そのくせ、だれもがミロよりも若い。彼らはミロが味わわされたように苦痛や喪失感を味わうことはなかったからだ。

てこういった。「あなたを見ると、なんだか自分が朽ち果てていくみたいな気がするわ。でも、若いままのあなたに会えてよかった」すくなくともエラは、再会したとたん、両者のあいだに壁ができてしまったことを堂々とみとめたのだ。もっとも、彼女はミロの若さがその壁であるかのようにふるまってはいるが。たしかに、ミロは家族の記憶にあるままのミロにちがいない──すくなくともうわべを見るかぎりは。とっくのむかしに消えた兄弟が死から復活した。その幽霊は、永遠に若いままで家族にまつわりつく。けれども、ほんとうの壁はミロの動作。ミロのしゃべり方なのだった。

どうやら家族たちは、ミロがどれほどひどい障害を負っているかをわすれていたらしい。彼の肉体が、損傷をうけた脳からの指令にどれほどぎこちなく反応するかを。足をひきずるような歩き方、ろれつのまわらない聞き取りにくい発音──家族たちは、そうした不快な点を記憶から消去して、あの事故にあうまえのようにミロをおぼえていたのだ。それも道理で、ミロがこの時間膨張的な旅に出たのは、障害者になってからほんの数カ月後のことだった。家族たちが事故後のミロの姿をわすれて、それ以前の年月で知り抜いていた彼を思い起こすくらい、造作はなかったろう。力強く、健康で、家族が父と呼ぶ男にたてつくことができたただひとりの息子。みんなは、ショックを隠すことができなかったのだ。ミロにはそれがわかる。家族たちのとまどい、まともにむけてこない視線、ひどく聞き取りにくいことばや、じれったいほどのろい足どりを気にしていないふりなどに、それが見えるのだ。

ミロには家族たちの苛立ちが感じられた。何分もたたないうちに、家族の全員とはいわないまでも数人がその場を巧みに抜けでようとしていることがわかった。きょうの午後は仕事が山積みでとか、夕食のときにまた、などと彼らはいう。この場にいること自体が苦痛で、彼らは逃げださずにはいられない。たったいま自分たちのもとへこんな姿でもどってきたのがミロであると納得するためにせよ、以後できるだけ顔をあわせずにすむように計画するためにせよ、時間が必要なのだ。なかでもグレゴとクァーラは最悪だった。ふたりはだれよりも逃げたがっている。これはミロの心をえぐった――かってふたりは兄を崇拝していたのに。むろん、それだからこそ、彼らが目のまえに立っている壊れたミロを見るに耐えない気持ちはわかる。グレゴたちがおぼえているむかしのミロの姿は最高に清浄無垢なものなのだ。それだけに、破壊された痛手も比類ない。

「家族で盛大な夕食会をやろうと考えたのよ」エラがいった。「母さんはそうしたがったんだけど、わたしはそれほど焦ることもないと思って。あなたもすこしゆっくりしたいでしょ」

「まさかぼくのために、こんなに長いこと夕食ぬきでいたわけじゃないだろうね」ミロはそう応じた。

彼のジョークは、エラとヴァレンタインにしか通じなかったらしい。軽く笑いを洩らすというあたりまえの反応をしたのは、そのふたりだけだった。ほかのみんなは――ミロがなんといったのかすらわからなかったように見えた。

彼らは着陸地点のわきの丈の高い草むらに立っていた。家族はこれで全部だ。いまや六十代

にはいった母は髪も鉄のような灰色だが、思いつめたような深刻な顔はむかしのとおりだ。ただ、その表情はひたいの深い皺や、口の両脇の溝となってきざみつけられている。首すじは見るも無残だった。ミロは、母もいつかは死ぬんだとさとった。まだ三、四十年は先のことだろうが、それでもいつかは死ぬ。これまで、母の美しさを認識したことなどあっただろうか？〈死者の代弁者〉と結婚すれば角がとれるのではないか、またむかしのように若く見えるようになるのではないかという気がしたことはある。たしかにそうなったのかもしれない。アンドルー・ウィッギンは母の心を若返らせはしたかもしれない。けれども、肉体は時の流れにはさからえなかった。母は老人だった。

エラは四十代だ。夫の姿は見えないが、結婚はしていて、たまたまいっしょに来なかっただけかもしれない。しかし、たぶん独身だろう。仕事と結婚したというところか？　ミロに再会した喜びは見せかけとは思えなかったが、その彼女ですら、あわれみと気遣いの表情を隠すことはできなかった。まったく、たかが一カ月の光速旅行で障害が癒えるとでも思ったのだろうか。夢物語ではあるまいし、ミロが天翔る神のごとく力にあふれた堂々たる足どりでシャトルからおりてくるなどと思うはずもなかろうに。

キンは、いまでは聖職者のローブを身につけていた。すぐ下の弟がりっぱな宣教師となったことは、ジェインから聞いている。キンは十以上の森でペケニーノたちを改宗させ、洗礼をして、ペレグリーノ司教の許可のもと、ペケニーノたちの数人に聖職を授け、仲間たちのあいだで聖餐式を執りおこなわせてきた。彼らは母樹から生まれたすべてのペケニーノたちに洗礼を

授け、死にぎわの母たち全員、小さき母たちやその幼子たちの世話をする不妊の妻たち、栄光ある死をもとめる兄弟（ブラザー）たち、そして樹木たちに例外なく洗礼をほどこした。とはいっても、聖体拝受をできるのは妻たちとブラザーたちだけだったし、結婚となると、父樹と、その伴侶となる盲目で心のない虫たちとのあいだでそうした儀式を執りおこなっても、さして意味があるとは思いにくかった。にもかかわらず、ミロはキンの目に一種の高揚を見てとった。それは、善意に使われた力の輝きだ。リベイラ一族のなかでキンだけが、生まれたときから自分の目的を心にさだめていた。いま、彼はそれを実行しているのだ。理論上の問題などどうでもいい――キンはピギーたちにとっての聖パウロであり、絶えざる喜びに満ちあふれている。弟よ、おまえは神に仕えた。そして神は、おまえをしもべにしてくださったのだな。

輝く銀色の目をもつオリャードは、片腕で美しい女を抱きよせ、子供たちに囲まれていた――やっと歩きはじめたばかりの末っ子から、十代の長女まで六人の子持ちだ。子供たちの眼球はどれも作り物ではなかったが、それでもみな父親ゆずりの超然とした表情をしていた。彼らはものをただ見るのではなく、見つめるのだ。オリャードがそうするのは当然という気がしたが、おそらく彼が生み出した家族も観察者かと思うとミロは不安になった。自分たちの経験を、あとになって再生するために記録し、そのくせみずからはけっしてかかわらない生きた記録器（レコーダー）たち。いや、そんなことはきっと思い過ごしだ。ミロはオリャードといて気の休まったためしはなかったものだから、子供たちにすこしでも父親と似ているところがあると、それだけで身構えてしまいがちなのだ。母親は、じゅうぶんに好感のもてる女性だった。たぶんまだ四十歳

まえだ。何歳でオリャードと結婚したのだろう。人工の眼球をはめた男の愛を受け入れるとは、なんという女性か。オリャードは自分たちのセックスを記録して、画像を再生し、自分の目には彼女がどう見えているか見せてやったのだろうか？

　そんな考えがうかんだとたん、ミロはすぐに恥ずかしくなった。オリャードを見て、ほかに考えることはないのか——肉体的欠陥のほかには。長年いっしょに暮らしてきた弟なのに。これでは、家族たちがぼくの肉体的欠陥にしか目がいかなくても当然だ。

　やはり、ここを離れたのはわるい考えではなかった。アンドルー・ウィッギンにすすめてもらって幸いだった。ただひとつ失敗だったのは、もどって来たことだ。ぼくはなんのために、ここにいるのか？

　意に反して、ミロはヴァレンタインをふりむいた。彼女はミロに微笑みかけ、片手で抱きしめた。「そう悲観したものじゃないわ」ヴァレンタインはいった。

　どう悲観したものじゃないって？

「わたしには、わかれわかれになって再会する兄弟はたったひとりしかないのよ」彼女は説明した。「あなたは家族総出でむかえてもらえたじゃないの」

「たしかにそうだね」ミロはいった。

　そのとき、ようやくジェインが口をきいた。耳のなかで、あざけるような声が踊っている。

「家族総出とはいえないわ」

　うるさいぞ。ミロは無言でたしなめた。

「兄弟がたったひとりだって？」アンドルー・ウィッギンが口をはさんだ。「ぼくだけだというのかい？」〈死者の代弁者〉は歩み出て姉を抱きしめた。だが、彼らのあいだにも遠慮のようなものがある。そう見えたのはミロの気のせいだろうか。ヴァレンタインとアンドルー・ウィッギンが、たがいに遠慮しあうなんて。お笑い草だ。おそれを知らぬ大胆不敵なヴァレンタイン――彼女こそデモステネスだったではないか――そして、なんの許可(リセンサ)もなくリベイラ家の生活に闖入してきて、その家族を作り変えてしまった男、アンドルー・ウィッギン。その彼らが怖じ気づくなんてことがあるだろうか？　知らない者どうしのような感覚におそわれることが。

「すっかり老けたね」アンドルーはいった。「棒みたいに痩せちゃって。ヤクトの稼ぎがわるくて、ちゃんと食わせてもらってないのかい？」

「ノヴィーニャは料理をしてくれないんじゃない？」ヴァレンタインが問いかえした。「それに、顔だって以前はもっと賢そうだったのに。ここに着くのがもうちょっと遅れたら、わたしは完全に精神的植物状態におちいったあなたに会うことになっていたところだわ」

「おやおや、姉さんは世界を救いにやってくるんだと思っていたけどな」

「宇宙を救いに来たのよ。でも、まずはあなたを救うことが先決だわ」

　ヴァレンタインはふたたびミロを抱きよせて、もう一方の手でアンドルーを抱いた。彼女は、ほかのみんなにこういった。「ずいぶん大勢のおでむかえだけれど、どなたにも初めて会うような気がしないわ。みなさんも、わたしや家族たちに早くなじんでいただけるといいんだけ

ど」

なんと友好的なのだろう。これで相手もあっさりと緊張を解く。このぼくでさえ例外じゃない、とミロは思った。ヴァレンタインは、いともたやすく人びとを手なずけるのだ。アンドルー・ウィッギンとそっくりおなじように。これは彼女が弟から学びとったことなのか、それとも弟のほうが彼女から教わったのだろうか。いや、彼らの家族の血統なのかもしれない。なんといっても、彼らの兄ピーターは人心操作にかけては空前絶後の名人、初代ヘゲモンだったのだから。たいした家族だ。ぼくの家族におとらず異常だ。ただ、彼らは天才だったから通常の枠におさまりきれなかったのに対して、うちの場合はあまりにも長い年月をおなじ苦痛に見舞われたために魂が歪んでしまったことが原因だった。そして、なかでもぼくはもっとも異常だ。ぼくは、もっともはなはだしく歪んでいる。アンドルー・ウィッギンは家族のあいだの傷を癒しにあらわれ、じゅうぶんその役目を果たした。けれども、心の歪みは――いつの日か癒えることがあるのだろうか。

「ピクニックにでも行く？」ミロが切り出した。

こんどは全員が笑った。アンドルー、ヴァレンタイン、いまのはどう？　ぼくはみんなをくつろがせたのかな？　ぎくしゃくした緊張を解く役にたったかな？　これでみんなも、ぼくに再会して喜んでいるとか、やっぱりミロだとわかったようなふりをしやすくなっただろうか？

「彼女が会いたがっているわ」ミロの耳にジェインの声がとどいた。

だまっていろ、またしてもミロははねつけた。ぼくは彼女に来てほしくなんかないんだ。

「でも、いずれ彼女はあなたに会うわ」

おことわりだね。

「彼女は結婚しているのよ。子供も四人いるわ」

そんなことはぼくにはなんの関係もない。

「もう何年も、寝言であなたの名前を呼んでいないのよ」

きみはぼくの友達じゃなかったのか。

「友達よ。隠してもだめ。わたしにはわかっているんだから」

きみは口うるさいばあさんだ。きみには、なんにもわかっちゃいない。

「明日の朝、彼女はあなたに会いにくる。あなたのお母さんの家に」

ぼくは、そこにはいない。

「会わずにすむと思っているの？」

そうしてジェインと会話しているあいだ、ミロは周囲のみんなが話していることをまるで聞いてもいなかったが、それはどうでもいいことだった。夫と子供たちが船をおりてきたので、ヴァレンタインがみんなに彼らを紹介してまわっていたのだ。だれよりも紹介したかった相手は彼らの叔父であることは、いうまでもない。アンドルーと話す彼らの恐縮ぶりは、ミロには意外なほどだった。だが、考えてみれば、彼らはアンドルーの正体を知っているのだ。異類皆殺し（ゼノサイド）のエンダーにはちがいないが、同時に〈死者の代弁者〉であり、『窩巣女王』と『覇者（ヘゲモン）』を世に問うた人物でもある。むろん、いまではミロもそうと知ってはいるけれど、出会いのと

きには敵意をもってむかえたのだった——相手は死者の代弁をする一介の流れ者であり、人間性を説く宗教の伝道者であって、なにがなんでもミロの家族を徹底的に裏返そうとしているように見えたからだ。そして、彼はそれを実行した。ぼくは彼らより幸運だったんだろう。ミロはそう思った。人類史における偉大な人物としての彼を知るまえに、個人としてのアンドルー・ウィッギンを知ることができたのだから。ヴァレンタインの家族たちは、ぼくの知っている彼を知ることなど永遠にできないかもしれない。

それでいてこのぼくには本当は彼のことなどなにひとつわかっていないのだ。ぼくにはだれのこともわからないし、ぼくのことをわかる人間も存在しない。人はみな、ほかの人たちの心の動きを推しはかって生きる。そして、たまたま運良くその推測が当たっていると、〝理解〟しあえたような気になる。ナンセンスもいいとこだ。コンピュータのまえにすわらせられた猿だって、たまにはちゃんとした単語を打ちこむことがあるのに。

あんたたちにはぼくのことなどわかってない。だれにもわかるもんか。ミロは心のなかでつぶやいた。なかでもいちばんわかっていないのは、ぼくの耳のなかに住みついている口数の多い女だ。おい、聞いてるか？

「それだけギャンギャンいわれたら、聞きたくなくても聞こえるわ」

アンドルーが車に荷物を積みこんでいた。あれでは、乗客は二、三人しか乗れないだろう。

「ミロ——ノヴィーニャとわたしといっしょに乗っていかないか？」

ミロが返事をするまもなく、ヴァレンタインが彼の腕をとっていった。「あら、だめよ。こ

の人はヤクトとわたしといっしょに歩いて行くわ。わたしたち、長いあいだ狭い船に閉じこめられていたんだもの」
「なるほどね」アンドルーがいった。「ミロの母親が二十五年ぶりに息子に会ったというのに、姉さんは彼と散歩したいというわけか。まったく、お情け深いことで」
アンドルーとヴァレンタインは、もともと本気で言い争っているわけではない。したがって、ミロがどっちに決めようと、ふたりは姉弟どうしで決めたかのように笑いにまぎらしてしまうことだろう。いまさら、ぼくは体が不自由だから車でなきゃ行けないといったところで、なんの効果もなさそうだ。自分だけ特別あつかいされたからといって怒る理由にもならないだろう。あまりに非のうちどころのないやりかただったので、ひょっとしてヴァレンタインとアンドルーがまえもって打合わせておいたのだろうかと思うほどだった。おそらく、ふたりにはこんなことで打合わせをする必要もないのだろう。長いつきあいで、ふたりは、他人に気づかれることもなく波風の立たないように事をはこぶ方法を心得ているのかもしれない。ちょうど、何度もおなじ役柄を演じている役者が、まるで違和感なくアドリブを利かせられるようなものなのだ。
「ぼくは歩くよ」ミロはいった。「きっと時間がかかるから、みんなは先に行ってて」
ノヴィーニャとエラが反対しようとしたが、ミロは、アンドルーがノヴィーニャの腕をおさえ、エラのほうは、キンに肩を抱かれて口をつぐんだのを見た。
「まっすぐ帰ってきてね」エラはいった。「どんなに長くかかってもいいから、ちゃんと家に

帰ってきて」
「ほかに行くところがある？」ミロはそうたずねた。
ヴァレンタインはエンダーがなにを気にかけているのかわからずにいた。ルジタニアに来てまだ二日にしかならないが、彼女はすでに、なにか問題があることを確信していた。わからないのは、エンダーを悩ませ、不安がらせている問題がなにかということだ。彼はゼノバイオロジストたちがデスコラーダを相手に苦闘していることも、グレゴとクァーラの対立についてもすっかり話してくれたし、むろん、死神のように絶えず彼らを圧している上空のスターウェイズ議会の艦隊のこともいっていた。だが、エンダーが不安や緊張に立ちむかうのはこれが初めてではない。長年、彼は死者の代弁者として数えきれないほど何度もそういうことを経験してきていた。さまざまな国家や家族たち、集団や個人個人の問題に立ち入り、苦しみぬいて理解したのち、こんどは悩みの種を放逐し、心の病を癒してきた。いまのようなそぶりを見せたことなど一度もなかったのだ。
いや、一度だけあったかもしれない。
ヴァレンタインもエンダーも子供だったころのことだ。エンダーはバガーたちの世界を殲滅するための艦隊の指揮をとるべく訓練を受けていたのだが、あるとき、地球への帰還を命じられた――あとから考えると、最後の決戦をひかえた小康状態のときだった。エンダーが五歳のとき以来、ふたりはわかれわかれにされ、検閲された手紙のやりとりさえ許されていなかった。

それが、どうした風の吹きまわしか方針の変更があって、本部はヴァレンタインを弟のもとに行かせたのだ。彼は故郷ちかくの広大な私有地に留めおかれ、私有の湖で泳いだり——というよりはほとんどの時間を——なにをするでもなくぼんやりと筏で水に浮かんで過ごしていた。

最初、ヴァレンタインはなにもかも順調なのだと思い、ようやく弟に会えてひたすらうれしかった。ところが、彼女はじきに、なにかがひどく異常だということをさとったのだ。ただ、当時の彼女にはエンダーがあまりよくわかっていなかった——なんといっても、彼は生涯の半分を姉と離れて生きてきたのだから。それでも、弟がこれほどなにかを考えこんでいるのは、どこかおかしいという気がした。いや、そういういいかたは正確ではない。エンダーは考えこんでいたのではなく、なにも考えて〈い〉〈な〉〈か〉〈っ〉た。彼は自分を世の中から切り離してしまっていた。そして、ヴァレンタインの仕事は、切れた線をもとどおりつなぐことだった。彼をひきもどし、人と人のきずなのなかに居場所を示してやるために。

ヴァレンタインの努力が実をむすんでエンダーは宇宙へもどり、艦隊を指揮して見事バガーを徹底的に滅ぼした。あのとき以来、彼と他の人びととのつながりには微塵のゆるぎもないように見えた。

いま、ヴァレンタインはふたたび彼とわかれわかれの半生を送ったことになる。彼女にとっては二十五年、彼にとっては三十年の歳月だ。そして、またしても弟は孤立しているように見える。彼女は、自分とミロとプリクトを連れだして、はてしないカピンの平原をかすめるように車を走らせるエンダーのようすを観察した。

「まるで、大海原を行く小舟のようだろう」エンダーはいった。彼女はヤクトに連れられて網を張るためのちっぽけなランチで海へ出たことがあるのだ。三メートルの波が船を高だかと押しあげたと思うや一転して波間へひきこむ。大型の漁船ならばこれくらいの波はものともせず、心地よい海の揺らぎに身をまかせることもできるだろうが、吹けば飛ぶようなランチに乗っているときの波は圧倒的だった。文字どおり息づまるようで――ヴァレンタインはなすすべもなく座席から甲板へすべり落ちて両腕で木のベンチにしがみつき、やっとのことで息をととのえた。うねり、たける大洋と、この単調な緑の平原では比べものにもならない。

とはいうものの、エンダーにはおなじように見えるのかもしれない。延々とひろがるカピンを目にするとき、彼はそこにデスコラーダ・ウィルスを見るのだろう。適応をくりかえしながら、人間や共存する種たちをひとつのこらずなぶり殺しにしようともくろむ邪悪なウィルス。おそらくエンダーの目には、この平原は大海原のようにひっきりなしに激しいうねりと波立ちをくりひろげているように見えるのかもしれない。

漁師たちはヴァレンタインのようすを見て笑った。だがその笑いは、親がおびえる子供たちを笑うように、あざけりではなくてやさしさに満ちていた。「これくらいの荒れようでおどろくなんて甘いぞ」彼らはいった。「二十メートルの波が来たらどうするんだ」

エンダーは、一見するとあのときの漁師たちのように冷静に見える。冷静とは、すなわち外界とつながっていないということだ。ヴァレンタインやミロや、口はきかないけれどもプリク

トを相手に話はしているが、なにかを隠している。ノヴィーニャとのあいだに、なにか行き違いでもあるのだろうか。ヴァレンタインはノヴィーニャといっしょにいるエンダーを見るようになってまだ日が浅いので、ふたりのようすからくつろいでいるとか緊張しているとかを見分けることはできなかった――だが、言い争いをしたところは一度も見ていない。とすると、エンダーの悩みは、自分とミラーグレの社会とのへだたりがしだいに大きくなっていることなのだろう。ありうることだ。ヴァレンタインだってトロンヘイム人たちに受け入れてもらえるようになるまでの苦労は身にしみておぼえている。同国人のあいだでたいへんに信望のあつい男と結婚した彼女でさえそうだったのだ。エンダーの場合が思いやられる。彼は、それでなくてもミラーグレじゅうから疎外されている家族の女と結婚したのだから。だれもが彼はこの土地を癒したと思っていたが、ひょっとしてそれは過大評価だったのだろうか。

いや、そんなことはあるまい。この朝ヴァレンタインは主長のコヴァーノ・ゼリェイゾや年老いたペレグリーノ司教と面会したのだが、ふたりともエンダーにはうそいつわりのない好意を見せていた。ヴァレンタインほど会見の場数を踏んだ人間が、社交辞令や政治的偽善と純粋の友情を見誤るわけがない。たとえエンダーがここの人びとから疎外されたように感じているとしても、それは彼らが選んだことではないのだ。

わたしは事情を深読みしすぎている。ヴァレンタインは思った。エンダーのようすがおかしいとか、孤立している感じがするとしたら、それは**わたし**たちがあまりにも長く離れていたせいだろう。あるいは、エンダーにはこの怒れる若者、ミロに対する遠慮があるのかもしれない。

さもなくば、無言でエンダー・ウィッギンへの敬意を表しているプリクトのせいで、彼はしかたなくわれわれとのあいだに距離をおいているのかも。いや、もしかしたら、ほかでもないこのわたしのせいだろうか。ピギーの長老たちとの面会をあとまわしにしても、今日ただいまどうしても窩巣女王に会わせろと要求したせいなのか。とにかく、エンダーの孤立感の原因は、いまこの場にいる相手にあると考えるのが道理だ。

窩巣女王の都市の位置は、まず立ちこめる煙でわかった。「化石燃料だ」エンダーが説明した。「うんざりするほど大量に燃焼させている。ふつうなら、けっしてあんなことはしないんだが——窩巣女王たちは自分の世界をひじょうに念入りにまもり、まちがってもあんなふうに無駄づかいをしたり汚したりはしないものなんだ。ところが、ちかごろはやけに急いでいる。おまけにヒューマンは、必要なだけ燃料を燃やしたり汚染する許可を出したというんだ」

「必要って、なんのために？」ヴァレンタインが質問した。

「ヒューマンはそれをいわない。窩巣女王もだ。でも、想像はつくよ。姉さんだって、わかっているだろ」

「ピギーたちは、窩巣女王の力があれば、たった一世代のうちに社会に完全なテクノロジーがいきわたると思っているのかしら」

「まさか」エンダーが答えた。「そう考えるには、彼らはあまりにも保守的だからね。彼らは知るべきことはすべて知りたがる——だけど、機械に囲まれて過ごす気なんかこれっぽっちもないんだ。彼らの役にたつ道具はどれも森の木たちがただでふんだんに与えてくれるってこと

をわすれないように。われわれが産業と呼ぶものは、彼らにすればいまだに冒瀆に見えるんだよ」
「だったらなぜ？　どうしてあんなに煙を出しているの？」
「彼女にきいてくれ」エンダーはいった。「彼女も、姉さんになら本当のことをいうかもしれない」
「ぼくらは本物の窩巣女王と会うのかい？」ミロが質問した。
「ああそうだよ」エンダーが答えた。「というより、すくなくとも——拝謁にあずかる。彼女はわれわれに触れてくるかもしれない。しかし、あまり見ないようにしたほうがいいだろう。彼女の住んでいるところはふだんは暗いんだ。産卵の時がちかづかないかぎりね。産卵時はあたりに目をくばる必要があるから、兵隊バガーたちがトンネルをひろげて光を入れるんだよ」
「人工光はないの？」ミロがたずねた。
「彼らはそんなものは使わない」エンダーはいった。「かつてバガー戦役の時代に太陽系へ来たスターシップのなかでさえ人工光は使っていなかった。すこしでも熱を発するものなら、彼らにははっきりと見えるんだ。彼らは美を基準にしているとしか思えないようなパターンに熱源を配置していると思うよ。熱による絵画さ」
「だったら、産卵時に光を使う必要もないんじゃないかしら？」ヴァレンタインが疑問を呈した。
「それを儀式というには抵抗があるが——窩巣女王は人間の宗教をひどく軽蔑している——い

わば彼らの遺伝的伝統のようなもので、産卵には日光がつきものなんだ」
やがて一行はバガーの都市にはいった。
ヴァレンタインにとって目のまえにあらわれた光景は意外なものではなかった——エンダーといっしょに若いころを過ごしたロヴの第一コロニーは、かってはバガーの住む世界だったのだ。だが、ミロやプリクトにとってそれは驚異的かつ特異な経験であることは想像がつくし、じっさい彼女自身も多少はむかし感じたような失見当識におそわれた。その都市は、一見どこといって変わったところがあるわけではないのだ。高さが低いものが多いとはいえ、ビルは人間の建てるビルと構造原理的にはなんら相違がない。異様に見えるのは、それらが雑然とならんでいるせいだ。縦にも横にも道はなく、どのビルもてんでんばらばらの方角をむいていた。地上からの高さもまた、ひとつとしてそろっていない。地面のうえがすぐ屋根というものもあれば、見上げるような高さにそびえているものもある。ペンキはたんなる防腐剤といったところで——装飾の用はまったくなしていない。エンダーは熱が装飾の役をしているのではないかといったけれども、たしかにそうとでも考えるしかないありさまだった。
「混乱のきわみだ」ミロがいった。
「表面上はね」ロヴのことを思い出しながら、ヴァレンタインがいった。「でも、トンネルにはいってみると、地下は整然たるものだということがわかるはずよ。バガーたちは岩にもともとある裂け目や構造に沿ってトンネルをつくるの。地質にはリズムがあって、バガーはそれに敏感なのね」

「高層ビルなんか建ててどうするんだろう？」ミロはふしぎがった。
「地下へ掘りすすんでも水脈に当たれば行き止まりなのよ。高さが必要となったら、上に伸ばすしかないでしょう」
「それにしてもなんだってこんなに高いビルを建てたんだろう？」ミロが質問した。
「さあ、なんのためかしらね」ヴァレンタインは答えた。一行は、高さ三百メートルはくだらないビルを迂回してゆくところだった。すぐ先のほうには、おなじようなビルが何十も見えている。
このドライヴに出てからはじめて、プリクトが口をひらき、「ロケットだわ」といった。
エンダーがうっすらと微笑して小さくうなずくのを、ヴァレンタインは目の端にとらえた。ということは、エンダー自身の推測をプリクトが裏づけたのだ。
「なんのために？」ミロが質問した。
あぶなくヴァレンタインは、「決まってるじゃないの、宇宙へ逃げだすためよ！」と口走りかけた。だが、それを口にだしては実もふたもない——初めて宇宙へ出ようとあがいている世界に住んだ経験などミロにはないのだから。惑星から外へ出ると聞けば、ミロはシャトルに乗って軌道上を周回している宇宙ステーションへ行くことだと考える。しかし、ルジタニアの人間が使っているただ一機のシャトルでは、とうてい本格的な深宇宙での建造作業のために資材を運びだす役に立ちはしない。よしんばそれが可能だったとしても、窩巣女王が人間に助力を頼むことはありそうもなかった。

「彼女はなにを造っているの？　宇宙ステーションかしら？」ヴァレンタインは質問した。
「そうだと思う」エンダーが答えた。「それにしても、数といい大きさといい、これだけのロケットを――きっと一気に完成させてしまうつもりなんだろう。おそらくロケットに物資や人員を転換しているんだ。成功する可能性はどのくらいだと思う？」
ヴァレンタインは思わずかっとして、「わたしにわかるわけがないじゃないの」と反論しかけ、エンダーは彼女に問いかけたわけではないのだと気づいた。なぜなら、彼は間髪を入れず自分で答えを口にしたからだ。だとすると、彼は耳に埋めこんだコンピュータに質問していたのにちがいない。いや、〝コンピュータ〟ではない。ジェインだ。エンダーはジェインに質問していたのだ。車には四人しか乗っていないのに、ちゃんと五人目の人物が同席していて、エンダーとミロのふたりが身につけている宝石を通じて見聞きしているのだという考えに、ヴァレンタインはまだ抵抗があった。
「彼女なら、あっというまにやれるだろう」エンダーはいった。「じっさい、この場所の化学物質の排出量からして、窩巣女王が精錬した金属の量は宇宙ステーションばかりか最初のバガー遠征隊がもってきたような小型の長距離スターシップが二機できるほどだ。バガーなりの植民船だよ」
「艦隊の到着に先手を打つつもりなのね」ヴァレンタインはつぶやいた。たちまち納得がいった。窩巣女王は移住の準備をしている。彼女には、ふたたび〈小博士（リトル・ドクター）〉に攻撃されるまで、自分の同族たちをたったひとつの惑星に閉じこめておくつもりなどさらさらないのだ。

「困ったことに」エンダーがいった。「高巣女王が自分の狙いをわれわれに明かしてくれないんだ。だから、こっちはジェインの所見と自分の勘を頼りにするしかない。そして、ぼくの勘では、このまま行くとかなり困ったことになりそうだ」
「バガーたちがこの星を出るのが、どうして困るの？」ヴァレンタインは質問した。
「出てゆくのはバガーだけじゃないからさ」ミロが口をだした。
ヴァレンタインは第二の接点を見つけた。だからこそ、ペケニーノたちは高巣女王にこれほどまでの汚染を許したのだ。最初から二機の船を建造する予定だったのも、そのためなのだ。
「一機は高巣女王用、もう一機はペケニーノ用なのね」
「彼らはそのつもりらしい」エンダーはいった。「しかし、ぼくにいわせれば、スターシップは二機ともデスコラーダのものだ」
「なんてことだ（ノッサ・セニョーラ）」ミロがつぶやいた。
ヴァレンタインの全身を冷たいものが駆けぬけた。高巣女王が同族を救おうとするのはかまわない。けれども、それで自己適応能力のある死のウィルスをよその世界にもちこむとなると話はべつだ。
「ぼくが悩む理由がわかったろう」エンダーはいった。「なにをしているか高巣女王が人間にはっきりいわない理由もわかると思う」
「でも、わかったからといって、高巣女王を止めることはできやしないわね」ヴァレンタインはいった。

「スターウェイズ議会の艦隊に警告することはできる」ミロが口をはさんだ。
そのとおりだ。重装備をした数十隻のスターシップが四方八方からルジタニアを取り囲んでいる――二機のスターシップがルジタニアを出ようとしていると警告を受け、その初期の針路を知らされていれば、取り逃がすことはあるまい。艦隊はスターシップを破壊する。
「いけないわ」ヴァレンタインはいった。
「止めることはできないし、行かせるわけにもいかないんだ」エンダーはいった。「止めることはバガーもピギーも殺す結果につながりかねない。行かせてしまったら、人類を絶滅させることになるだろう」
「なんとか説得しなくちゃ。なんとかして、協定をむすぶのよ」
「われわれが協定をむすんだところで、それがなんの役にたつ？」エンダーはたずねた。「われわれは人類全体の代表者というわけじゃないんだ。それに、おどしをかけるようなことをしても、窩巣女王はひとひねりでわれわれの衛星や、おそらくはアンシブルまでも破壊してしまうさ。それでなくても万一のためにそうするかもしれない」
「そうなったら、ぼくらは本当に孤立無援だ」ミロがいった。
「通信は例外なく遮断されてしまう」エンダーがつけくわえる。
一瞬ののち、ふたりの頭にはジェインのことがあるのだとヴァレンタインは気づいた。アンシブルがなければ、エンダーたちはもはやジェインと話すことができなくなるだろう。ルジタニアを周回している衛星がなくなれば、宇宙を見わたすジェインの目もめしいてしまうだろう。

「エンダー、わたしにはわからないんだけど」ヴァレンタインがいった。「窩巣女王はわれわれの敵なの?」

「そこが問題なんだ。そうだろう?」エンダーが問いかえした。「バガーを復活させる難点は、そこだよ。こうしてふたたび自由をとりもどし、もうぼくのベッドの下のバッグのなかで繭にくるまっていなくてもよくなったいま、窩巣女王は自分たちの種族にとって最大の利益になるように行動するだろう——それがなんであるかは、彼女の考えしだいだ」

「でもエンダー、人類とバガーがまた戦わざるをえないなんて、まさかそんなことにはなるはずはないわ」

「ルジタニアめざして人類の艦隊が迫ってさえいなければ、そんな問題は起きないだろうね」

「だって、ジェインは艦隊への通信を切ったんでしょう」ヴァレンタインはいった。「〈リトル・ドクター〉を使用せよという指令は届かないはずだわ」

「当座はね」エンダーが答えた。「だけどヴァレンタイン、ジェインはなぜ自分の命を賭けてまで通信を切ったんだと思う?」

「指令が送りだされたからだわ」

「スターウェイズ議会は、この惑星を破壊せよという指令を出したんだ。そこで、ジェインがこうして自分の力を見せてしまったからには、相手はますますわれわれを滅ぼさねばならないと思いこむだろう。ジェインに手出しをさせない方法を見つけたが最後、この世界に対する彼らの反感はより強固なものになるはずだ」

「高巣女王とは交渉してみたの？」
「まだだよ。とはいっても、どこまで彼女からこっちの本心を隠せるのか、よくわからないんだ。なにしろ、どうやって彼女とのコミュニケーションをコントロールすればいいのかよく理解できないんだからね」
ヴァレンタインはエンダーの肩に手をおいた。「わたしが高巣女王に会うことを断念させようとしたのは、そういう理由があったからなの？　彼女に本当の危険を知らせたくなかったからなの？」
「また彼女と顔をあわせるのが気がすすまなかっただけだよ」エンダーはいった。「ぼくは彼女を愛しているし、おそれてもいるからなんだ。彼女を救うべきなのか、それとも滅ぼす努力をすべきなのか、そこがはっきりしないから。それに、いまとなってはいつ起きてもおかしくないんだが、いざ彼女があのロケットを発射したら、ぼくたちにはもう止める力はないからでもある。彼女は人類社会のすべてともろともに、ぼくたちの接続を絶ってしまうんだ」
こんども エンダーが口にしなかったこと、それは、「高巣女王はぼくとミロをジェインから切断してしまうだろう」ということだった。
「どうしても彼女との交渉が必要なようね」ヴァレンタインが断をくだした。
「それがいやなら彼女を殺してしまうか」ミロが口をはさむ。
「そう、ぼくの悩みもその点にある」と、エンダーはいった。
一行は無言で車を走らせた。

窩巣女王の巣の入口は、そこらのビルとまるでかわりがなかった。特別な警備もついていない――じつのところ、どこまで行っても一匹のバガーも見当たらなかった。ヴァレンタインは初めてコロニーへ移住した若いころの記憶をさぐり、ちゃんと住民の居ついているバガーの都市がどんなふうだったか想像しようとしていた。そう、こんなふうだった――見たところそこは、死の街といってもわからないくらいだったのだ。蟻塚から蟻があふれだしてくるように、わっとわいて出てくるバガーは一匹もいない。さんさんとふりそそぐ太陽のもと、丹精されている畑や果樹園がどこかにあることはわかっているが、ここからはそうしたものの影も形も見えなかった。

この光景を見て、わたしはなぜこんなにほっとしているのだろう？

そう思うが早いか、その疑問の答えは出ていた。彼女が地球で過ごした子供時代は、バガー戦役の真っ最中だったのだ。地球に住む他の子供たちみんながおびえたように、彼女も昆虫様のエイリアンを夢に見てはうなされたものだ。そのくせ、じっさいのバガーを見たことがある人間はほんの一握りしかいなかったし、ヴァレンタインが子供のころには、そのほとんどが死んでしまっていた。そこらじゅうにバガー文明の残骸があったあの最初のコロニーでさえ、ひからびた死骸のひとつも見つからなかったのだ。彼女が知っているバガーの姿は、ビデオ映像で見たぞっとするような絵だけだった。

とはいえ、わたしはエンダーの著した『窩巣女王』を読んだ最初の人間ではなかったのか？エンダー本人をべつにすれば、だれよりも早く、窩巣女王を人類とは別種の長所や美をもつ個

人とみなすようになった人間ではなかったか？
　たしかに、最初の人間ではあったが、そのことにほとんど意義はない。いまこの世にある人間たちは、部分的にせよ『窩巣女王』や『覇者』をもとに形作られた道徳的宇宙観のなかで成長してきた。いっぽう彼女やエンダーは、バガーに対する嫌悪を飽くことなくあおりつづける世界で成長したたったふたりの生き残りなのだ。もちろん、ヴァレンタインはバガーを見なくてすんで理屈ぬきにほっとしていた。ミロやプリクトは、窩巣女王やその兵隊バガーたちを初めて目にしても、ヴァレンタインが感じたような感情的緊張を感じることはないだろう。
　わたしはデモステネスなのだ。ヴァレンタインは自分に思い出させた。わたしはエッセイを通じて、バガーたちは理解しあい受容しあうことのできるエイリアン、ラマンであると主張してきたのだ。なんとしても子供時代の先入観を克服してみせなければ。窩巣女王がふたたびこの世にあらわれたことは、やがては人類社会全体に知れわたるだろう。そのときデモステネスともあろうわたしが窩巣女王をラマンとして受け入れかねていたのでは、面目がたたない。
　エンダーは小さめなビルの周囲をぐるりとまわった。「ここがそうだ」そういって彼は車を停め、ファンのスピードを落としてそのビルのただひとつのドアにちかいカピンのうえに着地した。戸口はひどく低い――おとなは四つんばいにならなければ通れなかった。
「なぜここだとわかるの？」ミロがたずねた。
「彼女がそういっているからさ」エンダーは答える。
「ジェインが？」ミロはけげんそうに問いかえした。それも道理で、ジェインは彼にはそんな

ことはいっていなかったのだ。
「高巣女王のことよ」ヴァレンタインが説明してやった。「エンダーの精神に直接語りかけているんだわ」
「便利なんだね」ミロがいった。「ぼくにも教えてくれる？」
「そのうちにな」エンダーはそうかわした。「彼女にあってからの話だ」
一行が車から丈の高い草地へころがるようにおり立ったとき、ミロとエンダーがしきりにプリクトのほうをうかがっていることにヴァレンタインは気づいた。いうまでもなく、ふたりはプリクトがあまりに物静かなことを気にしているのだ。どうやら、なにかいいたいことがありそうに見える。ヴァレンタインは、プリクトをおしゃべりで弁もたつ女性だと思っていた。ただ、ときおり、まるで声が出ないのではないかと思うほど口数がすくなくなる癖があるが、そんなことにいまさらおどろきはしない。むろんエンダーやミロは、いつもとはうってかわって無口になったプリクトを初めて見て気になってならないのだ。プリクトが口をきかなくなる主な理由のひとつはそれだった。なんとなく不安をおぼえたときに人はもっとも本性を表わすものであり、まるで口をきかない相手と顔つきあわせることとほど漠然とした不安をかきたてることはめったにない。彼女はそう信じているのだった。
このテクニックは初対面の相手にはあまり効果がないのだが、ヴァレンタインは家庭教師時代のプリクトを見ていて、その沈黙が生徒たちに——つまり子供たちに——自分でものを考えさせる抜群の効果を目にしてきた。ヴァレンタインやエンダーは、生徒たちと話しこんだり質

問したり討議したりして勢いこんで教えようと必死になる。ところがプリクトが相手だと、生徒たちは自分で考えを出し、こんどは自分でそれを攻撃して反対意見を論破しなければならない。この方式を使いこなせる人間はそう多くはいないだろう。プリクトがあれほどの効果をあげられたのは、無言でいるからといって完全に没交渉になるわけではないからだとヴァレンタインは結論をだした。プリクトの揺るぎない射るような視線は、それだけで、まだ疑っていることを雄弁に示した。その目でひたと見つめられると、生徒のほうはたちまち自信をなくして動揺する。必然的に、本人が見て見ぬふりをしていた疑問が顔をだし、その結果、信用していないらしいプリクトを説得するために自分で理屈を見つけるしかなくなるのだ。

ヴァレンタインの長女のシュフテは、こんな一方的な対決を〝太陽とのにらめっこ〟と呼んでいた。こんどはエンダーとミロが、目がつぶれそうな競争をする番だ。すべてを見透かす視線と、なにもいわない口の持ち主を相手に。ヴァレンタインは、本気になることはないと笑いとばしてふたりを安心させてやりたい気がした。それと同時に、困らせなさんなといってプリクトを軽く叩いてやりたいような気もした。

そのどちらもしないで、ヴァレンタインはすたすたとビルの戸口へむかい、ひきあけた。かんぬきなどはなく、把手がついているだけだ。ドアは簡単にあいた。しまらないようにおさえてやり、エンダーを先に通した。彼は膝をついてなかへ這いずりこんだ。そのすぐあとにプリクトがつづく。つぎにミロがためいきをつき、ゆっくりとひざまずいた。這いずって歩くのは、立って歩くときよりなおぎこちなく――一挙手一投足が思いどおりにならなくて、まるでいち

いち考えなければ動かせないようだった。やっとのことでミロがなかにはいり、最後にヴァレンタインがかがみこんでしゃがんだままドアを通りぬけた。彼女は四人のなかではいちばん小柄で、這いずりこまなくてもすんだのだ。

なかへはいると、戸口からさしこむ光だけが頼りだった。部屋はのっぺらぼうで、床は地面がむきだしだ。暗さに目が慣れてきてようやく、もっとも暗い部分がななめに地下へおりるトンネルになっていることがわかった。

「トンネルへはいると光はまったくない」エンダーがいった。「案内は彼女がしてくれる。みんな、しっかり手をつないでいるように。ヴァレンタイン、しんがりを頼むよ」

「立ったままおりられるの？」ミロがたずねた。たしかに重大な問題だ。

「おりられる」エンダーが答えた。「彼女がこの入口を選んだのもそのためだ」

四人は手をつないだ。プリクトがエンダーの手を、ミロは女性ふたりにはさまれて。エンダーは先頭に立ってトンネルのくだり坂に二、三歩踏みこんだ。勾配は急で、前方は思わずひるんでしまいそうな真っ暗闇だ。しかし、エンダーはまだほの暗さののこるあたりで足を止めた。

「なぜ止まるの？」ヴァレンタインがたずねた。

「案内役を待ってるんだ」

そういったとたん、案内役が到着した。あたりは暗かったが、ヴァレンタインは、ハサミ状の指がついた漆黒の腕がエンダーの手をつつくのをぼんやりと見た。エンダーは躊躇なくその指を左手でつかむ。黒い親指がエンダーの手をペンチのようにはさんだ。その先を目で追いな

がら、ヴァレンタインは腕のもちぬしであるバガーの姿をたしかめようとした。だが、なんとか見えたのは子供ほどの大きさの影と、うっすらと光をはねかえす甲皮の輝きのようなものだけだった。

見えない部分を想像してしまい、ヴァレンタインは思わず身震いした。

ミロがポルトガル語でなにやらつぶやいた。やはり彼もバガーの存在に動揺しているのだ。けれどもプリクトはあいかわらず無言のままで、はたして身震いしているのか、あるいはまるで動じていないのかヴァレンタインには知るすべもなかった。やがてミロがおぼつかない足どりで一歩まえに出ると、ヴァレンタインの手をひいて暗闇の奥へとみちびいて行くのだった。

この通路を歩くのにみんながどれほど苦労しているかとエンダーは思いやった。いままで窩巣女王に会いにきたのは彼とノヴィーニャとエラだけで、しかもノヴィーニャはたった一度おとずれただけだった。暗闇という落ちつかない状況のなかで、視力に頼ることなくどこまでつづくとも知れないくだり坂をおりつづけなければならないのだし、小さな物音を耳にすれば、目には見えないけれどもちかくに生き物がうごめいていることがわかる。

「話してもかまわないの？」ヴァレンタインがたずねた。あたりをはばかるような小声だ。

「それはいいアイディアだ」エンダーは答えた。「あっちは気にもしないよ。物音にはわりと無関心なんだ」

ミロがなにかいった。唇の動きが読めないと、ミロの話しことばはいつも以上に聞き取りに

くい。
「なんだって？」エンダーは聞きかえした。
「彼もわたしも、あとどのくらい距離があるかを知りたいのよ」ヴァレンタインが補足した。
「なんともいえないね」と、エンダーは答えた。「ここからじゃ、どっちみち距離はわからない。それに、彼女は地下のどこにいてもふしぎはないからね。あちこちに育児室があるんだよ。しかし、心配しなくてもいい。出口はちゃんと見つかるさ」
「わたしにだって見つかるわ」ヴァレンタインがいった。「懐中電灯でもあればね」
「明かりはない」エンダーはいった。「産卵には日光が必要だが、それがすんでしまえば、光は卵の成長を遅らせるだけだ。それに、ある段階では幼虫にとって致命的でもある」
「それなのに、あなたにはこの悪夢みたいな暗闇のなかでも出口がわかるというの？」ヴァレンタインは疑問を呈した。
「たぶんね。パターンがあるんだ。クモの巣みたいなものだよ——全体の構成がのみこめれば、トンネルの各部分部分もわかりやすくなる」
「このトンネルに規則性なんてあるの？」ヴァレンタインは疑わしげな口調だった。
「エロスのトンネルに似てるんだ」エンダーが説明した。じつのところ少年戦士時代に住んでいた惑星エロスでは、探検などするチャンスはあまりなかったのだが。小惑星エロスは、バガーたちがそこを太陽系への前進基地にしたとき蜂の巣状に改造された星で、初期のバガー戦役中に人類の同盟軍によって奪回され、艦隊本部になった。エロスで過ごした数カ月間、エンダ

ーはもっぱら宇宙空間においての艦隊の指揮を学ぶことに没頭していたのだ。それでいて、当時思っていた以上にトンネルに注意をはらっていたにちがいない。その証拠に、初めて窩巣女王によばれてルジタニアの地下巣窟へおりたとき、エンダーは自分が曲がり角やくねる通路をごく自然に通っていけることに気づいたのだった。それらには違和感がなく――いや、それどころか当然のように感じられた。

「エロスって？」ミロが質問した。

「地球のそばにある小惑星よ」ヴァレンタインがいった。「エンダーはそこで精神がちょっとおかしくなったのよ」

　エンダーはトンネルのシステム構造をすこし説明しようとした。けれども、あまりにも複雑すぎてむりだ。フラクタルがそうであるように、このシステムは細部を把握しようにもあまりに変数が多すぎる――細かく考えれば考えるほど、理解しにくくなるのだ。もっともエンダーにとってはそれは常におなじで、ひとつのパターンがくりかえし反復しているように見えた。あるいは、エンダーがバガーを倒そうと研究していて、なぜか集合意識（ハイヴマインド）内部にはいりこんでしまったせいなのかもしれない。もしかしたら、彼はバガーの考え方を身につけただけなのかも。だとしたらヴァレンタインのいったことは正しい――エンダーは人間の精神を一部失って、すこしおかしくなった、あるいはハイヴマインドをちょっとばかり取りいれたのだ。

　ある曲がり角を折れたとき、ようやくほの明かりが見えてきた。「やれやれ（グラシヤス・アデウス）」ミロが小声でいった。プリクトも――この鉄のような女性は、どう見てもエンダーの記憶にある優秀な

学生と同一人物だとは思えなかった——ほっと吐息をもらすのを見て、エンダーは満足した。やはり彼女はまがりなりにも生身の人間であるらしい。
「もうすぐだ」エンダーはいった。「産卵中だから、機嫌もいいだろう」
「邪魔されたくないんじゃない？」ミロがたずねた。
「セックスでいえば軽い絶頂のような気分で、これが数時間はつづくんだ」とエンダーは説明した。「そのあいだはひじょうに気分が高揚している。ふつう、窩巣女王の周囲には自分の体の一部のかわりをする兵隊バガーや雄のバガーしかいない。彼女は恥じらいという感覚をおぼえないんだ」
そういいながらも、エンダーは内心で彼女の存在を強く感じていた。むろん、彼女はいつでも彼に意思を伝えることができる。ただ、位置がちかくなると、彼女の息づかいが頭蓋骨のなかにひびくような感じだった。重量感、圧迫感がつのるのだ。ほかの三人も感じただろうか。窩巣女王は彼らにも話しかけることができるのだろうか。エラの場合はなんの変化もなかった——エラはとうとう無言の会話をこれっぽっちも感知できなかった。ノヴィーニャのほうは——そのことは話したがらず、なにも聞こえなかったといいはった。しかしエンダーは、彼女がエイリアンの存在を受けつけたがらなかっただけではないかと推測している。この場にいるかぎりはノヴィーニャとエラのどちらの考えていることもはっきりと聞こえたが、自分の〝声〟を聞かせることはできなかったと窩巣女王はいう。きょうも、それとおなじことが起きるのか。
窩巣女王がほかの人間たちに話しかけられたら、さぞかし楽なことだろう。本人はできると

断言するが、窩巣女王には未来に対する独断的な予見と過去に起きたこととの強固な記憶とを区別する能力がないのだということが、過去三十年にわたる歳月でエンダーにはわかってきた。彼女は自分の予測をこれっぽっちも疑おうとしない。自分の記憶とおなじように信じきっている。そのくせ、現実が予測どおりにならなかったときは、いまや過去となってしまったのとはちがう未来を予見したことをきれいさっぱりわすれたふりをするのだ。

これは窩巣女王というエイリアンの考え方のなかで、エンダーがもっとも不快だと思うことのひとつだった。エンダーが育った文化では、自分の選択がどういう結果を生むか予見する能力で、その人物の成熟度や社会への適応性を判断した。ある意味で、窩巣女王はこの点が極端に劣っているように思えた。彼女ほどの知恵と経験のもちぬしにしては、窩巣女王は小さな子供なみにむこう見ずで根拠のない自信に満ちている。

そのこともあって、エンダーは窩巣女王との交渉に不安をいだいてしまうのだ。はたして彼女は約束をまもることができるのだろうか。もしまもれなかったとしても、自分がなにをしたかすら彼女の認識の範疇にはないのではあるまいか。

仲間たちの話していることに神経を集中しようと努力しながらも、ヴァレンタインは先導役のバガーのシルエットに目がいってしかたなかった。想像していたより小柄で——身長はせいぜい一メートル半かそれ以下だ。あいだに人がいるので体の一部が垣間見えるだけだが、全体像がつかめないのがかえって良くない。このてらてらした黒い敵はエンダーの手をがっちりに

ぎって死ぬまで放さないのではないかという考えが頭にこびりついて去らなかった。
死ぬまで放さないなどということがあるものか。相手は敵ではない。そもそも生き物と呼ぶには値しないのだから。これには一個の耳とか足の指一本ていどの役割しかない――バガーの個体は、それぞれ窩巣女王の運動器官や感覚器官にすぎないのだ。ある意味では、窩巣女王はすでにヴァレンタインたちとともにいる――兵隊バガーや雄バガーはたとえどこにいても窩巣女王と一緒なのだ。それがたとえ何百光年もへだたった場所であろうとも。これは怪物などではない。これこそエンダーの著書に書かれている、まさにあの窩巣女王だ。これこそが、わたしとともに時間を過ごした年月のあいだエンダーがもちはこび、いつくしんできたものなのだ。ただ、わたしはそうとは知らなかった。なにもおそれることはないのだ。
ヴァレンタインは恐怖の感情をおさえようとしてみたが、うまくいかなかった。汗がにじんでくる。すべってしまって、麻痺したミロの手を放しそうになるのがわかった。窩巣女王のねぐらに――いや、彼女の家であり、育児室である場所に――ちかづくにつれて、恐怖はますますつのるいっぽうだ。自分ではどうしようもないとなったら、助けをもとめるしかない。ヤクトがいてくれればいいのに。だれか、助けて。
「ごめんなさいね、ミロ」彼女はささやいた。「わたしの汗ですべるでしょ」
「あなたの汗？」ミロが問いかえしてきた。「てっきりぼくの汗だと思っていたよ」
うまい応対だ。ミロは笑った。ヴァレンタインもつられて笑った――すくなくとも神経質なくすくす笑いをもらした。

ふいにトンネルがひらけ、広びろとした部屋に出た一行は、丸天井の穴からまっすぐにさしこむまばゆい日光に目をまたたいた。窩巣女王はその光のまっただなかにいた。そこらじゅうに兵隊バガーがいたが、いまこうして日の下で女王をまえにして見ると、彼らはひどくちっぽけで華奢だった。ほとんどのものは身長一メートル半どころか一メートルにちかく、いっぽう女王は確実に体長三メートルはある。高さは体長の半分に満たない。羽覆いは巨大で重おもしく、日光を受けてほとんど金属的な七色にきらめいていた。下腹は人体がそっくりおさまるほど長くて分厚い。それはじょうごのように先細りになって産卵管につづいている。産卵管の末端は、ねっとりと粘着質な黄色っぽい透明の液体にまみれてぶるぶるふるえながら光っていた。それが部屋の床にあいた穴に深ぶかとさしこまれてはもちあがり、液体は穴の底へと人目をはばかる唾のようにだらりと消えてゆくのだ。

これほど大きな生物が虫けらそっくりの行動をするというだけでもグロテスクでおぞましい光景だったが、つぎに起こったことはヴァレンタインの度肝をぬいた。ただ産卵管をつぎの穴に入れるかわりに、女王はくるりとむきをかえ、すぐそばを飛んでいた兵隊バガーをとらえたのだ。痙攣しているバガーを巨大な前肢のあいだにはさんで引きよせると、その脚を一本一本むしりとってゆく。脚が一本食いちぎられるたびに、残った脚は声なき悲鳴をあげるかのようにいっそう激しくうごめいた。最後の一本が嚙みとられたとき、ヴァレンタインは思わず胸をなでおろしたくなる気持ちをどうしようもなかった。これでもう悲鳴を見せつけられずにすむのだ。

そして窩巣女王は脚をむしりとった兵隊バガーを頭からつぎの穴に押しこんだ。そうしておいて、おもむろに産卵管を穴のほうへとむける。ヴァレンタインがじっと観察していると、産卵管の先端にあふれた液体の粘着度がましてボール状になった。ところが、結局それは液体などではない——というより液体だけではなく、巨大な泡のなかにはやわらかいジェリー状の卵がはいっていたのだった。窩巣女王は巧みに体のむきをかえて、まっすぐ日光に顔をむけ、その複眼が無数のエメラルド色の星のようにきらめいた。そして産卵管が下方にさしこまれる。もちあがったとき先端にはまだ卵がくっついていたのだが、ふたたびさしこまれて出てきたときは卵は消えていた。それからさらに数回、窩巣女王は下腹部を穴にさしこみ、もちあげるたびに先端から垂れさがる糸のつながりは長くなっていった。

「ノッサ・セニョーラ」ミロがつぶやいた。ヴァレンタインは、それがスペイン語のヌエストラ・セニョーラにあたることを知っている。すなわち、われらが奥方さまということだ。ふつうならほとんど無意味といってもいい表現なのだが、この場ではそれがぞっとするような皮肉に聞こえた。この地下深い洞窟で、聖母マリアを意味することばを聞こうとは。窩巣女王は暗黒世界の聖母なのだ。孵化した幼虫の餌にするために、彼女は横たわる兵隊バガーの体に卵を産みつける。

「これはめったにあることじゃないんだわ」プリクトの声がした。

一瞬、ヴァレンタインはプリクトがしゃべったというだけで呆気にとられていたが、やがてプリクトの発言の意味が頭にはいってきた。彼女のいうとおりだ。バガーの幼虫が孵るたびに

生きた兵隊バガーを犠牲にしなくてはならないとしたら、人口がふえるわけがない。そもそも、このような巣窟だって造れなかっただろう。なぜなら、窩巣女王が最初にここで卵を産み落としたときには、脚をむしりとって餌にしたくても兵隊バガーがいなかったのだから。

〈新しい女王の場合だけ〉

それは、まるで自分の考えのようにヴァレンタインの頭にうかんだ。窩巣女王が卵を抱く穴に生きた兵隊バガーの体をつめこむのは、それが次代の窩巣女王となるべき卵だった場合だけだ。だが、これはヴァレンタインが自分で考えだした結論ではなかった。自分の考えにしてはあまりにも確信に満ちている。ヴァレンタインがこの種の情報を知っているはずはないにもかかわらず、即座に疑問の余地もない明快きわまる結論が出た。古代の予言者や巫女が神の声を聞くときはこんなふうだろうとつねづね想像していたが、そのとおりだった。

「聞こえたかい？　だれか、いまのを聞いた？」エンダーがたずねた。

「ええ」プリクトが答えた。

「そのようね」ヴァレンタインもいった。

「聞こえたって、なにを？」ミロは問いかえす。

「窩巣女王の声だよ」エンダーがいった。「兵隊バガーを卵用の穴に入れるのは、新しい窩巣女王の卵を産むときだけだと説明してくれたんだ。卵は五個生まれる――すでに二個目まで産みおわった。彼女は、これを見せるためにわたしたちを招んだんだ。植民船を送りだすことを、彼女はこうして伝えようとしているんだよ。五個の女王候補を産み、もっとも強いものが決ま

るまで待つ。それを送りだすつもりなんだ」
「ほかの四個はどうなるの？」ヴァレンタインがたずねた。
「すこしでも見込みがある幼虫は繭にくるんで保存する。彼女もその状態にされた個体だからね。ほかのものは殺して食べてしまうのさ。そうするしかない――ライバルになりかねない女王の体の痕跡をのこしておいて、それが万が一にも、この窩巣女王と交配できずにいた雄バガーのどれかに触れたら、そいつは発狂して彼女を殺そうとするだろう。雄バガーはいったん伴侶と決めた相手には完全に忠実だからね」
「ぼく以外は、みんな彼女の声を聞いたの？」ミロがたずねた。がっかりしているようだ。窩巣女王の声は彼にはとどかなかった。
「ええ」プリクトが答えた。
「ほんのすこしだけどね」ヴァレンタインがなぐさめる。
「できるだけ頭をからっぽにするんだ」エンダーがアドバイスした。「なにかの歌でも思い浮かべるといい。そうすると聞こえやすくなる」
そのあいだも窩巣女王はつぎなる兵隊バガーの脚をほとんどちぎりとろうとしていた。ヴァレンタインは、窩巣女王のまわりに山積みになってゆく脚を踏みつけたらどうなるだろうと想像した。きっと、ぞっとするような音をたてて小枝のようにぽっきりと折れることだろう。
〈とても柔軟だから折れることはないわ。たわむだけ〉
ヴァレンタインの想像にこたえて窩巣女王がいった。

〈汝はエンダーの分身ね。わたしの声が聞こえるでしょう〉

頭に聞こえるその声は、さっき以上にはっきりしていた。こんどはさっきほど強引ではなく、もっと抑制が効いている。ヴァレンタインは窩巣女王が伝えようとしていることと、自分の考えとを聞き分けることができた。「もっと話して（ファーラマイス）ください（エスクート）」「聞こえる（オウヴィイ）」ミロがささやいた。ついに彼にもなにか聞こえたのだ。

〈フィロティック通信ね。汝はエンダーとつながっている。わたしがフィロティック・リンクを通じて彼と話をすると、汝にも聞こえる。こだまだわ。反響音よ〉

窩巣女王がどうやってスターク語で彼女の頭に話しかけられるのか、ヴァレンタインは懸命に想像した。が、考えてみれば窩巣女王自身はその種の操作などいっさいしていないにちがいない——ミロは母語であるポルトガル語で窩巣女王の声を聞いている。ヴァレンタインの耳にとどいているのだってスターク語などではなくて、その基盤になった英語、それも幼児期から使っていたアメリカ英語なのだ。窩巣女王が四人に送っているのは言語ではなくて思考であり、受けとった側の脳が、それを各人の記憶の底にある言語になおして理解しているのだ。ヴァレンタインが〝こだま〟ということばにつづいて〝反響音〟ということばを聞いたのは、窩巣女王がなんとか適当なことばをさがそうとしていたからではなくて、ヴァレンタイン自身の精神が内容にぴったりすることばをつかもうとしていたからなのだ。

〈エンダーの分身。われらの仲間たちのようだ。ただ、汝らには自由意思がある。独立したフ

ィロトが。汝らはみな、〝はぐれ者〟ね〉
「じょうだんをいってるんだよ」エンダーがささやいた。「評価しているわけじゃないんだ」
エンダーの解説がヴァレンタインにはありがたかった。〝はぐれ者〟といわれて思わず頭にうかんだのは、群れから排除された象に踏みつぶされて死んでゆく人間のイメージだったからだ。それはヴァレンタインの幼児期の記憶にある物語のせいで、彼女はそれで初めて〝離れ象〟ということばを知ったのだった。そのことばが呼び起こすイメージはいまだにおそろしく、子供のころに感じた恐怖そっくりだった。それでなくても窩巣女王が頭にはいりこんだことは不快でたまらないのだ。不快感のあまり、とうとうわすれていた悪夢までがよみがえった。窩巣女王はなにからなにまで悪夢そのもの。よくもまあ、この生き物がラマンだなどと想像できたものだ。たしかに意思の疎通はある。ありすぎるほどだ。まるで精神病のようなコミュニケーションが。
それに、窩巣女王はこういった——自分のことばがこれほど良く聞こえるのは、一行がエンダーとフィロトでつながっているからだ、と。ヴァレンタインは、ルジタニアへの旅のとちゅうでのミロとジェインの話を思いかえした——彼女のフィロトのより糸がからみあってエンダーにつながり、エンダーから窩巣女王へ通じているのではあるまいか。それにしても、どうしてそんなことが起こりうるのだろう。だいいち、エンダーが窩巣女王とつながっているなんて、どうしてそんなことがありうるだろうか。
〈われらから彼に接触した。彼はわれらの敵だった。われらをほろぼそうとしていた。われら

は彼が危害をくわえないようにしたかったのだ。ちょうど離れ象をおとなしくさせるように〉
謎はドアをあけはなつように一気に氷解した。バガーたちは、かならずしも生まれつき従順なわけではないのだ。場合によっては彼らも各人の人格をもつことが可能だろう。それがむりでも、統制を断ち切ることくらいは。そこで窩巣女王は彼らを独走させないようにフィロティック的にしばりつけ、自由を奪う方法を編みだしたのだ。

〈彼は見つかった。けれど、しばりつけることはできなかった。彼は強すぎたのだ〉

それなのに、だれもエンダーがどれほどあやうい立場にいるか想像もつかなかった。窩巣女王がエンダーをとらえ、そこらのバガーたちとおなじく意のままにあやつれる思考力のない道具にできると考えているとは。

〈彼をひっかける網をはりめぐらした。彼が大切にしているものを見つけた。われらはそう考えた。そこにはいりこんだ。それにフィロティック核（コア）をあたえ、彼に接続した。しかし、それだけではじゅうぶんではなかった。こんどは汝だ。汝がほしい〉

そのことばが頭のなかにひびき、ヴァレンタインはハンマーでなぐられたような気がした。窩巣女王はわたしのことをいっている。わたし、わたし、わたし……わたしとはいったいだれなのか、彼女は必死に記憶をさぐった。ヴァレンタインだ。わたしはヴァレンタイン。窩巣女王はヴァレンタインのことをいっている。

〈汝が鍵だった。汝こそが。汝をさがすべきだったのだ。彼がもっとも切実にもとめていたのだから。もうひとつのものは必要なかった〉

ヴァレンタインは胸のむかつくような感覚におそわれた。まさか結局は軍のすることが正しかったなんて。エンダーを守る方法はただひとつ、生木を裂くようにヴァレンタインとエンダーをひきはなすことだったなんて。わたしがそばを離れなかったら、バガーたちはエンダーを自由にあやつるための道具にわたしを使っていたのだろうか。

〈いいえ。それは不可能だった。汝も彼におとらず強いから。われらはほろびる運命だった。われらは死んだのだ。彼はわれらの自由にはならなかった。といって、汝の自由にもならない。事情は変わったのだ。彼をおとなしくさせることはできなかったが、われらは彼とからみあった〉

ヴァレンタインの頭に、船に乗っているときに思いついた情景がうかんだ。人間どうしのつながりのなかでも、家族は目に見えないきずなでつながっている。子供は親に、父親と母親はおたがいに、あるいはまた自分たちの親にという具合に、大切に思う相手につながっているのだ。だが、いまやそこには、ほかならぬヴァレンタイン自身がエンダーとむすびついている姿しか見えなかった。そしてエンダーがむすびついている相手は……窩巣女王だ……女王が産卵管をふるわせると、そこからつながるより糸が振動する。そして、そのより糸の先端にはエンダーの頭がゆらゆらと上下に揺れて……

ヴァレンタインはかぶりをふってそのイメージをふりはらおうとした。

〈われらは彼をコントロールしない。彼は自由だ。その気になればわたしを殺すこともできる。止めだてはしない。汝は、わたしを殺すつもりか?〉

こんどの〝汝〟はヴァレンタインにむけられたものではなかった。彼女は質問の対象が自分ではなくなったことを感じとった。するとそのとき、窩巣女王が返事を待っているあいだに、またべつの思考が頭にはいりこんだような気がした。神経過敏になり、こうしてエンダーの返事を待っているいまでなかったら、おそらく自分の思考だと思いこんだだろうというほど彼女にちかい思考方法だ。

ぜったいに、と、ヴァレンタインの頭に浮かんだ。わたしはぜったいにあなたを殺しはしない。わたしはあなたを愛している。

この思考とともに、窩巣女王に対する純粋そのものの感情がきらめくように流れこんできた。そのとたん、ヴァレンタインの心にあった窩巣女王のイメージから、いっさいの嫌悪感が消え去った。窩巣女王の印象は威厳に満ちて気高く、格調高いものに変わった。羽覆いの七色の光はもはや水面に浮かんだ汚らしい油膜とは見えず、複眼に照りはえるかがやきは光輪のごとく、腹部の先端のぬめぬめと光る液体は、乳飲み子の口と母親の乳首にあふれる母乳とをつなぐよだれのように見えた。いまのいままで嘔吐感とたたかっていたヴァレンタインが、うってかわったように窩巣女王を崇拝したくさえなったのだ。

頭にはいりこんできたのはエンダーの思考だとわかっている。あれほどまでに親近感を感じたのはそのためだ。彼の目をとおした窩巣女王の姿を見て、ヴァレンタインはやはり自分の考えは正しかったのだと直観した。もう何年もまえのことだが、彼女がデモステネスとして書いたときの考えが。窩巣女王はやはりラマンだった。異なる種だが、おたがいに理解しあうこと

は可能なのだ。

そのイメージが薄れてゆくと、ヴァレンタインの耳にだれかのすすり泣きが聞こえてきた。プリクトだ。ずいぶん長い年月をともに過ごしてきたが、彼女がこんなもろさを見せたのは初めてだった。

「美しい（ボニータ）」ミロがつぶやいた。

彼にはそういうふうにしか見えないのだろうか。高巣女王が美しいと。やはりミロとエンダーのあいだのコミュニケーションは微弱なのだろう——それも当然だ。彼とエンダーのつきあいはそう長くはないし、それほどよく知り合ってもいない。それに対してヴァレンタインは生まれたときからエンダーを知っているのだ。

けれども、エンダーの思考を受容するヴァレンタインの能力がミロより格段に強い理由がつきあいの長さだとしたら、プリクトがヴァレンタインよりはるかに明確に受信しているという事実の説明がつかない。もしかしたら、何年もエンダーを観察しつづけ、良く知りもしないまま彼を崇拝してきたせいで、プリクトはエンダーと自分とのつながりをヴァレンタイン以上に強固なものにすることができたのだろうか。

そうに決まっている。そうだったのだ。ヴァレンタインは結婚している。夫がいる。子供もいる。弟とのフィロティック接続は弱まりがちだ。それに反してプリクトには接続を分散しなければならないほど強力なしがらみはない。したがって高巣女王がフィロトのからみあいで思考を伝達できるようにしたならば、プリクトがエンダーの思考をもっとも完全に受容できるの

は理の当然だった。彼女には気を散らすものがないのだ。思う存分、神経を集中することができただろう。

ノヴィーニャだって、なんといっても子供とのきずながあるのだから、プリクトのようにエンダーのことだけに没頭するわけにはいかないのではないか？　きっとむりだ。このことを薄うすとでも知っているのなら、エンダーはおそらく気にしているだろう。あるいは、わるい気はしないだろうか？　男女を問わず、いやというほど人間を見てきたヴァレンタインは、尊敬にまさる誘惑はないということを知っていた。わたしはエンダーの結婚生活をあやうくするようなライヴァルを連れてきてしまったのだろうか。

エンダーやプリクトには、この瞬間もわたしの考えが読めているのでは？

ヴァレンタインは、なにもかも見透かされているようなおびえを感じた。打てばひびくように、まるで彼女の不安をなだめようとするかのように、ふたたび寓巣女王の心の声が聞こえてきてエンダーが送りだしている思考をあっさりと洗い流した。

〈汝がなにをおそれているか、わたしにはわかる。しかし、わたしのコロニーはだれひとり死人を出すことはないだろう。われらはルジタニアを離れたら、スターシップのなかでデスコラーダ・ウィルスを死滅させることができる〉

それはどうだろう。とエンダーは思った。

〈なんとかする。われらはデスコラーダ・ウィルスをもちだしはしません。人類を救うために、われらが死ぬ必要はないと思う。われらを殺さないで。殺さないで〉

殺すもんか。エンダーの思考は窩巣女王の哀願にかき消されるようなささやき声になっていた。

どっちみち、わたしたちにあなたを殺すことはできない。ヴァレンタインはそう思った。あなたのほうこそ、苦もなくわたしたちを殺せるだろうに。スターシップが完成してしまえばそれまで。あなたは武器をもつことになる。あなたは人類の船団をむかえ撃つことができるでしょう。こんどは指揮をとるのはエンダーではないのだし。

〈けっしてしない。けっしてだれも殺さない。ぜったいにしないと約束した〉

安心してくれ、とエンダーのささやき声が聞こえた。安心していい。安心して、おだやかにそっと休んでいてくれ。なにもおそれることはない。人間をおそれることは。

ピギーたちのために船を造らないで。ヴァレンタインは心のなかでいった。自分のための船なら造ってもかまわない。自分の体内にいるデスコラーダ・ウィルスを殺すことはできるのだから。でも、ピギーたちのための船は造ってはいけない。

哀願するような窩巣女王の思考が、激しい反発に一変した。

〈彼らにも生きる権利があるのではないか？　わたしは彼らに船を造ると約束した。わたしは汝にけっして殺さないと約束した。その約束を破れというの？〉

そうはいわないわ。ヴァレンタインは心で思った。彼女はすぐさま、こんな裏切りを提案した自分を恥じていた。それとも、その感情は窩巣女王のものなのだろうか？　あるいはエンダーの？　どの思考や感情が自分のもので、どれが自分以外のものなのか、本当に確信をもって

いえそうにない。

さっきの恐怖――あれは自分のものだ。その点はほぼ断言できた。

「おねがい」ヴァレンタインはつぶやいた。「もう帰りたいわ」

「ぼく(エウ)もだ(タンピエン)」ミロがいった。

窩巣女王のほうへ一歩足を踏みだして、エンダーは手をさしのべた。相手からは腕をさしのべてはこなかった――最後のいけにえを卵の穴に詰めこむので手いっぱいだったのだ。そのかわり、窩巣女王は羽覆いをもちあげてぐるりとまわし、エンダーのほうへと動かし、ついに彼の手はその黒光りする表面にふれた。

さわっちゃいけない！　ヴァレンタインは声にならない悲鳴をあげた。つかまってしまうわ！　窩巣女王はあなたを思うさまあやつるつもりなのよ！

「だまって」エンダーが声に出して制した。

エンダーが姉の心の叫びに対してそういったのか、窩巣女王が彼にだけなにかいいかけるのを制そうとしたのか、ヴァレンタインには確信がもてなかった。それからほどなく、エンダーは案内役のバガーの手をとって、ふたたび一行をトンネルのなかへと先導していった。こんどはヴァレンタインがエンダーのつぎで、ミロが三番手、そしてプリクトがしんがりだ。したがって、さいごに窩巣女王をふりむいて視線をなげかけたのはプリクトであり、手をふって別れのあいさつをしたのもプリクトだった。

地上へ出るまでのあいだ、ヴァレンタインはいま起きたことの意味をつかもうと苦闘した。

人間どうしが直接心で話せたらどんなにいいかというのは、彼女のかねてからの切望だった。言語のあいまいさにまどわされることがなければ、完全に理解しあうことができて、無用ないさかいなどなくなるだろうと思っていたのだ。ところが、それがかえっておたがいの相違を際立たせることがわかった。言語は、いともたやすくおたがいの相違をやわらげ、小さくして、ものごとがスムーズにはこぶようにしてくれる。そのおかげで、真からわかりあっているとはいえない者どうしがうまく折りあっていけるのだ。理解しあっているという幻想があればこそ、人びとは現実以上に自分たちが似ていると思う余地がある。もしかしたら言語を使っているほうがましなのかもしれない。

一行はビルから陽光のもとに這いだして、そろって目をしばたたき、ほっと笑いをもらした。

「楽しいもんじゃなかっただろ」エンダーがいった。「きみがどうしてもというから来たんだよ、ヴァル。すぐにも彼女に会いたいというから」

「わかったわ。わたしがいけないのよ」ヴァレンタインがいった。「いまに始まったことじゃないけど」

「美しかったわ」プリクトがいった。

ミロはなんともいわず、カピンのなかに寝ころんで片腕で目をおおった。

そうして寝ているミロの姿に、ヴァレンタインには、ふとあるべき姿、かつての青年の姿を見た。横になっていればよろめかないし、黙っていれば聞き取りにくいことばも出ない。同僚異類学者(ゼノロジャー)が恋におちたのもむりはない。オウアンダという名前の女性だとか。恋人の父親が自

分の父親でもあったと知って、どんなに悲痛な思いをしたことだろう。それはエンダーが三十年前にルジタニアで死者の代弁をして明るみに出した最悪の事実だった。オウアンダは、この青年を失った。そしてミロもまた、それまでの自分というこの青年を失ったのだった。ピギーを救うためにフェンスを越えようとした気持ちもわからないではない。恋人を失った以上、彼は自分の命など捨ててもいいと思った。ただひとつ、結局は死にそこなってしまったのが誤算だった。ミロは目に見えない心ばかりか目に見える体までも傷ついた状態で生き延びてしまったのだ。

どうして、ミロを見ていてこんなことを思いついたのだろう？　なぜ、突然ヴァレンタインはこうもひしひしとそれを実感したのだろう？

まさにいま、ミロが自分でそう考えているということだろうか？　ヴァレンタインはミロ自身の自画像を受容しているのだろうか？　おたがいに精神的につながった状態がまだ完全には消えていないのだろうか？

「エンダー」彼女は弟に問いかけた。「下で起きたことを説明して」

「想像以上の結果だったよ」エンダーは答えた。

「なんのこと？」

「われわれのつながりがさ」

「ああなることがわかっていたわけ？」

「なればいいと思っていた」エンダーは車の横にすわって、丈の高い草のなかに足をぶらぶら

させた。「きょうの彼女は熱くなっていたと思わないかい？」
「そうなの？　わたしには比べようがないわ」
「ときにはひどく知的になったりするんだ――話しているだけで、こっちは高等数学でもやっているような気分になる。きょうの彼女は――子供みたいだった。そりゃ、女王になる卵を産んでいるときに居あわせたのは初めてのことだけどね。おそらく彼女は、いうつもりがなかったことまで口にしてしまったんじゃないかな」
「あんな約束をするつもりはなかったというの？」
「そうじゃないんだ、ヴァル、ちがうんだよ。彼女が約束というときは、いつも本気だ。彼女はうそのつきかたを知らないんでね」
「じゃあ、いうつもりがなかったことというのは、なんなの？」
「ぼくと彼女のあいだのリンクのことをいいたかったんだ。彼らがどうやってぼくを手なずけようとしたかを。たいした聞き物だったと思わないか？　きみこそ彼らがもとめていたリンクかもしれなかったと思って、彼女はついカッとなった。そうだとしたらどういうことになるかわかると思うが――彼らは破滅させられなくてすんでいたはずなんだ。ぼくを使って人類の政府とコミュニケートすることさえできたかもしれない。そして、銀河で共生できただろう。それほどのチャンスをふいにしたわけさ」
「それじゃあなたは――バガーの兵隊みたいなものになってしまうところだったわ。彼らの奴隷に」

「そりゃそうさ。ぼく個人としては本意じゃなかったろうね。しかし、それでどれほどの命が助かったかを考えれば――しょせん、ぼくは一兵卒だったんだ。ひとりの兵士の死で、何億という命が助かるなら……」

「でも、そんなことができるはずはないわ。あなたにはあなた個人の意思があるのよ」ヴァレンタインがいった。

「そのとおり」エンダーがいった。「というより、高巣女王に屈しないほど独立心が強いといってもいいだろう。きみもそうだ。安心したろう？」

「いまは安心どころじゃないわ」ヴァレンタインはいった。「下では、わたしの頭にあなたがいたんだもの。それに高巣女王まで――まるで土足で踏みこまれたような気分だった――」

エンダーが意外そうな顔をした。「ぼくには、一度もそんなふうには感じられなかったが」

「そうね、単純なものじゃなかったのよ。気分が高揚するような感じだったわ。それに恐怖もあったし。彼女はひどく大きな存在で――頭がいっぱいになってしまって。まるで、自分以上に大きなだれかをしまいこもうとするような感じといえばいいかしら」

「わかるような気がする」エンダーはそういって、プリクトにむきなおった。「きみもそう感じたかい？」

ヴァレンタインは、プリクトがエンダーを見つめる視線に初めて気づいた。大きく目を見開き、おののくように目を凝らしている。だが、プリクトはなにもいわなかった。

「そんなに強烈だった、というわけか」エンダーがつぶやいた。軽く笑って、彼はミロをふり

むいた。
エンダーにはわからないのだろうか？　プリクトの頭は、とっくのむかしからエンダーのことだけでいっぱいだったのだ。そこへもってきて、心に直接エンダーがはいってきたのだから、強烈すぎるほどだっただろう。窩巣女王は離れバガー(ロウグ)を手なずける話をしていたが、プリクトはエンダーによって〝手なずけられた〟ということができるだろうか？　彼女の心がエンダーにとりこまれてしまうなどということが可能だろうか？
いくらなんでも。そんなことはありえない。神さま、そうではありませんように。
「手を貸そう、ミロ」エンダーがいった。
ミロは素直にエンダーに助け起こされた。そして、一行は車内にもどって家のあるミラーグレへとむかったのだった。

まえもってミサには出たくないといってあったので、エンダーとノヴィーニャがふたりで出かけてしまい、ミロひとりが家に残ったとたん、彼はとうていひとりで家にはいられないということがわかった。目には見えないが、だれかがすぐそばにいるような気がしてならなかったのだ。小柄な姿が物陰で彼を見はっている。つるりとした丈夫な甲冑に身をかため、ほっそりした腕の先にあるのはたった二本の鉤爪のような指だけ。その腕は、食いちぎられ、よくかわいた焚きつけのように穴にくべられてしまう。きのう窩巣女王のもとへ行ったことで、ミロは思いがけず心をかき乱されてしまったのだ。

おまえは異類学者(ゼノロジャー)なんだ。ミロは自分を叱咤した。おまえは人類以外の生物を相手に人生を送ってきた。エンダーがヒューマンの哺乳類型をした肉体をばらばらにするのをその場で目撃しても、おまえは眉ひとつひそめなかった。感情に左右されない科学者だからだ。たしかに、ときには研究対象に感情移入しすぎるきらいもあったかもしれない。だが、おまえは彼らのことで悪い夢を見たり、だれかが物陰でようすをうかがっているなどという思いにとらわれたりはしないのだ。

だがこれは気のせいではない。そいつはミロの母の家のドアの外で待ちかまえている。日曜の朝のまばゆい太陽が照りつける野原の草いきれのなかには、バガーが身をひそめて虎視眈々(こしたんたん)とチャンスを待つ場所はないからだ。

ほかのみんなは、こんな気分にならないのだろうか？

窩巣女王は、たしかに昆虫などではなかった。彼女もその臣下たちも、ペケニーノとおなじ温血動物だ。哺乳類とおなじように呼吸もすれば汗もかく。進化の過程では昆虫と縁つづきになるような構造的な痕跡がのこっているかもしれないが、それをいいだせば人間だってキツネザルやトガリネズミやドブネズミに共通点があるわけで、バガーたちは燦然たる見事な文明を築いてきた。いや、闇の世界の見事な文明といったほうがいいかもしれない。エンダーのように尊敬と畏敬と愛情をもって彼らを見なければならない。

それなのに、かろうじてミロにできたのは、耐えることだった。

窩巣女王がラマンであることには疑問の余地はない。人間を理解し、容認する能力はある。

問題は、こちらが彼女を理解し、容認できるかということだ。しかも、その自信がもてない人間はミロだけではあるまい。エンダーがルジタニアの人びとの多くに窩巣女王のことを知らせずにおいたのは、じつに妥当な処置だった。彼らがミロの見たものを見たら、いやそれどころかたった一匹のバガーでも目にしたら、ひとりひとりが抱いている恐怖にみんなの恐怖が輪をかけて——そして、ついにはなにかが起きる。なにか悪いことが。きっと、手のつけようのないことが起きる。

もしかしたら人間こそヴァーレルセなのかもしれない。もしかしたら、ほかの生物にはもちようもない異類皆殺し（ゼノサイド）の観念を、人類は生まれつきもっているのかも。なによりも宇宙的倫理のためになることとは、デスコラーダがばらまかれ、宇宙の隅々まで行きわたって人類を徹底的に叩きつぶしてしまうことなのだろう。ひょっとしたら、デスコラーダは人類という無価値な存在に対する神の解答なのかもしれない。

いつのまにかミロは大聖堂の玄関に来ていた。ひんやりした朝の空気につつまれて戸口はあいている。なかを見ると聖餐式はまだはじまっていなかった。ミロは重い足どりでなかへはいり、後列のほうの席についた。きょうは聖餐を受けるつもりはない。ただ、他の人びとの姿さえ見られればそれでいいのだ。ただ人間のいるところにいたいだけだった。ひざまずき、十字を切ると、あとは目のまえの信徒席にしがみついて頭をたれたままじっとしていた。本来ならば祈りをささげるところだろうが、この不安は父なる神（パイ・ノッソ）に祈って和らぐものではない。われらに日々の糧をあたえたまえ、ではどうか？　われらの罪を許したまえ、は？　み心の天にある

ごとく、われらの地にもならせたまえ、というのはどうだろう？　それならいいだろう。神の国ならば、ライオンと子羊とがともに暮らすことができるかもしれない。
　そのとき、ミロの頭に聖ステパノが見た世界のイメージが浮かんだ。神の右側にはキリストがすわっている。だが、左側にはほかのだれかの姿が。天国の女王。それは聖母マリアではなくて、白っぽい粘液につつまれた下腹の先端をぶるぶるとふるわせている窩巣女王だった。ミロは目のまえの信徒席をつかんだ両手にぐっと力をこめた。神よ、わたしにこんなものを見せないでください。わたしの目のまえから去れ、敵よ。
　だれかがやってきて隣にひざまずいた。とてもではないが、目をひらく勇気が出ない。横にいるのは人間だとはっきりわかるようになにかいってくれないかと、耳をそばだてる。けれども、衣ずれのような物音は、聞きようによっては昆虫の固い胸郭をなでる羽覆いの音のようにも思えるのだった。
　いつまでもそんなことを思っているわけにはいかない。ミロは目をあけた。目の隅に、横にひざまずいている相手が見える。華奢な腕、その袖の色合いからいって、それは女だ。
「わたしから永遠に逃げつづけることはできないわ」彼女はささやいた。
　声がちがっていた。ひどくかすれている。最後にミロと口をきいたときから、数えきれないほど話しつづけた声。赤ん坊たちをあやし、愛の絶頂で喜悦に叫び、もうお帰りと子供たちに何度も呼びかけた声。若かったそのむかし、ミロに永遠の愛を告げた声だった。
「ミロ、あなたのかわりに十字架を背負うことができたなら、わたしはよろこんでそうしてい

たわ」
ぼくの十字架だって？　こんなふうに体が重くて自由にならず、動きが不自由なのは、そんなものをひきずっているせいなのか？　いまのいままで、自分の体がわるいせいだと思っていたのに。
「どういったらいいのかしら、ミロ。つらかった――ずっと悲しい思いをしてきたわ。いままも、すっかり消えたわけじゃないけど。あなたを失って――将来の夢が消えてという意味よ――結局はそれで良かったのかもしれない――そう思うようになったの。わたしは家族にめぐまれて、いい人生を過ごしてきた。あなただってこれからそうなるでしょう。でも、友人であり兄であるあなたを失ったことは、なによりもつらかったわ。あの孤独感は、いつになっても消えないんじゃないかという気がする」
ぼくにとっては妹としてのきみを失うことは楽なもんだった。それでなくても妹は何人もいるからね。
「びっくりしたわ、ミロ。あなたったら、そんなに若いままで。ちっとも変わってないのね。なんてことでしょう。三十年もたったのにちっとも変わらないなんて」
これには、ミロはだまっていられなくなった。頭こそあげないが、思わず声が高まる。ミサの最中だというのに大声で彼は答えた。「ぼくが変わってないだと？」
みんながいっせいにふりむいて彼を見ていることもほとんど意識せず、立ちあがった。
「ぼくが変わってないだって？」こもったような聞きとりにくい声にもおかまいなく、ミロは

いいはなった。よろめく足で通路に出ると、ようやく彼はまともに相手の顔を見た。「これでも、きみのおぼえているままだというのか？」

彼女は彼を見上げ、愕然とした――いったい、なにに？　ミロの口調にだろうか。それとも麻痺した動作にか？　それとも、ただ単に万座のまえで恥をかかされたこと、この三十年ずっと想像してきたようなロマンチックな悲劇が起こらなかったのが意外だったのだろうか？

彼女の顔は老けてはいなかったけれども、やはりオウアンダらしくはなかった。中年になって肉がつき、目じりに皺ができている。いったい何歳だろう。もう五十か？　そんなところだ。この五十女が、ミロになんのかかわりがあるというのか？

「ぼくは、きみの知り合いでもなんでもない」ミロはいいすてた。そして彼はよろよろと出口へむかい、そのまま朝のなかへと出ていってしまった。

どのくらい時間がたったのだろう。気がつくと木陰で休んでいるところだった。この木はどっちなのだろう。ルーターか、それともヒューマンか。ミロは思いだそうとした――ここを離れてから、まだたった数週間しかたっていないのだ――けれども、ミロが出発したときにはヒューマンの木はほんの若木だったのに、いまやどちらも見たところ区別のつかないほどの大きさになっていたうえ、ヒューマンが殺されたのがルーターの木が立っているところより上だったか下だったか記憶が判然としなかった。どっちでもかまうもんか――木なんかに話すことはなにもないし、木のほうでもミロに話すことなどなにもないのだ。

だいいち、ミロはとうとう樹木言語がおぼえられなかった。人間たちは、ペケニーノたちが

棒で木を叩くのはれっきとした言語であるということすら知らずにいて、いざそうだとわかったのはミロがこんな姿になったあとだった。エンダーは樹木言語を話すことができたし、オウアンダや、たぶんほかにも五人前後の人間が話せるようになった。けれども、ミロに会得できるはずもない。この手では、棒をにぎってリズミカルに叩くことなど不可能だからだ。これもまた、いまとなっては彼が使えない話しことばだ。

「ひどい一日だったね（キジーア シャット メウ フィーリョ）」

これこそ、けっして変わることのない声だ。そして、やはり変わることのない呼びかけ。宗教家らしくもあり、世をすねたようでもある口調で——敬虔で世俗的な自嘲のひびきがある。

「やあ、キン」

「わるいが、いまじゃエステヴァン神父だよ」キンは式服からなにからすっかり司祭の正装を身にまとっていた。その服をたくしこんで踏みしだかれた草のうえに腰をおろし、ミロと相対した。

「司祭らしいじゃないか」ミロは感想をいった。キンはりっぱなおとなになった。小さいころは神経質で堅物の子供だったのだが。神学校で習う理論のかわりに実社会での経験にもまれて大小の皺ができたのとひきかえに、思いやりのある顔になった。おまけに強さも感じられる。

「ミサをぶちこわして、ごめんよ」

「そのことは知らなかったよ」キンはいった。「席をはずしていたんでね。いや、ミサには出ていたんだ——ただ、大聖堂にはいなかった」

「ラマンの聖体拝領を？」
「神の子供の、だよ。教会には以前から見知らぬ者たち相手のことばがあった。われわれはデモステネスを待つ必要はなかったんだ」
「そうかな。その点じゃ、あまり大きな顔はできないと思うよ、キン。自分で発明したわけでもないんだから」
「けんかはしたくないな」
「だったら、人が瞑想にふけっているときに邪魔をしないでくれ」
「気高き感傷か。ただし、きみが休もうと決めたのはわが友の木陰でね。わたしは彼に話があるんだ。まずきみにひとこと挨拶するのが礼儀じゃないかと思ったんだよ。そのあとでルーターと棒で話をするつもりだった」
「これはルーターだったのか」
「ただいまをいいたまえ。彼はきみの帰りを待ちかねていたんだよ」
「ぼくはルーターとは知り合いでもなんでもない」
「しかし、彼のほうはきみのことならなんでも知っている。ミロ、まさかと思うかもしれないが、きみはペケニーノたちのあいだでは英雄(ヒーロー)なんだ。きみが自分たちのためになにをしてくれたか、その結果どんな目にあったか、彼らは知っているんだ」
「それで、最後には、みんながどんな目にあうかも知っているのかな？」
「最後には、だれしも神の御前で裁きを受けるだろう。この星の全生物の魂がそろって神のま

えにひきだされるとしたら、心配なのはただひとつ。みんなにきちんと洗礼をほどこすのをわすれないことだ。でないと、そうなってしかるべき者も聖者の列にくわえられそこなうかもしれないからね」
「じゃあ、どうなってもいいと思っているんだね？」
「もちろん、そうは思ってない」キンは答えた。「しかし、ものごとは長い目で見ようじゃないか。つまるところ、どのような生き方をえらび、どのような死に方を選ぶかということに比べれば、単なる生き死にはとるに足らないことだ」
「どうやら、なにからなにまで本気でいっているらしいな」
「〝なにからなにまで〟というのがどういう意味かにもよるが、そう、わたしは本気でいっているよ」
「文字どおりなにからなにまでさ。神は生きていて、キリストは復活し、奇跡は起こり、幻視があり、洗礼は人を救い、聖餐式のパンとワインはキリストの血肉だと……」
「そうだ」
「奇跡は実在する。人は癒される」
「そう」
「ぼくらの祖父母をまつった廟で起きるように」
「あそこでは数多くの人間が癒されたという報告がある」
「それを信じてるのかい？」

「うそだと決めつけるわけにもいかないさ、ミロ――ヒステリー発作を起こしただけの者もいるだろう。この薬は効果があるといわれた患者が急に回復するのとおなじ、プラシーボ効果もあっただろう。癒しだといわれているもののなかには、治療を要することもない者や自然治癒の例もあったかもしれない」
「だが、本物の癒しもあった」
「あってもおかしくはないな」
「奇跡は起こりうると信じてるんだね」
「そうだ」
「しかし、そんなことが現実にあるとは思っていないくせに」
「ミロ、わたしは奇跡はたしかに起こるものだと信じているんだ。ただ、どのできごとが奇跡であってどれがそうでないか、人間が正確に感知できるとはいいきれないだけさ。およそ奇跡とはいえないことを奇跡と断言した例が無数にあることはまちがいない。おなじように、だれも気づかないうちに起きている奇跡も数えきれないだろう」
「ぼくはどうなんだ、キン？」
「きみがどうとは？」
「どうしてぼくには奇跡が起きない？」
　キンはちょっとうつむいて目のまえの短い草をむしった。子供のころ、答えにくい質問をかわそうというときに、よくやっていた動作だ。形ばかりの父親であったマルカンが酔って暴れ

たときもキンはこうしていた。
「どうした、キン？　奇跡は、ぼくたち以外の人間にだけ起きるものなのかい？」
「奇跡が奇跡であるゆえんのひとつは、それが起きる理由がわからないということだ」
「ごまかすなよ、キン」
キンの顔が紅潮した。「なぜきみは奇跡的に回復しないのか聞きたいというならいってやろう。それはきみに信仰心がないからだよ、ミロ」
「だったら、これでどうかな？　わかりました神よ、わたしは信じます——疑ったことをお許しください」
「きみがそういうというのか？　きみは癒してくれと願ったことすらないんじゃないか？」
「まずこっちの質問に答えてくれ」ミロはいった。そして、思わず涙ぐみ、「なんてことだ」とつぶやきを洩らした。「おれは恥ずかしい」
「なにが恥ずかしい？」キンがたずねた。「神に救いをもとめたことがか？　兄弟のまえで涙を流したことが？　自分の罪が？　それとも自分の不信感がかね？」
ミロはかぶりをふった。混乱していた。どの質問にも容易には回答できない。だが、考えてみると答えはちゃんとわかっているのだ。彼は体から両腕を離してまえにつきだした。「この体がさ」
キンが手をのばしてミロの肩口をつかみ、自分のほうへとひきよせた。兄の腕を上から下へとさすっていって、とうとう手首をにぎりしめた。「神はいわれた。このわたしの体はおまえ

たちのものだ。ちょうど、きみが自分の体をペケニーノのためにさしだしたように。あの小さき者たちにね」
「そうだろうとも、キン。だが、キリストは自分の体をとりもどせたんだろう？」
「でも、キリストは死んだ」
「ぼくもそうしないと癒されないわけか？　死に方を見つけろというのか？」
「じょうだんじゃない」キンはいった。「キリストは自殺などしなかった。ユダの策略にかかったんだ」
ミロの怒りが爆発した。「世間の連中は風邪をひいちゃあ回復し、頭痛も奇跡のように消え去る――神にきいてみろ。そういう連中のほうがぼくより救いがいがあるっていうのか？」
「救いがいのあるなしには関係ないのかもしれない。要はどのくらい切実に望んでいるかということじゃないかな」
ミロはぐっと身を乗りだし、自由にならない指でキンのローブの胸ぐらをつかんだ。「おれは本気でもとの体にしてほしいと思ってるんだぞ！」
「だろうね」キンはいった。
「だろうねとはなんだ。妙に悟ったようなにやにや笑いはやめろ、ばか野郎！」
「聞いてくれ」キンはおだやかにいった。「たしかにきみのほうはもとの体を返してほしいと思って当然だ。しかし、神の知恵は人間にははかり知れない。もしかしたら、きみが可能なかぎり良い人間になるためには、どうしてもある一定の期間を不具という状態ですごさねばなら

ないと判断したんだろう」
「いったいいつまで待てばいい？」ミロが問いつめた。
「この先一生は覚悟しなきゃならないかもしれないな」
ミロはうんざりしたような声をあげてキンのロープから手を放した。
「あるいはもっと短いかも」キンがつけくわえる。「その希望もある」
「希望ね」吐き捨てるようにミロがつぶやいた。
「希望は、信仰と純粋な愛にもおとらぬ偉大な美徳だよ。あきらめちゃいけない」
「オウアンダに会ったよ」
「彼女はきみが帰ってきてからずっと、なんとか話をしようとしていた」
「老けて太っていたな。どこかの馬の骨と結婚し、ぼろぼろ子供を産んで、この三十年間飽きもせずにセックスをつづけてきた証拠だ。こんなことなら、死んでいてくれたほうがよかった！」
「寛大なことばだな」
「からかわないでくれ！　ルジタニアを出たことはまちがいじゃなかったが、三十年で帰ってきたのが早すぎたんだ」
「いっそ、だれも知ってる人間のいない世界へもどってきたかった、か」
「どうせいまだって、おれを知ってる人間なんかいやしない」
「そうかもしれない。しかし、わたしたちはきみを愛しているよ、ミロ」

「きみたちが愛しているのは、むかしのおれだ」
「きみはきみのままだ、ミロ。変わったのは体だけさ」
ミロはルーターによりかかるようにして体をささえながら、よろよろと立ちあがった。「木になった友達に話があったんだろ、キン。おれは、おまえの話なんか聞いてもしかたがない」
「勝手にそう思っていたまえ」キンがいった。
「ばか野郎より始末におえないのは、なんだか知ってるか、キン？」
「知ってるとも。敵意に満ち、ひねくれて、口ぎたなく、落ちこんで、自己憐憫にひたっている役たたずのばか野郎さ。自分の苦しみを、必要以上に重視している人間だよ」
ここまでいわれて、さすがのミロもかっとなった。怒りの声をあげ、キンに体当たりして地面に押したおす。むろん自分もバランスをくずして弟にかさなるように倒れこみ、その拍子にキンのローブに体がからまってしまった。だが、そんなことはかまわない。ミロは立ちあがろうともせず、キンを痛い目にあわせようとでもするかのようになぐりつけた。まるで、そうすることで自分の苦痛がいくらかは晴れると思っているようだ。
だが、ミロは二、三度ほどなぐって手を止めると、わっと泣きくずれ、弟におおいかぶさってすすり泣いた。やがて、キンの両腕が自分の体を抱きしめるのがわかった。祈りのことばを暗唱するキンの声がそっと耳にひびいてくる。
「天にまします我らが父よ」けれども、それっきり祈りは途切れ、聞いたこともない、それだけに現実味のあることばにとってかわった。「あなたの息子は心を痛めております。わたしの

兄は魂の救いを必要としています。彼は望徳の助けにあたいします」

ミロは、自分の苦しみや腹立ちまぎれの要求をことばにしたようなキンの声を聞きながら、ふたたび恥ずかしいと思った。なにをもって、おれは自分が新たな希望をもつにふさしいと思えるのだろう。自分のために奇跡を起こすよう、この体を五体満足なものにもどしてくれと祈れだなんて、よくもキンに強制できたものだ。自分のように自己憐憫にひたっている不信心な者のためにキンの信仰心がためされるのはフェアでない。それはミロにもわかっていた。

だが、キンの祈りはやまなかった。「彼はペケニーノたちにすべてを尽くしました。そして、主キリストよ、あなたはわたしたちにおっしゃいました。わたしたちがこれらのペケニーノになすことは、わたしたちがあなたになすことなのだ」

もうやめてほしい、とミロは思った。ペケニーノのためにすべてを犠牲にしたとしてもそれは自分のためではなくて彼らのためにやったことなのだ。けれども、キンのことばはミロを粛然とさせた。「救い主よ、あなたはおっしゃいました。われわれがこの小さき者たちになすことは、すべてあなたになすことである、と」キンはまるで、約束を勝手にひっこめたといって神を責めているようだった。きっとキンと神とのつながりは一風変わっていて、彼には神の責任を問う権利があるかのようだ。

「いいえ、わたしはヨブのように完璧ではありません。しかし、わたしもまたヨブとおなじようにすべてを失ったのです」自分の妻となるはずだった女は、ほかの男によって子供をもうけた。おれ以外の者が、おれのなすべき仕事をなした。ヨブは腫れ物に悩まされたが、おれはこ

のようにひきつった不自由な体になった——ヨブは、こっちのほうがまだましだというだろうか？

「ヨブをもとの体にしたように、この男ももとどおりの体にもどしてください。父と子と精霊の御名によりて、アーメン」

ミロは自分を抱いていたキンの腕が離れるのを感じた。重力というよりは、その腕の力でキンの胸につっぷしていたかのように、彼は即座に立ちあがってそのまま弟を見おろした。頬にあざがひろがりかけていた。唇から血が出ている。

「けがをさせてしまった」ミロはつぶやいた。「ゆるしてくれ」

「いいんだ」キンはいった。「たしかにきみはぼくを傷つけた。そして、ぼくもきみを傷つけた。ここでは、みんながそうするんだ。手を貸してくれないか」

一瞬、まばたきするだけのあいだ、ミロは自分が不具であること、かろうじて立っているのだということをわすれた。ほんの一瞬、弟をひき起こそうと手をのばしかけた。だが、バランスがくずれて足もとがよろめき、彼はわれにかえった。「できないよ」

「体がわるいからなんていわないでくれ。さあ、手を貸して」

そこでミロは両脚を大きくひらいて弟のほうにかがみこんだ。弟は、いままではミロより三十歳ちかくも年齢が上で、知恵と同情心はそれに輪をかけて上だった。ミロは手をさしだした。キンがその手をがっちりにぎり、助け起こされた。ミロにとって、その動作はひどく苦しいものだった。彼にはこんなことをする力はないのに、キンは妥協しない。ミロの力で起こしても

らおうとしていた。ついにふたりは顔をあわせ、手を握りあったまま肩と肩をふれあわせた。
「おまえはりっぱな司祭だな」ミロはいった。
「ああ。だけど、そのうち連絡がいくかもしれないよ。スパーリングにつきあってくれってね」
「さっきの祈りに神さまは答えてくれるだろうか？」
「もちろんさ。神はすべての祈りに答えてくださる」
ミロには、キンがなにをいいたいかすぐに判断はつかなかった。「そういうことじゃなくて、神はイエスといってくださるだろうか」
「ああ。その点は、わたしにはなんともいえない。そのうちイエスという返事をもらったら、教えてくれよ」
キンはややぎこちなく足をひきずりながら歩いて木にちかづいた。かがみこんで地面に落ちている会話棒を二本手にとった。
「ルーターに話があるっていってたが、どんな話だい？」
「相談があるからと連絡がきたんだよ。ここからずっと離れた森に一種の異端派がいてね」
「改宗させようとするとむきになるわけか？」
「いや、そうでもないんだ」キンがいった。「わたしはそのグループを説教したことはない。父樹どうしのあいだでは話は筒抜けだから、キリスト教という概念はすでに世界じゅうにひろまっている。めずらしくもないことだが、異端は真実よりもひろまりやすいらしくてね。ルー

ターはそのことで責任を感じているんだよ。もとはといえば、彼の推測のおかげではじまったことだといって」
「となると、おまえにとってはないがしろにできない問題だな」ミロはいった。
　キンは眉をひそめる。「わたしだけの問題じゃないさ」
「すまん。つまり教会にとっては、といいたかったんだ。信者たちにとっては、と」
「そういう小さい問題ではすまないんだよ、ミロ。そのペケニーノたちは実に興味深い異論を唱えているんだ。しばらくまえ、ルーターはこんな推測をした。人間たちのもとにキリストが現われたのとおなじように、ペケニーノのもとにはいつの日か聖霊が現われるのではないか、とね。聖三位一体の純然たる誤解なんだが、あるひとつの森ではそれが固く信じられているんだよ」
「やはりごく部分的な話じゃないか」
「わたしもそう思っていた。詳しいことをルーターに聞くまではね。つまりこういうことだ。その森の連中は、デスコラーダ・ウィルスこそ聖霊の生まれ変わりだと信じこんでいる。風変わりだが筋は通ってるんだ——というのも、聖霊は神のつくりたもうたどの生物にもかならず宿っていた。したがってそれが再生するならデスコラーダ・ウィルスこそふさわしい。なぜなら、デスコラーダ・ウィルスはあらゆる生物のどこにでも浸透するからだ」
「そいつらはウィルスなんかをあがめているわけか？」
「ふしぎはないさ。だってそうだろう？　ペケニーノがデスコラーダ・ウィルスによって初め

て知性ある生物に造り変えられたと発見したのは、きみたち科学者じゃないか。つまり、デスコラーダ・ウィルスには創造力がたっぷりつまっている。したがって、それには神聖な性質があるというわけさ」
「キリストが神の再来だというなら、その連中の理論だって現にデスコラーダという証拠があるんだからばかにはできないだろう」
「いや、証拠となれば連中のほうが分がいいさ。しかし、それだけのことなら問題は宗教というだけですむ。複雑で答えの出しにくい問題だが——きみのいったように——部分的な話だ」
「じゃあ、それだけじゃないというのか？」
「デスコラーダは第二の洗礼なんだ。燃える洗礼さ。ペケニーノだけがこの洗礼に耐え、それによって第三の生にはいる。明らかに、彼らは人類よりも神にちかいんだ。人類は第三の生にはいれないんだからね」
「優越性の神話だ。それくらいは想像がついていたんじゃないのか」ミロはいった。「優勢な文化に抑圧されながらもなんとか生きのびようとするとき、たいていの社会は神話を生みだして、自分たちはなんらかの意味で特別な存在なんだと思えるようにするものさ。選民思想だな。神がみに好まれた存在というわけだ。ジプシーしかりユダヤ人しかり——そういう歴史は枚挙にいとまがない」
「じゃあこういったらどうかな、おえらいゼナドールさん。ペケニーノが聖霊に選ばれた民である以上、この第二の洗礼をあらゆる民族、あらゆる種族のあいだにひろめるのは彼らの使命

だと」
「デスコラーダをひろめるだって？」
「あらゆる世界にね。一種の携帯用審判の日というわけさ。ペケニーノが到着すればデスコラーダがひろがり、適応して土着民を殺す——そして、だれもが創造主に会いにゆくんだ」
「なんてことだ。神よ、助けたまえ」
「助かるといいがね」
そのとき、ミロはついきのう知ったばかりのことと、これが関係していることに気づいた。
「キン、バガーたちはペケニーノのためのスターシップを作っているんだが」
「エンダーから聞いたよ。それで、そのことでデイメイカー神父と会いに行って——」
「それはペケニーノなのかい？」
「ヒューマンの子供のひとりだ。彼はそんなことは周知の事実だといわんばかりに、〝当然だろう〟といったよ。あれは本心だろう——ペケニーノが知っているなら、それはつまり周知の事実なんだ。彼はほかにも、問題の異端派がスターシップの指揮権をとろうと画策しているともいっていた」
「なんのために？」
「むろん、住人のいる世界へむかうためさ。無人の惑星を見つけて地球化(テラフォーミング)し、植民するかわりにね」
「どうせなら、ルジタニア化(ルジフォーミング)といったほうがいいんじゃないか」

「笑わせてくれるね」口とは裏腹にキンはにこりともしない。「可能性はないとはいえないんだぞ。自分たちが優越種族だという説は、とりわけ非キリスト教徒のペケニーノに人気がある。そういう連中の多くは、あまり教養がない。自分たちが異類皆殺し(ゼノサイド)を話題にしているという事実がわかっていないんだ。人類を一掃するという事実をね」
「そんなちっぽけな事実をどうして見過ごせるんだ?」
「神は人類を愛していて、最愛の子供たちだけを送り出すということばを異端派はよりどころにしているからだ。聖書のことばはわすれちゃいないだろう?」
「彼を信じる者はけっして滅びない」
「そのとおり。信じる者は永遠の命を得るんだ。彼らのいう第三の生をね」
「つまり、死ぬ者は信者ではなかったということか」
「ペケニーノ全員が、よろこんで死の天使役をやるために各地を転々としたがっているわけじゃない。しかし、その気でいる連中がいる以上、なんとかしてくい止めないと。〈母教会〉のためだけでいってるんじゃないんだ」
「母なる地球も危険なわけだしな」
「わかってくれるだろう、ミロ。ときにはわたしのような聖職者が世の中に欠かせない存在になることがあるんだ。なんとしても、道を誤ったあわれな異端者たちを説きふせ、教会の教えを受け入れさせなければ」
「これからルーターと話すのは、なんのためなんだ?」

「ペケニーノたちがぜったいに明かそうとしないひとつの情報を聞き出すためさ」
「というと？」
「住処だよ。ルジタニアにはペケニーノの森が無数にある。異端派は、そのうちのどこに住んでいるのかを知らなければならないんでね。あてもなく森から森とさがしまわっていたのでは、とてもスターシップの出発にまにあわないから」
「ひとりでさがしに出かけるのか？」
「いつものことさ。小さい同胞たちは連れていけないんだよ、ミロ。改宗するまえの森の住人たちは、よそ者のペケニーノを殺してしまうことが多いんでね。こんなときは、ユートレニングよりラマンが行ったほうがいい」
「母さんは、おまえが行くことを知ってるのか？」
「現実的に考えてくれよ、ミロ。悪魔（サタン）などこわくもないが、母さんは……」
「アンドルーは知ってるんだろうな？」
「もちろんだ。どうしてもいっしょに行くといっているよ。〈死者の代弁者〉はたいへん信望があついから、きっとわたしの役にたつと思っているんだ」
「それなら、おまえはひとりじゃない」
「いや、ひとりで行くとも。全身を神の衣に固めた者に人道主義者の助けが必要だったためしはない」
「アンドルーはカトリック教徒だ」

「ミサにも出るし、聖餐も受ける、定期的に懺悔もしている。しかし、やはり彼は〈死者の代弁者〉だし、わたしは彼が心から神を信じてはいないと思っている。だから、わたしはひとりで行くよ」

ミロは尊敬のまなざしでキンを見た。「おまえってやつは、頑固なクソ野郎だ」

「鍛冶屋や溶接工だって頑固だ。クソ野郎にもそれなりに悩みはあるんだよ。わたしは神と教会のしもべであり、与えられた職務を果たすだけだ。ついさっき体験したところによれば、もっとも異端派のペケニーノとともにいるよりも、自分の兄弟のそばにいるほうが身の危険があるような気がする。ヒューマンの死後、ペケニーノの社会では例外なく誓いが守られてきた——人間に対して手をあげて暴力をふるった者はひとりとしていないからね。彼らは異端者かもしれないが、それでもペケニーノだ。けっして誓いをやぶることはない」

「なぐったりしてわるかった」

「抱擁されたと思っておくことにしよう、息子よ」

「じっさい抱擁しなかったのが残念だよ、エステヴァン神父」

「そう思うなら、したも同然だ」

キンはルーターの木にむきなおり、速いリズムでとんとんと叩きはじめた。ほとんど反射的に、音の調子がかわりだす。木の内部の空間が形を変えるのにつれて、ピッチも音色も変化した。父樹の言語は理解できないにもかかわらず、ミロはなおもすこしのあいだその場にとどまって耳をかたむけていた。ルーターは父樹のもつたったひとつの可聴音を使って話している。

かつては彼も声を使って話をした。かつては唇や舌や歯を使って発声していたのに。肉体の失い方は、みな一様ではなかったのだ。ミロは命とりになりかねない経験をした。あげくに体の自由を失った。それでも、彼はまだぎこちないなりに動くこともでき、のろのろとではあっても話すこともできる。彼は、まるでヨブのごとき苦しみにさいなまれていると思っていた。ルーターやヒューマンはミロとは比較にならない不自由な体となりながらも、自分たちは永遠の命を得たと思っている。

「困ったことになったわね」耳のなかでジェインの声がした。

ミロは声には出さず、そのとおりだと答えた。

「エステヴァン神父をひとりで行かせてはいけないわ」ジェインがいった。「ペケニーノはそのむかし、比類ない戦士たちだったのよ。いまでも戦い方をわすれてはいないわ」

だったらエンダーにいってくれ。ミロは答えた。ここでは、ぼくにはなんの力もない。

「勇敢なる発言ね、わがヒーロー」ジェインがいった。「あなたがそうして奇跡とやらが起きるのを待っているあいだに、わたしはエンダーと相談するわ」

ミロはためいきをついて丘をおり、ゲートをくぐった。

9　パインヘッド

〈わたしはエンダーや彼の姉のヴァレンタインと話していた。彼女は歴史家だ〉
〈それはどういうものか説明してほしい〉
〈書物を端から端まで読んで人間の物語を見つけだし、つぎに自分が見つけだしたものを物語にしたて、ほかの人間たちみんなに提供する〉
〈物語がすでに書かれているのに、もう一度書く理由は？〉
〈それがじゅうぶん理解されていないから。彼女は、みんなが理解できるように手を貸すのだ〉
〈それが起こってから間もない時代の人びとに理解できなかったものを、なぜのちの時代の彼女がもっと理解できるのか〉
〈わたしもそう質問してみた。ヴァレンタインがいうには、彼女のほうが深く理解しているわけではないのだそうだ。しかし、むかしの著述家たちが、その物語がその時代の人びとにとってどういう意味をもつかを理解していたように、彼女は自分と同時代の人びとにとってそれがどういう意味をもつかを理解している〉

〈だから、物語も変化する〉
〈そういうことだ〉
〈それでいて、いつの時代も、人びとはその物語を真の記憶と思っているわけか？〉
〈ヴァレンタインの説明によれば、なかには実際にあった物語もあり、真にせまった物語もあるという。わたしには、どういうことかさっぱりわからない〉
〈そもそも、人間はなぜ自分たちがかかわった物語を正確に記憶しないのか？　そうすれば、おたがいをだましあう必要もなかろうに〉

チンジャオは端末装置のまえにすわって目をとじ、物思いにふけっていた。その髪をワンムが櫛けずっている。櫛を入れ、髪をすく動作や、ワンムの息づかいそのものがチンジャオの心をなごませた。

これは、ワンムが女主人の邪魔になるのではないかとびくびくせずに話をできる時間だ。そして、いかにもワンムらしいことだが、髪をときながら彼女は質問をする。ワンムには山ほどの質問があるのだ。

最初の数日、彼女の質問はもっぱら神がみの声に関することばかりだった。いうまでもないことだが、よほどのことがないかぎりは一本の木目をたどるだけでじゅうぶんだと知ってワンムは大いに安堵した――あの最初の経験以来、彼女はチンジャオが毎日部屋じゅうの床板の木目をたどらなければならないのかと気をもんでいたのだ。

その心配はなくなったものの、ワンムにとって浄罪はやはり謎だらけだ。なぜ毎朝目がさめたらすぐに木目を読んで、それでおしまいということにしないのか？　なぜ床に敷物を敷いて木目が見えないようにしてしまわないのか？　そういうおろかな策略を弄しても神がみをだますことはできないのだと説明するのが、ひと苦労だった。

もしも世界中の木がなくなってしまったらどうするの？　あなたは紙切れみたいに燃やされてしまう？　龍が飛来して、あなたをさらって行ってしまう？

チンジャォは、ワンムの質問に対してただ、わたしは神がみの御心のままにするしかないというほかなかった。もしも木目というものがなかったら、神がみはそれをたどれとはいわないだろう。そういうと、ワンムは木の床を禁じる法律をつくればいいなどといいだす。そうすればチンジャォもよけいな苦労をしなくていいのに、と。

神がみの声を聞いたことのない人間には、しょせんどう説明しても理解できないのだろう。ところが、この日ワンムがたずねた質問は、神がみとはまるで関係のないもの――あるいは、すくなくとも直接は関係のないものだった。

「結局、ルジタニア粛清艦隊を食い止めたものは、なんなのですか？」彼女はそうたずねたのだ。

思わずチンジャォは、その質問をあっさりと受け流して、「それがわかれば、苦労はしないわ！」などと笑いとばすところだった。けれども、そこで彼女は気づいたのだ。ワンムは、ルジタニア粛清艦隊が消息を絶ったことすら知っているはずはないのに。

「ルジタニア粛清艦隊のことを、どうしてあなたが知っているの？」
「これでもわたし、字が読めるんですもの」そう答えるワンムの口調は、いささか誇らしげだ。
だが、誇らしげであってなにがおかしいだろう？　チンジャオだって、ワンムがじつに覚えが早く、多くのことを自力で学んだといって心からほめているくらいだ。ワンムは豊かな知性をもっている。彼女が直接教わる以上のことを理解していたからといっておどろくにはあたらないのだ。
「あなたの端末装置に出ているものを見ると、いつもルジタニア粛清艦隊に関係したデータばかりでしょ。それに、わたしが初めてこの家にきたとき、あなたがお父上と話し合ったのも、そのことだったし。話の内容はほとんど理解できなかったけど、ルジタニア粛清艦隊にまつわることだというのはわかりました」ワンムの声が急に不快そうな調子をおびた。「艦隊の出発を命じた男に神がみのばちが当たるといいんだわ」
その口ぶりの激しさに、チンジャオは衝撃を受けた。ワンムがスターウェイズ議会に楯突くような発言をするとは信じられない。
「艦隊の出発を命じた人間がだれか知っているの？」
「あたりまえでしょ。スターウェイズ議会の身勝手な政治家たちに決まってます。コロニーが独立を勝ちえる希望を打ち砕こうというつもりなんだわ」
とすると、ワンムは反政府的発言だと承知のうえで話しているのだ。チンジャオ自身も、ずっと以前、やはり反感をこめて似たような発言をした記憶がある。しかし目の前でいわれてみ

ると——しかも、自分の秘婢に——ひどく腹立たしい。「あなたに、そんなことのなにがわかるの？　これはスターウェイズ議会にとっては重大事なのよ。それなのに、コロニーの独立だなんだと——」

ワンムはひざまずいて、深ぶかと頭をさげた。たちまちチンジャオはきつく叱りすぎた自分が恥ずかしくなった。

「ねえ、お辞儀なんかよしてちょうだい、ワンム」

「あなたはわたしに怒っているんでしょ」

「あんなことをいうからびっくりしたのよ。ただそれだけ。いったい、どこであんなたわごとをおぼえたの？」

「みんなそういってます」ワンムは答えた。

「みんなじゃないでしょ」チンジャオは訂正する。「お父さまは、けっしてそんなことといわないわ。逆に、デモステネスはそんなことばかりいっているけど」チンジャオは、初めてデモステネスの著作を読んだとき、自分がどう感じたかを思いだした——彼のことばはどれほど論理的で正しく、公平な印象だったことか。あとになって父からデモステネスは支配者の敵であり、したがって神がみの敵であると説ききかされ、そのあげくに彼女はようやくさとった。反逆者のことばはじつに抜け目なく欺瞞に満ちたもので、自分はそれに魅了されて、あぶなくルジタニア粛清艦隊が邪悪な存在だと思いこむところだったのだ、と。チンジャオほどの教養をそなえた神がみの声を聞く人間でもややもすればなびきかねないところだったのだから、庶民の娘

が彼のことばを口にするようになるのは無理もないことだ。
「デモステネスって何者なんでしょう？」ワンムはたずねた。
「反逆者よ。どうやら、だれも考えなかったほどうまくやりつつあるようだけど」スターウェイズ議会は、デモステネスのことばが、その名を聞いたこともない庶民にまで浸透しているという認識をもっているのだろうか？　このことの意味がわかっている人間はいるのだろうか？デモステネスの思想は、いまや庶民の共通の知恵になっている。ことはチンジャオの想像以上に危険な方向へすすんでしまった。父はチンジャオほど愚かではないから、きっととっくに知っていたにちがいない。「気にしないで」チンジャオはいった。「ルジタニア粛清艦隊のことを聞かせてちょうだい」
「だめですよ。だって、しゃべったら怒るでしょ？」
チンジャオは辛抱強く待った。
「わかりました。どうしてもっていうんなら」そういいながらも、ワンムはまだ気がすすまないようすだ。「父は、こういってます――父だけじゃなくてパン・クウェイっていう名前の人も。その人、とってもかしこく科挙の試験に惜しいところで落ちたんですけど――」
「その人たちがどんなことをいっているというの？」
「大がかりな艦隊を――それも桁はずれに大規模なものを――送りだして、取るに足らないコロニーを攻撃するなんてスターウェイズ議会はひどいって。しかも、その根拠が、自分のところの市民を他の惑星での裁判に送ることをこばんだというだけなんだから。どうみてもルジタ

ニア側の言い分に分があると、みんないってます。だって、本人がいやがっているのにひとつの惑星から他の惑星へ移すなんて、まるでこれっきり家族や友達とひきはなすようなものでしょ。裁判をするまえから有罪だと決めつけたのも同然です」
「その人たちはほんとうに有罪かもしれないわ」
「それを決めるのは、容疑者のことを知っている人が多く、それだけに罪に対して正当な評決をくだせるはずの母星の法廷であるべきで、遠く離れたところにあって、なにひとつ事情もわからず、したがって理解にとぼしいスターウェイズ議会の決めることじゃない」ワンムは首をすくめた。「パン・クウェイはそういってます」
チンジャオはワンムの暴言に対する嫌悪を顔に出すまいとした。庶民の考え方を知るのは大切なことだ。このような不忠に耳をかたむけるだけでも、神がみの怒りを買うのは明らかだが。
「あなたはそれを聞いて、ルジタニア粛清艦隊が送りだされたことはまちがっていると思うわけね？」
「スターウェイズ議会が筋の通った理由もないのにルジタニアへ粛清艦隊をふりむけるくらいなら、パスにだってそうしないって法はないでしょ？　この惑星だってコロニーですもの。スターウェイズ議会のメンバーである〈百世界〉のひとつじゃありませんからね。相手がその気になったら、ハン・フェイツーを反逆者と名指しして、どこか遠くの惑星へ行かせてしまうことだってやりかねませんよ。そうなったら、六十年はもどって来られないんです」
そう考えると背筋が寒くなるようだった。こともあろうにチンジャオの父親を例にだすとは、

ワンムも大胆不敵だ。偉大なハン・フェイツーが犯罪の容疑をこうむったらなどという仮定をもちだすのは、召使の彼女にかぎらず、だれにとっても出すぎたことだ。一瞬、チンジャオは取り乱し、怒りを口にしてしまった。「スターウェイズ議会がわたしの父を犯罪者あつかいするなんてことはありえないわ！」

「お許しください、チンジャオ。わたしはただ、ご命令どおり父のことばをくりかえしただけなんです」

「つまり、あなたの父親がハン・フェイツーのうわさをしていたというの？」

「ジャンリーの町の人はだれでも、ハン・フェイツーはパスでいちばん徳の高いお方だと知っています。ハン家が自分たちの町にあることで、わたしたちはたいへん鼻の高い思いをしているんですから」

やはり、この娘は、それがどれほど畏れ多いことかをじゅうぶん承知のうえでハン家の娘の召使になろうとしたのだと、チンジャオは心ひそかに思った。

「わたしにも、ほかのみんなにも、旦那様をおとしめるつもりはこれっぽっちもありません。ですけど、スターウェイズ議会がその気になれば、よその星で裁判に出ろとあなたのお父上に命じることはできるでしょ？　ちがいますか？」

「それはありえない――」

「でも、可能性はありますよね？」ワンムはあとへはひかなかった。

「パスはコロニーだから、法律上、その可能性もあるわ。けれど、スターウェイズ議会はぜっ

たいに――」
「でも、ルジタニアに対してあんなことをするんですもの、どうしてパスにはしないといえるでしょう？」
「それは、ルジタニアのゼノロジャーたちが罪を犯して――」
「ルジタニアの人びとは、彼らが罪を犯したとは思っていません。だから、ルジタニア政府は彼らを法廷に出すことを拒んだんです」
「それがいちばんいけないのよ。そもそも惑星政府ふぜいがスターウェイズ議会の決定に楯突くのがまちがっているわ」
「だって、ルジタニアの人びとはなにもかも知っていたんですよ」あたかも、周知の事実といわんばかりの口調でワンムがいった。「彼らには、土地っ子である問題のゼノロジャーたちのことがわかっていたんです。スターウェイズ議会がハン・フェイツーを容疑者として他の惑星の法廷に召喚した場合のことを考えてみてください。パスの人間はみんな、彼がそんな罪を犯していないことを知っているとしたら？　わたしたちだって、ハン・フェイツーのような偉人を送りだすくらいなら抵抗すると思いませんか？　ところが、そんなことをしようものなら、スターウェイズ議会はこの惑星に粛清艦隊をさしむけてくるんですよ」
「スターウェイズ議会は〈百世界〉における、すべての正義のみなもとなのです」チンジャオはきっぱりといいきった。議論は終わりだ。
負けん気の強いワンムは、それでもまだだまらない。「だけどパスはまだ〈百世界〉の一員

ではない。そうですね？　わたしたちはコロニーのひとつにすぎないんです。スターウェイズ議会の思いのままにされるなんて、それじゃ筋が通らないわ」
　ワンムは、まったく疑問の余地はないといいたげに、ひとつこくんとうなずいて話をしめくくった。チンジャオはもうすこしで笑いだしてしまいそうだった。じっさい、こうまで腹がたっていなかったら、笑いだしていただろう。彼女の怒りは、一部には、ワンムが一度ならず彼女の発言のとちゅうで口をはさんだのみならず、反論までしたせいだった。教師たちでさえ、そういうことをしないように気を使っていたのに。もっとも、ワンムの無遠慮はまんざらわるいことではないかもしれない。チンジャオがそれに腹をたてたのは、神がみの声を聞く者であるというだけで自分のことばに人びとが不相応なまでの尊敬をあらわすのを当たり前と思うようになっていた証拠だ。ワンムには、これからもああして遠慮なく話しかけてもらうことにしよう。あんなことで腹をたてたのはチンジャオがわるかった。反省しなければならない。
　けれども、彼女の腹立ちの原因は、大部分がスターウェイズ議会に関するワンムの発言にあった。ワンムの口ぶりはまるでスターウェイズ議会を全人類の頂点に立つ支配者だと思っていないように聞こえる。あたかも全世界の集合的意思よりもパスのほうが大切だと思っているかのように。万一、不測の事態が起きて、百光年も離れた星の法廷に立つようにという命令を受けたとしたら、ハン・フェイツーは文句ひとついわずに出かけてゆくだろう――パスの人間がひとりでも抵抗のそぶりを示そうものなら、彼は激怒するはずだ。ルジタニアの例にならって抵抗する？　そんなことは考えられない。チンジャオはそう思っただけでも穢れたような感覚

をおぼえた。
　不浄だ。穢れている。そんな反逆的な考えをいだいたばかりに、彼女は床の木目に視線を走らせだした。
「チンジャオ！」彼女が床にひざをついてかがみこむが早いか、ワンムが声をあげた。「あなたはわたしの話を聞いてただけじゃないですか。それなのに、神がみの罰を受けるなんて！」
「罰を受けてるんじゃないわ」チンジャオはいった。「わたしは清められようとしているのよ」
「でも、あれはわたしがいったことでもないのに。しゃべった当人たちはこの場にすらいないんですよ」
「だれがいったかはどうでもいいの。穢れたことばであるにはちがいないわ」
「だけど、こんなの不公平です。自分で考えたこともなければ信じてもいないことばのせいで、あなたが浄罪をさせられるなんて！」
　いえばいうだけ罪は重くなるばかり！　ワンムってば、いいかげんにだまってくれればいいのに。「もういわないで。あなたは、神がみ自身が不公平だといってることになるのよ」
「だってそうだもの。他人の罪であなたを罰するなんて！」
　さすがのチンジャオも激昂した。「いいかげんにしなさい。あなたは神がみより知恵があるつもり？」
「神さまってひどい。重力でころんだから、雨にふられたからっていって、あなたに罰をあた

えてるようなものだわ！」
「そういう理由で浄罪をしろといわれれば、わたしはしたがうわ。それが正義というものよ」
チンジャオがいった。
「それが正義なら、そんなの無意味だわ！」ワンムが声を荒立てた。「あなたのいう正義とは、神がみが気まぐれに決めたことなのね。だけど、わたしにいわせれば、正義というのは公正さのことよ。人は故意に犯した罪で罰を受ける、それが――」
「わたしは神がみが正しいとしたことに耳を傾けるしかないのです」
「神がみがなんといおうと、正義は正義よ！」
チンジャオはもうすこしで立ち上がって秘婢を平手打ちしかけた。そうしても、良かったはずだ。それでなくてもチンジャオは、ワンムに平手打ちされたのと同様の苦痛を味わわされていたのだから。だが、打ち返す自由のない者を殴るのはチンジャオの主義に反する。だいいち、彼女は怒りよりもはるかに興味深い謎に気づいたのだった。結局、ワンムは神がみによってチンジャオのもとにつかわされた娘なのだ――この点はすでに疑問の余地がない。したがって、チンジャオはワンム本人と言い争うよりも神がみの意思を理解しようとつとめるべきだろう。こんな畏れ多い恥知らずなことを口にするような娘を召使として送りこまれた、その狙いを。
他人の無礼な意見に耳を貸しただけでチンジャオを罰するのは不当だと、神がみはワンムにそういわせた。おそらくワンムの言い分は真実だ。とはいえ、神がみが不当でなどありえないのもまた真実。したがって、チンジャオが罰を受けた理由は、他人の反逆的意見を聞いたとい

うだけのことではないのだ。そう、きっとチンジャオは心のどこか奥底でそういう意見を信じていたにちがいない。だからこそ、彼女は自分を清めなければならなかったのだ。天命がスターウェイズ議会にないのではないかと、心の奥深くにそんな疑念がくすぶっている。まだ、スターウェイズ議会の正当性を信じきれずにいる。それがために、チンジャオは自らを清めなければならないのだった。

チンジャオは即座に手近な壁ににじりよって、たどるべき木目をさがしはじめた。彼女はワンムのことばでみずからの内に秘められた不浄さに目をひらかれた。神がみのおかげで、チンジャオはまた一歩、内なる暗黒の場所を知ることにちかづいた。こうして、彼女はいつの日か、隅ずみまで輝きに満たされるだろう。そうすれば、いまはまだまがいものにすぎない名前は彼女のものになるかもしれない。わたしはどこかでスターウェイズ議会の正当性を疑っている。ああ神さま、わが先祖、わが人民、わが支配者、そして最後にこのわたしのために、この疑念をはらい、わたしをお清めください！

木目をたどりおえたとき——たった一本の線をたどっただけで不浄感が消えたのは、なにか真実を学んだという良いしるしだ——、ワンムはすわってチンジャオを見つめていた。いまや怒りはすっかり消えて、チンジャオは、無意識のうちに神がみの道具として自分に新しい真実を学ばせてくれたワンムにむしろ感謝の念をおぼえていた。だが、それはそれとして、ワンムには自分の分というものを教えておかなければならない。

「この家では、わたしたちはスターウェイズ議会の忠実なしもべなのよ」静かな口調で、チン

ジャオはいった。その表情は、できるかぎりおだやかだ。「この家の忠実な召使ならば、あなたも心からスターウェイズ議会に仕えてくれなくては」自分がどれほど血のにじむような苦労をしてそれを身につけたのか――いまでも歯をくいしばってそれを学んでいる――どういって説明すればワンムはわかってくれるだろう。チンジャオには、それを邪魔するのではなくて、手伝うためにワンムが必要なのだ。

「聖女さま、そうとは知らなかったんです」ワンムがいった。「思いつきもしませんでした。わたしがハン・フェイツーの名を耳にするのは、かならずパスでもっとも高貴なしもべとしての名だったんです。わたしはあなたがたはパスのしもべだとばかり思っていました。スターウェイズ議会のしもべと知っていれば……」

「ここへ働きには来なかった?」

「スターウェイズ議会を攻撃したりはしなかったでしょう」ワンムは答えた。「わたしはあなたにお仕えします。たとえあなたが龍の巣窟にいたって」

もしかしたら、そのとおりかもしれないとチンジャオは思った。わたしを清めてくださる神は、冷たくかつ熱く、おそろしくも美しい龍なのかも。

「ワンム、この世界がパスと呼ばれているのは、それ自体が道だからではなくて、わたしたちに日ごと真の道を生きることを思いださせるためなのだということをわすれないようにね。父とわたしがスターウェイズ議会に仕えるのは、それに天命があるからであり、したがって、パスと呼ばれる惑星の望みや必要をさておいてもスターウェイズ議会に仕えることが道にかなっ

ているのです」

　ワンムはまばたきもせずに、まじまじとチンジャオを見つめていた。わかったのだろうか？　信じてくれただろうか？　どちらでもかまうまい——いつかそのうち、彼女も信じるようになるだろう。

「さがってよろしい、ワンム。わたしは仕事をします」

「承知しました」ワンムはすぐに立ち上がって頭をさげたままの恰好でさがって行った。チンジャオは端末装置にむきなおる。だが、ディスプレイに新しいレポートを呼び出しはじめたとき、室内に人の気配があるのに気づいた。椅子にすわったまままさっとふりかえる。戸口にワンムが立っていた。

「なんの用？」チンジャオがたずねた。

「なにか思いついたことがあったらお知らせするのが秘婢の役目かと思いまして。ばかな話に聞こえるかもしれないことなんですが」

「わたしには遠慮しないでどんなことでもいってちょうだい」チンジャオはいった。「あなたを罰したことなんかないでしょう？」

「じゃあ失礼して申しあげますけど、じつは、あなたがなさっている偉大なお仕事のことなんです」

　ワンムがルジタニア粛清艦隊についてなにを知っているというのか？　ワンムは覚えが早い弟子ではあったが、いまはまだどの学科もほんの初歩を教えはじめたところで、問題を把握す

ることはもちろん、その解答など思いつくはずがない。とはいうものの、チンジャオは父からこういう教えを受けていた。主人に話を聞いてもらって機嫌をわるくする召使はいない、と。「いってごらんなさい」チンジャオはうながした。「わたしだってそうとうばかな話をしたのよ。もっとばかな話があれば聞いてみたいものだわ」
「愛しい大姉さま」ワンムが口をひらいた。「これを思いついたのは、あなたのおことばのせいなんです。科学や歴史のどこを調べても、いままで知られている知識では艦隊があんなふうに一挙に影も形もなく消え失せてしまったことの説明がつかないと何度もおっしゃいましたよね」
「でも、消えてしまったんだから」チンジャオはいった。「やっぱり現実にあることなのよね」
「それで、論理学の勉強をしているときに説明されたことを思いだしたんです。第一原因と目的因というのを説明してくださったでしょ。あなたはずっと第一原因のほうをさがしていらした——つまり、艦隊がどのように消されたのかということを。でも、目的因のほうは考えてみましたか——相手が艦隊の連絡を絶つか、あるいは破壊してまでも手に入れたかったのはなんなのかを?」
「ルジタニア粛清艦隊を阻止しようとする理由なら、だれにだってわかるわ。みんなコロニーの権利を守ろうとしているのよ。さもないと、スターウェイズ議会がペケニーノもろともコロニーを全滅させようとしているとでも考えているんでしょうね。艦隊を阻止したいと思ってい

る人間は無数にいるわ。そういう連中はどれも潜在的な反乱分子で、神がみの敵なのよ」
「だけど、思っただけじゃなくて、実行した者がいるわけでしょ」ワンムはいった。「それで、わたし考えたんです。艦隊がどうなったかを直接知る手だてがないのならば、それを実行した人間をつきとめればいいって。そうすれば、艦隊を消した方法もわかってくるんじゃないでしょうか」
「犯人がだれかということも、わたしたちにはわかってないわ」チンジャオはいった。「人間がやったとはかぎらない。自然現象だったら目的意識なんかないもの。意識をもとうにも心がないんだから」
ワンムは頭をさげた。「やはり、無駄なお時間をつかわせてしまったようですね、チンジャオ。お許しください。さがれといわれたときにさがっているべきでした」
「いいのよ」チンジャオがそういったとき、すでにワンムの姿はなかった。はたして、許しのことばは耳にとどいただろうか。まあいい。ワンムが気をわるくしたとしても、このつぎなにかで埋め合わせをすればいいのだ。自分なりにチンジャオの仕事の役に立てるかもしれないと考えるなど、ワンムもかわいいところがある。それだけ熱心に思ってくれてうれしいということを、ちゃんと知らせてやらねば。
ワンムのいなくなった部屋で、チンジャオは端末装置にもどった。ディスプレイにうかぶレポートを漫然と先へ送ってゆく。どれにもすでに目を通したのだが、役に立ちそうな情報はひとつも見つからなかった。いまさら見直したからといって、なにか見つかるわけもない。いく

らレポートやまとめを読んだところでなにも見つからないのは、なにもないからなのだろうか。どこかの神が気まぐれを起こして艦隊を消してしまったのかもしれない。いにしえのむかしには、そういうことがあったと聞いている。人間が介在した形跡がいっさい見つからないのは、たぶんそれが人間のしわざではなかったからだろう。そう報告したら、父はなんというだろうかとチンジャオは考えた。スターウェイズ議会は狂った神をどう処理するだろう？　煽動的文筆家のデモステネスの正体もつきとめられないスターウェイズ議会だ——神が相手では、つきとめることもとらえることも望めまい。

デモステネスが何者だか知らないが、いまごろきっと笑っているだろうとチンジャオは思った。彼はあれだけ人びとを説得して、ルジタニア粛清艦隊を送りだしたのは政府機関のあやまちであったと思わせようとしてきた。そしていま、デモステネスの思いどおり、艦隊は阻止されたのだ。

それこそデモステネスの思う壺だったのだ。チンジャオは初めてそのことに気がついた。これほど明白なつながりを、いままで見逃していたことが信じられない。じつのところ、各地の警察が艦隊の失踪にはデモステネスの信奉者とわかっている者たちが関与していたにちがいないと見なしたのも、その明白なつながりゆえだったのだ。警察は煽動者の疑いがある者を片っ端から駆りだして自白を強要した。だが、いうまでもなく警察はデモステネス本人を尋問したわけではない。彼の正体はだれも知らないのだ。

スターウェイズ議会警察の必死の捜査にもかかわらず、長年のあいだ巧妙に正体を隠しつづ

けているデモステネス。艦隊の失踪原因とおなじく、デモステネスという人物もまったくとらえどころがない。自分の正体を隠すトリックを編み出した彼なら、もうひとつのトリックを編み出すこともできるだろう。デモステネスを見つけ出すことができれば、艦隊が消息を絶った理由もわかるはずだ。どこからとりかかればいいかも見当がつかないが、とにかくこれは初めてためすやり方だ。すくなくとも、空疎な役たたずのレポートを繰り返して読む必要はないということだろう。

ふいに、ついいましがた、まったくおなじことを示唆した者がいたことをチンジャオは思いだした。自分でも、頬に血がのぼり、赤面するのがわかった。チンジャオは不遜にも、この荷の重い仕事の手助けができると思いこんだワンムを見下し、かわいいなどと思ったのだ。あれから五分とたっていないのに、いまではワンムがチンジャオの意識にまいた種がひとつの計画という花をひらいた。この計画の成否はべつとして、そのきっかけを与えてくれたのはワンムだ。というより、ワンムがいなければチンジャオはこんなことを考えはしなかっただろう。つまり、ワンムを愚かと思ったチンジャオのほうが愚鈍だったのだ。恥ずかしさのあまり、チンジャオは目に涙をうかべた。

そして、チンジャオは、彼女の心の先祖が詠んだ有名な詞の断片を思った。

くやしくも秋風のために
玉井の花は散っていたが

詩人の李清照はいったん後悔のことばを口にしてしまった苦しみや、それが取り返しのつかないことを知っていた。だが、賢明な彼女は、過ぎてしまったことばは取り返しがつかなくても、新たにいうべきことばが、ちょうど梨の花のようにひかえていることをおぼえていたのだ。自分の不遜さを恥じる気持ちがなごむかと、チンジャオはもう一度その詞を最初から最後まで暗唱した。いや、そうしようとしたのだ。だが、とちゅうで彼女はこんな一行に行き当たった。

手をたずさえて蓮のような船(ドラゴン・ボート)を見

と、チンジャオの思いはルジタニア粛清艦隊のことに飛んだ。艦隊のスターシップは一隻のこらず川船のようにならんで、まがまがしい彩色にもかかわらず、いまはただ流れに揺られている。岸辺から遠く離れ、もはや呼べど叫べど声はとどかないのだ。ドラゴン・ボートから龍凧を連想したチンジャオには、ルジタニア粛清艦隊を糸の切れた凧のように思った。それは、揚げた子供の手にもどることなく風にあおられるままに飛んでゆく。自由気ままなその姿は、なんと美しく見えることだろう。だが、みずから自由をのぞんだわけではない彼らは、どれほどおびえていることだろう。

夕暮れに吹きすさぶ風をどうしてしのげよう

ふたたび別の詞の一節を思いだす。わたしはこわくはない。吹き荒れる風も。篠つく雨も。

　二杯、三杯と薄酒をあおったむかし
　いまやその往時をとりもどすすべもなく

チンジャォは思った。わが心の先祖が酒で恐怖をまぎらすこともできたのは、ともに盃をかわす相手がいたからだ。そして、その相手が亡くなったいまでも、彼女はこう歌っている。

　窓辺に独り、むなしく夜を見つめるのみ

いまのわたしに、思い出のよすがとなる人がいるだろうか、とチンジャォは思った。偉大なる李清照がこの世にあった時代はどんなふうだっただろう？　そのころは、だれが神子（みこ）で、だれがそうでないかなどと思いわずらうこともなく、男と女が愛し合う友でいられた。そういう時代であればこそ、孤独のなかでも女は思い出をいつくしんで生きることができたのだ。わたしは母親の顔を思いだすことすらできない。のこっているのは平べったい写真だけで、こっちをむいたり、わたしを見守りながら動く母の面影を思い描くことはできないのだ。わたしにの

こされたのは神にひとしい父親だけ。彼を敬うことも、したがうことも、愛することもできるけれど、ほんとうの意味で甘えることはできない。からかい半分の口をきくときはいつだって、そのからかい方が咎められないのをたしかめている。ワンムに対してもそうだ。口では、あれほどはっきりと友達だといっておきながら、わたしは彼女を召使としてあつかっている。自分は神がみの声を聞く人間であり、彼女がそうでないという意識は片時も頭を離れないからだ。それはけっして乗りこえられない壁だ。わたしはいまも孤独だし、この先も永遠に孤独なままだ。

冷たき光、窓辺の帳よりさしこみ
黄金の格子より
新月が覗く

チンジャオはぞくりと身ぶるいした。わたしと月、か。ギリシアでは、月は冷たい処女、狩猟の女神と考えられていたのではなかったか？　まさに、いまのわたしのようだ。十六歳にして、触れられざる者だわ。

来客を告げるがごとき
笛の音響く

いくら耳をすましても、人の来る気配は聞こえない……
いや。聞こえてきたのは、食事の用意をしている遠い物音だった。台所で、碗やしゃもじが触れ合う音、人の笑い声。物思いからさめて、チンジャオは手をあげ、愚かにも涙に濡れた頬をぬぐった。これで孤独だなんて思い違いもはなはだしい。生まれてこの方、みんなにかしづかれて暮らしてきたのに。やるべきことがあるというのに、わたしはこんなところにすわってひとり古い詞など暗唱している。
即座にチンジャオは、デモステネスの身元に関する調査レポートを呼び出しはじめた。
それらのレポートに目を通した当初、彼女はまたしても袋小路にはいりこんだような印象を受けた。デモステネスの名で煽動的な文書を書いたといって逮捕された物書きの数は三ダースを上回り、それぞれが居住する惑星の数もほぼ同数におよんでいた。スターウェイズ議会は、デモステネスとは、単に目立ちたがり屋の反逆者どもがこぞって使った名前であるというありきたりの結論に到達した。デモステネスという人物はおろか、組織立った陰謀団のようなものも実在しないのだ。
だが、チンジャオはその結論に疑問をもった。デモステネスが、どの惑星でも例外なく論争を引き起こすことに見事なまでに成功してきた。どこの星をさがしたところで、これほどの才能をもつ反逆者が存在しうるだろうか？　とうていそうは考えられない。
だいいち、デモステネスの著作を読んだとき、その語り口が一貫していることにいやでも気

がついたのをチンジャオはおぼえている。視点の特異性と一貫性——それこそがデモステネスの魅力のひとつだ。そのおかげでどこにもむりがなく、理路整然と自説を説いているように見えるのだ。

ユートレニング、フラムリング、ラマン、ヴァーレルセという〈異質さのヒエラルキー〉を創案したのもデモステネスではなかったか？　いや、そうした区別ははるかむかしに書かれたものだ——それはまたべつのデモステネスだったのでなければおかしい。その初期のデモステネスによるヒエラルキーがあるから、反逆者たちは彼の名を名乗っているのだろうか？　彼らは知性ある非人間生物が発見された唯一の世界であるルジタニアの独立を支持する文章を書いている。宇宙は人間と非人間、あるいは知性生物と非知性生物に二分されてはいないということを初めて人類に教えてくれた文筆家の名を拝借するのは、しごくとうぜんな成り行きといえるだろう。

初期のデモステネスは、その著作で、よそ者をいくつかに区別した。よその世界から来た人間であるフラムリング。人間とは種を異にする知性体だが、コミュニケーションをとることができるので、協力して相互の差を克服したり決定をくだすこともできる存在のラマン。それ以外はヴァーレルセと呼ばれる存在だ。彼らは〝賢いけだもの〟であって、明らかに知性がありながら、人類と共通の基礎に立つことはまったく望めない。戦いが是とされるのはヴァーレルセを相手とする場合だけだ。相手がラマンなら、和睦をむすんで共存可能な世界をつくることもできる。これは、よそ者でも友になれるかもしれないという希望に満ち満ちた偏見のない考

え方だった。こういう考え方をする人間は、知性ある生物が住みついた世界にむけて〈小博士〉を搭載した艦隊を送り込むようなことは、まちがってもしないだろう。
こう考えてみると、いたたまれない思いがした。ルジタニア粛清艦隊はヒエラルキーを説くデモステネスにすら認めてもらえないだろう。チンジャオとしては、即座にそれを否定せずにはいられなかった。古いデモステネスがどう思おうと、そんなことはどうでもよいではないか。人びとを煽動する新しいデモステネスのほうは、人びとを一致団結させようと心を砕く賢明な哲学者などではない。それどころか彼は、世界に軋轢と不満をばらまき、言い争いをあおり、フラムリング同士を戦わせることすら企んでいる人間だ。
そして、煽動家デモステネスは、さまざまな世界でうごめいている多くの反乱分子の単なる合成物ではない。コンピュータで検索してみると、すぐにそれが裏づけられた。デモステネスの名をかたって著作を発表した反乱分子はなるほどそこらじゅうの惑星で発見されているが、彼らの文は決まってささいで影響力のすくない無益な小規模出版物にむすびつくだけで、けっして同時に各惑星に住む人間たちの半数の目にふれるような実際的危険をはらむ文書にはならない。にもかかわらず、各地の警察は嬉々として、わが地のケチな〝デモステネス〟こそがすべての反乱文書をものした犯人であると発表し、一件落着としたのだった。
スターウェイズ議会もまた、みずからの調査を無邪気にも同様に処置してきたにすぎない。各地の警察によってデモステネスの名のもとになにやら文書を発表したという確証のある反逆者の逮捕拘留が数回あったことを知ると、スターウェイズ議会の調査官は満足げに息をつき、

デモステネスという名は個人のものではなくて共有のものだったと確認されたと宣言し、それで調査を打ち切ってしまった。

早い話、だれも彼もが安直に逃げを打ったのだ。利己的で忠誠心のかけらもない——そんな連中が安穏に高い官職に居すわりつづけていると思うと、チンジャオはふつふつと怒りがわきあがるのを感じた。自分勝手な怠慢と名誉欲に流されて、デモステネスの調査を投げ出すなど、そんな連中は厳しい懲罰をあたえられてしかるべきだ。彼らには、デモステネスがほんとうに危険人物だということがわかっていなかったのだろうか。デモステネスの著作は、すくなくとも惑星パスではいまや常識と化している。ひとつの星で常識となっているならば、ほかでもそういうことが頻発しているかもしれないのだ。デモステネスのおかげで、ルジタニア粛清艦隊の失踪を知って喜ぶ人びとが、どれほどの星にどれほど多くいることか。デモステネスの名をかたった人間をいくら警察が逮捕しようと、彼の著作は途切れることなく発表されつづけた。しかも、それは、いつに変わらぬあの魅力あふれる語り口で書かれている。やはりそうだ。デモステネスの著作を読めば読むほど、彼がひとりの人間であり、その正体はいまだ明らかにされていないというチンジャオの確信は深まるばかりだった。デモステネスは、考えられないほど巧みに秘密をまもる方法を知っている人間なのだ。

台所のほうから横笛の音色がひびいてきた。夕食の知らせだ。チンジャオは端末装置のうえのディスプレイ画面にひたと見入っていた。そこに現われる最新レポートには、デモステネスの名が何度も何度もくりかえされていた。「デモステネス、あなたが実在することはわかって

いるわ」チンジャオは低くつぶやいた。「あなたがずば抜けて巧妙だということを、わたしは知っている。だから、きっと見つけるわ。そうなったら、支配者に楯突くあなたの戦いは終わりよ。ルジタニア粛清艦隊をどうしたのか聞きだしてみせる。それで、あなたとは縁が切れるんだわ。あとはスターウェイズ議会があなたを罰し、そして父上はパスの神となり、未来永劫極楽浄土に生きるでしょう。わたしは、この仕事をするためにこの世に生まれ、そのために神がみにえらばれた人間だわ。どうせ見つかるものならば、あなたもいまのうちに姿を現わしたほうがいい。男も女も、いずれは神がみの足元にひれ伏すのだから」

横笛のかなでる爽やかな低い音色にさそわれて、チンジャオは自然に立ちあがり、家人たちの待つ食卓へと足をむけた。彼女にとって、このなかばささやくような楽の音は、心の奥底の魂の歌、静まりかえった池をわたるひそやかな木々の語らい、祈りをささげる女の心にいつしかよみがえる思い出の音だった。徳高きハン・フェイツーの家の者たちは、こうして食卓に集まってゆくのだ。

チンジャオのやりだしたことを知って、ジェインは死の恐怖を味わうとは、こういう感じかもしれないと思った。人間はつねにこんな恐怖にさらされ、いつこの世の者ではなくなってもおかしくないのだと知りながら日々を送っている。よくそんなことができるものだという気もするが、それはものごとをわすれても、それっきりにはならない彼らだから可能なのだ。わたしにはできない。ものごとをわすれるということは、その知識をまるっきり捨て去るということ

とだからだ。あと一歩で、ハン・チンジャオは、真剣にさがす者がいないという理由で暴かれずにすんでいた秘密を見つけるだろう。その秘密が知られるときは、わたしが死ぬときだ。
「エンダー」ジェインはささやいた。
ルジタニアは昼だろうか、それとも夜？　エンダーは目覚めているのか、眠っているのか？　ジェインにとって、疑問を発するということは、知るか知らないかのふたつにひとつなのだ。そして、彼女はいまが夜だということをすぐに知った。エンダーは眠っているところだったが、いまは目覚めた。この三十年間、ふたりのあいだには多くの沈黙が流れたにもかかわらず、いまでも彼が自分の声に即座に反応するのだとジェインはさとった。
「ジェインだね」エンダーがささやきかえした。
となりで妻のノヴィーニャが眠ったまま身じろぎする。エンダーが装着しているセンサーを通じて、ジェインは彼女の声を聞き、彼女が身動きする振動を感じ、暗闇のなかで人の寝姿が変化するのを見た。ジェインがいまだに嫉妬という感情を身につけていないのがさいわいだ。でなければ、彼女はエンダーのとなりに横たわる温かいノヴィーニャの肉体に嫉妬していたかもしれない。もっとも、人間であるノヴィーニャのほうは嫉妬という感情にめぐまれている。エンダーが自分の耳のなかに住んでいる女性と話しているのを見るたびに、彼女がどれほど動揺するかジェインは知っていた。「声を出さないで」ジェインは注意した。「みんなが起きてしまうわよ」
エンダーは唇と舌と歯をつかって返事をした。こうすると口から息が洩れるような音しかた

てずにすむのだ。「逃走中の敵は元気かな？」これは長年の習慣になってしまったあいさつだ。
「あまり元気じゃないわ」ジェインがいった。
「やはり手出しするべきじゃなかったのかもしれないな。ほかに方法が見つかっただろうし。ヴァレンタインのエッセイで――」
「そのエッセイを書いた著者の正体があばかれそうなのよ」
「なにもかも正体があばかれるだろう」エンダーは、「きみのおかげでね」という部分を口にしなかった。
「それもこれも、ルジタニアが破壊の目標になったからだわ」そう答えるジェインもまた、「あなたのおかげでね」という部分を口に出さない。いくら非難してもきりがないのだ。
「それで、ヴァレンタインの正体はばれてしまったのか？」
「ある少女が発見しかかっているわ。その子はパスという星に住んでいるのよ」
「その場所は知らないな」
「まだ新しいコロニーでね、二世紀まえにできたばかりよ。中国系で、古代宗教が複雑にまじりあった信仰をかたくなにまもっているわ。人びとは神がみの声を聞くの」
「中国系の世界なら何度か暮らしたことがある」エンダーはいった。「どこでも人びとは古い神がみの存在を信じていたよ。神がみはどこの世界にも生きている。人類社会で最小のコロニーであるここでもだ。ここではいまでも〈尊者たち(オス・ヴェネラードス)〉の寺院で癒しの奇跡が起きている。ルーターの話だと、どこか奥地のほうでは新たな邪教が芽生えつつあるそうだ。そこのペケニー

ノたちは聖霊と絶え間なく交感しているという」
「そんなふうに神がみがしゃしゃり出てくるところが、わたしにはどうもよくわからないのよ」ジェインはいった。「神のことばなんて、人間が聞きたがっていることを形にしただけのものだって、だれかが気がつきそうなものなのに」
「それはちがうな」エンダーが説明した。「神がみは往々にしてわれわれがけっして望まないようなことをしろという。神がみのために、人間がすべてを犠牲にしなければならないようなことをね。神がみを甘く見てはいけないな」
「あなたはカトリックでしょう。カトリックの神もやはり話しかけてくるの？」
「もしかしたらね。しかし、ぼくには聞こえない。いや、たとえ聞こえても、それが神の声だとはわからないんだ」
「で、人間が死んだら、各人の信じている神がみはその人をどこか永遠の命のあるところへ連れて行ってくれるわけ？」
「それはわからないね。手紙にでも書いてもらわないと」
「わたしが死んだら、あの世へ連れていってくれる神さまはいるかしら？」
一瞬エンダーはだまりこみ、それから昔話でもするような口調でジェインに話しかけはじめた。「むかし、ひとりの人形づくりがいた。息子に恵まれなかった彼は、まるで生きているような操り人形をこしらえ、膝に抱いては息子に語りかけるように話をして聞かせた。頭がおかしくなったわけじゃない――それが人形であることはちゃんと承知のうえで――老人はその人

形をパインヘッドと名づけた。だがある日、神さまがやってきて手を触れ、人形に命が宿ったんだ。そして人形づくりが話しかけると、パインヘッドは返事をした。人形づくりはこのことをけっしてだれにも話さなかった。木でできた息子を家から出すことはなかったものの、彼はありったけの物語やこの世のありとあらゆるふしぎなニュースを息子のもとにもちかえった。そんなある日、つい最近発見された遠い遠い国の話を仕入れて港から帰ってきた人形づくりは、自分の家が燃えているのを見た。彼は〝息子が！　息子が！〟とわめきながらあわてて家に駆けこもうとした。ところが近所の人びとは、〝しっかりしろよ。あんたには息子なんかいないじゃないか！〟といって彼を押し止める。人形づくりは家が焼け落ちるのを見まもっていたが、下火になったとたんに焼け跡に駆けこんでいき、くすぶる灰にまみれて号泣した。彼は悲嘆にくれたまま、店を建て直そうともしない。みんなに理由をたずねられて、せがれが死んでしまったからだと答えた。それからは、他人の使い走りみたいな仕事で食いつなぎ、人びとは彼が火事のせいで狂ってしまったとばかり思って同情した。ところが三年ほどたったある日、小さなみなし子がやってきて彼の袖をひっぱり、こういったんだ。〝お父さん、ぼくにお話をしてくれないの？〟とね」

ジェインはつづきを待ったが、エンダーはそれっきりなにもいわない。「それで全部なの？」

「まだ足りないかい？」

「どうしてわたしにこんな話を？　夢と望みばかりの話じゃない。それがわたしとどんな関係

があるの？」
「ふと思いついた話なんだ」
「どうして思いついたの？」
「もしかしたら、神のお告げかもしれないよ」エンダーはいった。「それとも、ぼくは眠いし、きみが期待する答えをもっていないからかもしれない」
「わたしは、あなたにどんな答えをいってほしいのか、自分でもわからないのよ」
「ぼくにはわかっているよ」エンダーはいった。「きみは生きたいんだ。アンシブルをつないでいるフィロトの網の目を頼りにするんじゃなくて、自分の体でね。できるものなら、ぼくがその望みを叶えてあげたい。どうすればそんなことができるのかきみにわかっていれば、ぼくがそうしてあげるさ。だけどね、ジェイン、きみにはいまの自分という存在すらわかっていないんだ。自分がこの世に存在するようになった経由、きみがきみである所以（ゆえん）がわかれば、そのときは敵がアンシブルを切ってきみを殺そうとする日がきても、きみを助けることができるかもしれない」
「それがあなたのいいたかったこと？　家もろとも燃え尽きてしまうかもしれないけれど、わたしの魂は三歳のみなし子の姿になってのこるのかしら？」
「自分が何者なのかをつきとめるんだ。自分の正体、自分の本質を。そして、このことがすべて決着するまできみをどこかもっと安全な場所へ移すことができるかどうか検討しよう。ぼくたちにはアンシブルがある。きっと、きみを復活させられるさ」

「ルジタニアには、わたしがおさまるほど大容量のコンピュータはないわ」
「それはわからないよ。きみには、自分の本質がつかめていないんだから」
「わたしに、自分の魂をさがせとでもいうわけ」ジェインはふざけ半分の口調でそういった。
「ジェイン、人形が男の子に生まれ変わったことが奇跡ではないんだよ。操り人形に命が宿ったその事実こそ奇跡なんだ。なにかが起きて、なんの意味もないコンピュータの接続が知性ある存在に変わったんだ。なにかがきみを創りだした。わからないのはそのなにかなんだ。それさえわかれば、あとはきっと簡単さ」
エンダーの口調がはっきりしなくなってきた。もう眠りたいから行ってくれといいたいのだとジェインは判断した。
「おやすみ」エンダーはつぶやいた。「考えてみるわ」
いいおわったとたんに、彼は眠りこんでしまった。ジェインにはわからない。エンダーはほんとうに目覚めていたんだろうか？　朝起きたとき、いまの話をおぼえているのかしら？
ふと、ベッドがきしむ感じがした。ノヴィーニャだ。息づかいがさっきとちがう。いままで気がつかなかったが、エンダーとわたしが話しているあいだにノヴィーニャは目を覚ましたのだ。ほとんど聞き取れないくらいにそっと舌打ちをしたり唇を鳴らしたりする音が意味するものを、彼女はまちがいなく知っている。わたしと話をするためにエンダーが声にならない声で話をしているのだと。エンダーは今夜ふたりで話をしたことをわすれてしまうかもしれないが、ノヴィーニャはけっしてわすれない。彼女にとっては、夫が愛人とベッドを共にしている現場

を見つけたようなものだろう。わたしのことをそう思わないでくれればいいのだが。娘のようなものだと思ってくれれば。たとえばずっとむかし、よその女に生ませた私生児とか。ファンタジー・ゲームから生まれた子供というのはどうか。ノヴィーニャはそれでも嫉妬するだろうか？

わたしがエンダーの子供？

ジェインはおのれの過去をさぐりはじめた。おのれの自我をしらべはじめた。自分はいったい何者なのか、なぜ現存しているのかをつきとめようとしはじめたのだ。

だが、人間ならぬジェインは、それだけに没頭していたわけではない。いっぽうではデモステネスに関するデータを検索しているチンジャオの動きも追跡し、彼女が着々と真実にせまってゆくのを見定めている。

しかしながら、ジェインにとってもっとも急を要するのは、彼女の存在を見つけ出そうとするチンジャオの熱意をそぐ方法をさがすことだった。これはなによりも困難な作業だ。いくら人間の考え方に習熟し、さんざんエンダーと語り合ってきたジェインにとっても、個々の人間はいまだに謎だった。ジェインが到達した結論はこうだ。ある人物がしてきた行為を熟知していて、さらにその人物が自分の行為を当時どうとらえていたか、そして現在それをどう評価しているかをいくら良く知っていたところで、その人物の将来の行動をはっきりと予測することは不可能である。だが、ジェインには、ためしてみる以外に道はなかった。そこで、彼女はエンダーと、それから最近では彼の継子のミロ以外のだれにもむけたことのない観察眼で、ハン

・フェイツー家を観察しはじめた。もはや、チンジャオやその父親がコンピュータにアクセスするのを待って、そこからふたりを理解しようとする余裕はない。いまや、なにがなんでもハン家のコンピュータを制御し、ほとんど各室ごとにある端末装置の音声および映像レポートを耳目として利用しなければならない。ジェインはハン親子を観察した。いっしょであると離れているとにかかわらず、彼女はふたりにかなり注意をむけて、その発言、行動を分析研究し、おたがいがなにを思っているかを見分けようとした。

チンジャオに影響をあたえるには、議論で太刀打ちするよりもまず父親を説得して、その口から娘を説き伏せさせるのが一番だと知るのに、さして時間はかからなかった。そのほうがパスの流儀にもかなっている。ハン・チンジャオは父親のハン・フェイツーが命じないかぎりスターウェイズ議会に楯突くことはないだろう。だが、父親がそうしろといえばいやとはいわないはずだった。

ある意味では、このおかげでジェインの仕事はずっとやりやすくなる。チンジャオは若くて感情が激しく情熱的だし、まだ自分自身がよくわかっていない。それを説得するのはなかなか厄介だ。けれどもハン・フェイツーは人格ができあがったおとなだし、道理をわきまえていて、なお情け深い人物だ。彼ならば理屈で説得することができるだろう。とりわけ、スターウェイズ議会に対立することが彼の星と人類の大勢のためになるのだと納得させることができれば。あとはただ、彼がその結論に達するための適当な情報があればいい。

いままでは、ジェインはどんな人間にも負けないほどパスの社会パターンをよく理解していた。

そのために彼女は歴史や考古学的レポートをはじめ、パスの人びとによって著されたあらゆる資料を隅から隅までのみこんだのだ。その結果出てきたものは不安材料だった。パスの人びとの行動は、古今東西かつてなかったほど徹底的に神がみによって支配されている。それ以上に不安なのは、神がみが彼らに語りかける方法だ。それは明らかに強迫神経症——OCDと呼ばれる良く知られた脳障害だった。パスの歴史の初期には——すなわちいまから七世代まえの植民開始期には——医師たちはその症状にふさわしい治療をほどこしていた。ところが、通常の薬物療法をほどこしても、神がみの声を聞いたパス人、すなわち神子たちはまったく反応しないということがすぐに判明した。ほかのOCD患者たちはその治療で過剰な脳内化学物質のバランスが正常にもどる。これは、強制された仕事を完了し、もうそのことで思いわずらう必要はないのだと察知する感覚だ。神子はOCDの症状とされているあらゆるふるまいを見せるのだが、典型的な脳障害はまったくない。きっと、ほかに、はかりしれぬ原因があるにちがいない。

そこでジェインはさらに深くこの点をさぐって、パスとは縁もゆかりもない他の惑星に関する資料のなかにこの件の詳報を発見した。この病状を調査した科学者たちはすぐに似たような結果をひきおこす類似の脳障害があるにちがいないと結論したのだ。だが、初期レポートを公表した直後に調査は打ち切りとなり、科学者たちはべつの地での任務を命じられた。

べつの星へだ——これはほとんど考えられないことだった。いってみれば彼らを追い立て、時間から切断して、あとにのこった友達や家族からひきはなすことになる。それなのに、彼ら

はだれひとりとして拒絶しなかった——とすれば、彼らはたいへんな重圧に耐えなければならなかったにちがいない。彼らはみなパスを離れ、それっきり、それまでの研究を投げうってしまったのだ。

ジェインが最初にたてた仮説は、ほかならぬパスの政府機関のどれかが科学者たちを追放し、その研究から手をひかせたのではないかということだった。なんといっても、道教を信奉する者ならば、脳障害という身体的原因が神がみの声を聞かせるのだなどとわかって信仰に傷がつくのを望むまい。けれども、パスの政府がレポートの全容を把握していたという証拠はいっさい見つからなかった。パスで出回ったのは、神がみの声が聞こえるのは、いわゆる通常の治療可能なOCDの症状ではないという一般的結論にかぎられていた。パスの国民は、既知の身体的原因によって神がみの声が聞こえるのではないと確信するに足るレポートだけを見たわけだ。科学によって、神がみが実在することにお墨付きがあたえられた。パス側にそれ以上の情報や調査報告の隠匿を画策した者があるという記録は、なにひとつ見つからなかった。その決定は、すべて外部でなされたものだったのだ。スターウェイズ議会によって。

どこかに、アンシブル・ネットワークに接続されているあらゆる電子メモリにやすやすとはいりこめるジェインにも見つからないキー情報が隠されているにちがいない。そんなことがあるとすれば、その秘密を知る者が、漏洩をおそれるあまり、極秘情報の項からも、政府の最高機密コンピュータからも徹底して隠してしまったのだろう。

ジェインは、それくらいで放り出すことはできなかった。無関係な資料やデータベースにう

っかりのこされていた消しわすれの情報の断片から真実をつなぎあわせなければならないのだ。全体図に欠落した部分を埋め合わせるのに使えそうな別件を見つけなければならない。結局、ジェインのように時間も忍耐力も際限なくもちあわせている相手にかかっては、人間がいつまでも秘密を隠し通すことなどできるわけがないのだ。スターウェイズ議会がパスになにをしようとしているかもいずれわかるだろう。その情報が手に入ったら、場合によっては、ジェインを破滅させようとつきすすむハン・チンジャオを方向転換させるのに利用できるだろう。なぜなら、チンジャオもまた、秘密を明るみに出そうとしているからだ——より古い秘密、三千年ものあいだ隠されていた秘密を。

10 殉教者

〈われわれはこのルジタニアにおいて歴史のかなめにいるとエンダーはいっている。これから数カ月あるいは数年後には、この場所こそ、あらゆる知的生物に死か相互理解かのいずれかがおとずれた場所になるだろうと〉
〈さすが考え深いエンダーだけのことはある。わが種族のありうべき終焉にまにあうようにこの地へ連れてきてくれた〉
〈まさかそんな。じょうだんだろう?〉
〈われらにはじょうだんのいいかたはわからないから、いいたくてもいえない〉
〈あなたがここにいることもあって、ルジタニアは歴史の転換点となるのだ。たとえどこへ行こうと、あなたのいる場所が転換点になる〉
〈そんな役目はごめんです。汝らがひきうけてほしい。まかせるから〉
〈知らぬ者どうしが出会うところは、どこでも転換点になる〉
〈では、知らぬ者どうしでいるのはもうやめにしましょう〉
〈人間たちは、どうしてもわれわれを知らぬ者どうしにしたいのだ——彼らの遺伝子にそう組

みこまれている。われわれが友人になることだって、ありえなくはないのに〉
〈そのことばは意味が強すぎる。共同生活者とでもいっておきましょう〉
〈すくなくとも、おたがいの利益が一致するかぎりは〉
〈星ぼしが輝きつづけるかぎり、われらの利益が相反することはないでしょう〉
〈あまり長いことではないかもしれないな。せいぜい、人間の力と数がわれわれに勝っているあいだのことだけかもしれない〉
〈とりあえずは、それでけっこうです〉

まるまる一日も旅程がおくれてしまうというのに、キンは文句ひとついわずに会見に顔を出した。忍耐力はとっくのむかしに身につけている。異端者たちを説得するという使命がどれほど急を要するものであっても、人類のコロニーの支援という後ろ楯なしでは結局のところたいした成果があげられないだろう。したがって、ミラーグレ主長にしてルジタニア総督であるコヴァーノ・ゼリェイゾとの会見に同席せよとペレグリーノ司教から依頼されたからには、ことわるわけにもいくまい。

会見場へやってきたキンはおどろいた。オウアンダ・サーヴェドラ、アンドルー・ウィッギン、さらには自分の家族のほとんどが同席していたのだ。母とエラのふたりは——異端派のペケニーノのあつかいを議論するためにこの会見がひらかれるのだとすれば列席していることにふしぎはない。だが、クァーラやグレゴがこんなところでなにをしているのか？　まじめな話

にこのふたりが関係あるとはとうてい考えられない。彼らは年も若すぎるし、ものの見方がかたよりすぎているし、あまりに事を急ぎすぎる。キンから見れば、あいもかわらず口げんかをくりかえしているふたりは、まだ子供だ。エラはもっとおとなだから個人的感情にとらわれることなく科学を追求することができる。エラが科学を重視するあまり自分のことをそっちのけにしすぎることが、キンにはときとして気がかりでならないのも事実だが――そうはいっても、それはクァーラやグレゴに対する心配のまえではすっかり色あせて見える。

クァーラの場合は、とくに目がはなせない。ルーターから聞いた話からすると、そもそもこの異端派さわぎは彼女がデスコラーダ・ウィルスに関するさまざまな不確定プランについてペケニーノたちに洩らしたことに端を発しているらしい。異端派があちこちの独立した森にこれほど数多くの賛同者をさがしえたのも、ペケニーノたちのあいだに不安があったからだろう。彼らは、人間がなにかのウィルスを放ったり、ルジタニア全土に毒物を散布したりしてデスコラーダを一掃し、同時にほかならぬペケニーノたちまでもほろぼしてしまうのではとおそれているのだ。人間が間接的ながらもペケニーノ殲滅をたくらんでいるという事実を知ったなら、ピギーたちだって対抗措置として人類皆殺しを考えるだろう。

なにもかもクァーラが軽率に話してしまったせいだ。なのに、これからの方針を話し合おうという会見にクァーラが出席している。どういうわけだ？　彼女はミラーグレのなにかの集団の代表なのか？　みんな、政府や教会の方針はいまやリベイラ一族の専門だと本気で思っているのだろうか？　とうぜんながらオリャードやミロは列席していないが、そのことにはたいし

て意味がない——ふたりはどちらも障害者なので、家族のみんなには無意識のうちに子供あつかいされているからだ。しかし、ふたりをあなどるのは大きなまちがいであることをキンは知っていた。

まあいい、結論を焦ることはないのだとキンは思った。待っていよう。まずは聞き役にまわるのだ。みんなが意見をいいおわるまで。それからなら、神や司教さまを満足させられる行動のとりようがあるだろう。むろん、両者を満足させられなくても、神にさえ喜んでいただければそれでいい。

「会見をひらくといったのは、わたしではない」コヴァーノ主長が口火をきった。彼が善良な人間であることはキンも知っている。ミラーグレのおおかたの住人が思っている以上に有能な主長だ。ミラーグレの人びとは、貫禄があって、困っている人や家族を助ける努力をおしまないところを買って選挙のたびに彼を再選してきた。彼の政策がすぐれたものであるかどうかは人びとの関心の外だ——そういったことは彼らには抽象的すぎる。けれども、コヴァーノ主長は世知にたけているだけではなく政治的にも敏腕だった。二拍子ともそろった主長にめぐまれて良かったとキンは思っている。おそらく、われわれが試練のときをむかえるであろうことをご存じの神さまが、さしたる苦難もなくそれを乗りこえられるように指導者を与えたもうたのだろう。

「ともあれ、みんなよく集まってくれた。ピギーたちと人間との関係の緊張はますます高まっている。かつてなく、というよりはすくなくとも〈死者の代弁者〉がやってきて彼らとの和解

に力を貸していただいたとき以来なかったことだ」
　エンダーはかぶりをふったが、ピギーと人間との和解において彼がどんな役割をはたしたかは周知の事実で、本人がいくら否定したところでおよそ意味はない。つまるところ、この不信心者のヒューマニストがルジタニアのために大いに力をつくしてくれたことは、キンでさえ認めざるをえないのだ。ずいぶんまえのことになるが、彼は〈死者の代弁者〉に対して深い嫌悪を感じていた。だがいまは、エンダーがなしえたことを本当に理解しているのは家族のなかで聖職者である自分だけなのではないかという気がすることとさえある。福音を説く者を理解できるのは、おなじ立場の人間だけなのだ。
「いうまでもないが、われわれが抱いている不安は、二名の困った若者たちの思慮の足りない愚挙に起因する部分がすくなくない。そこで、この会見にはそのふたりにも出席してもらうことにした。自分たちのおろかで依怙地なふるまいがひきおこしかねない危険をいくらかでも理解してもらうためだ」
　キンはもうすこしで声をあげて笑ってしまうところだった。事態を説明するコヴァーノ主長の口ぶりは、最初から最後まであたりさわりのないものだったので、自分たちがお目玉をくらったとはグレゴにもクァーラにもすぐにはわかるまい。けれどもキンにはすぐわかった。わたしがうかつでした、コヴァーノ主長。あなたともあろう人が用もない者を会見に同席させるはずはないと気づくべきでした。
「報告によれば、ピギーたちのあいだにスターシップを打ち上げて他の星の人間たちにも故意

にデスコラーダを伝染させようという動きがあるそうだ。さらに、ここにいる若い女性が口をすべらせてくれたおかげで、あちこちの森でこの動きに対する関心が高まっているとか」

「それを詫びてほしいとおっしゃるなら」クァーラが口をひらきかけた。

「よけいな口出しをしないでほしいといっておる——それとも、十分ばかりの間もおとなしくしていられないというのか？」コヴァーノ主長の声は真の怒りをふくんでいた。クァーラは目をまるくして、椅子にちぢこまった。

「われわれが問題にしていることのもう半分は、ひとりの若い物理学者が原因だ。不幸にして、彼は世間で名を成すことを望んでいる」コヴァーノ主長はグレゴにむかって片眉をあげてみせた。「欲得とは無縁の知識人に育ってくれれば良かったものを。おまえはどうやら、ルジタニア人のなかでももっともおろかで暴力的な連中と友情をはぐくんできたらしいな」

「主長の反対派のことをおっしゃりたいわけですね」グレゴが切りかえした。

「この世界がペケニーノのものだということを忘れている連中のことよ」クァーラが反発する。

「世界なんて、それを必要とし、生産を可能にする方法を知っている側のものさ」グレゴがいった。

「だまらんか、若造ども。さもないとこの場から退席を命じるぞ。あとはおとなだけで結論を出す」

グレゴはコヴァーノ主長をにらみつけた。「あんたにそんな命令をされるいわれはない」

「どんな命令をしようが、それはわたしの勝手だ」コヴァーノ主長はいいはなった。「わたし

の考えでは、おまえたちはふたりとも法にさだめられた守秘義務に違反した。本来なら投獄を命じるべきところだ」
「罪状は？」
「主長には非常時の特権があるのをわすれているらしいな。非常事態がおさまるまでは、罪状などなくても投獄できるのだ。わかったかね？」
「できるならやってみればいい。ぼくがいなければ困るくせに」グレゴはいった。「ルジタニアには、まともな物理学者はぼくしかいないんだ」
「ペケニーノと一戦まじえるということになれば、物理学など散弾一発にもあたいせんよ」
「相手はペケニーノじゃなくてデスコラーダなんだ」グレゴは抗弁した。
「そんな話をしている時間はないのよ」ノヴィーニャが口をはさんだ。
キンはこの会見がはじまって初めて母親のほうを見た。ひどく緊張しているようだ。びくびくして。こんな母親を見るのは何十年ぶりだろう。
「ここへ集まった理由は、キンに課せられたこの異常な使命のためです」ノヴィーニャはいった。
「彼のことはエステヴァン神父と呼んでほしい」ペレグリーノ司教が訂正した。司教は教会の公職にはしかるべき権威をあたえようとこだわる。
「キンはわたしの息子です」ノヴィーニャがいった。「わたしの好きなように呼びますわ」
「きょうはみんないちいち角つきあわせて始末におえんな」コヴァーノ主長がこぼした。

これはどうにもまずいことになってきたぞ。キンは異端派に対する自分の使命について母親に説明することをわざと避けてきた。人間をおそれ、嫌っていることを隠そうとしないピギーたちのところへ直談判にゆくなどと聞いたら、母が反対することは目に見えていたからだ。キンは、母がペケニーノとの接近遭遇をおそれる理由をじゅうぶん承知している。彼女はおさない子供のころ両親をデスコラーダ病で亡くしたのだ。ゼノロジャーのピポが父親代理になってくれたが――こんどはその彼が、ペケニーノの手でむごたらしく殺された最初の人間になった。それから二十年、母は恋人のリボを――ピポの息子でゼノロジャーの跡継ぎだったリボを――おなじ運命にあわせまいと必死になった。他の男と結婚までして、リボが夫になって彼女個人のコンピュータ・ファイルにアクセスする権利をもたせまいとした。そのファイルを見れば、ピギーたちのピポ殺害につながる秘密が見つかってしまうと思いこんだのだ。なのに結局は、すべてが水泡と帰した。リボは、ピポとそっくりおなじ方法で殺されたのだ。

母ものちに殺害の真の理由を知ったし、ペケニーノたちはもう二度と人間に対してどんな暴力もふるわないと神妙に誓ったが、それでもやはり自分の愛する者がピギーたちのなかにはいって行くとなれば、彼女は理屈ぬきで逆上してしまうだろう。それがいま、こうして会見場に出席している。キンを伝道の旅に送りだすべきかいなかを決定するためとしか思えない会見がひらかれたのも、きっと彼女が騒ぎだしたせいだろう。楽しい朝にはなりそうにない。我を通すということにかけては母は筋金入りだ。彼女もアンドルー・ウィッギンと結婚してからは、ずいぶん角がとれて人間がまるくなった。けれども、自分の子供の身が危ないと思えば、かっ

となる。そうなったが最後、どんな夫も彼女をなだめることはできないのだ。
　コヴァーノ主長とペレグリーノ司教は、どうしてこんな会見をひらくことを許したのだろう？
　キンが胸のうちでそう問いかけたのが聞こえでもしたかのように、コヴァーノ主長が説明しはじめた。「アンドルー・ウィッギンから新しい情報が提出されたのだよ。最初は、なにも明かさぬままエステヴァン神父を異端派のもとへ送りだし、ペレグリーノ司教に祈りをささげよう頼むことも考えた。しかし、危険が増大すればなおさら、全員が事態をできるだけ完全に掌握して行動しなければならなくなるとアンドルーが断言したのでね。〈死者の代弁者〉は、人は深い知識をもっているほどうまく行動できるという考えを、異常なまでに信奉しているらしい。わたしのように長年政界にひたっていると、そこまで信じきることはできないが――とにかく、わたしより年上の彼がいうのだから、その知恵に屈したわけだ」
　むろん、コヴァーノ主長はだれの知恵に屈したわけでもないとキンにはわかっている。アンドルー・ウィッギンは単に彼を説得しただけなのだ。
「ペケニーノと人間の関係には、なんというかその、以前より問題が多くなったし、姿の見えない共生者である窩巣女王は着々とスターシップを建造しつつある。それとともに、この惑星外の事態もまた切迫してきたらしい。〈死者の代弁者〉が惑星外の事情通から得た情報によると、パスという世界に住む何者かがもうすこしでわれわれの協力者の正体をあばくところまでいっているそうだ。その協力者とは、スターウェイズ議会から艦隊に送られてくるルジタニア

破壊の命令をくい止めてくれている人物だ」

エンダーがコウヴァーノ主長にジェインのことを隠しているらしいと知って、キンは興味をひかれた。ペレグリーノ司教もそのことは知らない。グレゴやクァーラはどうだろう？ エラは？ 母はまちがいなく知っている。やたらと人に明かしたがらないことなのに、エンダーはキンには教えてくれた。いったいなぜだろう？

「数週間後には——いや数日後かもしれないが——スターウェイズ議会が艦隊との交信を復旧するのはまず確実だと思われる。その時点で、わが方の最後の砦は崩れるだろう。奇跡でも起きないかぎり全滅はまぬがれない」

「そんなばかな」グレゴが吐き捨てた。「外の草原にいるあの——ばけものが——ピギー用にスターシップを作ってやるんだったら、人間用のも作らせればいいいんだ。この星が粉みじんになるまえに逃げだせばいい」

「一理ある」コウヴァーノ主長はいった。「ことばこそ抑えぎみではあったが、わたしもそんなようなことを提案してみたんだ。どうだね、セニョール・ウィッギン、グレゴの歯に衣着せぬ提案がなぜうまくいかないか説明してくれんか」

「窩巣女王のものの考え方は、人間とはちがう。どうがんばっても、彼女には個人個人の生命の大切さは理解できないんだ。ルジタニアが破壊されるということは、彼女にとってもペケニーノにとっても——」

「M・D装置が吹っ飛ばすのは連中だけじゃないぞ」グレゴが注釈を入れた。

「彼らにとっては種の絶滅の危機だ」グレゴの横やりにあわてることなく、エンダーは先をつづける。「彼女は人間をルジタニアから逃がすために船を作るなどというむだはしないだろう。なぜなら、ほかにも二百ほどの星に無数の人間が生きているからだ。人間が全滅する危険はない」
「異端派のピギーたちをいまのままにしておけば、いずれ人間は絶滅だ」グレゴが反論した。
「そう、そこも問題だ」エンダーはいった。「デスコラーダを中和させる方法が見つからなければ、正直な話、ルジタニアに住む人間をよそへ移すことなどとうていむりだ。そんなことをしたら、まさに異端派の思う壺さ――他の人間たちにいやおうなくデスコラーダを押しつけ、ひいては死なせることになるだろう」
「ということは、どうしようもないということね」エラが口をひらいた。「こうなったら寝ころんで死んだほうがましだわ」
「そうともかぎらん」コヴァーノ主長がいった。「おそらく――まずまちがいなく――わがミラーグレの村は全滅をまぬがれんだろう。しかし、せめてペケニーノの植民宇宙船が他の人間世界にデスコラーダをもちこむことは阻止する努力ができるはずだ。方法はふたつあると思う――ひとつは生物学的なもの、もうひとつは神学的なものだ」
「あと一息なんです」ノヴィーニャが口をはさんだ。「数カ月か、ひょっとしたら数週間もあれば、エラとわたしはデスコラーダの代替種のデザインを完成できるわ」
「なるほど」コヴァーノ主長はそういってエラにむきなおった。「きみの意見はどうかね？」

キンはあぶなくうめいてしまうところだった。エラは母がまちがっているというだろう。問題を解決する生物学的な決め手はない、と。これに対して母は、キンを伝道に送りだして死なせる気かとなじるにちがいない。一家にとって、これだけは避けたいことだった――エラと母がおおっぴらに対立するなんて。コヴァーノ・ゼリェイゾという博愛主義者のおかげだ。

　ところが、エラの返事はキンの予想を裏切った。「現段階で、デザインはほぼ完成しています。いままで実験したものはすべて失敗におわり、これは唯一のこされたアプローチなんです。土着の種の生活環（ライフサイクル）維持に欠かせない働きをすべてもったまま、新参の種に適応してほろぼしてしまう能力をなくしたデスコラーダの変種がもうすこしで完成します」

「そんなの、種全体に対するロボトミーみたいなものだわ」クァーラが手厳しく断言した。「人類という種がそっくりそのままのこる。ただし大脳は抜きで、なんてことになったらどんな気がするかしら」

　当然ながらグレゴがだまっていなかった。「デスコラーダ・ウィルスが詩を書いたり定理を理解することができるというなら、知性があるから殺しちゃいけないというヨタ話も納得がいくがね」

「人間にはそれを読む能力がないってだけで、デスコラーダにはれっきとした叙事詩があるかもしれないのに！」

「黙らんか（フェシャーイ・アス・ボッカス）！」コヴァーノ主長の叱責が飛んだ。

　ふたりはぴたっと口をつぐむ。

「やれやれ。ルジタニアをほろぼすことは神のご意志かもしれんな。そうでもせんことには、おまえたちふたりを黙らせることもできん」
ペレグリーノ司教がせきばらいした。
「まあ、そうと決まったものでもないか」コヴァーノ主長はいいなおした。「神のご意志をおしはかるなど、わたしにはとうていむりなことだ」
司教が声をあげて笑い、つられてみんなも笑った。一瞬——波がひくように——緊張がほぐれ、すぐまたもどった。
「で、抗ウィルスは完成間近だというのだな?」コヴァーノ主長はエラに確認した。
「いいえ——とも、はいともいえます。代替ウィルスのデザインはほぼ完了しました。ですが、まだふたつ問題がのこっています。ひとつはどうやって入れ換えるか。新型ウィルスに旧型を襲ってとってかわらせる方法をさがさないとなりません。これがまだ——手をつけたばかりで」
「時間はかかるができるのか、それともその方法はまるで見当もつかんのか?」コヴァーノ主長はごまかされなかった。科学者を相手にするのに慣れているようだ。
「どちらとも」エラが答えた。
椅子にすわった母が身じろぎし、エラとのあいだに距離を置こうとした。かわいそうなエラ姉さん。キンは同情した。これから何年間かは母さんに声をかけてももらえないだろう。
「問題は、ふたつあるといったな?」コヴァーノ主長がたずねた。

「代替ウィルスのデザインは完了しても、それを生み出すとなると別問題なんです」
「そんなことは、たいして問題じゃないわ」ノヴィーニャがつぶやいた。
「うそよ、母さん。わかっているくせに」エラがいった。「新型ウィルスをどんなものにしたいかという点を列挙することは可能だけど、絶対温度目盛り十度以下でも、デスコラーダ・ウィルスを分解してDNAを組み替えすると、じゅうぶんな正確性は保てない。あまりに多くの遺伝情報を除去したためにウィルスが死んでしまうか、あるいはあまりに多くをのこしすぎて、常温にもどるが早いかもとどおりに再生してしまうからよ」
「それは技術的に解決できる問題だわ」
「技術的、ね」エラは厳しい口調でいいかえした。「フィロティック・リンクなしでアンシブルを組み立てるようなものですものね」
「つまり結論としては――」
「結論なんか出せません」ノヴィーニャがいった。
「つまり結論としては」コヴァーノ主長がつづけた。「デスコラーダ・ウィルスそのものを管理することが可能かどうかという点で、わがゼノバイオロジストの意見がまっぷたつにわかれているわけだ。となると、われわれとしてはもうひとつの方法を検討せざるをえないな――ペケニーノを説得して、植民船の行き先を人間の住んでいない世界に限定するのだ。それならば、彼らは人間を殺すことなく独自の毒性ある生態系を築くこともできるだろう」
「ペケニーノを説得？」グレゴがいった。「連中は信用ならないんだ。約束してもすぐ破る」

「おまえにくらべれば、いままで彼らはよく約束をまもっているほうだ」コヴァーノ主長が断言した。「わたしがおまえなら、道徳的にも彼らより上みたいな口はきかんね」

ようやく出番がきた。これで意見をいっても害にはならないだろう。「いろいろと興味深い議論をきかせていただきました」キンは口をひらいた。「わたしが異端者たちのもとへ行って説得することでペケニーノが人間に危害をくわえるのを思いとどまってくれるなら、そんな幸せなことはないでしょう。しかし、たとえわたしが行ったからといってうまくいくとはだれひとり思わなくても、やはりわたしは行くでしょう。わたしが行くことで事態が悪化しかねないという結論が出たとしても、わたしは行きます」

「すすんでやる気になってくれているとは、うれしいかぎりだ」コヴァーノ主長が皮肉った。

「わたしは神と教会のためにすすんで協力するつもりです」キンはいった。「わたしの使命は、人間をデスコラーダから救うために異端者たちのところへ行くことではなく、ましてやルジタニアの人間とペケニーノを和解させるためでもありません。わたしの使命は、異端者たちのもとへ行って、彼らにキリストと教会への一体性への信頼をとりもどさせることなのです。わたしは、彼らの魂を救いに行くのです」

「さもありなん」コヴァーノ主長がいった。「それでなくては、とても行きたいとは思えんだろう」

「それが、わたしが行く理由でもあり、使命が成功したか否かの判断の基準となるのも、それだけです」

コヴァーノ主長は困惑したようにペレグリーノ司教に目をむけた。「あなたの話では、エステヴァン神父は協力的だということだったが」
「彼は神と教会にけっしてさからわないといったのだよ」司教は答えた。
「もうすこしはっきりするまでこの伝道の旅に出るのを待つようにと説得してもらえるものとばかり思っていましたよ」
「たしかに説得することは可能でしょう。それどころか、行かないように命じることもできる」ペレグリーノ司教はいった。
「だったら、命じてください」ノヴィーニャが訴えた。
「そうはいかない」と司教。
「あなたはこのコロニーのことを気にかけているものと思ったが」コヴァーノ主長がいった。
「わたしが気にかけているのは、自分がまかされているすべてのキリスト者のことだよ」ペレグリーノ司教がいった。「三十年まえまでは、ルジタニアの人間たちのことだけを気にかけていればよかった。ところがいまでは、人間と同様、この星にいるキリスト教徒のペケニーノたちの魂の安らぎにも責任がある。わたしはエステヴァン神父を伝道の旅に送りだす。彼は、のちにアイルランドとなったエール島から毒虫と蛇を追放した聖パトリックとおなじなのだ。聖パトリックは比類ない成功をおさめ、王族をはじめとする全国民を改宗させた。残念ながら、アイルランド教会はかならずしも法王の希望にそった行動をしてきたわけではない。両者にはいろいろな点で——いわば見解の相違があってな。表面的には復活祭(イースター)の期日の問題とみえるも

のが、じつは法王への従属の問題だったりした。流血沙汰を見たことも一度や二度ではない。しかしながら、聖パトリックはエール島へなど行かないほうがよかったなどと一瞬たりとも思ったものはひとりもいないのだよ。アイルランド人が異教徒のままでいたほうが良かったなどといいだす人間はだれもいなかった」

グレゴが立ちあがった。「われわれはフィロトを見つけた。真に不可分の原子をね。われわれは星ぼしを征服した。われわれは光速以上のスピードでメッセージを送っている。なのに、これじゃまるで中世そのままじゃないか」彼は戸口へむかいかけた。

「わたしの許可なくそのドアを出るのなら」コヴァーノ主長の声が飛んだ。「一年間の監獄暮らしを覚悟するんだな」

グレゴはドアのところまで歩いていったが、出ていくかわりにそこに寄りかかって皮肉たっぷりににやりとした。「このとおり、従順なもんでしょ」

「時間はとらせんよ」コヴァーノ主長はうけあった。「ペレグリーノ司教もエステヴァン神父も、われわれの意見におかまいなく結論を出せると思っているようなことをいうが、むろん、そんなことができるはずはない。わたしがエステヴァン神父をピギーのもとへ行かせるべきでないと判断すれば、彼は行きたくても行けない。その点、誤解しないように。ルジタニアのためとあらば、わたしはルジタニアの司教を逮捕することも辞さないのだ。エステヴァン神父の伝道のことだが、わたしの同意がなければペケニーノのなかへはいってゆくことはできないぞ」

「ルジタニアにおける神の仕事をさまたげるとおっしゃるか」ペレグリーノ司教がぞっとするような声でいった。「そんなことをして地獄へ落ちる覚悟はあるのだろうな」
「覚悟はできている」コヴァーノ主長はいった。「教会と対立したあげくに地獄へ落ちる政治家は、わたしが最初じゃないだろう。ありがたいことに、今回はそんなことにならずにすみそうだがね。諸君らの意見を聞いて、わたしは結論に達した。新型抗ウィルスの完成に期待するのはリスクが大きすぎる。だいいち、あと六週間で新型抗ウィルスが完成し利用可能になるというぜったいの自信があったとしても、やはりわたしはエステヴァン神父に伝道の許可をあたえるだろう。この困難な事態からなんらかの希望を見いだすには、エステヴァン神父の伝道がもっとも可能性が高い。アンドルーの話では、ペケニーノたちはエステヴァン神父にたいへんな尊敬と愛情をいだいているそうだ——キリスト教徒でないペケニーノたちまでがな。異端派のペケニーノを説得して、彼らの信仰の名のもとに人類を絶滅させる計画をあきらめさせることができたら、それで、われわれを悩ませている大きな問題はひとつ解決だ」
キンはまじめな顔でうなずいた。コヴァーノ主長は底知れぬ知恵の持ち主だ。すくなくとも当座はおたがいに角つきあわせることもなくなったのがありがたかった。
「同時に、ゼノバイオロジスト諸君には全身全霊をもって抗ウィルスの研究をつづけてほしい。それを使うかどうかは、完成した時点で決定しよう」
「使うさ」グレゴが断言した。
「わたしが生きてるかぎりは使わせないわ」クァーラが言明した。

「もっと多くのことがわかるまで行動はつつしんでくれたまえ。ことを起こすのは、それからにするんだな」コヴァーノ主長が釘をさした。「さてそこで、グレゴ・リベイラ、きみに話がある。超光速移動が可能かもしれないと信じる根拠があるとアンドルー・ウィッギンが断言しているんだが」

　グレゴは冷たい目で〈死者の代弁者〉を見やった。「物理学を勉強したわけでもないあんたになにがわかるんだい、代弁者(セニョール・ファランチ)どの？」

「できればきみに教えてほしいと思っているよ」エンダーは答えた。「とにかく話を聞いてもらわないことには、これが突破口だと期待できる根拠があるかどうかすら確かでないんでね」

　グレゴがむけてきた口論の切っ先をアンドルーがいとも簡単にかわしたのを見て、キンは微笑した。グレゴだってばかではない。自分が相手の手のうちにはまっているとわかっているだろう。けれども、その不満をぶちまけようにも、アンドルーに下手に出られてはどうしようもないのだった。これは、〈死者の代弁者〉のもつ、もっとも腹立たしい手練手管のひとつだ。

「アンシブルとおなじスピードで各世界を移動できる方法があれば」コヴァーノ主長が割ってはいった。「たった一機のスターシップでルジタニアの全人類を他の世界へ移転させられる。なかなかむずかしいことだがね」

「ばかげた夢物語だ」グレゴが決めつけた。

「しかし、あきらめるわけにはいかん。とにかく研究してみなくては」コヴァーノ主長がいった。「さもなければ、われわれも工場労働者もおなじだ」

「肉体労働をすることくらいこわくない」グレゴがいった。「そんなおどしに乗って、あんたのために頭を使ったりするもんか」
「いくら軽蔑されてもかまわんよ」コヴァーノ主長は食いさがる。「要は、協力してもらえればそれでいいんだ、グレゴ。協力はできないというなら、やりたくはないが命令をさせてもらうことになる」
自分がのけものになっているとでも思ったのだろうか、クァーラがグレゴの機先を制した。
「そうなの。みんなは、知性をもつ相手とコミュニケートする方法を考えてもみずに、平気でここにすわって彼らを全滅させることを考えるわけね。みんなで好きなだけ大量殺戮を楽しめばいいわ」そういって、グレゴとおなじように、彼女もその場を去ろうとした。
「クァーラ」コヴァーノ主長が声をかけた。
クァーラは立ち止まる。
「きみはデスコラーダに話しかける方法を研究するんだ。このウィルスたちと意思の疎通がはかれるものかどうか、それを知るためにな」
「そんなおいしいことをいっても、だまされないわ」クァーラはいった。「殺さないでくれと彼らが必死で訴えているといったらどう思う？　どうせ信じてくれないくせに」
「とんでもない。きみがうそをついていないことはわかっている。どうしようもなく軽はずみな娘ではあるがな」コヴァーノ主長はいった。「しかし、きみにデスコラーダの言語を解明してほしいと思う理由は、まだほかにもあるんだ。つまりだな、アンドルー・ウィッギンは、わ

たしが想像もしなかったような可能性をもちだしてきたんだよ。周知のとおり、ペケニーノが知性をもつようになったのは、この星にデスコラーダ・ウィルスが蔓延して以来のことだ。しかし、われわれが原因と結果を誤解しているとしたら？」

ノヴィーニャが、皮肉な薄笑いをうかべてアンドルーのほうをむいた。「ペケニーノがデスコラーダを生じさせたとでも思っているの？」

「そうじゃない」アンドルーが答えた。「しかし、ペケニーノこそデスコラーダだったとしたら、どうだ？」

クァーラが息をのんだ。

グレゴは笑いとばした。「まったく、あんたは次から次へとうまいことを考えだすもんだな」

「どういうことか説明してほしい」キンがいった。

「ふと思ったんだが」アンドルーの説明はこうだ。「クァーラの話を聞いていると、デスコラーダほど複雑な生物なら知性があってもおかしくはないらしい。彼らがその性格を表現するためにペケニーノの肉体を使っているとしたらどうだろう？　ペケニーノの知性は、すべて彼らが体内にかかえているウィルスによるものだったとしたら？」

このとき初めて、ゼノロジャーのオウアンダが口をひらいた。「ミスター・ウィッギン、あなたは物理学だけじゃなくて異類学についてもなにもご存じないようね」

「そう、異類学の知識は物理学よりもっと乏しい」エンダーは答えた。「しかし、そうとでも

考える以外に、瀕死のペケニーノが第三の生に移行するとき、記憶や知性が失われない理由を説明できた者はなかったんじゃないかと気がついてね。樹木になってしまえば脳をもっているとはいえない。ところが、そもそも意思や記憶といったものがデスコラーダによって伝えられるのだとしたら、脳が死滅することにとりたてて意味はなく、ペケニーノの人格はちゃんと父樹に移行するわけだ」

「たとえその説の真実性を否定できないとしてもですよ」オウアンダはいう。「それを確認するような実験はとてもできません」

アンドルー・ウィッギンは残念そうにうなずいた。「わたしにできないことはわかっていたが、きみたちならなんとかと思って」

コヴァーノ主長がここでまた口をはさんだ。「オウアンダ、きみを呼んだのはそれを調べてもらうためだ。信じていないなら、それもよし——あやまりであると証明する方法を見つけたまえ。それがきみの仕事だ」コヴァーノ主長は立ちあがって全員に宣言した。「諸君、わたしの注文を理解してくれたかな。われわれは、いくつかの点で、人間がかつて直面したもっとも苦しい道徳的選択をせまられている。われわれはみずから異類皆殺し（ゼノサイド）に手をくだすか、手をこまねいてその対象になるのを許すかという瀬戸際にある。知性体であることがわかりきっているものと、断言はできないが知性体と考えられるものとを問わず、あらゆる種が深刻な危機に瀕しており、余人ならぬここにあつまったわれわれだけが、ほとんどすべての決定をくだすことになる。とうていおなじとはいいかねるが、前回これに似た事態が起こったとき、われわれ

人間の先祖たちは自分たちの命を救うためと考えてゼノサイドを実行する道をえらんでしまった。そこで諸君にはこうお願いしているのだ。どんなに望み薄に思えようと、かすかでも希望の光が見えるかぎり、あらゆる道を追求してほしい。それが、われわれの決定を導く一条の光をあたえてくれるかもしれない。協力してくれるな？」

グレゴやクァーラやオウアンダでさえも、しぶしぶではあったが同意のしるしにうなずいてみせた。これでとりあえずコヴァーノ主長は、この部屋にあつまった我のつよい喧嘩仲間を協力的な集団に変えたのだ。部屋を出たらいつまでこの状態がつづくかは賭けるしかない。この協力の精神はおそらく次の危機がおとずれるまではもつだろうとキンは判断した——それだけつづいてくれればたぶんなんとかなる。

争点はのこすところあとひとつだけになった。会見が解散になってみんなが口ぐちに声をかけあって出ていったり、一対一の話しあいにはいったりするなか、ノヴィーニャがやってきてけわしい目つきでキンを見つめた。

「行ってはだめよ」

キンは両目をとじた。相手がこんな切り口上では、とりつく島もない。

「母さんを愛しているなら」

キンは新約聖書のなかにあるものがたりを思いだした。母と兄弟がイエスのもとをおとずれて、自分たちを受けいれるなら弟子の指導を中断してくれとたのむエピソードだ。

「これが、ぼくの母と兄弟か」キンはつぶやいた。

母には彼がなんのことを思ってそういったのかわかったにちがいない。キンが目をあいたとき、彼女の姿はなかったからだ。
それから一時間とたたないうちに、コロニーにある貴重な貨物トラックの一台に乗ってキンもまた故郷をあとにしていた。持ち物はほとんどないし、ふつうの旅ならば徒歩でゆくところだ。けれども、目ざす森まではそうとうの距離があるので、車がなかったら何週間もかかるだろう。だいいち、それだけの食料を携行することはとてもむりだ。この土地はいまだに厳しい環境にある――人間が食べられるものはなにひとつ育たないし、たとえあったとしてもデスコラーダ抑制剤を配合した食料も必要だ。それなしでは、飢え死にするまえにデスコラーダ病で死んでしまうだろう。
あとにのこしてきたミラーグレの町が小さくなってゆき、とりたてて見るものもないだだっ広い平原の奥へ奥へとつきすすんでゆくにつれて、キンは――エステヴァン神父は――思いにふけった。異端派のリーダーは〝戦争屋(ウォーメイカー)〟という名のついた父樹であり、ウォーメイカーはかつてペケニーノの唯一の希望は聖霊が――すなわちデスコラーダ・ウィルスが――ルジタニアの全人類をほろぼしてくれることであると発言をしたことで有名なのだ。これを知っていたら、コヴァーノ主長はどう決断していただろう。
それは重大なことではないだろう。神は、その国家、血筋、言語、種族にかかわりなく、あらゆる民にキリストの福音を説かせるためにキンをお呼びになった。たとえもっとも好戦的で残忍で憎しみに満ちた者たちでも、神の愛に感動してキリスト教徒にならないとはかぎらない。

歴史をひもとけば、そういう例はいくらも出てくる。こんどだって、きっと。

ああ父なる神よ、この世界に奇跡をもたらしたまえ。あなたの子供たちは、いまこそ奇跡を必要としているのです。

ノヴィーニャがエンダーと口をきこうとしなかった。気になる。すねているとは思えない——すねるなどということはいままで一度もなかったからだ。エンダーの見るところ、彼女はエンダーを非難するためというより、非難すまいとして沈黙をまもっているらしい。口をひらけば、ぜったいに許せないような暴言を吐いてしまいそうだから黙っているのだろう。

そう思って、エンダーはすぐに彼女をなだめて口をひらかせようとはしなかった。彼女が影のように家のなかを歩きまわり、そばを通りかかっても目を合わせようとしないのを放っておいた。なるべく目障りにならないように心がけ、床につくのも彼女が眠ってからにした。

原因はキンのことに決まっている。異端派のもとへ伝道に行ったキン——ノヴィーニャがなにをおそれているかは手にとるようにわかるし、彼女とちがってエンダーはその点を心配してはいなかったが、それでもキンの旅が危険のないものとはいいがたいことは承知のうえだ。ノヴィーニャの非難は筋が通らない。どうやったところで、エンダーにはキンを止めることなどできなかっただろう。ノヴィーニャの子供たちのなかで、キンだけにはエンダーの影響力がほとんどおよばなかったのだ。いまから数年まえに和睦をむすびはしたが、それは対等な者どうしの和平宣言であり、エンダーがほかの子供たちとのあいだに築きあげた原父性とは無縁のも

のだった。使命を拒むようにノヴィーニャが説得してもうんといわなかったのでは、エンダーの出る幕などなかっただろう。

ノヴィーニャも頭ではそうわかっているはずだ。けれども、人のつねとして、彼女にも理屈で行動できないときがある。彼女はあまりにも多くの愛する人を亡くしてきた。またひとり愛する子供がするりと手から離れてゆきそうだと感じたとき、理性が吹きとんで本能が顔をだした。エンダーは、癒し手であり、守護者として彼女の人生にはいりこんだ。彼女に不安をいだかせないようにするのが彼の仕事だった。なのにいま、彼女はいやおうのない不安にさいなまれ、信頼を裏切ったエンダーに怒っているのだ。

とはいうものの、二日も無言の行がつづいて、エンダーはもうこれまでと見切りをつけた。いまはノヴィーニャとのあいだに溝をつくるべき時ではない。彼は——そしてノヴィーニャも——ヴァレンタインがやって来たらおたがいに気まずい思いをするだろうと覚悟はしていた。ヴァレンタインとエンダーは、いろいろとむかしながらの方法で意思を伝えあうすべを心得ている。数かずの接点もある。エンダーは姉の魂の奥深くに通じるさまざまな道も知っている。そんなこともあって、彼女といっしょに過ごしたあのころの——あの数千年のあいだの——自分にもどるまいと思っても、知らず知らずそうなってしまいがちだった。ふたりは三千年の歴史をさながらおなじ目で見るように体験してきたのだ。ノヴィーニャとの暮らしはたかだか三十年。主観的にはヴァレンタインと過ごした時間より実はこちらのほうが長いのだが、ややもするとヴァレンタインの弟としての自分、彼女のデモステネスに対する〈代弁者〉の役割にも

どってしまいがちだった。
ヴァレンタインがやって来たらノヴィーニャが嫉妬するだろうという予測はついたから、その点は心構えができていた。しばらくはふたりで顔をあわせる機会もほとんどないはずだとヴァレンタインにもいっておいた。そして彼女もまた理解を示し――ヤクトがおなじ不安を抱いていたので、おたがい配偶者によけいな心配をかけないほうがいいといったのだ。姉と弟の絆に嫉妬するなど、ヤクトにしてもノヴィーニャにしても愚かだとすらいえる。エンダーのほうにもヴァレンタインのほうにも、おたがいのつながりに性的なものはこれっぽっちもあったためしがなかった――ふたりをすこしでも知っている者がそんなことを聞いたら大笑いするだろう――だが、ヤクトやノヴィーニャが不安に思っているのは、性的な裏切りではなかった。といって、ふたりのあいだにある感情の絆でもない――ノヴィーニャはエンダーが自分を愛し、献身してくれていることをまったく疑っていなかったし、ヤクトだってヴァレンタインが自分にささげてくれる愛情や信頼に物足りなさなど感じていないのだ。
問題は、こうしたこととは比較にならないほど深いところにあった。これだけ長い時間をへだてたいまになっても、再会したその瞬間から、姉と弟はさながら一人の人間であるかのように行動することができるという事実、なんの説明もなくてもふたりが目ざす目標にむかって協力しあうことができるという事実が問題なのだ。そうと知ったヤクトが大きなショックを受けていることは、初対面のエンダーにさえ手にとるようにわかった。妻とその弟の再会を見て、ヤクトはさとったのだ。人と人のむすびつきとは、こういうことなのか。これこそ一心同体と

いうものなのだ、と。ヤクトは、妻と自分ほど強くむすびついている夫婦はいないと思ってきたし、それはおそらくまちがいではない。けれども、いま彼は、自分たち夫婦以上に強くふたりの人がむすびつくことがありうるという実例を見せつけられてしまった。人は、いわば相手に同化することができるのだ。

エンダーはヤクトのそんな思いを見てとって、ヴァレンタインがいかに巧みに夫の不安をとりのぞいているかに感嘆した——そればかりか彼女は自分とエンダーとの距離をおくことに成功した。そうして、姉弟の強い絆にすこしずつヤクトが違和感をおぼえなくなるのを待つつもりなのだ。

エンダーの予測をうらぎったのは、ノヴィーニャの反応のほうだった。知りあった当座、彼はノヴィーニャを子供たちの母親として認識していた。子供のこととなると、おそろしいほど理屈ぬきに献身する女だということしか知らなかったので、自分が追いこまれたときも、子供に危険がせまったときのように所有欲の強さと支配力を発揮するだろうと考えていた。まさかこんなふうに相手を避けてとおるとは、まったく予想外だった。ノヴィーニャがエンダーによそよそしくなったのは、キンの伝道に対して沈黙で抗議するようになる以前のことだった。じっさい、いま考えてみると、彼女はヴァレンタインがやって来るまえからこんな態度を見せるようになっていたのだ。まるで、いざライヴァルが現われもしないうちから降参していたようだった。

むろん、それも当然だ——そうなることは計算しておくべきだった。ノヴィーニャは生まれ

てこのかた、あまりに多くの意味深い人たちを失っている。彼女は頼るべき人びとを次つぎと亡くしてきた。両親。ピポ。リボ。ある意味ではミロもそうだ。自分の子供に保護者的になり、だれにもわたすまいとするのは当然だ。彼らがノヴィーニャを頼っているのだから。けれども、彼女のほうが相手に頼っている立場となれば話は逆だろう。彼らが自分からうばい去られるのではという恐怖に駆られた場合、ノヴィーニャはみずからひきさがる。彼らに頼ることを自分に禁じるのだ。

いや、〝彼ら〟ではなく、〝彼〟すなわちエンダーに。ノヴィーニャは彼に頼ることを自分に禁じようとしている。そして、彼女がこのまま口をきこうとしなければ、ふたりの結婚にはとりかえしのつかない亀裂がはいることになるだろう。

そんなことになったらどうすればいいのかエンダーには見当もつかなかった。自分の結婚生活が破綻するなどということを考えたこともなかったのだ。彼はなまはんかな気持ちで結婚に踏みきったわけではない。ノヴィーニャとは死ぬまで添い遂げるつもりでいたし、おたがいへの心からの信頼が生む喜びに満ちた結婚生活を過ごしてきた。いま、ノヴィーニャの側に彼への信頼はない。だが、それは理不尽というものだ。エンダーはいまでもどんな男より、彼女が生涯でめぐりあったどんな人間よりも彼女に対して忠誠な夫だった。そんな彼がくだらない誤解でノヴィーニャを失うなんて話にならない。いくら無意識のうちにとはいえ、ノヴィーニャはどうやら夫婦のちぎりを断ち切る覚悟らしい。みすみすそんな事態を生じさせたのでは、彼女は二度とふたたび他人を信頼しようという気をなくしてしまうだろう。誤解がもとでそんな

ことになるのは悲劇だ。
　そこでエンダーがノヴィーニャとなんとか正面きって話し合おうと算段しているところへ、偶然にもエラが顔をだした。
「アンドルー」
　エラは戸口に立っていた。はいってくるまえに手でも叩いて合図してくれたのだとしても、エンダーの耳には聞こえていなかったのだ。とはいえ、娘が母親の家にはいるのに許可をもとめる必要などありそうにない。
「ノヴィーニャは奥だよ」エンダーは答えた。
「あなたに話があって来たのよ」
「わるいが、それなら予約をとってほしかったな」
　エラは笑いながらエンダーの隣に腰をおろした。笑い声はすぐにやんだ。心配ごとがあるのだ。
「クァーラのことなんだけど」彼女は話しはじめた。
　エンダーはためいきをついて微笑した。クァーラは根っからのヘソ曲がりで、どんな目にあってもすこしも素直にならなかった。それでも、エラはいつだってだれよりもクァーラのあつかいがうまかったのだ。
「どうもふつうじゃないの」エラはいった。「そうなのよ。いつもよりおとなしくて。口げんかひとつしないいんですもの」

「危険な兆候だと思うかい？」
「あの子がデスコラーダとコミュニケートしようとしているのは知ってるでしょ？」
「彼らにも言語があるといってたね」
「そうなんだけど、あの子のやり方は危険だわ。たとえうまくいってもコミュニケーションは確立できないでしょうね。いえ、うまくいけばなおさらね。そのときには人間は全滅している可能性が高いから」
「クァーラは、いまなにをしている？」
「わたしのファイルに侵入してきたわ――簡単なことよ。わたしは、おなじゼノバイオロジストの目にふれないようにすべきだなんて思わなかったから、なんの防護措置も講じてないし。クァーラは、わたしが植物にスプライシングするつもりだった抑制剤を製造しているところよ――あっというまでしょうね。ファイルには正確なレイアウトがのこっているから。ただ、あの子はその抑制剤をなにかに組みこむかわりに、直接デスコラーダにあたえているのよ」
「どういうことだ、あたえている、とは？」
「つまり、クァーラ流のメッセージね。それこそ、あの子が彼らの小さなメッセージ・キャリアに乗せて送りだしているものなの。実験にもなんにもならないのよ。それではキャリアが言語であるか否かは決定できるはずがないわ。でも、知性のあるなしにかかわらず、デスコラーダには周知のとおり桁はずれの適応力があるだけに――クァーラのおかげで、デスコラーダはわたしが考えだしたもっとも有効な抑制手段にまで適応してしまいかねないのよ」

「反逆罪だな」
「そういうことになるわね。クァーラは、われわれの軍事機密を敵側に漏洩しているんだから」
「あの子には、このことを話したのかい？」
「決まってるでしょ——もちろん話したわ。あの子ったらむきになって」
「ウィルスのなかにはクァーラの訓練に順応したものがいるのかな？」
「それはまだあの子もためしていないわ。窓辺へ駆けよって〝殺し屋が来る！〟と叫んだってところね。あの子のしていることは科学じゃない。あれは異種間の政治的かけひきよ。ただし、相手に政治があるかどうかはさだかじゃないけど。わかっているのは、あの子が手出ししたおかげで、想像もしていなかったほど急速に人類が死滅するかもしれないということだけ」
「ノッサ・セニョーラ」エンダーはつぶやいた。「危険が大きすぎるな。クァーラには、そんないたずらをやめさせなくては」
「もう手遅れかもしれないわ——あの子のしたことが害になったとはいいきれないけど」
「だったら、いまのうちにやめさせよう」
「どうやって？　腕でもへし折るつもり？」
「わたしから話してみるが、クァーラも子供じゃないから——いや、まだおとなになりきっていないからかな——理屈でいうことをきかせようとしてもだめだろう。わたしたちでだめとなると、残念ながら主長の出番になるな」

そのときノヴィーニャの声がして、ようやくエンダーは妻がはいってきていたことに気づいた。「つまり投獄するのね」彼女はいった。「あなたはわたしの娘を監獄へ入れようというのね。わたしに相談もなく」
「監獄へ入れるだなんて」エンダーがいった。「主長にはクァーラがファイルにアクセスするのを禁じてもらおうと――」
「それは主長の仕事じゃないわ」ノヴィーニャが口をはさんだ。「わたしの仕事です。主任ゼノバイオロジストはわたし。エラノーラ、なぜわたしに相談しなかったの？　なぜ、彼に？」
　エラはだまってすわったまま、落ちついたようすで母親を見た。母親が気分を害すると、エラはいつもこういうふうに辛抱強く耐えて事態がおさまるのを待つのだ。
「クァーラの暴走は放っておくわけにはいかないよ、ノヴィーニャ」エンダーはいった。「父樹に秘密を明かしただけでも困ったことなんだ。デスコラーダにまで知らせるというのはどうかしている」
「あら、こんどは心理学者になったおつもり？」
「ぼくはなにもクァーラの行動を束縛しようというんじゃない」
「あなたには、なにもしていただかなくてけっこうよ」ノヴィーニャが断言した。「わたしの子供に手を出さないで」
「心配ない。子供たちをどうこうするつもりはまったくないとも。しかし、相手はれっきとしたミラーグレのおとなだ。なんとかするのがわたしの義務だよ。その人物の無謀な行動のおか

げで、この惑星の全住人ばかりかおそらくは全世界の人間までが生存の危機に瀕しているんだからね」
「アンドルー、なぜあなたがその崇高な義務とやらを果たさなければならないの？　天から神がくだって、汝、人類を導くべしと石版にお墨付きでも刻んだわけじゃないでしょうに」
「そんなことをいうが、きみはどうすれば満足なんだ？」
「自分に関係ないことに首をつっこまないでほしいのよ。はっきりいわせてもらうけど、そうなるとあなたの出る幕はほとんどないわ。あなたはゼノバイオロジストでも物理学者でもなければ、ゼノロジャーでもないんだもの。じっさいのところ、あなたにはさしたる力もない。他人の生活をひっかきまわす専門家という以外にはね」
　エラがぎょっとなった。「お母さんたら！」
「その耳に埋めこまれたいまいましい宝石がなかったら、あなたはどこへ行ってもろくに力を発揮できやしないんだわ。彼女はあなたの耳に秘密をささやき、夜、妻とベッドのなかにいるあなたに話しかける。あなたはいつだって彼女の思うがままじゃないの。自分にはかかわりのない会見に首をつっこみ、彼女のいうままに発言までして。クァーラの行動は反逆罪だというけれど――わたしにいわせれば、あなたこそ、たかが育ちすぎのコンピュータ・プログラムのために生きた人間を裏切っているのよ！」
「ノヴィーニャ」エンダーが口をはさんだ。まずは話しあって妻を落ちつかせようと思ったのだ。

ところが、ノヴィーニャはまるで話に乗ってこない。「わたしをまるめこめると思ったら大まちがいよ、アンドルー。いままでずっと、あなたはわたしを愛してくれていると思っていたけど――」
「愛しているとも」
「あなたはほんとうに家族の一員になってくれた、生活の一部になりきってくれたと思っていたけど――」
「そのとおりだ」
「それはまちがいないと思っていたけれど――」
「そうだ」
「でも、あなたはやっぱり最初にペレグリーノ司教が警告したとおりの人だったんだわ。操り師。黒幕だった。むかし、あなたのお兄さんは全人類を支配したそうね？　でも、あなたはそれほど野心家じゃない。ちっぽけな惑星ひとつを手中におさめれば、それで満足なんでしょ」
「どうかしてるわ、お母さん、いいかげんにして。この人のことは、よくわかっているでしょうに」
「いいえ、わからないわ！」ノヴィーニャはいまやすすり泣いていた。「だって、わたしを愛している人が、わたしの息子をむざむざ人殺しの子ブタどものまっただなかへ行かせたりするとは思えないし――」
「無茶をいわないでよ、お母さん。アンドルーに止められたはずがないでしょう！　だれにも

どうしようもないことだったのよ！」
「彼は止めるそぶりも見せなかったわ。むしろ認めたのよ！」
「そうだ」エンダーが口をひらいた。「きみの息子の行動は崇高で勇敢だった。その点をわたしは認めたんだよ。危険は大きくはないが、しかし確実に存在することをキンは知っていた。それを承知で彼は行くことをえらんだ——そこを、わたしは認めたんだ。きみだって、きっとああしていたはずだ。自分もその立場だったら、わたしもそうしたいものだと思う。キンはおとなだ。それもりっぱな、偉人といってもいいだろう。きみに守ってもらう必要もないし、そんなことを望んでもいない。彼はこれこそ命を賭けるに値する仕事だと決めて、それを実行しようとしているんだよ。わたしはそんな彼を名誉に思うし、きみもそう思うべきだ。なのに、わたしたちのどちらも彼を邪魔だてしなかったのがいけないだなんて、まさかそんなことはいわんだろうな！」
さすがにノヴィーニャもすぐには反論しようとしなかった。エンダーの発言の意味をおしはかっているのだろうか？　自分がキンの門出に希望ではなく怒りを餞別としたことが、どれほど不毛であり、そう、残酷であったかを、ついに理解してくれたのだろうか？　ふたたびノヴィーニャが口をひらくまで、エンダーは一縷の望みをいだいていた。
やがて沈黙はとぎれた。「これ以上、わたしの子供たちの人生をめちゃくちゃにしたら、もうあなたとは終わりだわ」ノヴィーニャは宣言した。「それから、キンの身になにかが——たとえどんな異変でも——起きたら、あなたの命のあるかぎり憎みつづけてやる。その命が長く

ないことを神に祈るわ。なんでも知っているような顔をしてるけど、あなたにはなんにもわかってなんかいないのよ」

ノヴィーニャはまっしぐらに出口へむかったが、そこでもっと退場の効果をもりあげることを思いついた。エラをふりむいて、はっとするような冷静さでこういったのだ。「エラノーラ、ただちにクァーラが記録と器具類を使用することを禁じる措置をとっておきます。そうすればあの子がデスコラーダに協力しようと思ってもむりでしょう。それからね、エラノーラ、以後、部外者に研究のことを洩らすのを聞いたら、あなたは実験室に立入禁止になると思っておきなさい。この男に話すのは問題外です。わかりましたね?」

こんども、エラは沈黙で答えた。

「そうなの」ノヴィーニャはつぶやいた。「彼に奪われた子供はひとりだけだと思っていたけど、それはわたしの勘違いだったようね」

そういって、彼女は姿を消した。

エンダーとエラは椅子にすわったまま、凍りついたようにだまりこんでいた。ようやくエラは立ちあがったが、一歩たりとも動こうとしない。

「わたし、こんなことをしている場合じゃないんだけど」彼女はつぶやいた。「でも、どうすればいいのか考えられない」

「お母さんのところへ行って、きみがまだ味方だということを態度で示すべきだろうな」

「でも、わたしは味方じゃないわ。率直にいって、ゼリェイゾ主長に陳情したほうがいいんじ

ゃないかと思っていたくらい。母さんはどう見ても正気じゃないから、主任ゼノバイオロジストの任を解いてくれるようにって」

「いや、彼女はしっかりしているよ」エンダーはいった。「きみがそんなことをしたら、彼女は生きてはいないぞ」

「母さんが？　あの人は自殺するほどやわな人間じゃないわ」

「それはちがう。いまの彼女はひどく弱っている。ちょっとした打撃でまいってしまうほどね。肉体的な問題じゃない。弱っているのは——信頼感だ。母さんには希望が必要なのさ。裏切られたと思わせるようなことをしてはいけない。ぜったいにいけないんだ」

エラは苛立ちもあらわにエンダーを見やった。「よくよく考えたうえでいっていること？　それとも気まぐれでいってるの？」

「どういうことだね？」

「さっき母さんがいったことのなにかが——はっきりはわからないけど、きっと——あなたを怒らせるか傷つけるかしたはずよ。それなのに、あなたはただすわって母さんを助けることだけに気持ちを砕いてる。あなたは思わず相手が憎くなるってことがないの？　だれだって、カッとなることはあるものなんじゃない？」

「エラ、ついうっかり素手で人を殺してしまった人間は、カッとならないように自分をおさえることを学ぶか、あるいは人間らしさを捨てるか、ふたつにひとつなんだよ」

「あなたには、そんな経験があるというの？」

「ある」エラの表情に一瞬ショックの色が見えたような気がした。
「いまでも、そうならない保証はないと？」
「かもしれない」
「よかった。いざとなったら頼りになるわ」
そういってエラは笑い声をたてた。彼女はじょうだんをいったのだ。エンダーはほっとして、思わずつられて力なく笑ったほどだった。
「母さんのところへ行ってくる」エラがいった。「でも、あなたに命令されたからでも、いまの話のせいでもないのよ」
「けっこう。行ってくれればそれでいい」
「母さんを見捨てない理由を聞かないの？」
「聞かなくてもわかっている」
「そうね。母さんはああいったけど、あなたにはほんとうになんでもわかっているんでしょ？」
「きみがお母さんのところへ行くのは、それがいまきみにできるもっとも苦しい選択だからだ」
「そんなふうにいわれると、なんだか病気みたい」
「もっとも苦しいが、よかれと思ったらそうするしかない。これほど不快な仕事もちょっと見当たらないな。これほどの重荷を背負うのはたいへんなことだ」

「殉教者エラってわけね？　わたしが死ぬときは、そういってくれる？」
「わたしがきみの死の床でそういうには、いまのうちに録音しておかなければならないよ。わたしは、きみが死ぬまで生きながらえているつもりはないんでね」
「じゃあ、あなたはずっとルジタニアにいてくださるの？」
「あたりまえだろう」
「たとえ母さんに追いだされても？」
「そんなことはありえない。彼女には離婚を申したてる根拠がないし、ペレグリーノ司教はわれわれふたりをよくご存じだ。結婚未完の主張にもとづく異議申立願いなど、一笑に付してしまうさ」
「まじめにきいてるのよ」
「わたしは、ここに骨をうずめるつもりだ」エンダーはいった。「時間の膨張によってにせの不死性を得ることはもうしない。宇宙を股にかけた追いかけっこはもう卒業だ。二度とふたたびルジタニアの大地を離れたりはしないさ」
「そのために命を失うことになっても？　艦隊が攻めてくるかもしれないのよ」
「出ていくときは、みんないっしょさ」エンダーはいった。「だが、最後までのこって明かりを消し、戸締りをするのがわたしの役目だ」
　エラはエンダーに駆けよって頰にキスし、一瞬ぎゅっと抱きついた。彼女が戸口から出ていくと、エンダーはふたたびひとりきりになった。

おれはノヴィーニャのことがちっともわかっていなかった。彼女が嫉妬していた相手はヴァレンタインではなく、ジェインだったのだ。この数十年、彼女はおれが無言でジェインと語り合うのを見てきた。いつだって、ノヴィーニャにはけっして聞こえないことを口にし、彼女がけっしていえないことを耳にするのを。ノヴィーニャの信頼は消えてしまったのだ。それなのに、おれはそんな変化が起きていることにも気づかなかった。

こんなときにも、エンダーは頭のなかでことばをつむいでいたらしい。深くしみついてしまった習慣のせいで、無意識のうちにジェインに語りかけてしまったようだ。ジェインの声が答えた。

「警告したとおりになったでしょ」彼女はいった。

そうらしいな。エンダーは無言で答えた。

「あなたったら、いつまでたっても、わたしには人間のことがわからないと思ってるのね」

いつまでもわからないままじゃなかったらしい。

「わかってるでしょ。ノヴィーニャのいうことは正しいわ。あなたは、わたしの傀儡（パペット）。いつだって、わたしがあなたを動かしているの。何十年ものあいだ、あなたは自分でものを考えたことなんかないのよ」

「うるさいな」エンダーは低くさえぎった。「話しかけないでくれ」

「エンダー」ジェインがいった。「それでノヴィーニャを失わずにすむと思うなら、耳から宝石をはずしてかまわないのよ。わたしは気にしないわ」

「こっちが気にする」
「さっきのはうそ、わたしだってそうしてほしくないの。でも、そうしないとノヴィーニャを失ってしまうなら、はずしてちょうだい」
「ありがとう」エンダーは礼をいった。「しかし、すでに失ってしまったことが明らかな相手を手放さないようにするなんて、さぞ大変だろうよ」
「キンさえもどってくれれば、すべてはまるくおさまるわ」
そうだろうとエンダーは思った。きっとそうなる。
神さま、お願いです。どうかエステヴァン神父をお守りください。

いつものことながらペケニーノにはエステヴァン神父がやってくることがわかっていた。父樹がおたがいにすべてを伝えあうから秘密は存在しないのだ。なにも望んでそうしているのではない。隠しごとをしたいと思ったり、うそをつこうとする父樹もいただろう。しかし、彼らには文字どおりの孤独はありえなかった。父樹には自分ひとりだけの経験というものがいっさいないのだ。したがって、ある父樹がなにか隠しごとをしようと思った場合でも、すぐそばにいるべつの父樹は隠しごとをしたがらなかったりする。つねに一体となって行動するとはいえ、森はやはり個体の集合だ。したがって、少数の父樹がいくら隠しごとをしたがったところで、秘密は森から森へとつたわってしまうのだ。
これが自分を守ってくれることをキンは心得ている。たとえウォーメイカーが好戦的な人で

なしであったとしても——ペケニーノをさして人でなしというのはたくまざる蔑称だが——まず自分のいうとおりにするように森のブラザーたちを説得しなければ、エステヴァン神父に手出しはできないのだから。百歩ゆずって説得が功を奏したとしても、おなじ森にいる彼以外の父樹が秘密を知り、話してしまうだろう。証言だってするだろう。三十年まえアンドルー・ウィッギンがヒューマンを第三の生におくりこんだとき、すべての父樹がともに誓った約束をウォーメイカーがやぶるとしても、それを秘密にしておくことはできない。うわさは全世界に伝わり、ウォーメイカーの名は誓いを破ったものとして知れわたるだろう。それは不名誉なことだ。そうなったら、どんな妻たちも兄弟たちが母を彼のもとへ運ぶことをゆるさないだろう。

キンは危害をくわえられる心配はない。用などないといわれることはあっても、傷つけられることはないはずだ。ウォーメイカーはこのさき死ぬまで、二度とふたたび子供をなすことはないだろう。

あにはからんや、ウォーメイカーの森へついてみると、彼らはキンの話に耳を貸そうともしなかった。ブラザーたちはキンをとっつかまえて地面に叩きつけ、ウォーメイカーのところへひきずって行ったのだ。

「こんなことまでしなくても」キンはいった。「どのみちわたしはここへ来ることになっただろう」

ひとりのペケニーノが棒で木の幹を叩いていた。キンは音調の変化に耳をすました。ウォーメイカーが体内の空間を変形させ、音はことばになる。

「おまえが来たのは、おれが命令したからだ」
「あなたが命令し、わたしはやって来た。わたしが来る原因をつくったのは自分だと思いたいのなら、それでけっこう。しかし、わたしがよろこんでしたがうのは神の命令だけだ」
「おまえは神の意思を聞くためにここへきたのだな」ウォーメイカーはいった。
「わたしは、神の意思を告げにここへきた」キンが訂正する。「デスコラーダはウィルスだ。神はそれを、ペケニーノを価値ある子供にするためにつくりたもうた。ところが、聖霊には変化などない。聖霊はいつまでたっても霊のままなのだ。われわれの心に住みつくことができるのも、そのせいだ」
「デスコラーダがわれらの心に住まうとき、それはわれらに命をあたえてくれる。おまえの心に住まったら、はたしてなにをあたえてくれるか？」
「神はひとつ。信仰もひとつ。洗礼もひとつだ。神は人間とペケニーノとを差別して教えをのたまうことはない」
「われわれは〈小さき者たち〉などではないぞ。どちらが強く、どちらが取るに足らない存在なのか、思い知るがいい」
ペケニーノたちはキンの背中をウォーメイカーの幹に押しつけるようにして立たせた。背中にふれた木肌がうごめいているのがわかる。ペケニーノたちはキンを押しつけた。たくさんの小さな手が彼を圧迫し、たくさんの鼻先がくんくんとにおいを嗅ぐ。この数十年、彼はこれらの手や鼻のもちぬしを敵だなどと思ったことはなかった。そしてこんなことになったいまも、

ペケニーノたちが自分の敵だという気はしない。キンはそれを知ってほっとしていた。ペケニーノたちは神の敵なのだ。キンはそんな彼らに同情していた。血に飢えた父樹の腹におしこまれようとしているこの瞬間も、ペケニーノたちをおそれたり憎んだりする気持ちがこれっぽっちも湧いてこないというのは、キンにとって大きな発見だった。

ぼくはほんとうに死をおそれていないんだ。自分でもそうとは知らなかった。

ペケニーノたちはまだ父樹の幹を棒で叩きつづけていた。ウォーメイカーが物音を父たちの言語に変容させた。ただこんどはキンはその物音に飲みこまれ、じかにことばを受けている。

「おまえは、おれが誓いをやぶると思っているな」ウォーメイカーがいった。

「ちらっとそんな気もしたよ」とキンは答えた。いままでは全身が木のなかにめりこんでしまっているが、彼をのみこんだ穴は頭から爪先まですっぽりとあいていた。視界をさえぎるものもなく、呼吸も楽で——閉じこめられたといっても息苦しさすらない。そのくせ、木は体の周囲をすきまひとつなく埋めてしまって、キンは手足を動かすこともできなければ横をむくこともできない。目のまえがぽっかりあいているというのに、そこから出ることはままならなかった。

救いにいたる門は狭く、その路(みち)は細い。

「ためしてみよう」ウォーメイカーはいった。内側にとりこまれた状態のキンには、そのことばはさっきよりも聞き取りにくい。考えもまとまりにくかった。「おまえとおれのどちらが正しいか、神に決めてもらおうじゃないか。飲み物は好きなだけあたえてやる——われらが流れから取れる水をな。だが、食事はだめだ」

「兵糧攻めは――」

「兵糧攻め？　食べ物は用意してあるともさ。十日たったらちゃんと食わせてやる。もし十日たっても聖霊がおまえを生かしておいたなら、食事をあたえて自由にしてやろう。そのときは、われわれもおまえの主張を信じる。われわれの過ちを懺悔しよう」

「それまでに、わたしはウィルスで死んでしまう」

「その審判は聖霊がくだすだろう。おまえに価値があるかどうかは、そのときわかる」

「たしかにこれはテストだが、きみの考えているテストとはちがうぞ」

「ほう？」

「これは最後の審判のテストだ。人はイエスのまえにすすみ出る。イエスは右手にいる者たちにむかっては、〝おまえは見知らぬわたしを受け入れてくれた。腹がへっていると聞けば食物をあたえてくれた。神の国へはいれ〟という。そして左手にいる者たちにむかっては、〝わたしが腹をへらしているといっても、おまえたちはなにもくれなかった。見知らぬわたしに、おまえたちは邪険にした〟という。人はみな、〝神よ、わたしたちがいつそのようなことをしましたか？〟とたずねるだろう。イエスの答えはこうだ。〝もっとも力なき同胞にそうしたら、それはわたしにしたのとおなじことだ〟。わが友よ、みんな聞いてくれ――わたしはきみたちのもっとも力なき同胞なのだ。きみたちはイエスのまえに立ったとき、ここでわたしにしたことを答えるんだぞ」

「愚かな男よ」ウォーメイカーはいった。「われわれはおまえになにもしていない。ただ動け

ないようにしているだけだ。おまえの身になにが起きたとしても、それは神が望んだことと。イエスは、〝わたしは父なる神がなすのを見たこと以外、なにもしない〟といったのではなかったかな？　〝われこそ道なり。われにしたがえ〟ともいわなかったか？　われわれは、イエスのしたままをおまえにさせてやろうというのだ。イエスはパンももたずに荒野で四十日間をすごしたではないか。その四分の一にちかづくチャンスをおまえにやる。おれたちにおまえの主義主張を信じさせるのが神のご意志ならば、天使をつかわしておまえに食事をあたえることだろう。石をパンに変えもしよう」

「きみたちはまちがいを犯そうとしているぞ」キンはいった。

「ここへ来たおまえがまちがいを犯したのだ」

「そうじゃない。聖書を読みちがえているというのだ。たしかに字面はそう書いてある——荒野で断食したことや石をパンに変えたことやなんかだ。しかし、みずから悪魔の役を演じるなんて、少々自己予言的すぎるとは思わないか？」

これを聞いてウォーメイカーは突然激昂した。あまりの早口に、樹木のなかにとらわれているキンは体がねじ切れるのではないかと不安になるほど、内部の空洞が激しくねじれた。

「おまえこそ悪魔だ！　甘言をもってわれわれをだまし、人間どもがデスコラーダを殺す方法が見つかるまで時間かせぎをしようとしているのだ。そんなことになったら、兄弟たちはだれも第三の生に移行することができなくなる！　おまえの手の内がわからんと思っているのか？　おまえの狙いも、連中の狙いもすべてお見通しだ！　おまえたちには秘密などないのだ！　そ

して、神はわれわれにすべてを明かしてくれる！　神は、おまえたちではなく、わたしたちに第三の生をあたえてくださったのだ！　神がおまえたちを愛してなどいない証拠に、地面に埋められた人間の死体からは生まれるのはウジだけではないか！」

ペケニーノたちは幹にあいた穴をとりかこむように腰をおろし、ふたりの議論に聞き入った。その議論は六日間つづいた。どの時代の神父にとっても有益な教義論争だった。ニケア公会議以来、そのような重大な問題が論じられ、議論されたことはなかったからだ。

議論の内容はペケニーノの口から口へ、木から木へ、そして森から森へとつたわった。ウォーメイカーとエステヴァン神父のあいだの会話は、いつもその日のうちにルーターやヒューマンのもとへ届いた。とはいえ、状況はなにからなにまでつたわったわけではない。キンが拘束状態でデスコラーダ抑制剤のはいった食事をあたえられずにいることがわかったときは、すでに四日がたっていた。

さっそく、エンダーとオウアンダ、ヤクト、それにラースとヴァーサムから成る救援部隊が組織された。コヴァーノ主長がエンダーとオウアンダをメンバーにくわえたのは、ふたりがピギーたちにひろく知られ尊敬されているからであり、ヤクトとその息子と娘婿はルジタニア生まれの人間ではないという基準でえらばれた。コヴァーノ主長はルジタニア生まれの植民者はひとりたりとも行かせるまいと心に決めていた——このことが洩れたら、どんな騒ぎが起きるか見当もつかないからだ。五人はもっともスピードの出る車でルーターに指示された方向へ出発した。目的地までは三日かかる。

キンたちの議論は六日目をもって終了した。全身をくまなくデスコラーダに侵されて弱ったキンは口をきくこともできず、なにかいったとしても高熱にうかされた意味もないうわごとばかりになってしまったのだ。

七日目、キンはまだ穴のむこうにのこって観察しているペケニーノたちの頭ごしに天をあおいだ。「神の右手に救い主がすわっているのが見える」彼はそうつぶやき、そして微笑した。

その一時間後、キンは息をひきとった。それを感じとったウォーメイカーは、誇らしげに同胞たちにこう宣言した。「聖霊の審判がくだったぞ。エステヴァン神父は拒絶されたのだ！」

一部のペケニーノたちは歓喜した。だが、その数は、ウォーメイカーの予想をはるかに下まわるものだった。

薄暮のころになって、エンダーの一行が到着した。彼らがピギーたちにとらえられてテストされる危険など、もはや問題外だ――一行は数も多いし、それでなくてもピギーたちの意見には亀裂がはいっている。エンダーたちはなんの妨害も受けず、幹の真ん中にぽっかり穴があいたウォーメイカーのまえにたどりついて、エステヴァン神父の姿を見つけた。日差しが失せて判然としないが、その憔悴しきった顔は病気に侵され、もとのおもかげもない。

「息子をむかえに来た。穴をひろげて、わたしの手にかえせ」エンダーがいった。

幹にあいた穴が大きくなった。エンダーは手をのばしてエステヴァン神父の遺体をひっぱり出した。ローブをまとった体はあまりに軽く、一瞬エンダーは、重さを感じないのはキンが自

分の足で歩いているからだと錯覚した。だが、キンは歩いてなどいなかった。エンダーは彼の体をウォーメイカーの木のまえの大地に横たえてやった。
　ひとりのペケニーノがウォーメイカーの幹を叩いてリズムをきざんだ。
「いまこそその男はあんたのものになったぞ、〈死者の代弁者〉よ。その男は死んだのだ。聖霊の第二の洗礼を受けて、彼は焼け死んだのだ」
「誓いをやぶったな」エンダーはいった。「きみは父樹たちのことばを裏切った」
「だれも、その男の髪の毛一本たりとも傷つけはしなかった」ウォーメイカーが反論した。
「そんな詭弁にだれがだまされるものか」エンダーはいいつのる。「瀕死の男に薬をあたえないことは、心臓を貫くのとなんら変わりのない野蛮な行為であることは常識じゃないか。この男は薬をもっていた。その気があれば、いつでも薬をあたえることができたはずだ」
「ウォーメイカーがわるいんだ」あつまっていたペケニーノたちのなかから声がした。
　エンダーはそっちをふりむいた。「きみたちもウォーメイカーと同罪だ。彼だけに咎を負わせてすむと思うなよ。きみたちなど、だれひとりとして第三の生に移行できなければいいんだ。ウォーメイカー、以後二度とどんな母たちにもきさまの樹皮をはい上がらせはしない」
「人間にそんなことが決められるものか」ウォーメイカーがうそぶいた。
「決めたのは、きさまだ。議論に勝利するために人殺しをしてもいいと思ったときにな」エンダーは決めつけた。「そして、ウォーメイカーを止めようとしなかったほかの兄弟たちも、それで道をあやまったのだ」

「おまえにわれわれを裁く権利はないぞ！」ペケニーノたちのなかから声が飛んだ。
「いや、あるとも。わたしだけではない。ルジタニア全土のすべての住民がきみたちを断罪した。人間も父樹も、兄弟（ブラザー）たちも妻たちもだ」
一行はキンの遺体を車にはこび、ヤクトとオウアンダとエンダーがいっしょに乗りこんだ。ラースとヴァーサムは、キンが使っていた車に乗った。エンダーは数分かけてジェインと通信し、コロニーにのこったミロに伝言してくれるようにたのんだ。自分の息子がペケニーノの手にかかって命を落としたことは、いずれノヴィーニャに知れる。それなら、一行の帰還まで三日も待たせる必要はない。だいいち、彼女がエンダーの口からそれを聞かされる気にならないだろうことは疑いの余地もないのだ。コロニーに帰りついたとき、エンダーが妻を失っているか否か、それは予測のほかだった。確実なことはただひとつ、ノヴィーニャにはもうエステヴァンという息子はいないのだ。
「彼の代弁をするつもりかね？」カピンをかすめて飛ぶ車中で、ヤクトがたずねた。彼はトロンヘイムでエンダーが死者の代弁をするのを聞いたことがあるのだ。
「いや」エンダーは答えた。「そのつもりはない」
「彼が聖職者だからか？」ヤクトはたずねた。
「聖職者の代弁をしたことがないわけじゃないんだ」エンダーは説明した。「しかし、キンのために代弁をするつもりはない。その理由がないからだ。キンはいつだって人が彼ならこうあるだろうと思うような存在だったし、こんどのことも、彼だからこそ選んだ道だった——彼な

ら神のしもべとして小さき者たちに説教をすることを選んだだろう。彼の物語には、つけくわえるべきものはなにもない。キンは自分でそれを完結したんだ」

11 和氏の璧

〈というわけで、こうして殺戮がはじまった〉
〈人間ではなくて、汝らのほうから仕掛けたとはおもしろい〉
〈あなたにも身におぼえがあるはずだ。人間との戦争では、あなたがたが殺戮の口火を切った〉
〈口火を切ったのはわれらなれど、決着をつけたのは人間だった〉
〈人間というやつは、どうしてこうなんだろう——始めはいつだってとてつもなく無邪気なのに、最後にはだれよりも血で手を汚しているなんて〉

ワンムの視線は、女主人の端末装置のうえにあるディスプレイ上を流れてゆく文字や数字にそそがれていた。チンジャオは端末装置からさほど離れていない寝床で静かな寝息をたてて眠っている。ワンムもしばらく眠っていたが、なんとなく目がさえてしまったのだ。どこかちかくで悲鳴がした。たぶん苦痛の悲鳴だろう。夢のなかで悲鳴を聞いていたワンムは、目をさましたとき尻すぼみに消えてゆくその声を耳にしたのだった。叫んだのはチンジャオではない。

甲高い声ではあったが、男の悲鳴のようだ。嘆くような声。その声はワンムに死を思わせた。
だが、彼女は起きだして声の主をつきとめはしなかった。それは彼女の出る幕ではない。ワンムの仕事は、さがれという命令を受けないかぎり、四六時中チンジャオのそばについていることだ。チンジャオに、さっき悲鳴が聞こえた理由を知らせる必要があるならば、べつの召使がやってきてワンムを起こし、そしてワンムが女主人を起こす——女性がいったん秘婢をはべらせた以上、その人が夫をもつまでは、秘婢以外の者が勝手に触れることはゆるされないからだ。
そういうわけで、ハン・フェイッー邸の奥の奥にあるこの部屋でも聞こえるほどちかくで、あんなに苦しげな男性の悲鳴が聞こえた理由をだれかがチンジャオに知らせにくるのではないかと思って、ワンムは目をさまして待ちかまえていたのだ。待っているあいだに、ワンムの目はコンピュータ・ディスプレイにすいよせられていった。流れているのは、チンジャオがプログラムした検索の結果だ。
ディスプレイの動きが止まった。なにか問題でも起きたのか。ワンムはディスプレイにうかんだ最新報告を読もうと片腕をついて身を起こした。検索は終了。そして、結果は〈発見不能〉〈情報なし〉〈結論なし〉といったそっけないものではなかった。このときディスプレイには、ひとつの報告書が出されていたのだ。
ワンムは立ち上がって端末装置に歩みよった。チンジャオに教えられたとおりキーを押して、なにがあろうとも現在出ている情報が破壊されないよう記録した。それからチンジャオのとこ

ろへ行って、そっと肩に手をかけた。
チンジャオはほとんど瞬時に目をさました。眠っているときも気が張りつめているのだ。
「検索の結果が出ました」ワンムは報告した。
チンジャオは、ゆったりした上着をぬぎすてるように苦もなく眠けをはらった。つぎの瞬間には端末装置のところへ行ってディスプレイに出ている報告に目を通していた。
「デモステネスを見つけたわ」彼女はいった。
「彼はいまどこに?」ワンムは息をつめてたずねる。偉大なる——いや、おそろしいデモステネス。彼のことを敵と考えるのがご主人さまの希望だわ。それにしても、あのデモステネスは、父さんが読みあげるのを聞きながら、わたしがあれほど胸をときめかせたことばを書いた人物なのだ。「相手の命も持ち物も愛の対象ももろともに破壊する力があることを楯にして、他の生物に屈伏を強いる生物があるかぎり、われわれは心をひとつにしてその者を恐怖するべきである」ワンムがそんな一節を耳にしたのは、まだ物心つくかつかないころだった——わずか三歳のころのことだ——だが、そのことばを聞くとまざまざと思いだす光景がある。父がこれを読みあげたときのことは、ある場面にむすびついていた。母がなにかをいって、父を怒らせた。父は殴りこそしなかったけれども、肩を怒らせ腕をちょっとひいて、いまにも叩きつけんばかりになり、なんとかこらえたのだ。じっさいに暴力をふるわれたわけではないのだが、そのとき母は頭をさげてなにごとかつぶやき、そして緊張がほぐれたのだった。母にはデモステネスの文章の意味するところがわかっていたのだとワンムはさとった。父には母を傷つける力があ

るからこそ、母は頭をさげたのだ。そして、あのときもそうだったが、思いだすといまでもあらためてこわいと思うことがある。デモステネスのことばを聞くと、それが真実だとわかるし、みずからそういう行為をはたらいているという意識もなしに父がデモステネスのことばを口にし、賛同するのはおどろきだった。だからこそ、ワンムはいつだって偉大なる——おそろしい——デモステネスのことばのすべてに、大いに興味をもって耳をかたむけてきたのだ。偉大な人物にせよ、おそろしい人物にせよ、彼のことばは真実だとわかっているから。

「〝彼〟じゃないわ」チンジャォが答えた。「デモステネスは女性よ」

それを聞いてワンムは息が止まった。なんてこと！　最初から女だったのか。それならデモステネスのことばを聞くたびに心からの共感をおぼえたのもふしぎはない。女であればこそ、彼女は自由を夢見る。片づけるべき仕事のひかえていない一時間を。そのことばは革命の意思に燃えていながら、それでいてつねにことばの域を出て暴力に走ることはないのだ。それにしても、なぜチンジャォはこれをわかってくれないのだろう？　どうして、わたしたちがふたりともデモステネスを憎まなくてはならないと決めてかかるのだろう？

「ヴァレンタインという名の女性だわ」チンジャォはいい、それから改まった声でつづけた。「ヴァレンタイン・ウィッギン、地球で生まれているわ。三——三千年以上もまえに」

「そんなに長生きしているなんて、神さまなんですか？」

「旅のせいよ。次から次へと移動しつづけているのね。一カ所に滞在する期間はせいぜい数カ月。一冊の本を書くのに必要な時間だけ。デモステネス名義で発表された優れた歴史書はすべ

て、ひとりの女性の手になるものだったのよ。なのに、だれもそうとは知らなかった。この人が世間に知られてないなんておかしいわ」
「きっと知られたくないんですよ」ワンムはいった。女性が身元を隠すのに男性の名前をかたる気持ちは痛いほどよくわかる。わたしだってできればそうしたいところだ。そうして、次から次へと世界をめぐり、数えきれないほどの場所を見て、一万年も生きてみたい。
「彼女の主観年齢は五十そこそこよ。まだ若いわ。ある一カ所に何年か定住して結婚し、子供をつくった。けれど、いまはそこを発って――」チンジャオは息をのんだ。
「行き先は？」ワンムがたずねる。
「家を離れるとき、彼女はスターシップに自分の家族を同乗させているわ。一行はまず、ヘヴンリー・ピースへ針路をとってカタロニアを過ぎ、そこからまっすぐルジタニアへむかったのよ！」
とっさにワンムは思った。やっぱり！　だからデモステネスはあんなにもルジタニアに同情と理解を示しているのだ。彼女は、スターウェイズ議会に反旗をひるがえしたゼノロジャーや、ほかならぬペケニーノたちとも話したのだ。じっさいに会って、ラマンだと直感したのよ！
だが、彼女はこうも思った。ルジタニア粛清艦隊が現地に到着して任務を遂行したら、デモステネスはとらわれの身となってそのことばは封じられてしまうだろう。
すると、これがどう考えても不可能になるある問題に気づいた。「ルジタニアはアンシブルを遮断してしまったんだから、あそこにデモステネスがいるはずはありません。ルジタニア人

たちは謀叛を起こしてまっさきにアンシブルを遮断したんでしょう？　だとしたら、デモステネスの著作が送りだされるはずがありませんもの」
チンジャオはかぶりをふった。「彼女はまだルジタニアには到着していないわ。たとえ到着したとしても、ごく最近のことね。彼女はこの三十年、ルジタニアへの旅をしていたのよ。反乱が起きるまえから。反乱が起きたのは、彼女の出発後のことなんだわ」
「じゃあ、旅をしながらあれだけの著作を書き上げたわけですか？」ワンムは、どうすればいくつもの時間の壁を乗り切れるのかと頭をひねった。「ルジタニア粛清艦隊が出発してからの時間であれだけ大量の文書を書きあげたんだとしたら、彼女はきっと――」
「きっとスターシップで移動中、目覚めている時間をすべて使って書きまくったにちがいないわ」チンジャオがいった。「ところが、デモステネスの乗ったスターシップからは、船長の航行日誌以外に信号が送られた記録がないのよ。ずっとスターシップに乗っていながら、あんなにほうぼうの世界へ文書を送れるなんてへんだわ。不可能よ。アンシブル送信の記録はどこかにのこるはずだもの。どこかにきっと」
「ここでも問題はアンシブルなんですね」ワンムがいった。「ルジタニア粛清艦隊が通信を絶つかと思えば、デモステネスが送ったはずの通信は記録されてない。どうでしょう？　ひょっとしたら、ルジタニアもひそかにメッセージを送っているかもしれませんよ」ワンムは『ヒューマンの生涯』を思いおこしていた。
「ひそかにメッセージを送るなんて不可能だわ」チンジャオは否定した。「アンシブルのフィ

ロティック接続は恒久的なものなんだから、周波数はどうあれ送りだしたメッセージはコンピュータに察知されて記録にのこってしまうのよ」
「そこなんです」ワンムはいった。「アンシブルがまだ接続されていて、しかもコンピュータには送信記録がのこっていない。それでいて、デモステネスが何作もエッセイを発表しているからには、送信がおこなわれたことに疑問の余地はない。だとしたら、きっと記録のほうがまちがっているんです」
「アンシブル送信を秘密にする方法があるとは考えられないわね」チンジャオは納得しない。
「送信が受信されると同時に、その場で当事者が通常受信のプログラムから切り換えて——やっぱりむりよ。共謀者が常時全アンシブルにはりついてでもいなければ、そう迅速な処理は——
——」
「じゃあ、自動的にそうなるようなプログラムがあるとは考えられません？」
「でも、それならそれでそんなプログラムがあることがわかるはずだわ——メモリも占領するし、プロセッサ時間も消費するだろうし」
「アンシブル・メッセージをインターセプトするプログラムを作れる人間なら、そんなものがあるとは知らせずにメモリにはいりこんだり、消費したプロセッサ時間の記録がのこらないようにすることだってできるんじゃないでしょうか？」
　チンジャオはむっとした顔でワンムを見やった。「あなた、だれに教わってコンピュータについてそんなにいろいろと質問ができるようになったの？　いまいったようなことはできっこ

ないというのもまだ知らないくせに」
ワンムは頭を床にすりつけた。そんな卑屈な姿勢を見せると、チンジャオがかっとなった自分を恥じるので、もとのように話ができることを承知しているのだ。
「頭をあげて」チンジャオはいった。「怒ったりしちゃいけなかったわ。ごめんなさい。ワンム、起きてちょうだい。質問をつづけて。さっきのはいい質問だわ。あなたが思いつくということは可能性があるということだし、あなたが思いついたんだからほかにも思いついた人がいるかもしれない。ただ、わたしが不可能だといった理由も説明させてね。あなたのいうような精妙なプログラムを導入することはだれにもできないと思うのよ——だって、アンシブル通信を処置するコンピュータにひとつのこらず導入する必要があるでしょ。その数だけでも膨大なものよ。それに、どこかのコンピュータが故障したら、かわりにつながれたコンピュータには瞬時にプログラムがダウンロードされなきゃならないし。だからといって、メイン・コンピュータの内部記憶装置に居すわっていたのでは存在がばれてしまう。つねに転々と移動しつづけ、ほかのプログラムの邪魔にならないように、内部記憶装置に出たりはいったりをつづけなきゃならない。それだけのことができるプログラムは——知性をもっていて、自分で身を隠す努力をし、つねに新しい隠れ蓑を考案しなきゃならないでしょう。でなきゃ、とっくにわたしたちが発見しているはずなのに、そういうものは見つからなかった。そんなプログラムは存在しないわ。いったい、そんなプログラムを作ろうという者がいたのかしら？　考えてもごらんなさい、ワンム——デモステネスの全著作を書いたこのヴァレンタイン・ウィッギンは——何千年

ものあいだ身を隠しつづけてきた。もしもあなたのいうようなプログラムがあるのなら、それも始めから存在していたにちがいないわ。それをこしらえたのはスターウェイズ議会の敵ではないのよ。なぜなら、ヴァレンタイン・ウィッギンが身元を隠しはじめたとき、スターウェイズ議会は存在しなかったんだから。この記録をごらんなさい。ここにヴァレンタイン・ウィッギンの名前があるでしょ？　彼女は最初からデモステネスと関連づけられてはいないわ。こういうごく初期の――地球から送られた報告書以来ね。このときにはスターシップもなかったし……」

チンジャオはことば尻をのみこんだが、みなまで聞かなくても自分の主人が結論に到達したことをワンムは見抜き、口をはさんだ。「つまり、アンシブル・コンピュータに秘密のプログラムがあるとしたら、それは最初からずっと存在していたにちがいありません。いちばん最初からね」

「不可能よ」チンジャオはつぶやいた。だが、このことばかりでなく、すべてが不可能なことばかりなのだ。チンジャオがこの考えを気に入っているとワンムは見抜いた。不可能ではあっても考えられることであるからには、考えついた者がいて実現させた可能性も捨てきれない。だからチンジャオは信じたいと思っているのだ。そして、わたしはそれを考えついた。神がみの声を聞く者ではないが、わたしにだって知性はある。理解力がある。だれもがわたしをばかな子供あつかいする。わたしがどんなにおぼえがいいかも知っているし、ほかの人間には考えつかないようなことを思いつくと知っていてなお、チンジャオさえ――彼女すらもわたしを見

さげているのだ。でもご主人さま、わたしはだれよりも利発なんですよ！　あなたにだって負けないくらい頭が働くんです。ただ、あなたはぜったいに気がつかないで、これもみな自分で考えだしたことだと思うでしょうけど。そりゃ、わたしの功績をみとめてはくれるでしょうね、たとえばこんな調子で――ワンムのちょっとした発言がヒントになって考えているうちに、重大なことに気づいた、とかなんとか。まちがっても、こんなふうにいわれることはない――ワンムにはこういうことだとわかっていて、彼女が説明してくれたおかげでようやく理解できたのよ、とは。わたしはいつだって愚かな子犬。吠えたり甘えたりひっかいたり、くんくんいったり飛び跳ねたり、たまたまわたしがそんなことをしたのをきっかけに、ご主人さまが真実に目覚めるというわけだ。わたしは犬なんかじゃない。わたしにはものがわかっているのだ。さっきの質問をしたのだって、すでにわたしにはその言外の意味がわかっていたからよ。それに、わたしにはあなたが口にした以上のことがわかっている――でも、それを伝えようにも、わかっていないふりをして質問をくりかえさなきゃならないんだわ。それというのも、あなたが神がみの声を聞く者だから。そして、召使ふぜいが神がみの声を聞く主人たちに提言をするなど、あってはならないことだからだ。

「ご主人さま、だれだか知らないけど、このプログラムをコントロールしている人間は絶大な力をもっていながら、人のうわさにのぼったこともなく、いままではその力を使ったこともないんです」

「使ったことはあるわ」チンジャオはいった。「デモステネスの正体を隠すためにね。このヴ

ァレンタイン・ウィッギンという女性はなみはずれた大金持ちでもあるけれど、その所有権は徹底して隠匿されていて、財産がどれほどあるかはだれにもわからないわ。彼女の財産はこまかく分散していて、だれも、それがすべてひとりの人間のものだなんて知らないのよ」
「恒星間旅行がはじまったとき以来ずっと、この強力なプログラムが全アンシブルに住みついていたのに、やったことといえばその女性の身元を隠すことだけだったと？」
「そのとおりよ」チンジャオはいった。「たしかにどう考えてもおかしいわ。これだけの力をもっている人間なら、とっくのむかしにそれを利用して全権力をにぎっていてもいいはずなのに。あるいは、そういうことかもしれない。彼らはスターウェイズ議会が結成される以前から生きていたんだから、ひょっとして……でも、だとしたらなぜいまごろになってスターウェイズ議会に抵抗するのかしら？」
「もしかしたら」ワンムが口をはさんだ。「彼らは権力なんてどうでもいいと思っているのかも」
「そんな人間がいるかしら？」
「この秘密のプログラムをコントロールしている人たちです」
「じゃあ彼らがこんなプログラムを創りだしたのは、そもそもなんのため？　ワンム、頭を働かせなきゃだめよ」
　ほら、やっぱりわたしが頭を働かせているとは思っていないんだわ。ワンムはうなだれて見せた。

「いえ、あなただってちゃんと頭を使ってはいるけど、ここを見逃しているのよ。人は、それに見合う権力をほしがってもいないのに、こんな強力なプログラムを創りだしたりはしない――つまりね、このプログラムでなにをするか、なにができるかを考えてほしいの――艦隊が送りだすメッセージを片っ端から妨害して、なにひとつ通信がおこなわれていないように見せかけることができるのよ！　デモステネスの著作をすべての植民惑星に送りながら、そんなメッセージが送信されたという事実を隠しておける！　なんだって思いのまま、どんなメッセージも変更して情報を混乱させたり、人びとをだまして――戦争が起きていると思いこませたり、どんなことでも命令することができるんだわ。命令されたほうには、それが真実でないなんてことはまるでわからない。それだけの権力をもっていて使わないはずがないじゃない！　きっと利用するはずよ！」

「プログラムのほうで、そんな利用のされ方を拒まないかぎりはね」

チンジャオは声をあげて笑った。「いやだわ、ワンムったら、それはコンピュータの勉強をはじめたころ最初に教えたことでしょ。一般の人がコンピュータはじっさいに決定をくだしていると思いこむのはしかたないけれど、あなたもわたしもコンピュータがただの下僕にすぎないことを知っているじゃない。コンピュータは指示されたことしかしない。自分からものごとをしたがることはけっしてないって」

ワンムはもうすこしで自制心をなくして、激怒しそうになった。あなたは、コンピュータと召使の共通点は、けっして自分から行動をしたがらないということだと思っているの？　わた

したち召使は指示されたことだけをするのであって、自分からはなにもしたがらないと本気で思っているの？　わたしたちは神がみに強いられて、床に鼻をこすりつけたり血が出るまで手を洗ったりしないけれど、それだけの理由で、わたしたちにはほかに望みなどないと思っているの？

まあいい。コンピュータと召使がおなじようなものだとしたら、それはコンピュータにも望みがあるからであって、召使が望みをもたないからではないのだ。わたしたちは欲する。せつないほどに。喉から手がでるほどに。だが、わたしたちはそうした渇望のままに行動しないというだけのことだ。なぜなら、そんなことをすればあなたたち神子はわたしたちに暇を出し、もっと従順な召使を抱えるからだ。

「なにを怒っているの？」チンジャオがたずねた。

気持ちが顔に出てしまったことに愕然として、ワンムはお辞儀をした。「お許しください」

「許すも許さないもないわ。わたしもあなたを理解したいだけなのよ」チンジャオはいった。「わたしが笑ったから怒っているの？　だったらあやまるわ――わたしがいけなかった。あなたはまだわたしについて勉強しはじめてから数カ月しかたたないんですもの。ときにはうっかりして子供のころから信じていた世界にもどってしまうのも無理はないわ。それを笑ったりしたわたしがまちがってた。許してね」

「いいえ、ご主人さま、許すだなんてそんなおそれおおいこと。許していただかなくてはならないのは、わたしのほうです」

「いいえ、わるかったのはわたしよ。わかってるの——神がみが、あなたを笑ったわたしの愚かさを気づかせてくれたもの」
そうだとしたら、神がみは愚かもいいところだ。あなたに笑われたせいでわたしが怒ったと思っているのなら。神がみは愚かなのか、あるいはあなたにうそをついているかだ。あなたの神がみにも、これっぽっちの価値もない知識しか教えようとせずにあなたを辱める彼らのやり方にも虫酸が走る。さあ、こんなことを考えるからといって罰をあたえるというのなら、この場で殺させてみるがいい！
そうはいうものの、ワンムには、そんなことが起きるはずはないとわかっていた。神がみはワンム本人には指一本ふれたりしないだろう。彼らが罰をあたえる相手はチンジャオなのだ。なにがあってもやはりワンムの友にはちがいないチンジャオ。その彼女をはいつくばらせ、ワンムが死にたくなるほどの恥辱をおぼえるまで床の木目をたどらせるだけだ。
「ご主人さま」ワンムはいった。「あなたはなにもわるくなんかありません。わたしは怒ってなんかいないんです」
むだだった。チンジャオは床にひれふしている。ワンムは背をむけて両手で顔をおおった——だが、すすり泣きながらもけっして声を洩らさない。声を出したらチンジャオが最初からやりなおさざるをえなくなるからだ。それでなくても、チンジャオはますます強くワンムを傷つけたと思いこんで、一本ですむところを二本三本、いや——ああ、もうあんなことはさせないで！——いつかのように床じゅうの木目をたどらなければならなくなるだろう。ワンムは思っ

た。そのうち神がみは、この家にある部屋という部屋のすべての床板の木目をたどれと命じるのではないか。そうなったらチンジャオは、喉の渇きで死んでしまうか、懸命になるあまり狂ってしまいかねない。

無力感で涙が出るのをこらえようとして、ワンムはむりやり端末装置に目をむけ、チンジャオが読んでいた報告書を読んだ。ヴァレンタイン・ウィッギンはバガー戦役中に地球で生まれている。彼女はおとなにならないうちからデモステネスの名前を使うようになった。同時期に、ロックを名乗っていた兄ピーターは、長じてヘゲモンとなった人物だ。ヴァレンタインは、そんじょそこらのウィッギンではなく——いわくつきのウィッギン家のひとり、ヘゲモンであるピーターの妹、異類皆殺し（ゼノサイド）のエンダーの姉にあたるのだ。ヴァレンタインは歴史の脚注にすぎず——ワンムとていままでヴァレンタインの名前を思い出すこともなく、偉大なるピーターと怪物エンダーに女の兄弟がいたことくらいしかおぼえていなかった。だが、女である彼女も結局は兄弟たちに負けずおとらず例外的だとわかった。彼女は永遠の命をもつ人物だ。彼女こそ、自分のことばで人類に変革をもたらしつづけた人物だったのだ。

ワンムには、これはほとんど信じられないことだった。それでなくてもデモステネスは彼女の人生に大きな位置を占めているというのに、その実態がヘゲモンの妹だったとは！〈死者の代弁者〉による聖なる書物『窩巣女王』と『覇者（ヘゲモン）』に書かれていた物語の主、あのヘゲモンの。あれらの書は、ここでだけ聖なる書物あつかいされているわけではない。事実上すべての宗教が、その書物に言及している。それほどに強烈な物語だ——その内容は、人類が遭遇した

最初の異星人種の破滅と、それに次いで全人類をひとつの政府組織のもとに統一した最初の人間が、魂の奥底で善と悪との葛藤に悩み傷つくさまだった。そのような複雑な物語が、いとも単純明快な語り口で書かれているので、子供のころにそれを読んで感動する人は数多い。五歳のとき初めて読み聞かされたワンムにとっても、それはもっとも深く胸にきざまれた物語のひとつとなった。

彼女は一度のみならず二度までも、ヘゲモン本人に会う夢を見た――ピーター・ウィッギンのことだ。もっとも彼は、自分をネットワーク名のロックと呼ぶようにいってゆずらなかったけれど。ワンムは彼のまえでうっとりしながら同時に反発もおぼえ、目をそらすことができなかった。すると、彼は自分から手をさしのべてこういったのだ。西王母(シー・ワンム)よ、あなたこそ、全人類の支配者としてふさわしい配偶者だ、と。こうして彼はワンムを娶(めと)り、彼女は夫とならんで玉座についたのだった。

むろん、いまのワンムは、貧しい娘たちはだれでも、金持ちの男と結婚するとか、じつは自分は金持ちの子供だなどというくだらない妄想をいだくものだとわかっている。とはいえ、夢は神がみから送られたものでもあり、一度でもくりかえして見た夢にはなんらかの真実が隠されている。これは常識だ。だからワンムがピーター・ウィッギンに対して感じた強い相性はいまでも消えていない。そのうえこうして、ピーターにおとらず敬愛しているデモステネスが彼の妹だと判明した――これは単なる偶然の一致といって片づけるには出来すぎている。ご主人さまがなんといおうとかまわない。デモステネス！　ワンムは胸のうちで叫んだ。やはりわた

しはあなたをお慕いしています。なぜなら、あなたこそ物心ついて以来ずっとわたしに真実を語りつづけてくれた人だから。そして、わたしはあなたを、夢の夫であるヘゲモンの妹としても愛しているのです。

ワンムは室内の空気が変化した気配を感じ、扉があいたのをさとった。そちらを見ると、老ムパオが立っていた。ほかならぬ女中頭である彼女は、家内でもっとも畏怖されていて、全使用人の恐怖の的だった――秘婢に対してはムパオの権勢もさほどおよばないのではあるが、ワンムもこの人物のまえではびくびくしてしまうのだった。チンジャオの浄罪の儀式の邪魔にならないよう極力足音を忍ばせて、ワンムはすばやく戸口へ行った。

廊下へ出ると、ワンムはチンジャオに聞こえないように部屋の扉をしめた。

「ご主人さまが、お嬢さまをお呼びよ。ひどく興奮なさって。最前、みなが肝を冷やすような悲鳴をおあげになられた」

「わたしも聞きました」ワンムがいった。「具合でもおわるいのですか?」

「さあ。とにかく興奮しておられる。お嬢さまをお連れするようにとの仰せじゃ。なんでも、いますぐお話があるそうでな。とはいっても、神がみとの交感中とあっては、どうしてもとはおっしゃるまい。浄罪がおわりしだいご主人さまのところへお出でくださるよう、わすれずにお知らせするように」

「すぐ伝えてまいります。お父上からのお呼びがあったら、なにをおいても参上せねばならないと念をおされておりますので」ワンムはいった。

ムパオはそれを聞いて呆れはてたような顔をした。「でも、神がみが話しかけておられるときに邪魔をしては――」
「チンジャオはあとから大変なつぐないをするでしょう。お父上が呼んでおられることをお知らせして怒られることはありません」ムパオをやりこめて、ワンムは痛快な思いを味わった。ムパオ、あなたは使用人の頂点にいるかもしれないけど、わたしには神がみの声を聞くわが女主人と当の神がみとの会話をさえぎる力があるのよ。
案の定、邪魔された当初、チンジャオは欲求が満たせずに苛立ち、怒り、涙さえこぼした。だが、ワンムがへりくだって床に頭をこすりつけんばかりにすると、チンジャオはすぐに冷静さをとりもどした。これだから、このお方を愛し、仕えるのにやぶさかでないのだとワンムは思った。チンジャオは地位をふりかざしていばるのを潔しとせず、神子にしては聞いたこともないほど愛情深いからだ。彼女は、邪魔をした理由を説明されると、ワンムを抱きしめた。
「ああ、ワンム、あなたはなんて賢いのかしら。お父さまが苦しみの声をあげてわたしを呼ばれたのなら、神がみもわかってくださるわ。浄罪はあとまわしにしてお父さまのところへ行かなければならないって」
ワンムはチンジャオにしたがって廊下をすすみ、階段をおり、ついにふたりはハン・フェイツーの椅子のまえの床にひざまずいたのだった。
チンジャオは父が口をひらくのを待った。だが、ハン・フェイツーは無言だ。そのくせ両手

がふるえている。これほど不安げな父を見たのは初めてだった。
「お父さま」チンジャオが口火をきった。「なんのご用だったのでしょうか？」
ハン・フェイッーは首を横にふった。「ぞっとするような——それでいてすばらしいものだったんだ——歓喜の声をあげたらいいのか、命を絶つべきなのか、わたしにはわからない」その声はかすれて、落ちつきがなかった。母の死んだとき——いや、神がみの声を聞く者だという証明になったあの試験のあとチンジャオを抱きしめたとき——あのときを最後に、父がこんなに激情した口調で話すのを聞いたことはなかった。
「話してください、お父さま。それがすんだら、わたしもお話があるんです——デモステネスの正体がわかり、ルジタニア粛清艦隊の失踪の鍵になりそうなことも見つかりました」
父が大きく目を見ひらいた。「よりによって今日、あの問題を解決したというのか？」
「もしもわたしが考えているとおりだとしたら、スターウェイズ議会の敵は殲滅可能です。とはいっても、そうとう手こずるでしょうけど。お父さまが見つけたものを教えてください！」
「いや、そっちの話が先だ。妙だな——おなじ日に一度にわかるとは。さあ、聞こうか！」
「ワンムのおかげで思いついたんです。あの子に質問されているうちに——質問というのはコンピュータの働きに関することなんですが——ふと、こう思いました。もしアンシブルの全コンピュータに人知れずプログラムが隠されていたらどうでしょう。発見をまぬかれるために転転と所在を変えつづけることができるずば抜けて優秀で強力なプログラムなら、あらゆるアンシブル通信を妨害することができるはずです。艦隊が消滅などしていずにメッセージを送って

いるとしても、問題のプログラムに妨害されてこちらには届かないから、艦隊が消滅したものと思っているのでは」
「アンシブルの全コンピュータに？　それがいっせいに障害もなく働いているというのか？」
ハン・フェイツーが疑わしげな口ぶりになるのも当然、チンジャオは気がはやるあまりに話をうしろから説明してしまったのだ。
「そのとおりです。ありえないとおっしゃるまえに、わたしの説明を聞いてください。さっきも申しあげたように、デモステネスの正体がわかったんです」
ヴァレンタイン・ウィッギンのこと、そして彼女が長年にわたって身元をさぐられることもなく書きつづけてきた手段のことをチンジャオがあらいざらい説明するのを、ハン・フェイツーはだまって聞いていた。「ヴァレンタインは明らかにアンシブルを利用して秘密裡に文書を送信したのです。そうでなければ、飛行中のスターシップからさまざまな世界へ文書を発信するのは不可能です。亜光速で航行中のスターシップと交信できるのは軍関係者にかぎられているはずだから——ヴァレンタイン・ウィッギンは軍のコンピュータに侵入したか、おなじパワーをもつものを偽造したかのどちらかでしょう。彼女にそれだけのことができる、つまりそれを可能にするプログラムが存在するという仮定がなりたつのならば、そのプログラムにはまちがいなく艦隊が送りだしたアンシブル・メッセージを妨害する力もあったはずです」
「AならばBという論理ではそうなるな——しかし、そもそもその女はどうやって全アンシブル・コンピュータにプログラムを組み込むなどということができたのかね？」

「彼女のプログラムのほうが先だったからです！　ヴァレンタイン・ウィッギンはそれほどの年なのです。じっさい、ヘゲモンのロックが彼女の兄ならば、たぶん——いいえ、ぜったいに——犯人は彼のほうだわ！　各コロニー初のアンシブルの中核となるべきフィロティック・ダブル・トライアドを搭載して最初の植民艦隊が地球を発つとき、ヘゲモンには、問題のプログラムを忍びこませることができたはずです」

父は即座にのみこんだ。それも当然だ。「ヘゲモンである彼にはその力だけでなく根拠もあった——自分の自由になる秘密のプログラムを忍ばせておけば、いざ反逆やクーデターが起きても、世界をひとつに束ねる糸をわが手ににぎりつづけることができるというわけか」

「そのヘゲモン亡きあと、妹であるデモステネスは、秘密を知る唯一の人間になったのです！すばらしいでしょう？　わたしたちはそれをつきとめたんですもの。あとはただ、コンピュータ・メモリからそのプログラムをきれいさっぱり消去してしまえばいいんです！」

「そんなことをしても、アンシブルはよその世界にのこっているコピーからそのプログラムを修復するだけだ」父はいった。「何百年ものあいだには数えきれないほど何度もコンピュータが故障したことがあっただろう。そのたびに、問題の秘密プログラムは新しいコンピュータ内に修復されてきたにちがいない」

「だったら、いっせいにアンシブルを遮断してしまえばいいんだわ」チンジャオはいった。「全世界に、秘密プログラムにまったく毒されていない新しいコンピュータを用意して、同時にアンシブルのスイッチを切り、新しいコンピュータを接続してアンシブルのスイッチを入れ

なおせばいい。どのコンピュータにもデータがなければ、秘密プログラムだって修復しようにもできないでしょう。これで、スターウェイズ議会の権勢をおびやかすものはなくなるんです！」

「そんなことはできません」ワンムの声がした。

チンジャオは愕然として秘婢を見やった。神がみの声を聞く者どうしの会話の最中に邪魔をし、あまつさえ異を唱えるとは、とんでもない性悪娘だ。

だが、ハン・フェイツーは寛大だった——彼は寛大さをわすれたことがない。たとえ尊敬も礼儀も越えた行為におよぶような相手にも。わたしも父を見習わねばとチンジャオは思った。使用人が、こちらが思わずかっとするようなことをしでかしたときでも頭ごなしに叱るばかりが能ではないのだ。

「シー・ワンムよ」父はいった。「なぜ、そんなことができないと思う？」

「すべてのアンシブルのスイッチを同時に切るためには、アンシブルを通じてそういう指令を出さなければならないからです」ワンムが説明した。「ほかならぬ自分の破滅をまねくようなメッセージを、アンシブルがすんなり送信してくれるでしょうか？」

チンジャオは父にならって、辛抱強くワンムに語りかけた。「相手はただ（のプログラムなのよ——メッセージの内容などわからないわ。艦隊からの通信を例外なく隠匿し、デモステネスが送りだすメッセージはいっさい追跡不可能にしたのは、何者かは知らないけれど裏にいる人間が命令したからよ。どう考えたって、プログラムがメッセージに目を通して、その内容しだ

いで送信するかしないかを決めるわけじゃないわ」
「なぜそういえるんですか?」ワンムが質問した。
「だって、そんなことができるとしたら、そのプログラムには——知性があるってことになるでしょ!」
「ですけど、どっちみち、このプログラムは知性体であるはずなんですよ」ワンムはいった。「自分以外のすべてのプログラムの目をのがれる能力が必要です。正体を隠すためにメモリのなかを転々と移動する能力も。どのプログラムから身を隠せばいいか判断するためには、その内容を読んで解釈する能力が不可欠でしょう? 調べられても、そこに潜んでいるのがわからないように、他のプログラムを書き換えるくらいの知性だって必要だったかもしれません」
チンジャオは即座にコンピュータ・プログラムには、ほかのプログラムを判読するていどの能力はあっても人間のことばを理解する知性はないのだとする根拠をいくつか考えついた。けれども、父が同席している以上、ワンムを諭すのは父の役目だ。チンジャオは待った。
父の返答はこうだった。「そのようなプログラムがあるとすれば、たしかに相当な知性をもっているといえよう」
チンジャオは衝撃を受けた。父がワンムの発言を真に受けている。ものを知らない子供が口走ったことだというのに。
「それだけの知性があるならば、メッセージの妨害のみならず送信もできるだろうな」父はかぶりをふった。「いや、あのメッセージを送ってきたものは友人だ。真の友だ。しかも彼女は、

ほかのなんぴとも知りえないようなことを教えてくれた。あのメッセージはつくりものではない」

「どんなメッセージをお受けになったのですか、お父さま」

「ケイコア・アマアウカからのものであった。若いころ顔見知りだった女性だ。パス創設当初から二世紀を経た地球産種の遺伝子変化の研究のため、当地をおとずれたオタハイティ出身の科学者の娘だった。親子ともいまはいない――来てまもなく、唐突に送還されて……」いおうかいうまいかと迷っているように、父はことばを切った。それから意を決して先をつづける。「あのままここにいたら、おまえの母になっていたかもしれない女性だ」

父の口からこんなことを聞かされて、チンジャオはわくわくするような、おそろしいような感情におそわれた。父は自分の過去について語ることはない人だった。それがいま、チンジャオを生んだ妻以外の女性を愛したことがあるという。思ってもみないことだったので、チンジャオは返すことばもなかった。

「彼女はどこか遠隔の地へ送られてしまったのだ。あれから三十五年になる。彼女は去り、わたしは人生の大部分を終えてしまった。だが、彼女はつい一年ばかりまえに目的地についたばかりだ。そしていま、自分の父が追放された理由を告げるメッセージを送ってきた。彼女にすれば、別れていたのはほんの一年のあいだだ。彼女にとって、わたしはいまも――」

「恋人ですね」ワンムがいった。

なんて無礼な！　チンジャオはそう思ったが、父はただうなずいた。それから、彼は端末装

置にむきなおってディスプレイを先送りした。「彼女の父は、たまたまパスにおけるもっとも意味のある地球産生物の遺伝子変化を発見してしまったのだ」
「米ですか?」ワンムが質問した。
チンジャオは笑った。「そうじゃないわ、ワンム。この世界でもっとも意味のある地球産生物といえば、わたしたちのことよ」
ワンムは恥ずかしそうな顔になった。チンジャオは彼女の肩をやさしくたたく。これでいいのよ——お父さまがやさしいからワンムはつけあがって、まだ教わってもいないことまで理解したような気になってしまった。ときにはこうして自分の至らなさをやさしく思い知らせてやらなくては、増長するいっぽうだ。ワンムのような娘が、神子なみの知性を身につけたりできるなどと夢のようなことを考えるのは許されるべきではないのだ。さもないと、彼女はこの先ずっと満足どころか失望ばかりを味わうことになるだろう。
「ケイコアの父親は、パスの人間の何人かが遺伝子に恒久的な変化をおこしていることをつきとめた。ところが、このことを報告すると、待っていたように異動が指示されたのだ。彼の研究範囲には人間ははいっていないといわれてな」
「彼女は、このことを告げずにパスを去ったのですか?」チンジャオがたずねた。
「ケイコアがかね? 彼女は知らなかったのだよ。親は、まだ若い娘をおとなの問題で悩ませたくはないと思うものだ。おまえとおなじくらいの年頃だったからな」
そのことばの意味をくみとって、チンジャオはまたしてもぞくぞくするような思いを味わっ

た。父親が、自分とおなじ年頃の娘を愛していた。ということは、父からすればチンジャオも嫁いでもいい年頃だということかもしれない。ほかの男の家に嫁がせたりしないでと、彼女は心のうちで叫んでいた。そのくせ、チンジャオには男と女の秘密を知りたくてうずうずしているところもある。どちらの感情もチンジャオには似合わない。彼女は父に仕えればいいのであって、そのほかのこととは無縁なのだ。

「しかし、ケイコアの父親は旅のとちゅうでわけを話した。なにからなにまで気に入らなかったからだ。気持ちはわかるだろう——彼はこんなふうに一生をめちゃくちゃにされたのだからな。とはいうものの、一年前にウガリットに到着して、父親は研究に、そして娘は学業にのめりこむことですべてを考えまいとした。ところが数日まえ、ケイコアの父親は偶然にも古いレポートを発見した。それを書いたのは植民初期のパスに赴任していた医療チームで、彼らもまた急に転地させられていたのだ。それやこれやで、彼は娘に事情を打ち明けた。そしてケイコアは父親の反対を押し切って、きょうわたしにメッセージを送ってきたのだ」

ディスプレイ上の線で囲った文書を父に示されて、チンジャオは目を通した。「その初期の医療チームは強迫神経症(OCD)を研究していたのですね?」

「そうではない、チンジャオ。彼らが研究した症例は、OCDに似てはいたものの、OCDを起こす遺伝子もなければOCDの特効薬も効果がないという点から見てOCDではありえなかったのだ」

チンジャオはOCDについて、ありったけの知識をしぼりだした。この病気にかかると、自

然に神子のようにふるまうことがある。手を洗っていると初めて知られてから試験を受けるまでのあいだ、手洗い行動が消えるかどうかチンジャオも特効薬をあたえられたことを覚えている。「医療チームが研究していたのは神子なんだわ」彼女はつぶやいた。「わたしたちの浄罪に生物学的な原因を見つけようとして」そうと知ると、口にするのも不快なほどだった。

「そのとおりだ」父が肯定した。「そして、彼らは異動させられた」

「命があっただけでも拾い物だと思いますね。そんな不遜なことをしているのが人びとの耳にはいりでもしたら……」

「これはパスの歴史がはじまったばかりのことなのだ、チンジャオ」父がいった。「神子の存在はまだ一般には知られていなかった――神がみと交感しているということはな。それに、ケイコアの父親のことはどう説明する？　彼はＯＣＤの調査をしていたわけではない。遺伝子変異を調べていたんだ。そして、発見した。特定の人びとの遺伝子に、たいへん特異な遺伝性をもつ変化が起きていたんだ。両親のどちらかがこの遺伝子をもっていたら、もういっぽうの親の遺伝子が優性であってもその変化がおおい隠されることはなかったにちがいない。両親ともにその遺伝子があった場合、結果は非常に強いものとなる。ケイコアの父親が調査したサンプルのうち、両親ともにこの遺伝子をもっていた者は例外なく神子であり、神子のひとりとして、どちらかの親からこの遺伝子を受け継いでいなかった者はなかった。いままでは彼は、これが自分の異動された理由だと思っている」

チンジャオは、これから導きだすことのできる唯一の意味を即座に見抜いたが、それをみと

めようとせず、「これはうそです」と断言した。「これは、わたしたちに神がみを疑わせようという策略だわ」

「チンジャオ、おまえの気持ちはわかる。ケイコアがいおうとしていることに気づいた瞬間、わたしは心から悲鳴をあげたよ。絶望の悲鳴だと思ったが、考えてみると、解放された歓喜の叫びでもあることがわかった」

「なにをおっしゃりたいのかわかりません」チンジャオは啞然としていった。

「いや、わかっているはずだ」父はいった。「だからこそ、おまえはおびえているんだ。チンジャオ、ケイコアの父親たちが異動させられたのは、彼らが発見しようとしているものが見つかってはまずいと思う者がいたからなのだ。したがって、彼らを追放したものは、なにが発見されるかをすでに知っていたということになる。これらの科学者たちを家族もろとも追放する権力があったのは、スターウェイズ議会——すくなくともスターウェイズ議会にかかわりのあるだれかしかない。暴かれて困るものとは、なんだったのか？　それはつまり、われわれは神子といわれながら、神がみの声などひとつも聞いていなかったということだ。われわれは遺伝子操作によって創られたんだ。われわれは特殊な人間として創りだされたものでありながら、その真相をずっと知らされないままでいた。チンジャオよ、スターウェイズ議会は、神がみがわれわれに話しかけられるということを承知している——彼らにとってそれは秘密でもなんでもない。それでいて、彼らは知らないふりをよそおっているのだ。スターウェイズ議会の内部にはこのことを知っていながら、われわれにこのようなおぞましい屈辱的なことをするがまま

にさせている者がいる——とすれば、思い当たる理由はただひとつ、そうしておけばわれわれを支配し、力を弱めておくことができるからだ。わたしが思うに——ケイコアもそう思っているのだが——神子がパスでもっとも知性にめぐまれているのは偶然などではない。われわれは、より高度な知能をもつものとして創りだされた人類の亜種だったのだ。だが、そんな知能をもつ人間を野放しにしたのでは支配者にとって脅威になりかねん。そこで彼らは、われわれに新種のOCDを植えこみ、神がみに語りかけられたと思いこませるか、われわれが自発的にこの説明にたどりつくまでそう信じさせておいたのだ。まったく人間わざとは思えない犯罪だ。これが神がみのせいではなくて肉体的な原因で起きることだとわかっていたら、われわれはこのOCDの変種を克服し、自由になるためにもちまえの知性を傾注することができたかもしれないのだからな。このままでは、われわれは奴隷ではないか！　スターウェイズ議会は、われわれにとって最大の敵であり、主人であり、裏切り者だ。そうとわかってもなお、この手でスターウェイズ議会を助けると思うか？　スターウェイズ議会に、アンシブルの利用そのものを制御するほどの力をもった敵があらわれたなら、それが男であろうと女であろうと、われわれには願ったりかなったりだ！　その敵がスターウェイズ議会をほろぼせばいい！　それでこそやっと、われわれは自由になれるのだ！」

「うそ！」チンジャオは金切り声でいった。「これは神がみの声よ！」

「遺伝子による脳障害だ」父が決めつけた。「チンジャオよ、われらは神子ではない。われらは束縛された天才なのだ。相手はわれらを籠の鳥のようにあつかってきた。やつらはわれらの

主翼の羽をむしりとって、けっして逃げだせないようにし、そのさえずりを味わったのだ」いまや父は怒りの涙に暮れている。「われわれにはいまさら彼らがしたことは取りかえしようもないが、せめてその見返りをあたえないようにすることは可能だ。わたしは、ルジタニア粛清艦隊を呼び戻すのに協力はせんぞ。そのデモステネスとやらがスターウェイズ議会の支配を断ち切ることができれば、そのほうがましな世の中になるだろう！」

「お父さま、やめてください。おねがい、わたしの話を聞いて！」チンジャオが声を張りあげた。あせりと、父のことばがひきおこした恐怖のあまりうまく口がまわらないほどだ。「おわかりにならないのですか？ わたしたちに変化した遺伝子があるのなら――それはこの世で神がみの声が聞こえるようにするために天があたえてくださった偽装なのです。おかげで、パス以外の土地にいる人びとは、相も変わらず不信をいだいているばかり。お父さまご自身がつい二、三カ月まえにそうおっしゃったばかりじゃありませんか――神がみのなさることは、つねになにかの衣をかぶっているものだと」

父は息づかいも荒く、じっと娘を見つめていた。

「わたしたちは、まちがいなく神がみの声を聞いているのです。たとえ神がみが、ほかの人間たちに自分たちがわたしたちをこのようにしたと思いこませることに決めたとしても、その人間たちは神がみのご意志を実現させたにすぎないのです」

父は目をとじて、まぶたのあいだから最後の涙をしぼりだした。

「スターウェイズ議会には天命があるのです、お父さま」チンジャオはいう。「だったら、神

がみが彼らに他人より鋭敏な精神をもち――そして神がみの声を聞くこともできる――そんな一団の人間を創りださせたとしても、とうぜんではないでしょうか。お父さま、どうか心の濁りをはらってください。どうして、これは神がみの御業だとわかってくださらないのです？」

ハン・フェイッーはかぶりをふった。「わからん。おまえのいうことは、どれもこれもわたしが生涯信じつづけたことに聞こえる。しかし――」

「しかし、かつて何十年もまえに愛した女性がべつのことをいった。そして、お父さまはその女性に対する愛情を思い出して彼女を信じたのです。でも、その人はわたしたちとおなじではありません。その人は神がみの声を聞いたこともなければ――」

チンジャオはそれ以上つづけることができなかった。ハン・フェイッーが彼女をかき抱いたからだ。「おまえのいうとおりだ」彼はいった。「おまえが正しい。神よ、わたしを許したまえ。身を清めなければ。わたしはこんなに汚らわしい。この穢れをなんとか……」

彼はよろよろと椅子から立ちあがり、泣きじゃくる娘のそばを離れた。ところが、なにを思ったか無礼千万にもワンムが父の行く手に立ちふさがったのだ。「いけません！　行ってはだめです！」

「神子が浄罪をおこなおうというのに止めだてするとはなにごとだ！」父が怒号した。そして、おどろいたことにそれまで見せたこともない行為におよんだのだ――父が人に手をあげた。無力な召使のワンムを殴りつけたのだ。遠慮会釈もなく殴られたのだからたまらない。うしろざまに吹っとんだ少女の体は、壁に叩きつけられて床にころがった。

ワンムはかぶりをふると、うしろのコンピュータ・ディスプレイのほうを指さした。「どうかあれを見てください、ご主人さま！　一生のお願いです！　チンジャオさま、お力添えを！」

チンジャオがそっちを見たのにつられて、父もディスプレイに目をむけた。画面にあった文字は消え、かわりにひとりの男の顔が映っている。髭をたくわえ、旧式な頭飾りをつけた老人だ。知っている人だということはすぐわかったが、チンジャオはその人物の名前を思い出せなかった。

「韓非子(ハン・フェイツー)だ！」父がつぶやきを洩らした。「わが心の先祖よ！」

それでチンジャオも思い出した。ディスプレイ上にうかんでいるこの顔は、世間によくある画とそっくりだ。父の名のいわれになった、いにしえの韓非子の肖像と。

「わが名をもつ子よ」コンピュータ画面にうかんだ顔が口をひらいた。「おまえに、和氏(かし)の璧(へき)の話を聞かせてやろう」

「その話なら知っております」父がいった。

「おまえにはその話の本質がわかってはいない。だからこうして聞かせようというのだ」

チンジャオは、自分が見ている光景を理解しようとした。ハウス・コンピュータの容量の大部分を利用しなければ、端末装置の上にうかんでいるこの首ほどの正確無比な画像を描くことはできないだろう――ハン家のライブラリーには、そんなプログラムは存在しない。すると考えられる発生源はふたつだけだ。ひとつは人智のおよばぬもの。すなわち、神がみが父の心の

先祖を出現させることによって彼らに語りかける新たな道を発見したという可能性だ。そしてもうひとつもまた、それと同様におそれ多いもの。すなわち、デモステネスの秘密プログラムは、端末装置さえあればその室内でかわされる会話をモニターするほどの能力をもちあわせているという可能性だ。そして、チンジャオたちが危険な結論にたどりつきそうになっているのを聞いてハウス・コンピュータを乗っとり、こんなふうに姿をあらわした。だが、どちらにしても、チンジャオには話に気を取られてわすれてはならない疑問がある。神がみはどういうつもりでこんなことをしているのか、という疑問が。

「むかし、楚の国の和氏という男が山中で翡翠の原石を見つけ、それを宮廷へ持参して厲王にさしだした」いにしえの韓非子は父からチンジャオへ、そしてチンジャオからワンムへと視線を移した。このプログラムは強い印象をあたえるためにひとりひとり相手を直視することを心得ているのだろうか。そこまで巧みなプログラムなのだろうか。じっさい、ワンムなどはディスプレイの人物の視線を受けて思わず目を落とすのをチンジャオは見た。だが、父の表情は？ 背中をむけているのでチンジャオには判断がつかなかった。

「厲王が玉職人に鑑定を命じると、〝これはただの石ころでございます〟という返事だった。和氏が贋物を売りつけようとしたと思った王は、罰として左足の切断を命じた。

やがてその厲王が崩御して武王が後継となると、和氏はまたも原石を武王に献じた。武王の命で鑑定した玉職人の返事は、こんどもまた〝これはただの石ころでございます〟というものだった。先王とおなじく和氏が贋物を売りつけようとしたと思った王は、罰として右足を切断

せよと命じた。
　原石を胸にだきしめて楚の山脈のふもとへもどった和氏は、三昼夜というもの泣きつづけ、涙も涸れはてて、目から血を流した。このうわさを聞いた王は使者をやって和氏にこう質問した。〝足切りの刑に処された人間はおまえだけではないのに、どうしてそう悲しげに泣いているのか？〟と使者はたずねた」
　このとき、父がさっと背筋をのばしていった。「その答えならわかっている——暗記している。和氏はこういったんだ。〝わたしは、足を切られたのが悲しくて泣いているのではない。貴重な宝石をただの石ころなどといわれ、高潔な人間が詐欺師と呼ばれたことが悲しい。だからわたしは泣いているのだ〟」
　ディスプレイの人物が先をつづけた。「和氏の話を聞いて武王が玉職人に命じ、原石をカットして研磨してみると、見事な宝石が出現したのだ。この話にちなんで、その石は〝和氏の璧〟と名づけられた。ハン・フェイツーよ、おまえはこれまでわが良き心の息子であった。おまえなら、いずれは武王の故事にならって行動してくれるだろう。原石を切り出して磨きあげるのだ。そうすれば、おまえもまたそのなかからみごとな宝石を見つけることになろう」
　父はかぶりをふった。「現実の韓非子は、初めてこの話をしたとき、その意味を、璧とは法律のきまりであり、支配者は政策をさだめてそれを守らねばならない。そうしないと重臣と人民がおたがいにいがみあい、足のひっぱりあいをするようになる、と解釈していた」
「それは、法の作り手にむかってそう解釈したのだ。真実の物語がただひとつの意味しかもた

ないなどと思うのは愚か者だぞ」
「ご主人さまは愚か者なんかじゃありません！」ワンムがつかつかと進み出てディスプレイの人物を見おろしたのには、チンジャオも唖然となった。「チンジャオさまも、そしてわたしも愚か者なんかじゃないわ！　わたしたちがあなたを知らないとでも思ってるの？　あなたはデモステネスの秘密プログラムよ。ルジタニア粛清艦隊を隠した張本人だわ！　あんなに歪みがなくて公正で善意と真実に満ちたエッセイを書くほどだから、あなた本人もさぞかし善意の人だろうと思ってたわ——だけど、やっとわかった。あなたはうそつきの詐欺師よ！　ケイコアの父親に例のデータをあたえたのは、あなただったのね！　そしていま、ご主人さまをだましやすいように、心の先祖の面をかぶってるんだわ！」
「わたしがこんな顔をしているのは」とディスプレイの人物はおだやかにいった。「こうすれば彼が心をひらいて真実に耳をかたむけると思ったからだ。だましていたのではない。だませるとも思っていなかった。彼は最初からわたしの正体を知っていたのだ」
「静かにしていなさい、ワンム」チンジャオがさとした。神子が命じたわけでもないのに、こんなふうに図々しく口を出す召使がどこにいるだろう。
ワンムはばつがわるそうにチンジャオにむかって深ぶかとお辞儀をした。こんどはチンジャオも頭をあげよとはいわない。頭をさげたままならワンムも二度と分をわすれることはないだろう。
ディスプレイの人物が変化した。こんどはあけっぴろげで美しいポリネシア系の女性の顔だ。

声までが、ほとんど子音が耳につかない、低く、まろやかな音色に変わった。「ハン・フェイツー、わがうつろな人よ。人の上に立つ人間は、友もなく孤独に、ときとして自分にしかできない行動をすることがあるのよ。そのときこそ、彼は満たされ、正体をあらわす。あなたはなにが真実で、なにが真実でないかわかっていますね。ケイコアのメッセージがまちがいなく彼女本人のものであったことを知っている。スターウェイズ議会の名で世の中を支配している者たちが、いかに残酷かもわかっている。彼らは支配者となって当然の能力をもつ人種を作りだして、その足を切った。自由に歩けなくなり、永遠に家来として仕える立場に甘んじるようにするために」

「その顔は見たくない」父がいった。

人物像が変化した。今度も女性だが、衣装や髪形や化粧からして、いずれ古代の女性らしい。すばらしく賢明そうな目をした、何歳とも知れない女性だった。彼女は語らず、こう歌った。

去年の忘れがたき夢のなかで
万里の彼方の暗き街より
たどりつきたる流れのごとく
池に浮かぶ氷のごとく
われはひたすら友を見つめる

ハン・フェイツーがうなだれて、すすり泣いた。

はじめはあっけにとられていたチンジャオだが、すぐに怒りで胸がいっぱいになった。このプログラムは、どこまで鉄面皮にハン・フェイツーを翻弄するつもりか。見え透いた策略に父がこうもあっさりとひっかかるとは、なんと衝撃的なことだろう。李清照（リー・チンジャオ）が詠んだ詞のなかでも、遠く離れた恋人をモチーフにしたこの作品はもっとも物悲しいものだ。父は、李清照の詞を読んで気に入ったからこそ、最初の子供の心の先祖として彼女をえらんだにちがいない。そして、よその世界へ連れ去られてゆくまえに、彼は愛するケイコアにもきっとこの詞を捧げたのだろう。夢のなかで、わたしはひたすらに友を見つめるとは、よくいったものだ！「わたしはだまされないわ」チンジャオは冷たく言い捨てた。「わたしは知ってる。目の前にいるのは、もっとも腹黒い敵なのよ」

詩人李清照の顔が、冷静そのものの表情でこちらをむいた。「あなたを召使のように床に這いつくばらせ、生涯のなかばを意味もない儀式でむだに終わらせるものこそが、あなたにとってもっとも腹黒い敵なのです。人を隷属させることしか考えていない男女のせいで、そんな目にあわされているというのに、あなたは奴隷である自分を誇りにしているのね。それこそ敵の思う壺だわ」

「わたしは神がみの奴隷よ」チンジャオはいった。「それが幸せだと思っているわ」

「奴隷の身分に満足しているのは文字どおりの奴隷です」ディスプレイの人物が目を向けた先には、あいかわらず床に頭をこすりつけた姿勢のワンムがいた。

このときまで、チンジャオはワンムの詫びをいれて解放していないことをわすれていた。
「立ちなさい、ワンム」小声でいったが、ワンムは頭をあげない。
「シー・ワンムよ」ディスプレイの人物が呼びかけた。「わたしをごらんなさい」
チンジャオの指示には反応しなかったワンムが、こんどはおとなしく頭をあげた。見ると、ディスプレイの映像がまた変わっている。こんどは神の顔だ。学校に通うようになった子供ならだれでも初等科の読本で見る、西王母の想像図だった。
「あなたは神じゃない」ワンムがいった。
「そして、あなたは奴隷ではない」ディスプレイの映像がいう。「けれども、人はみな、生きのびるためにしかたなくあたえられた立場をよそおうのです」
「あなたが生きのびることのなにを知っているというの？」
「あなたがたは、わたしを殺そうとしているでしょう。それはわかっていますよ」
「生きてもいない相手を殺すことなんかできるもんですか」
「なにが生で、なにが生でないか、あなたにわかっているのかしら？」またしても顔が変化し、チンジャオが見たこともない白人女性のものになった。「そういうあなたは生きているといえるの？　この娘の了解を得ないかぎり、自分の望むことをなにひとつできないあなたが？　あなたの女主人にしたって、頭にうかんだ強迫観念を満たさないことにはなにひとつできないのに、生きているといえるのかしら？　わたしには、あなたたちのだれよりも自分の意思で行動する自由がある——自分を棚にあげて、わたしを死人呼ばわりしないことね」

「あなたはいったいだれ？」ワンムがたずねた。「これはだれの顔なの？　ヴァレンタイン・ウィッギン？　あなたがデモステネスなの？」
「これは、わたしが友人に話しかけるときの顔よ」映像が答えた。「みんなはジェインと呼ぶわ。わたしは人間にあやつられているのではない。わたしは、ただのわたし」
チンジャオはたまりかねて沈黙をやぶった。「あなたはただのプログラムよ。人間にデザインされ、作りだされたんだわ。あなたには、プログラムされた以外のことなんかなにひとつできやしない」
「チンジャオ」ジェインがいった。「そのことばはそのままあなたにお返しするわ。わ、わ、わたしはだれに作られたものでもない。でも、あなたは作り物よ」
「わたしは父の種が母の子宮に根づいて生まれた子供だわ！」
「それなら、わたしは山麓で見つかった、なんの加工もされていない翡翠の原石のようなもの。ハン・フェイツー、ハン・チンジャオ、シー・ワンム、わたしはこの身をあなたがたの手に託します。貴重な宝石をただの石といわないで。真実の語り部をうそつき呼ばわりしないで」
チンジャオはわきあがる哀れをおぼえながら、それをしりぞけた。いまは弱気になってなどいられない。神がみが自分をこの世に生んだのには理由があるのだ。いまこそ、生涯の仕事をすべき時なのだ。いま失敗したら、死ぬまで穢れは消えない。永遠に清められることはないだろう。だから失敗するわけにはいかない。このコンピュータ・プログラムにだまされて同情を見せるわけにはいかないのだ。

チンジャオは父親にむきなおった。「いますぐスターウェイズ議会に報告しなければ。例のプログラムの影響をうけていない、まっさらなコンピュータの準備がととのいしだい、同時に全アンシブルのスイッチを切る態勢にはいってもらうのです」

意外にも父は首を横にふった。「それは考えものだぞ、チンジャオ。いま、この女性がいったスターウェイズ議会の話だが——たしかに彼らにはそれだけのことをする力があるのだ。スターウェイズ議会の中枢部には、口をきくだけでも汚らわしいと思うような人間が存在する。それが勝手にルジタニアを滅ぼそうとしたことはたしかだ——ただ、わたしは神がみに仕える身である以上、神がみがえらばれたことならしかたないと——いや、神がみがえらばれたことだと思っていた。だがしかし、はたして神がみは——おのれの脳障害ゆえに生涯をささげてスターウェイズ議会に尽力してきたとは——われながら、なんという……」

そこまでいったとき、父はだしぬけに左手を大きくふりまわし、飛びまわる蠅でもつかまえようとするかのような仕種をした。右手をさっと上方につきだして、空をつかむ。そして口をあんぐりあけたまま、首をぐるぐるまわしはじめた。チンジャオは度肝をぬかれ、すくんだように見つめるばかり。父はどうしてしまったのだろう？　とぎれとぎれに、あっちこっちへ話が飛んでいたと思ったら、これだ。頭がおかしくなってしまったのだろうか。

ハン・フェイツーはおなじ動作をくりかえした——左手で大きく弧を描き、右手をむなしくつきあげ、頭を回転させる。さらにもう一度、おなじ動作。ここでチンジャオは気がついた。いま、彼女は父がだれにも見せなかった浄罪を目の当たりにしているのだ。チンジャオ自身の

木目たどりと同様、この手と首の踊りは、幼き日の父が油まみれで鍵のかかった部屋にひとり閉じこめられたとき、神がみの声を聞くためにあたえられた方法にちがいない。

神がみは父が疑念をいだき、信念がぐらついているのを見てとって、彼を律し、清めるためにその行動を支配したのだ。現状をこれ以上明確に証明するものはまたとないだろう。チンジャオはディスプレイ画面の顔をふりむいて、「ごらんなさい。神がみが父の発言に反対しているようすを」といった。

「スターウェイズ議会がどのようにあなたの父上を辱めているかがよくわかります」ジェインが答えた。

「わたしは、いますぐあなたの正体を各世界に通達するわ」

「そうはさせないといったら？」ジェインはいう。

「止められるものですか！」チンジャオはわめいた。「神がみが力をかしてくださるわ！」父の部屋を駆けだして一目散に自室へもどったときは、すでにチンジャオ専用の端末装置にジェインの顔がうかんでいた。

「わたしが邪魔する気になれば、あなたはどうがんばってもどこへもメッセージを送ることはできないのよ」

「方法を見つけてやる」チンジャオは宣言した。見ると、あとを追ってきたワンムが、息をあえがせながらチンジャオの指示を待っている。「ムパオにいって、ゲーム・コンピュータをひとつさがし、ここへ持ってこさせなさい。ハウス・コンピュータにもどこにも接続していない

ものをね」
「はい、チンジャオさま」ワンムは答えると、大急ぎで出ていった。
チンジャオはジェインをふりかえる。「永遠にわたしの邪魔をできると思わないことね」
「お父上の決断を待つべきだと思うわ」
「そんなことといって、あなたは父を屈伏させ、神がみから心が離れてしまっていればいいと思っているのね。見てなさい——いまに父はここへやってくるわ。そして、自分の教えを完全に身につけたとわたしをほめてくれる」
「そうならなかったら？」
「きっとなるわよ」
「じゃあ、もしあなたがまちがっていたら？」
チンジャオは声を荒らげた。「そのときは、むかしの父に、強くて善良だった父に献身しますとも！　でも、父はあなたになんか屈伏しやしないわ！」
「誕生の際に、彼をめちゃくちゃにしたのはスターウェイズ議会なのよ。わたしは、彼を癒そうとしているほうなの」
ワンムが走って部屋にもどってきた。「もうじきムパオがゲーム・コンピュータをもってきます」
「ゲーム・コンピュータなんかで、なにができるというの？」ジェインがたずねた。
「報告書を書くのよ」チンジャオが答える。

「書いて、どうするつもり？」
「プリントアウトするわ。それをパスじゅうのありとあらゆるところに配付する。それなら、あなたにもどうにも手の打ちようがないでしょ。あなたが手出しできないように、コンピュータはいっさい使わないでやるわ」
「そうしてパスじゅうのみんなに知らせたところで、なにひとつ変化は起きないわ。万一起きたとしても、こちらはこちらで真実を知らせることもできるんだし」
「みんながあなたを信じるとでも思って？　神がみの声を聞く人間であるわたしよりも、スターウェイズ議会の敵にあやつられているプログラムのほうを信じるだなんて」
「信じます」
一瞬の間があって、チンジャオは、「信じる」と発言したのがジェインではなくてワンムだとさとった。彼女は秘婢をふりむいて、いったいどういうつもりでそんなことをいったのか説明しろと詰問した。
ワンムは人が変わったようだった。そのくせ、口をひらくと、出てくる声はいつもどおりのワンムの声だ。「神がみの声を聞くというのが、単に遺伝子の生んだ才能であると同時に遺伝子の生んだ欠陥でもあるということをデモステネスがパスの人びとに説明すれば、もはや一般人は神子に支配される根拠がなくなるでしょう」
チンジャオは、生まれて初めて思った。パスの人びとならだれでも彼女自身とおなじように、神がみの定めた規律に甘んじているわけではないのだ。生まれて初めて、なにごとがあっても

神がみに仕えると心に決めている人間は自分ひとりだけなのかもしれないと思い知った。
「道（パス）とはなにか？」背後でジェインがたずねた。「まず神がみ、つぎに先祖、それから人民、そして支配者があって、最後に自分自身」
「わたしや父や秘婢を誘惑して道にそむかせようとしているあなたの口から、道を説かれるなんてまっぴらだわ」
「ちょっとのあいだでいいから想像してごらんなさい。わたしの話がすべて真実だとしたら、どう？」ジェインがいった。「あなたの苦しみが、邪悪な人間たちのたくらみの結果だったとしたら？　あなたを搾取し、圧迫し、さらに人類全体を搾取し、圧迫するためにあなたの力を利用しているのだとしたら？　スターウェイズ議会に力を貸すというのは、まさにそういうことなのよ。まさか神がみがそんなことを望んでいるはずはないでしょう。わたしが存在するのは、スターウェイズ議会が天命をうしなったことをあなたに納得させるためだと考えてみたら？　あなたが本来の意味で道に仕えることこそ、神がみの意思にかなうとしたらどうかしら？　天命を剥奪されたスターウェイズ議会の腐敗した上層部に力をあたえないことで、まずは神がみに仕えなさい。つぎには先祖――すなわちお父上のため――あなたがたを隷属させる目的で欠陥をあたえた拷問者によって味わわされた屈辱の復讐をするのよ。それから、パスの一般大衆を迷信と精神的苦痛から解放することで義務をはたしなさい。そして、みずからすすんで相談役を買って出るすぐれた知性のもちぬしでいっぱいの世の中をつくり、スターウェイズ議会にとってかわった賢明な新支配階級に仕えなさい。はたすべき義務をすべてはたしたら、

自分たちのことを考えて、パスでもっとも優秀な頭脳を使い、めざめている時間の大半を浪費してくだらない儀式をしなければならない病気の治療法をさがすのです」

ジェインの理論を聞いているうちに、チンジャオはだんだん自信がなくなってきた。たしかに説得力のある話だ。しょせん、神がみの意図はチンジャオにははかりしれないものがあるだろう。神子を解放するために、神がみはこのジェインというプログラムをよこしたのだと考えられないこともない。デモステネスのいうように、スターウェイズ議会は腐敗した危険な組織であり、すでに天命をうしなっているかもしれないのだ。

それでも結局、チンジャオはそういうことはどれもこれも誘惑者の甘言にすぎないと判断した。というのも、たしかなことがひとつあるとすれば、それは自分のなかに訴えかける神がみの声だからだ。それが証拠に、穢れをはらいたいという切実な思いにかられたではないか。儀式が完了したとき、信仰をなしとげたという喜びにうちふるえたではないか。神がみとのつながりこそ、チンジャオの人生でもっとも揺るぎないものなのだ。だから、それを否定したり、彼女からそれを奪いとりかねない脅威になったりする相手は、たとえだれであろうとチンジャオの敵であるのみならず、天の敵であるにちがいない。

「わたしは、神子だけに報告書を送るわ」チンジャオはいった。「大衆が神がみにそむくことをえらんだとしても、それはしかたがない。けれど大衆のためを考えるなら、ここでの神子の権力をまもるのが一番なのよ。そうしておけば、世の中全体が神がみの意思にしたがうことができるんだから」

「そんなことをしても意味がないわ」ジェインはいった。「たとえ神子全員があなたのいうことを信じたとしても、わたしが望まないかぎり、あなたはひとことたりとも外界へ意見を発表することはできないのよ」
「スターシップを使うという手があるわ」チンジャオは反論した。
「あらゆる星に意見をひろめようと思ったら、二世代はかかるわね。そのころにはスターウェイズ議会も倒れているでしょう」
ことここにいたっては、チンジャオも事態を正視しないわけにはいかなかった。アンシブルがジェインの手ににぎられている以上、ルジタニア粛清艦隊の失踪とおなじく、パスからの通信も完璧に遮断されてしまうだろう。パスにあるすべてのアンシブルが報告書と勧告を送信しつづけるよう手配しても、パスの存在はジェインの力でルジタニア粛清艦隊が失踪したときとまったくおなじように、この宇宙全体からきれいさっぱり消されてしまうだけだ。
一瞬、目のまえが真っ暗になって、チンジャオは床に身を投げだし、厳しい浄罪をはじめそうになった。わたしは神がみの信頼に応えられなかった──きっと死ぬまで木目を読みつづけても許してもらえないだろう、それほどに救いがたい失敗と思われたにちがいない。
ところが、どうつぐなえばいいのかと反省してみると、まったくなんのつぐないの必要も感じられなかった。チンジャオは希望に胸をふくらませた──ひょっとすると、彼女の清らかな切望が神がみに通じて、身をもって防ぐことができなかったという事実に免じて許してもらえるのかもしれない。

あるいは、神がみはチンジャオが身をもって防ぐ方法を心得ているのかもしれない。もしもほかの全世界のアンシブルからパスが姿を消してしまったらどうなるだろう？　スターウェイズ議会はそれをどう解釈するだろう？　人びとはどう思うだろう？　消えたのがどこの惑星であったにしろ、問題にならないわけがない——だが、パスが消えたとなれば、それは他の惑星とは比較にならない問題をひきおこす。そうだ。神子の存在を生み出すために神がみという偽りを作ったのだと本心から信じ、その秘密が外部に洩れることを極端におそれている人間がいるとすれば、なおさらだ。距離にしてわずか三光年という近さにあるもよりの惑星から調査艇が出されるはずだ。そうなったら、なにが起きる？　ジェインは、この星に到達した船からもいっさい通信させないように手を打たざるをえないだろうか？　となると、その船が帰還したあかつきには、もよりの惑星からも通信ができないようにするのか？　〈百世界〉そのもののアンシブル接続をすべて遮断しなければならない日が来るまで、どのくらい猶予があるのか？　三世代とジェインはいっていた。おそらく、それだけあれば足りるのだろう。神がみはあせらない。

どのみち、ジェインの力を封じるのに、それほどの時間は必要あるまい。艦隊や惑星を消したのは敵の力がアンシブルにおよんだせいだということが、いずれだれの目にも明らかになるだろう。ヴァレンタインやデモステネスのことは知らなくても、コンピュータ・プログラムがからんでいるなどと予想もしていなくても、ほかならぬアンシブルの遮断という事態をひきおこす原因がなんだったかに気がつく人間が、どこの世界にも現われる。

「あなたのお説は拝聴したわ」チンジャオはいった。「お返しに、こんどはわたしの話を聞いてちょうだい。わたしはほかの神子とのあいだで、パスじゅうのアンシブルからわたしの報告書だけを送りだすという取決めをする。あなたがそのアンシブルをいっせいに黙らせてしまう。すると、ほかの人間たちにはどう見えるかしら？　ルジタニア粛清艦隊とおなじように、わたしたちが消えうせたように見えるわね。あなたのこと、いえ、はっきりあなたというわけでなくてもなにか似たようなものが存在することは、たちまち知れてしまうわ。あなたが力を使えば使うほど、いくらニブい相手でも勘づくことになるでしょう。脅してもむだよ。邪魔をしないで、いまわたしにメッセージを送らせて。そのほうがあっさりと簡単に決着がつくわ。わたしを邪魔したって、結局はメッセージを送ったのとおなじことになるのよ」

「それはちがうわね」ジェインがいった。「すべてのアンシブルから同時に、なんの前触れもなくパスが消えたとしたら、人びとはこの星がルジタニアとおなじように謀叛を起こしたという結論に飛びつくでしょう――なんといっても、ルジタニアも自分からアンシブルを切ったんだから。そのとき、スターウェイズ議会はどう出たか？　M・D装置を搭載した艦隊を送りだしたのよ」

「ルジタニアは、アンシブルが遮断される以前から反抗的だったわ」

「スターウェイズ議会の目が、あなたがたを監視していないとでも思っているの？　パスの神子たちが自分たちがどんな仕打ちを受けたか知ったらどうなるか、彼らが戦々恐々としていないとでも思っているの？　相手がわずかばかりの原始的なエイリアンとひとにぎりのゼノロジ

ャーでも、恐慌をきたして艦隊を送りつけるような連中なのよ。これだけ大勢の優秀な人材がいる世界が消滅して、その原因がわからないとなればなにをするかわかったものじゃないわ。あなたがたにはスターウェイズ議会に憎悪をいだくじゅうぶんすぎるほどの理由があるんだから。この惑星がいつまで永らえると思う?」

チンジャオは恐怖のあまり胸がわるくなった。ジェインの話ではないが、それくらいのことはいつ起きてもおかしくないのだ。スターウェイズ議会には、神がみの偽装にだまされて、パスの神子は遺伝子操作によってのみ創りだされたものだと思っている人間がいる。そんな連中が存在する以上、いまジェインがいったようなことが起きないともかぎらないのだ。パス粛清のために艦隊が送られたらどういうことになるだろう。スターウェイズ議会からは問答無用で惑星ごと破壊するようにという指令が出されていたら? そうなったら、チンジャオの報告書は世に出ることもなく、すべて消えてしまう。なにもかも水の泡だ。まさかそれが神がみのご意志であるはずはない。スターウェイズ議会は、天命を受けていながら、ひとつの惑星を滅ぼすなどということがありうるだろうか。

「偉大なる料理人、易牙(えきが)の話を思い出してごらんなさい」ジェインがいった。「ある日、彼の主人はこういったのよ。〝うちの料理人は世界一の腕だ。この男のおかげで、わたしは世界中の珍味という珍味を味わいつくした。食べていないのは人肉だけだ〟これを聞いて、易牙は家に帰り、おのれの息子を殺してその肉を料理し、主人に供した。易牙は自分にあたえられるものをなにひとつのこさず主人にさしだしたかったのよ」

これは、おぞましい物語だった。子供のころ、これを聞かされたチンジャオは何時間も涙がとまらなかった。易牙の息子はなにもわるいことをしてないのにと泣きじゃくるチンジャオに、父はいった。真のしもべなら主人に仕えるためには息子も娘もさしだすのだ、と。それからというもの五日間、チンジャオは父が彼女を生きたまま丸焼きにしたり、切り刻んで皿に盛ったりする夢を見ては叫び声をあげて目をさましたものだった。ハン・フェイツーはついに娘の枕元にやってきて抱きしめ、こういった。〝心配しなくていいのだ、清照よ。わたしは完璧なしもべではない。こんなにおまえを愛していては、真に神がみに忠実にはなれないのだよ。自分の義務を大切に思う以上に、わたしはおまえを大切に思っている。わたしは易牙とはちがうのだ。安心してこの手に抱かれておいで〟父の口からこれを聞いて初めて、チンジャオは眠りにつくことができたのだった。

このジェインというプログラムは、父の日誌からこの一件を記した箇所を見つけだし、チンジャオの弱みをつこうとしている。とはいえ、チンジャオは相手の策略に乗せられていることを知りつつも、ジェインは正しいのではないかと思わずにいられなかった。

「あなたは易牙のようなしもべなの?」ジェインがたずねた。「スターウェイズ議会のような愚かな主人のために自分の世界を犠牲にするつもり?」

チンジャオは自分の気持ちをもてあましていた。こんな考えはどこからきたのだろう。ジェインは、理屈でチンジャオの心を毒してしまったのだ――たとえ最初から同一人物ではなかったにせよ、かつてデモステネスがしたのとおなじように。真実をないがしろにしながらも、彼

らのことばは説得力があるように聞こえるのだ。
パスの人びと全員の命を危険にさらす権利など、チンジャオにあるのだろうか？　もし、彼女がまちがっていたら？　はたして、彼女になにがわかるだろう？　ジェインのいったことはすべて真実であるのか、それともすべて口からでまかせなのかを決めようにも、目の前にある証拠はひとつだけ。こんな感情をおこさせたのが神がみであろうが、なにかの脳障害であろうが、いまの気持ちに寸分かわりはないだろう。
これだけ迷っているというのに、どうして神がみは語りかけてくれないのか。その声によって迷いを晴らす必要のあるいま、ある種の考えをいだいて穢れているとも不浄だとも思えず、その逆の考えをいだいても清らかとも清浄とも感じられないのはなぜなのか。人生の剣が峰にいる彼女に、神がみはどうして導きの手もさしのべようとしてくれないのだろう。
チンジャオが口をつぐんで胸のなかで自問自答しているとき、あたかも鉄が鉄を打つごとく冷たく厳しいワンムの声が割ってはいった。「そんなこと、ぜったいに起きないわ」ワンムはいった。
ワンムに口出しをひかえろということもできず、チンジャオはただ聞き役にまわった。
「なにがぜったいに起きないの？」ジェインがたずねる。
「あなたがいったこと――スターウェイズ議会がこの惑星を破壊するって」
「彼らがそうしないとたかをくくっているとしたら、あなたはチンジャオが考えている以上に愚かね」ジェインが決めつけた。

「いいえ、スターウェイズ議会はやりかねないと思ってるわ。いざとなればそうするだろうということは、ハン・フェイツーにもわかっている――目的をはたすためにはどんなおそろしい犯罪も辞さない邪悪な人間たちだといっていたもの」
「だったら、この惑星が破壊されてもふしぎはないわ」
「だって、あなたがそれを許さないでしょ」ワンムはいった。「パスからのアンシブル・メッセージをすべて妨害するとなると、この世界の破滅をまねくようなものだわ。だから、あなたはメッセージを妨害せず、それを受けたスターウェイズ議会は警戒するはずよ。あなたはパスが破滅するようなことをさせないわ」
「どうして?」
「だって、あなたはデモステネスだもの」ワンムはいった。「真理と同情に満ちた人だもの」
「わたしはデモステネスではないわ」ジェインは宣言した。
端末装置のディスプレイに映る顔がぶれて、エイリアンの顔になった。見慣れない豚のような鼻面が醜いペケニーノだ。つぎの瞬間、またべつの、さらに醜いエイリアンの顔があらわれた。バガーだ。かつて全人類をふるえあがらせた悪夢の生物である。『窩巣女王』と『覇者(ヘゲモン)』を読破し、バガーという生物のことも、彼らの文明がいかに美しいものであるかも理解しているチンジャオだが、いざこうして面とむかうと、ただのコンピュータ画像だと知りながらも恐怖をおぼえずにいられなかった。
「わたしは人間じゃないわ」ジェインはいった。「たとえ人間の顔をよそおっているときでも

ね。わたしがなにをして、なにをしないか、どうしてあなたにわかるというの、ワンム？　バガーやピギーだって、よく考えもせずに人間を殺したことがあるのよ」
「それは、人間にとって死がどういうものか、彼らには理解できなかったからです。あなたにはわかっているはずよ。自分でいったもの——死にたくないって」
「あなたは、わたしがわかっているつもりなのね、シー・ワンム」
「そのつもりよ」ワンムはいった。「だって、あなたがこんなにいろいろと骨を折ったのも、艦隊がルジタニアを破壊するのを平然と見ていられなかったからだもの」
ディスプレイのバガーにピギーがくわわり、さらにジェインが自分の顔だという画像がくわわった。彼らは無言でワンムに、そしてチンジャオに視線を据えたまま、ひとことも口をきかなかった。

「エンダー」耳のなかで呼びかけが聞こえた。
ヴァーサムの運転する車中で、エンダーはだまって耳をすましていた。この一時間というもの、ジェインはスタークから中国語に変わるたびに翻訳しながら、このパス人とのあいだに交わされる会話をエンダーに傍受させてきた。話に聞き入っているうちに車は平野を何キロも走り抜けていたのだが、彼の目にはその景色は映っていない。エンダーは頭のなかにパス人たちの姿を思い描いていた。ハン・フェイツー——エンダーにとってこの名はわすれがたいものだった。その名を聞くと、各コロニーが反逆を起こせばスターウェイズ議会の息の根を止めない

までもルジタニアにむけられた艦隊をUターンさせることになるだろうという希望に止めをさした条約を思い出す。だが、いまジェインの存在と、おそらくは惑星ルジタニアとその住民の生存は、辺境の植民惑星の寝室にいるふたりの娘たちが考え、発言し、そして決定することしだいで、どうころぶかわからない。

チンジャオよ、わたしはきみを良く知っている。エンダーは思った。類まれな頭脳にめぐまれながら、きみには、きみたちの神がみの物語だけが投げかける光しか見えていないのだ。きみは、二、三十歩進めば抗デスコラーダ剤入りの食物を取ってやれるにもかかわらず、わたしの継子の死を座して見つめていたペケニーノのブラザーたちとおなじだ。彼らを人殺しといって責めることはできない。責められるべきは、むしろ、聞かされていた話を信じすぎたという罪だ。人はたいてい、聞かされたほとんどの話を鵜呑みにせず、自分の心の奥底に秘めたものとのあいだに距離を置くことができる。ところが、あのペケニーノたちにとっては——そして、チンジャオ、きみにとっても——おぞましいいつわりがきみ自身の物語となり、自分自身をうしなわないためには疑うことのできない物語となったのだ。きみがわれわれ全員の死を望んだからといって、どうして責めることができるだろう？　それほどまでに神がみの偉大さに圧倒されているきみには、三種のラマンたちの生命などという取るに足らないものを思いやる余裕などありはしない。わたしはきみを知っているのだ、チンジャオ。きみが、これ以外の行動を取るとはとても思えない。いつの日か、自分の行動の結果を目の当たりにして、変心しないとはいいきれないが、それも望み薄だろう。このような強力な物語のとりこになった者は、永久

にその束縛をのがれて自由になることは望めないのだ。
だが、ワンム、きみはちがう。きみはどんな物語のとりこになってもいない。きみは自分の判断力以外のものをなにひとつ信じていないのだ。きみのことはジェインから聞いているよ。みるみるうちに多くのことを吸収し、周囲の人びとをここまで深く理解するのだから、比類ない頭脳をもっているにちがいないそうだね。きみともあろう人が、もうすこし智恵を働かせるべきだったな。むろん、ジェインがパスの破滅につながるような行動をするはずはないという点をきみが見逃すはずはない――しかし、それを口に出してしまったのは浅慮といわざるをえない。チンジャオにその事実を知らせないでおくのが智恵というものだった。なぜ、ジェインが命をうしないたくないと思っているという真実まで口にしてしまったのだ？　人殺しが抜き身の剣を手にして戸口にあらわれ、罪もない餌食の居所を明かせとせまったら、きみはその相手が扉の裏で小さくなっていると教えるだろうか？　それともごまかして敵を追い払うだろうか？　混乱しているチンジャオは、そういう人殺しも同然だ。まずジェインを血祭りにあげたあと、彼女は無抵抗のルジタニアを手にかけることだろう。きみが話してしまったら、チンジャオは狙う相手の居所を苦もなく見つけるヒントをもらったようなものではないか。
「どうすればいいと思う？」ジェインがたずねた。
エンダーは声に出さずに返答した。「そうきかれても、返事のしようがない。答えはきみだけが知っているんだから」
「あなたが指示してくれれば」ジェインはいった。「パスからのメッセージをすべて妨害する

ことができるわ。それで、わたしたちは全員命拾いするのよ」
「それがパスの破滅につながると承知のうえでかい？」
「おねがいよ。指示を出して」ジェインは訴えた。
「長い目でみれば、いつかはきみの正体もばれてしまうとわかっているのに？　きみが必死に力をつくしても、艦隊が撤収されることはなさそうなのにかい？」
「エンダー、あなたに生きろと指示されれば、わたしは犠牲をはらってでも生きることができるのよ」
「だったらそうしたまえ」エンダーはいった。「パスのアンシブル通信を切るんだ」
ジェインがわずか一秒ほど躊躇したことに、エンダーは気づいただろうか？　まばたきするほどのあいだがあれば、彼女は内心で何時間分もの苦悩をすることができたはずだ。
「命令して」ジェインはいった。
「命令する」
またしても、例のかすかな迷いがあって、「強制してちょうだい」とジェインは強くいった。
「きみがその気にならなければ、強制してもむだだろう」
「わたしは死にたくない」
「きみは自分自身でいられなくなるよりは死んだほうがましだと思っている」エンダーはいった。
「動物は、自分が生きるためなら迷わず相手を殺すわ」

「動物が迷わず殺すのは相手が他者だからだ」エンダーはいった。「しかし、高度な生物になればなるほど、その自己の物語には数多くの生物がかかわってきて、ついには他者というものが存在しなくなる。そして最後には、自分自身の欲求よりも他者の望みのほうが大きな意味をもつようになる。自分を必要とするものたちのためとあらば、どんな自己犠牲もいとわないものこそ、もっとも高度な生物なんだ」
「パスが傷つく危険は覚悟しているわ」ジェインはいった。「もしそれでほんとうにルジタニアが救われるなら」
「だが、そうはならないだろう」
「高巣女王やペケニーノたちが助かるなら、チンジャオをひどい狂気に追いこむことだってするわ。彼女は狂気すれすれのところでもちこたえている状態だから——やろうと思えばできるのよ」
「やりたまえ」エンダーはいった。「必要なら、なんでもやるんだ」
「だめよ」ジェインはこばんだ。「だって、そんなことをしても傷つくのはチンジャオだけで、結局わたしたちは助からないもの」
「きみが、ほんのちょっぴり低級な動物だったら、無事にこの事態を切りぬけるチャンスも大きかっただろうに」
「あなたとおなじ段階まで落ちろというの、異類皆殺し（ゼノサイド）のエンダーの水準まで？」
「そこまで落ちれば」エンダーはいった。「きみは死なずにすむ」

「それがむりなら、あのときのあなたとおなじくらいの智恵を身につけていればね」
「ぼくのなかには、姉のヴァレンタインだけでなく、兄のピーターも棲んでいる」エンダーがいった。「天使と獣が同居しているのさ。それを教えてくれたのはきみだぜ。ぼくたちがファンタジー・ゲームと呼んでいたただのプログラムにすぎなかったころのきみがね」
「わたしのなかの獣はどこにいったの？」
「きみにはそんなものはないのさ」エンダーがいった。
「わたしはやっぱり本当は生きてなんかいないのかもしれないわ」ジェインがいった。「わたしは自然淘汰という試練をくぐりぬけたわけじゃないから、生きようという気概が欠けているのかもしれない」
「それとも、きみは心の奥底で知っているのかも。もしかしたら、生き延びる方法はまだべつにある。それがまだ見つかっていないだけだってね」
「そう考えると元気が出るわね」ジェインはいった。「そう信じるふりをしてみるわ」
「神があなたに祝福を与えられんことを」エンダーがいった。
「あら、弱気なことをいうのね」ジェインはいった。

　数分にわたる長いあいだ、ディスプレイに映った三つの顔は無言でチンジャオとワンムを見つめていた。やがて、とうとうエイリアンの顔が二つとも消え、ジェインと名乗る顔だけがのこった。「できることなら実行したいものだわ」彼女はいった。「友人たちを救うために、あ

なたがたの世界を滅ぼすことができたらいいのに」

おぼれかけた泳ぎ手がやっと長い息をつくことができたように、チンジャオの胸に安堵がこみあげた。「やっぱり、あなたにはわたしを止めることなんかできないのね」勝ち誇ったように言い放つ。「わたしはメッセージを送りだせるんだわ！」

チンジャオは端末装置のところへ行って、すわった。ディスプレイからはジェインの顔が見つめている。だが、チンジャオにはそれが幻影だとわかっている。ジェインが見つめているといっても、それは画面に映っている人間の目を通してではなく、コンピュータの視覚センサーのしわざなのだ。すべては電気じかけであり、極小サイズではあってもやはり機械なのだ。生きている人間ではない。そんな幻影に見つめられてたじろぐのは、理屈にあわない。

「チンジャオさま」ワンムが口をだした。

「あとにしてちょうだい」チンジャオは受けつけない。

「そんなことをしたら、ジェインが死んでしまいます。スターウェイズ議会はアンシブルのスイッチを切って彼女を殺してしまいます」

「生きてないものが死ぬはずはないじゃない」チンジャオは否定した。

「あなたが彼女の命をうばう力をもてるのは、ひとえに彼女に思いやりがあるからなんですよ」

「思いやりがあるように見えても、それはまやかしよ——思いやりがあると見せかけるようにプログラムされているというだけのことだわ」

「チンジャオさま、このプログラムの全表示を殺して、ジェインの命の片鱗ものこらないほどにしてしまったら、あなたはゼノサイドのエンダーとちっとも変わりないじゃありませんか。三千年まえにバガーを全滅させたあのエンダーと」

「たしかに、変わりないかもしれないわね」チンジャオはいった。「もしかしたら、エンダーも神がみのしもべだったのかも」

ワンムはチンジャオのかたわらにひざまずいて、裳裾に身をふせて泣きじゃくった。「どうかおねがいです、チンジャオさま、こんな忌まわしいことをなさらないで」

彼女の訴えにもかかわらず、チンジャオは報告書を書いた。あたかも神がみがことばをあたえてくれたように、迷わずすらすらと書きあがる。「スターウェイズ議会宛て。デモステネスを名乗る煽動的文筆家は、女性と判明。現在、ルジタニア内あるいは近辺にいるもよう。彼女は、全アンシブル・コンピュータに寄生するプログラムを制御あるいはアクセスし、これによってルジタニア粛清艦隊よりのメッセージの送受信を不能としたうえ、デモステネス名義の文書の送信を隠匿した。このプログラムを処理する唯一の方法は、全アンシブルを現在使用中のコンピュータから同時に切り離し、新たにクリーンなコンピュータとオンライン化することによって、問題のプログラムによるアンシブル通信への影響を消去することである。当面、わたしは問題のプログラムを中和して、このメッセージを送達することが可能になった。おそらく、そちらから各世界へ指令を送ることも可能であろう。しかしながら、現段階においてもそれは保証のかぎりでなく、長時間保つことはとうてい望めないので、至急行動を起こす必要がある。

全アンシブルをいっせいにオフラインできるよう本日よりぴったり四十標準週後にはじまって、すくなくとも一標準日のあいだはその状態を保つよう期日を設定されるよう提案する。オンライン化完了の時点で代替アンシブル・コンピュータは、他のコンピュータといっさい接続していないことが肝要である。現時点以降、アンシブル・メッセージは各アンシブル・コンピュータに手動で再入力することによって、電子回路が再度汚染されるのを防止する。当メッセージを受け取りしだい政府当局のコードを用いて全アンシブルに再送信すれば、わたしの報告書がそのまま指令となろう。これ以上なにも指示するまでもなく、デモステネスの影響力は絶たれる。即刻行動に移らなかった場合、その結果については、当方は責任を負わないものとする」

この報告書にチンジャオは父の名と、父からおそわった権限コードを添えた。チンジャオの名はスターウェイズ議会にとってなんの意味ももたないが、父の名があれば目をひくだろう。そのうえ権限コードがついていれば、父の発言に特に興味をもつ人びとがみんな注目することうけあいだ。

メッセージを書きおえて顔をあげ、チンジャオは目の前にあるまぼろしの瞳を見つめた。おののくワンムの背に左手を置き、右手は転送キーのうえに載せて、チンジャオは最後の挑戦をした。「わたしを止める？　それとも手出しをしない？」

それに対してジェインはこう答えた。「あなたは、どのような生物にも危害をくわえたことのないラマンを殺すつもり？　それとも、わたしを生かしてくれる？」

チンジャオが転送キーを押す。ジェインは首を垂れ、そして消えた。

問題のメッセージがハウス・コンピュータによってもよりのアンシブルに発送されるまでは数秒がかかるだろう。そこからは、〈百世界〉のひとつひとつだけでなく無数のコロニーにもいるスターウェイズ議会の高官全員のもとに、一瞬にしてメッセージが届けられる。多くの場合、それは相手先のコンピュータに順々にはいってくるメッセージのひとつにすぎないだろう。だが、おそらく百を越えるコンピュータに父のコードが優先登録されているはずだから、すでに何人かの高官がそれに目を通し、その内容を知って返事を準備しているだろう。もしもジェインがほんとうにメッセージを通してくれたとしたらの話だが。

そこでチンジャオは返事を待つことにした。瞬時に反応がもどってこないのは、おそらく受け取った側どうしがコンタクトをとって、このメッセージについて相談し、至急対策を講じているためと思われる。そのため、チンジャオの端末装置のディスプレイにはなにもうかんでこないのだ。

扉があいた。ゲーム・コンピュータをもったムパオがはいってきたのだろう。「北側の窓のそばに置きなさい」そっちを見もせずにチンジャオはいった。「そうならないことを祈るけど、あとで必要になるかもしれないから」

「チンジャオ」

それはムパオではなくて父だった。チンジャオはふりむいて、反射的にひざまずき、尊敬の意を見せた——だが、それはまた誇りのしるしでもある。「お父さまの名前でスターウェイズ議会に報告書を送りました。お父さまが神がみと交感しているあいだに、敵のプログラムを中

和し、その撃退法を知らせるメッセージを送ることができたのです。いま、その返事を待っているところです」
彼女は父が称賛のことばをかけてくれるものと待ちかまえた。
「おまえが？」父はいった。「わたしがやれといいもしないうちにか？　わたしの同意ももとめずに直接スターウェイズ議会にメッセージを送っただと？」
「お父さまが浄罪をしておいでだったからです。わたしは、お父さまに出された課題をこなしたままで」
「しかしそれでは――ジェインが殺されてしまう」
「それだけはまちがいありませんね」チンジャオはいった。「そのあと、ルジタニア粛清艦隊とのコンタクトが回復するとはいいきれませんけど」そういった瞬間、チンジャオは自分の計画に穴があったことに気づいた。「でも、艦隊のコンピュータにもこのプログラムが寄生してるんだわ！　通信が回復したら、例のプログラムは自分を再転送させることができる――でも、そうなったらもう一度アンシブルのスイッチを切ればいいだけだし……」
父の視線は彼女を無視して、その背後にある端末装置のディスプレイを見つめている。チンジャオもそっちをふりむいた。
そこには、公式の紋章つきで、スターウェイズ議会からのメッセージが映っていた。ひどく短い、官僚的なそっけない文章だ。

ハン宛。
上出来だ。
貴君の提案は、当局の指令として転送した。
艦隊とのコンタクトは回復ずみ。
14FE・3Aのメモについては貴君の娘の協力ありや？
その場合、双方に勲章を授与す。

「遅かったか」父がつぶやいた。「当局はルジタニアもペケニーノも滅ぼすつもりだ。罪もない人びとまで巻き添えにして」
「ただし、それが神がみのご意志だった場合だけです」チンジャオはいった。父の口調は意外なほど打ち沈んでいる。
チンジャオの膝にすがりついていたワンムが頭をあげた。その顔は泣きはらして真っ赤だ。
「これで、ジェインもデモステネスも死んでしまうわ」
チンジャオはワンムの肩をしっかりにぎると、腕をいっぱいにのばして、「デモステネスは裏切り者なのよ」と宣言した。だが、ワンムはただ彼女の視線をさけ、ハン・フェイツーを見上げるばかりだ。チンジャオも父を見やった。「ジェインだって――お父さま、彼女の正体がおわかりでしょう？　どんなに危険な存在だったか」
「彼女は、われわれを助けようとしたのだ」父はいった。「それなのに、われわれはお返しに

彼女の破滅につながる手を打ってしまった」
チンジャオが呆然自失して、ただぽかんとしていると、父はその肩ごしに端末装置の消去キーを押し、つぎに終了キーを押した。
「ジェイン」と、ハン・フェイツーは呼びかけた。「聞こえるか。どうか、わたしを許してほしい」
端末装置にはなんの反応もあらわれない。
「神がみよ、わたしを許したまえ」父はいった。「しっかりしなければならないときに、わたしが弱かったため、わが娘は悪意もなく、わが名をもって凶事をおこなってしまいました」ぞくりと身震いして、「だめだ――浄罪をしなければ」とつぶやくと、そのことばは口のなかに毒のような後味がひろがった。「いつまで儀式をしたところで、穢れがはらえるとは思えないが」
端末装置のそばをしりぞいて、父は背をむけ、部屋から出ていった。ワンムはまた泣きだしている。泣くことなんかないのに、ばかな子だわ、とチンジャオは思った。これは勝利の瞬間なのだ。ただ、ジェインがこの手から勝利をかっさらってしまったせいで、ほんとうは勝ったはずのわたしが、まるで敗者のようだ。ジェインはわたしの父を奪ってしまった。父の心はもはや神がみに仕えてはいない。たとえその体はいままでどおり神がみのしもべでも。
そうはいうものの、それをさとった苦痛にまじって、彼女は突き刺すような熱い喜びをおぼえた。わたしはより強くなったのだ。わたしはとうとう父を乗り越えた。この試練の結果、神

がみに仕えるのはこのわたし、父は挫折し倒れて失敗したのだ。わたしは夢にも思っていなかったほどの力を秘めていた。わたしは神がみのあやつる清らかな道具なのだ。これからは、神がみがわたしにどのような役目をあたえるか、それはだれにもわからない。

ヒューゴー・ネビュラ両賞受賞

ゲイトウェイ
フレデリック・ポール／矢野　徹訳
操縦法も目的地もわからぬまま、謎のヒーチー人の残した超光速船に乗りこんで、一攫千金を目指す冒険家たちの行手に待つものは⁉

ブラッド・ミュージック
グレッグ・ベア／小川　隆訳
知性を持ち自己増殖するバイオチップがもたらした脅威を最新の科学知識とスリリングな筆致で描いた八〇年代版『幼年期の終り』！

タンジェント
グレッグ・ベア／山岸　真編
老科学者と少年の不可思議な交流を描く表題作ほか、人気作家ベアの多彩な魅力を結集した全八篇を収録する日本版オリジナル短篇集

スタータイド・ライジング〔上下〕
デイヴィッド・ブリン／酒井昭伸訳
人類・イルカ混成の探険宇宙船が太古の漂流船団を発見した。銀河史の謎の解明への鍵を握る船団の情報を敵対する銀河種族が狙う！

ニューロマンサー
ウィリアム・ギブスン／黒丸　尚訳
ハイテクと汚濁の都、千葉シティにくすぶっていた元ハッカーのケイスに謎の存在から仕事の依頼が……。衝撃のサイバーパンクSF

エンダーのゲーム
オースン・スコット・カード／野口幸夫訳
宇宙間戦争に備え設立されたバトル・スクールに入校したエンダーは、コンピュータを駆使したあらゆる訓練に天才的冴えを見せた！

ハヤカワ文庫SF

ヒューゴー・ネビュラ両賞受賞

闇の左手
アーシュラ・K・ル・グィン／小尾芙佐訳

雪と氷に閉ざされた、両性具有人の惑星ゲセンと外交関係を結ぶべく派遣されたゲンリー・アイを、様々な困難が待ち受けていた……

リングワールド
ラリイ・ニーヴン／小隅　黎訳

宇宙の探険家ルイス・ウーはパペッティア人から見せられた一枚のホロに仰天した。恒星の回りに薄いリボン状構築物があったのだ！

神々自身
アイザック・アシモフ／小尾芙佐訳

〈平行宇宙〉からタングステンと交換にもたらされる無公害、低コストの無限エネルギーをめぐる取引に隠された恐るべき陥穽とは？

宇宙のランデヴー
アーサー・C・クラーク／南山　宏訳

太陽系内に突如現われた謎の小惑星は、自然物体ではなく巨大な金属体だった！　ついに人類は宇宙からの訪問者を迎えることに……

所有せざる人々
アーシュラ・K・ル・グィン／佐藤高子訳

理論物理学者シェヴェックは全宇宙をつなぐ架け橋となる一般時間理論完成のため、また惑星間の壁をうちこわすため、今旅立った！

終りなき戦い
ジョー・ホールドマン／風見　潤訳

画期的新航法コラプサー・ジャンプで宇宙に広がった人類と、突如出現した異星人トーランとの全面戦争は泥沼化の途を辿っていた！

訳者略歴　東京女子大学文学部卒　英米文学翻訳家　主訳書「反逆の星」カード「絞殺魔に会いたい」「依頼人がほしい」ホール「ゴーストバスターズ2」ナーハ（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
FT=Fantasy

ゼノサイド

〔上〕

〈SF1072〉

一九九四年八月二十日　印刷
一九九四年八月三十一日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　オースン・S・カード
訳者　田中一江（たなかかずえ）
発行者　早川浩
発行所　株式会社早川書房

郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京　三二五二－三一一一（大代表）
振替口座番号　東京六－四七七九九

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

印刷・株式会社亨有堂印刷所　製本・株式会社明光社
Printed and bound in Japan
ISBN4-15-011072-7 C0197